埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書　第１集

藤之宮遺跡

―熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書Ⅳ―

2008

埼玉県熊谷市教育委員会

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書　第１集

藤之宮遺跡

（ふじのみやいせき）

―熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書Ⅳ―

2008

埼玉県熊谷市教育委員会

序

私たちの郷土熊谷は、丘陵、台地、沖積低地と地形が変化に富み、肥沃な大地と豊かな自然が広がっております。こうした自然環境のもと、市内には先人たちによって多くの文化財が営々と築かれてきました。これらの文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証しであるとともに、私たちの子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代へと伝え、さらに豊かな熊谷市形成のための礎としていかなければならないと考えております。

さて、熊谷市では市民が暮らしやすく、生活環境の豊かさを実感できる土地利用を図ることを目的に土地区画整理事業を進めております。市内上之地区で進めている上之土地区画整理事業もその一つであります。事業地内には事前の試掘調査により、原始・古代から中世に至るおびただしい遺跡が確認されました。熊谷市教育委員会では遺跡の重要性を鑑みて、関係部局と保存に向けて協議を行ってまいりましたが、土地区画整理事業上やむを得ず計画等の変更ができない街路築造工事等に関しては、発掘調査を実施して記録保存の措置を講ずることとなりました。

本書は、平成14年度に発掘調査を行った藤之宮遺跡について報告するものでございます。遺跡からは弥生時代から中世までの数多くの遺構や遺物が確認されました。中でも古墳時代の溝跡からは、全国的にもあまり発見例のない古墳時代中期の土器群がまとまって出土しました。これは土器を供えて祭りを行った痕跡と思われ、古代の祭祀を考える上で大変貴重な成果といえます。

本書が埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広く御活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護法の趣旨を尊重され、御理解御協力を賜りました熊谷市都市整備部都市計画課、土地区画整理中央事務所、並びに地元関係者には厚くお礼申しあげます。

平成20年３月

熊谷市教育委員会
教育長　野　原　　晃

例　言

1　本書は、埼玉県熊谷市上之字藤之宮2010番地他に所在する藤之宮遺跡（埼玉県遺跡番号59－093）の発掘調査報告書である。

2　本調査は、熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業に伴う事前記録保存のための発掘調査であり、熊谷市教育委員会が実施した。

3　本事業の組織は、第Ⅰ章３のとおりである。

4　発掘調査期間は、平成14年５月８日から８月８日までである。整理・報告書作成期間は、平成19年４月16日から平成20年３月21日までである。

5　発掘調査の担当は、熊谷市教育委員会吉野　健・加藤隆則（現宮城県仙台市教育委員会）、本書の執筆・編集は、松田　哲が行った。

6　発掘調査における写真撮影は吉野、遺物の写真撮影は松田が行った。

7　本書にかかる資料は、熊谷市教育委員会が保管している。

8　本書の作成にあたり、下記の方々及び機関等から御教示、御協力を賜った。記して感謝申し上げます。（敬称略、五十音順）

越前谷理　小林　高　鈴木敏昭　知久裕昭　鳥羽政之　永井智教　村松　篤

埼玉県教育局生涯学習文化財課　㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団

凡　例

本書における挿図指示は、次のとおりである。

1　遺構挿図の縮尺は、次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

調査区全測図…１／400　　住居跡・掘立柱建物跡・土坑・井戸跡…１／60

溝跡平面図…１／200　　溝跡断面図・方形周溝墓…１／80　　火葬跡…１／20

2　遺構挿図中のスクリーントーン等は、次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

＝地　山　　＝焼　土　　＝炭化物

3　遺構挿図中、断面に添えてある数値は標高を示している。

4　遺物挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

土師器・須恵器・縄文土器・弥生土器・鉄製品・土製品…１／４　　石製品…１／３・１／４

5　遺物実測図の表現方法は、以下のとおりである。

土師器・縄文土器・弥生土器・土製品・石製品断面：白抜き　　須恵器断面：黒塗り

鉄製品断面：　　赤彩：

須恵器底部調整　回転糸切り　ᘐ

回転ヘラ削り　＼

6　遺物拓影図のうち、左右あるものは向かって左に外面、右に内面、左のみのものは外面を示した。

7　遺物観察表の表現方法は、以下のとおりである。

法量の単位はcm、ｇである。（　）が付されるものは推定値、現存値を表す。

胎土は、土器に含まれる鉱物等を以下の記号で示した。

Ａ…白色粒子　Ｂ…黒色粒子　Ｃ…赤色粒子　Ｄ…褐色粒子　Ｅ…赤褐色粒子

Ｆ…白色針状物質　Ｇ…長石　Ｈ…石英　Ｉ…白雲母　Ｊ…黒雲母　Ｋ…角閃石

Ｌ…片岩　Ｍ…砂粒　Ｎ…礫

8　写真図版の遺物縮尺は、すべて任意である。

9　土層及び土器の色調は、『新版標準土色帖第14版』（小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色標監修、日本色研事業株式会社発行　1994）を参考にした。

目　次

序
例　言
凡　例
目　次

Ⅰ　発掘調査の概要……1
　1　調査に至る経過……1
　2　発掘調査・報告書作成の経過……1
　3　発掘調査、整理・報告書刊行の組織……2
Ⅱ　遺跡の立地と環境……3
Ⅲ　遺跡の概要……8
　1　調査の方法……8
　2　検出された遺構と遺物……8
Ⅳ　遺構と遺物……12
　1　住居跡……12
　2　掘立柱建物跡……46
　3　溝　跡……53
　4　土　坑……78
　5　井戸跡……88
　6　方形周溝墓……92
　7　火葬跡……92
　8　ピット……93
　9　遺構外出土遺物……95
Ⅴ　調査のまとめ……109

挿図目次

第１図　埼玉県の地形図……3
第２図　周辺遺跡分布図……5
第３図　調査地点位置図……9
第４図　調査区全測図……10
第５図　第１号住居跡・出土遺物……12
第６図　第２号住居跡……13
第７図　第３・４号住居跡……15
第８図　第３号住居跡出土遺物……17
第９図　第４号住居跡出土遺物……17
第10図　第５号住居跡・出土遺物……19
第11図　第６号住居跡……20
第12図　第６号住居跡出土遺物……21
第13図　第７号住居跡……23
第14図　第８号住居跡・出土遺物……24
第15図　第９号住居跡・出土遺物……26
第16図　第10・11号住居跡……27
第17図　第10号住居跡出土遺物……28
第18図　第11号住居跡出土遺物……28
第19図　第12号住居跡・出土遺物……31
第20図　第13号住居跡……32
第21図　第13号住居跡出土遺物……33
第22図　第14号住居跡・出土遺物……34
第23図　第15号住居跡・出土遺物……35
第24図　第16号住居跡……37
第25図　第16号住居跡出土遺物……38
第26図　第17号住居跡・出土遺物……40
第27図　第18・19号住居跡……42
第28図　第18号住居跡出土遺物……43
第29図　第20号住居跡・出土遺物……44
第30図　第21号住居跡・出土遺物……45

第31図　第１号掘立柱建物跡……46
第32図　第２・３号掘立柱建物跡・出土遺物‥47
第33図　第４号掘立柱建物跡……49
第34図　第４号掘立柱建物跡断面図……50
第35図　第５号掘立柱建物跡・出土遺物……51
第36図　第６号掘立柱建物跡・出土遺物……52
第37図　第１・２号溝跡……53
第38図　第３～14号溝跡……57
第39図　第３～14号溝跡断面図(1)……58
第40図　第３～14号溝跡断面図(2)……63
第41図　第３号溝跡土器集中地点遺物出土状況‥64
第42図　第９号溝跡遺物出土状況……65
第43図　第15～19号溝跡……66
第44図　溝跡出土遺物(1)……67
第45図　溝跡出土遺物(2)……68
第46図　溝跡出土遺物(3)……69
第47図　溝跡出土遺物(4)……70
第48図　溝跡出土遺物(5)……71
第49図　溝跡出土遺物(6)……72
第50図　溝跡出土遺物(7)……73
第51図　溝跡出土遺物(8)……74
第52図　第１～11号土坑・第３号井戸跡……79
第53図　第12～24号土坑……82
第54図　第25～29号土坑……86
第55図　土坑出土遺物……87
第56図　第１・２・４号井戸跡……89
第57図　井戸跡出土遺物……90
第58図　第１号方形周溝墓・出土遺物……91
第59図　第１・２号火葬跡……93
第60図　ピット出土遺物……94
第61図　遺構外出土遺物(1)……98
第62図　遺構外出土遺物(2)……99
第63図　遺構外出土遺物(3)……100
第64図　遺構外出土遺物(4)……101
第65図　遺構外出土遺物(5)……102
第66図　遺構外出土遺物(6)……103

挿表目次

第１表　周辺遺跡一覧表……６
第２表　第１号住居跡出土遺物観察表……13
第３表　第３号住居跡出土遺物観察表……18
第４表　第４号住居跡出土遺物観察表……18
第５表　第５号住居跡出土遺物観察表……20
第６表　第６号住居跡出土遺物観察表……22
第７表　第８号住居跡出土遺物観察表……24
第８表　第９号住居跡出土遺物観察表……27
第９表　第10号住居跡出土遺物観察表……29
第10表　第11号住居跡出土遺物観察表……29
第11表　第12号住居跡出土遺物観察表……30
第12表　第13号住居跡出土遺物観察表……33
第13表　第14号住居跡出土遺物観察表……34
第14表　第15号住居跡出土遺物観察表……35
第15表　第16号住居跡出土遺物観察表……38
第16表　第17号住居跡出土遺物観察表……41
第17表　第18号住居跡出土遺物観察表……43
第18表　第20号住居跡出土遺物観察表……44
第19表　第21号住居跡出土遺物観察表……45
第20表　第２号掘立柱建物跡出土遺物観察表‥48
第21表　第５号掘立柱建物跡出土遺物観察表‥51
第22表　第６号掘立柱建物跡出土遺物観察表‥52
第23表　溝跡出土遺物観察表……75
第24表　土坑出土遺物観察表……87
第25表　井戸跡出土遺物観察表……90
第26表　第１号方形周溝墓出土遺物観察表‥‥91
第27表　ピット出土遺物観察表……95
第28表　遺構外出土遺物観察表……105

図版目次

図版１　調査区全景（真上から）
　　調査区遠景（北東から）
遺　構
図版２　第２号住居跡
　　第３号住居跡
　　第３号住居跡遺物出土状況
　　第４号住居跡
　　第５号住居跡
　　第６号住居跡
　　第６号住居跡遺物出土状況(1)
　　第６号住居跡遺物出土状況(2)
図版３　第６号住居跡遺物出土状況(3)
　　第６号住居跡遺物出土状況(4)
　　第７号住居跡
　　第８号住居跡
　　第８号住居跡遺物出土状況
　　第９号住居跡
　　第10号住居跡
　　第11号住居跡
図版４　第12号住居跡
　　第13号住居跡
　　第14号住居跡
　　第15号住居跡・第２号井戸跡
　　第16号住居跡
　　第16号住居跡遺物出土状況
　　第17号住居跡
　　第18・19号住居跡
図版５　第20号住居跡
　　第１号掘立柱建物跡
　　第２号掘立柱建物跡遺物出土状況
　　第５号掘立柱建物跡
　　第１号溝跡
　　第３号溝跡（南西から）
　　第３号溝跡（北東から）
図版６　第３号溝跡土器集中地点遺物出土状況(1)
　　第３号溝跡土器集中地点遺物出土状況(2)
　　第３号溝跡土器集中地点遺物出土状況(3)
　　第３号溝跡土器集中地点遺物出土状況(4)
　　第３号溝跡土器集中地点遺物出土状況(5)
　　第３号溝跡土器集中地点遺物出土状況(6)
　　第３号溝跡土器集中地点遺物出土状況(7)
　　第３号溝跡土器集中地点遺物出土状況(8)
図版７　第４～６号溝跡
　　第８・９号溝跡
　　第９号溝跡遺物出土状況(1)
　　第９号溝跡遺物出土状況(2)
　　第８～14号溝跡（北西から）
　　第８～14号溝跡（南東から）
図版８　第10号溝跡
　　第10～14号溝跡
　　第15～19号溝跡
　　第３・４号土坑・第３号井戸跡
　　第５号土坑
　　第６号土坑
　　第７号土坑
図版９　第８号土坑
　　第９号土坑
　　第10号土坑
　　第12～14号土坑
　　第15号土坑
　　第16～18号土坑
　　第21号土坑
　　第22～24号土坑
図版10　第25号土坑
　　第26号土坑
　　第29号土坑
　　第１号井戸跡
　　第４号井戸跡

図版10　第１号方形周溝墓
第１号火葬跡
第２号火葬跡

遺　物

土師器（古墳時代前期）

図版11　第３号住居跡　第８図１・２・９
第４号住居跡　第９図１・２
第６号住居跡　第12図１・２
図版12　第６号住居跡　第12図３・７
第８号住居跡　第14図１・２
第９号住居跡　第15図１
第11号住居跡　第18図１
図版13　第12号住居跡　第19図４
第16号住居跡　第25図１・２・８
第３号溝跡　第45図21
第47図72
遺構外　第61図33
図版23　第４号住居跡　第９図４・５・６・７・８
第11号住居跡　第18図２・３・４・５
第21号住居跡　第30図１・３

土師器・須恵器　坏類（古墳時代後期～平安時代）

図版14　第１号住居跡　第５図６
第17号住居跡　第26図２
第18号住居跡　第28図２・13
第20号住居跡　第29図１
第２号掘立柱建物跡　第32図１
第３号溝跡　第44図１・３・11・13
図版15　第３号溝跡　第44図14・16
第４・５号溝跡　第48図３・４・５
第９号溝跡　第49図２・３
第10号溝跡　第50図８
不明溝跡　第51図３
第４号井戸跡　第57図９
図版16　60－85・86ＧＰ１　第60図３
63－88ＧＰ１　第60図９・10
遺構外　第64図121・123・125・131・136・143・152

土師器・須恵器　壺・甕類（古墳時代中期～平安時代）

図版17　第17号住居跡　第26図13
第３号溝跡　第44図５・６・18
第45図29・31
図版18　第３号溝跡　第45図30
第46図55・56・57・58・59
図版19　第３号溝跡　第46図60
第47図61・62・63・66・67・70
図版20　第３号溝跡　第47図71・73・74・75
第９号溝跡　第49図８・20
図版21　第９号溝跡　第49図21
第10号溝跡　第50図３
遺構外　第62図90
第64図154・155

縄文土器

図版22　遺構外　第61図１・２

弥生土器

図版21　遺構外　第61図３
図版22　第４号住居跡　第９図９
第10号住居跡　第17図15
第14号住居跡　第22図６
第16号住居跡　第25図20・21・22・23
第18号住居跡　第28図17
第６号掘立柱建物跡　第36図１
第３号溝跡　第47図76・77・78・79・80・81・82・83・84・85・86・87・88・89・90
第５号溝跡　第48図６・７
第９号溝跡　第50図27・28
第27号土坑　第55図３
第１号方形周溝墓　第58図１
遺構外　第61図４・５・６・７・８・９・10・11・12
図版23　遺構外　第61図13・14・15・16・17・18・19・20・21・22・23・24・25・26・27・28・29・30・31・32

土製品

（支脚）

図版24　第５号住居跡　第10図３

60－88ＧＰ１　第60図14

遺構外　第66図221

（土錘）

図版24　第14号住居跡　第22図５

第18号住居跡　第28図15

遺構外　第66図219・220

（土玉）

図版24　第16号住居跡　第25図25

遺構外　第66図218

鉄製品

図版24　第９号溝跡　第49図26

石製品

（砥石）

図版24　第17号住居跡　第26図14

第18号住居跡　第28図16

第１号井戸跡　第57図１

（軽石）

図版24　第９号溝跡　第49図25

（滑石製模造品）

図版24　遺構外　第66図222

馬歯

図版24　第９号溝跡　未掲載

人歯

図版24　第５号土坑　未掲載

Ⅰ　発掘調査の概要

1　調査に至る経過

昭和61年６月６日付け61熊都発第148号で、熊谷市長より上之第一地区土地区画整理事業（現上之土地区画整理事業）地内の埋蔵文化財の所在及び取り扱いに関する照会が提出された。これを受け、熊谷市教育委員会は、事業地内全域に弥生時代から平安時代の遺跡が所在する地域であり、工事に先立って発掘調査を実施する必要がある旨を回答し、平成７年11月13日から平成８年１月19日にかけて遺跡の所在確認調査を実施した。その結果、弥生時代から近世にかけての集落跡及び墓が広範囲に分布することが確認された。この結果を踏まえて、平成８年２月９日付け熊教社発第865号で熊谷市教育委員会教育長から熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業代表者熊谷市長あてに次のように通知した。

事業地内には、埋蔵文化財包蔵地（前中西遺跡、藤之宮遺跡及び諏訪木遺跡）が所在する。当該地は現状保存するか、または埋蔵文化財に影響を及ぼさない方法での開発が望ましい。やむを得ず埋蔵文化財に影響を及ぼす場合は、事前に記録保存のための発掘調査を実施すること、なお、発掘調査の実施については教育委員会と協議すること。

その後、保存について協議を重ねたが、工事計画の変更は不可能であると判断されたため、記録保存の措置を講ずることとなった。

文化財保護法第57条の３第１項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の通知は、代表者熊谷市長より平成14年４月23日付けで提出された。発掘調査に関わる熊谷市教育委員会からの通知は、平成14年５月13日付け熊教社発第173号で提出された。埼玉県教育委員会からの通知は、平成14年５月８日付け教文第３－67号であった。

2　発掘調査・報告書作成の経過

(1)　発掘調査

発掘調査は、平成14年５月８日から８月８日まで行われた。調査面積は1,907.29㎡である。

調査はまず重機による表土除去及び作業員による遺構確認作業から行った。そして、５月中旬から７月上旬にかけて遺構の発掘及び土層断面図の作成、遺物の取り上げ、写真撮影などの作業を順次行っていった。７月中旬からは遺構平面図を作成し、８月初旬には調査区の航空写真撮影を行い、現場におけるすべての作業を終了した。

(2)　整理・報告書作成

整理・報告書作成作業は、平成19年４月から平成20年３月まで実施した。第１四半期は遺物の洗浄、注記、接合、復元作業等を行い、併行して遺構の図面整理を行った。第２四半期に入ると、遺物の実測・トレース、遺構のトレースを開始し、第３四半期には遺構・遺物の版組を作成した。第４四半期に入ると、遺物の写真撮影を行い、終了したものから順次写真図版の割付け、編集作業、原稿執筆を行った。そして、印刷業者選定の後、報告書の印刷に入り、数回の校正を行い、３月下旬に報告書を刊行した。

3　発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者　熊谷市教育委員会

(1)　発掘調査

平成14年度

教育長	飯塚誠一郎
教育次長	小林武夫
社会教育課長	岩田　隆
担当副参事	田中英司
課長補佐	藤原　清
主幹兼文化財保護係長	金子正之
主査	寺社下　博
主査	浅見敦夫
主査	吉野　健
主事	松田　哲
発掘調査員	加藤隆則
発掘調査員	船場昌子
発掘調査員	渡邊大士

(2)　整理・報告書作成事業

平成19年度

教育長	野原　晃
教育次長	増田和己
社会教育課長	関口和佳
担当副参事	今井　宏
副課長	新井　端
副課長	出縄康行
主幹兼文化財保護係長	金子正之
主査	寺社下　博
主査	吉野　健
主任	松田　哲
主事	松村　聡

Ⅱ　遺跡の立地と環境

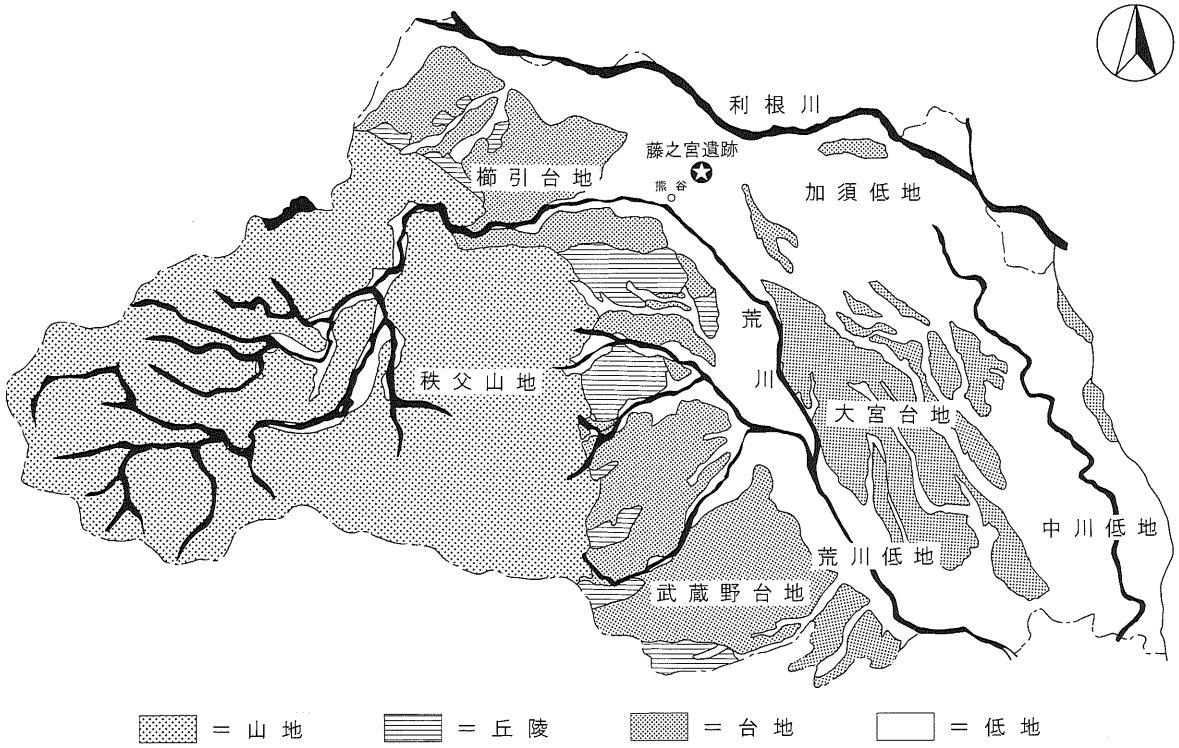
熊谷市は埼玉県北部に位置する県北最大の市である。平成17年10月１日には妻沼町及び大里町と、平成19年２月13日には江南町と合併し、人口20万を超える市として新たに発足したところである。

熊谷市は北側で群馬県との境を利根川が、南側では旧大里町及び旧江南町との境を荒川がそれぞれ西から南東方向に流れており、両河川が最も近接する地域にある。地形的には市の西側に櫛引台地、荒川を挟んで南側には江南台地、北側及び東側には妻沼低地が広がっているが、市の大半は妻沼低地上にある（第１図）。

櫛引台地は洪積世に形成された荒川扇状地の左岸一帯の総称で、寄居町の波久礼付近を扇頂として東は熊谷市西部の三ヶ尻付近まで、北東方向へはＪＲ高崎線籠原駅から北へ約２kmの距離にある西別府付近にまで延びている。標高は約36～54mを測り、妻沼低地に向って緩やかに下る。

櫛引台地の東側には、沖積世に荒川の乱流により新たに形成された新荒川扇状地が広がっている。新荒川扇状地は、熊谷市の南西に位置する深谷市（旧川本町）菅沼付近を扇頂として妻沼低地へと広がっており、自然堤防や後背湿地が発達している。

今回報告する藤之宮遺跡は、その新荒川扇状地の縁辺部、標高24m前後の自然堤防上に立地している。遺跡は熊谷市東部の上之地区に所在し、ＪＲ高崎線熊谷駅からは北東へ約2.0km、荒川からは北へ約3.0km、利根川からは南へ約6.0kmの距離にある。現地表面から遺構確認面までの深さは、遺構が密集する調査区西側では0.3～0.4mと浅かったが、調査区東側に広がる谷状の落ち込みでは最大1.2m程であった。



第１図　埼玉県の地形図

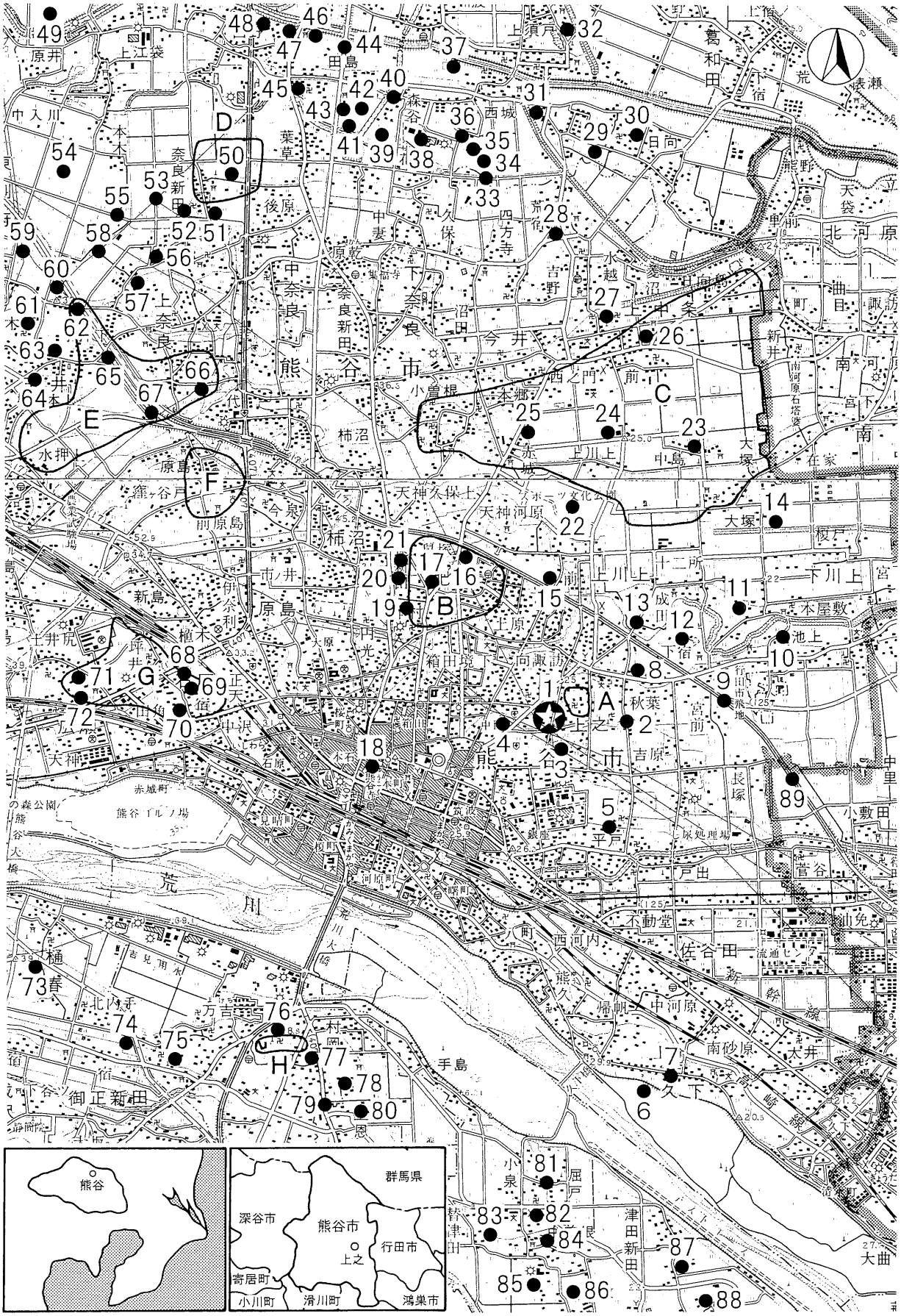
次に藤之宮遺跡周辺の歴史的環境について概観する（第２図）。

旧石器時代から縄文時代の遺跡は、熊谷市東部では確認例が極めて少ない。この段階の遺跡は主に熊谷市西部から深谷市域にかけて多くみられ、地形的には櫛引台地及び台地直下の妻沼低地自然堤防上に集中する。旧石器時代については、櫛引台地東端に立地する熊谷市籠原裏遺跡（地図未掲載）から出土した黒耀石の尖頭器が唯一の事例である。縄文時代は、早期段階は櫛引台地北端に位置する深谷市東方城跡（地図未掲載）において尖頭器が検出されているのみである。前期になると台地のみならず低地上にも出現しはじめ、中期も特に後半段階の加曽利Ｅ式期の遺跡が爆発的に出現するが、依然として櫛引台地及び台地直下の低地上に集中している。後期になると徐々に低地へ進出しはじめ、熊谷市水久保遺跡（32）、西城切通遺跡（37）、場違ヶ谷戸遺跡（45）など櫛引台地から離れた低地上にも遺跡が認められるようになる。藤之宮遺跡周辺では隣接する諏訪木遺跡（２）でのみ確認例がある。晩期は遺跡数が減少する。諏訪木遺跡では後期に続いて集落が営まれており、唯一の事例と言える。熊谷市遺跡調査会により行われた調査（熊谷市遺跡調査会2001）や埼玉県埋蔵文化財調査事業団により行われた調査（埼玉県埋蔵文化財調査事業団2002・2007）では、後期末から晩期の遺物が検出されている。特に後者の調査では遺構に伴って大量の遺物が出土し、集落跡の存在が明らかとなっている。この他では櫛引台地北端に立地する深谷市上敷免遺跡（地図未掲載）で晩期最終末の浮線文土器が多数検出されている。遺構からの検出ではなかったが、次代へのつながりがみてとれる資料である。

弥生時代は、まず初期段階である前期末から中期前半は今回報告する藤之宮遺跡で土器片が若干検出されているが、遺構は確認されていない。遺構が認められた遺跡は櫛引台地直下の低地上に集中するが、集落ではなく、再葬墓である。横間栗遺跡（地図未掲載）では、前期末から中期前半頃の再葬墓が13基確認されており、再葬墓一括資料は1999年３月に埼玉県指定になっている。この他にも熊谷市（旧妻沼町）飯塚遺跡、飯塚南遺跡（ともに地図未掲載）や先の深谷市上敷免遺跡などでも再葬墓が検出されており、東日本初期弥生土器を語る上で非常に重要な資料が出土している。また、上敷免遺跡では包含層からであるが、県内初の遠賀川式土器の壺の胴部片も出土している。

中期中頃になるとこれまでの状況と一変して確認例が増す。東日本でも最古段階の環壕集落である池上遺跡（９）、その墓域とされ、最古段階の方形周溝墓が検出された行田市小敷田遺跡（89）などがあり、本格的に展開されることとなる。中期後半は隣接する前中西遺跡（３）、北島遺跡（22）などで集落が営まれており、藤之宮遺跡や前中西遺跡では方形周溝墓が検出されている。特に前中西遺跡では方形周溝墓が多数検出されており、集落・墓ともに後期初頭まで続くことが明らかとなっている。北島遺跡では大規模な集落が営まれるとともに墓域も形成されている。そして、特筆すべきことは水田に引き込む水路や堰が造営されていたことである。これは当時、本格的な水田経営が行われていたことを物語っており、北島遺跡はその規模や内容から東日本屈指の遺跡として注目されている。後期以降については、藤之宮遺跡で土器片が若干検出されているが、遺構は確認されていない。遺構が認められた遺跡としては前中西遺跡、北島遺跡以外に近辺では確認例がない。

古墳時代になると低地上への進出がより活発化し、前期の遺跡は近年確認例が増加している。藤之宮遺跡や前中西遺跡では集落跡が確認され、北島遺跡では弥生時代に続いて大規模集落が営まれており、墓域も形成されている。中条遺跡（26）では木製農具が検出され、行田市小敷田遺跡では畿内や東海地



第２図　周辺遺跡分布図

第１表　周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
熊谷市			51	東通遺跡	古墳後
1	藤之宮遺跡	弥生中、古墳、奈良・平安、中世	52	西通遺跡	古墳後
2	諏訪木遺跡	縄文後･晩､弥生中･後､古墳後､奈良･平安､中･近世	53	中耕地遺跡	縄文中、古墳前・後、奈良・平安
3	前中西遺跡	弥生中、古墳、奈良・平安	54	別府条里遺跡	奈良・平安
4	箱田氏館跡	平安末	55	一本木前遺跡	古墳前・後、奈良・平安、中世、近世
5	平戸遺跡	弥生中・後、古墳後、平安、中・近世	56	土用ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安
6	久下氏館跡	中世	57	奈良氏館跡	平安末～中世
7	市田氏館跡	中世	58	天神下遺跡	古墳前・後、奈良・平安
8	成田氏館跡	中世	59	寺東遺跡	縄文前～後
9	池上遺跡	弥生中、古墳、平安	60	稲荷東遺跡	古墳後、奈良・平安
10	古宮遺跡	縄文、弥生中、古墳前、奈良・平安、中・近世	61	玉井陣屋跡	平安末～中世
11	上河原遺跡	奈良・平安、中・近世	62	新ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安
12	宮の裏遺跡	古墳後	63	水押下遺跡	古墳後
13	成田遺跡	古墳後	64	稲荷木上遺跡	古墳後
14	中条条里遺跡	古墳前・中、奈良・平安	65	下河原中遺跡	奈良・平安
15	河上氏館跡	中世	66	本代遺跡	古墳後、近世
16	八幡山遺跡	古墳	67	下河原上遺跡	近世
17	出口下遺跡	古墳後	68	天神前遺跡	古墳中・後、中世
18	熊谷氏館跡	中世	69	兵部裏屋敷跡	中世
19	肥塚館跡	中世	70	御蔵場跡	近世
20	出口上遺跡	奈良・平安、中・近世	71	高根遺跡	縄文、古墳後、平安、中･近世
21	肥塚中島遺跡	奈良・平安、近世	72	不二ノ腰遺跡	奈良・平安
22	北島遺跡	弥生中・後、古墳、奈良・平安、中世	73	宮前遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
23	中島遺跡	古墳後、奈良・平安	74	宿遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
24	女塚遺跡	古墳後、奈良・平安、中世	75	万吉西浦遺跡	縄文中、古墳、平安、近世
25	赤城遺跡	古墳、奈良・平安	76	村岡館跡	平安末
26	中条遺跡	古墳、奈良・平安、中世	77	北西原遺跡	奈良・平安
27	中条氏館跡	中世	78	塚本遺跡	古墳、奈良・平安
28	光屋敷遺跡	古墳後、奈良、中・近世	79	西浦遺跡	奈良・平安
29	先載場遺跡	古墳後、奈良	80	腰廻遺跡	奈良・平安
30	八幡間遺跡	古墳後、奈良	81	北方遺跡	奈良・平安
31	東城館跡	平安末	82	宮前遺跡	奈良・平安
32	水久保遺跡	縄文後	83	西浦町遺跡	奈良・平安
33	長安寺遺跡	古墳後、奈良・平安	84	宮前町遺跡	奈良・平安
34	西城館跡	平安末	85	宮町遺跡	奈良・平安
35	長安寺北遺跡	古墳後	86	仲町遺跡	奈良・平安
36	乙鵜森遺跡	古墳後	87	旭町遺跡	奈良・平安
37	西城切通遺跡	縄文後	88	北町遺跡	奈良・平安
38	鵜森遺跡	弥生後、古墳後、奈良・平安	行田市		
39	森谷遺跡	古墳後、奈良・平安	89	小敷田遺跡	弥生中、古墳前・後、奈良・平安
40	中大ヶ谷戸東遺跡	古墳後、奈良・平安	古墳群		
41	南大ヶ谷戸遺跡	奈良・平安	熊谷市		
42	中大ヶ谷戸西遺跡	古墳後、奈良・平安	A	上之古墳群	古墳後～末
43	鷺ヶ谷戸北遺跡	古墳後、奈良・平安	B	肥塚古墳群	古墳後～末
44	山ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安	C	中条古墳群	古墳中期末～後
45	場違ヶ谷戸遺跡	縄文後	D	奈良古墳群	古墳中期後～末
46	宮前遺跡	奈良・平安	E	玉井古墳群	古墳後
47	実盛館	平安末	F	原島古墳群	古墳後
48	下三丁免遺跡	古墳後	G	石原古墳群	古墳後
49	道ヶ谷戸条里遺跡	奈良	H	村岡古墳群	古墳後
50	横塚遺跡	古墳前、平安			

方の外来系土器が多数出土している。この他にもたくさん確認例があるが、遺跡は主に利根川流域沿いの自然堤防上に分布する傾向にある。中期は確認例が少ないが、前段階に続いて藤之宮遺跡や前中西遺跡、中条遺跡などで集落跡が営まれている。また、５世紀末頃の鎧塚古墳や女塚１号墳（Ｃ：中条古墳群)、市の指定史跡である横塚山古墳（Ｄ：奈良古墳群）などといった古墳も築造されている。鎧塚古墳は、全長43.8mの帆立貝式前方後円墳であり、墓前祭祀跡２箇所から須恵器高坏型器台（県指定文化財）が出土している。女塚１号墳も帆立貝式前方後円墳であり、全長46mを測る。二重周溝を持ち、盾

持武人埴輪などの人物埴輪が出土している。横塚山古墳はＢ種横刷毛の埴輪を持つ帆立貝式前方後円墳であるが、後円部は一部欠損している。

後期になると遺跡数が爆発的に増加する。集落跡は規模が大小あるが、多数営まれるようになる。そして、これらは奈良・平安時代へと継続して営まれるものが多い。古墳は群として形成され、多数の古墳群が台地及び低地上に築造されはじめる。低地上では藤之宮遺跡北東に分布する上之古墳群（Ａ）の他に、肥塚古墳群（Ｂ）、中条古墳群（Ｃ）、奈良古墳群（Ｄ）、玉井古墳群（Ｅ）、原島古墳群（Ｆ）、石原古墳群（Ｇ）などがある。これらは概ね６世紀から７世紀末ないし８世紀初頭にかけて築造された古墳群である。市内の古墳群で特筆すべきことは、利根川流域に近い古墳群（中条古墳群など）では埋葬施設に角閃石安山岩を使用しているが、荒川流域に近い古墳群では川原石を使用しており、肥塚古墳群ではその両者が混在することが挙げられる。

奈良･平安時代は前述のとおり、古墳時代後期以降引き続き営まれる遺跡が多い。規模は大小あるが、概ね大規模なものが多くみられ、通常の集落とは思えない遺跡がいくつか存在する。その筆頭が北島遺跡である。第19地点の調査では二重の堀が巡る台形区画内から建物跡が検出されており、他地点でも軸の揃った掘立柱建物跡が多数確認されている。また､遺物では｢篁｣の文字が刻まれた緑釉陶器をはじめ、多くの鉛釉陶器が検出されており、有力者層を想定させる遺物が数多く出土している。北島遺跡以外では、池上遺跡で整然と配置された９世紀代の大型掘立柱建物跡が確認されたこと、小敷田遺跡では「出挙」の文字が書かれた木簡が検出されたこと、諏訪木遺跡では区画溝内に四面庇の付いた大型掘立建物跡や軸の揃った掘立柱建物跡が多数検出されたこと、旧河川で土器や木製品、玉類などを使った水辺の祭祀が行われたことなどが挙げられ、官衙を彷彿とさせる遺跡の集中する地域といえる。

集落以外では北島遺跡や池上遺跡の東側に中条条里遺跡（14)、行田市南河原条里遺跡（地図未掲載）などの条里遺跡が広がっている。ほぼ東西南北に区割されており、現在もその痕跡を明確に残す。

平安時代末から中世にかけては武蔵七党やその他在地武士団が台頭してくる段階であり、市内でも館跡が多数みられる。成田氏館跡（８）、久下氏館跡（６）、市田氏館跡（７）、河上氏館跡（15)、熊谷氏館跡（18)、肥塚館跡（19)、中条氏館跡（27）などがある。このうち、藤之宮遺跡北東に位置する成田氏館跡は、平安時代末の成田助高から親泰が15世紀後半に行田市忍城を構えるまでの居館とされている。また、県事業団によって行われた諏訪木遺跡の調査では、館跡から南に約300ｍの所に中世の居館と思われる変形方形区画が検出されており、『新編武蔵風土記稿』に成田氏の一族がこの地に居を構えたという記述と合わせて成田氏に関連する館跡との見解が示されている（埼玉県埋蔵文化財調査事業団2002)。

中世段階については館跡を中心にその一端が明らかになりつつあるものの、依然として資料が不足している状態であり、今後の資料の蓄積を待つ以外にないというのが現状である。また、近世段階についても同様で隣接する諏訪木遺跡をはじめとしていくつか確認例があるが、不明な点が多いというのが実状である。

Ⅲ　遺跡の概要

1　調査の方法

今回報告する藤之宮遺跡の発掘調査は、平成14年度に行われた。調査は、まず遺構確認面まで重機で掘削し、その後人力による手掘り作業を行っていった。手掘り作業終了後は、遺構ごとに実測、遺物の取り上げ、写真撮影等の作業を順次行った。実測作業を行うにあたっては、あらかじめ区画整理地内全体を網羅するように設定された一辺５ｍのグリッド方式に従い、交点を基準に水糸で１ｍ間隔のメッシュを張り、簡易遣り方による方法で行った。今回報告する調査地点のグリッドは、東西が49から67まで、南北は84から90までが該当する。なお、区画整理地内全体のグリッド図については、同区画整理地内に所在する前中西遺跡の報告（熊谷市教育委員会2002・2003）に記載されていることから、本報告では省略した。

2　検出された遺構と遺物

今回報告する地点は、藤之宮遺跡の遺跡範囲北西部にあたる（第３図）。調査区の西側は標高24m前後の高台であり、多数の遺構が密集するが、東側は谷状の落ち込みが広がっており、遺構数が少ない。標高は最も低い所で23.3mを測る。今回の調査で検出された遺構は、住居跡21軒、掘立柱建物跡６棟、溝跡19条、土坑29基、井戸跡４基、方形周溝墓１基、火葬跡２基、ピット群である（第４図）。

住居跡は、弥生時代末から古墳時代初頭段階が２軒、古墳時代前期が７軒、中期から後期にかけての段階が１軒、後期から末頃が６軒、奈良・平安時代が５軒の計21軒である。すべて調査区西側の高台に位置する。他の遺構との重複が著しいため、遺存状態の良いものは少ない。また、確認面の都合から浅いものが多く、古墳時代後期以降の住居跡にはカマドが検出できなかったものがみられた。遺物は、弥生時代末から古墳時代初頭、古墳時代前期、中期から後期の住居跡からは土師器、後期から末頃の住居跡からは土師器、土製品、奈良・平安時代の住居跡からは須恵器、土師器、土製品、石製品などが検出された。古墳時代前期の住居跡からは比較的良好な資料を得ることができた。

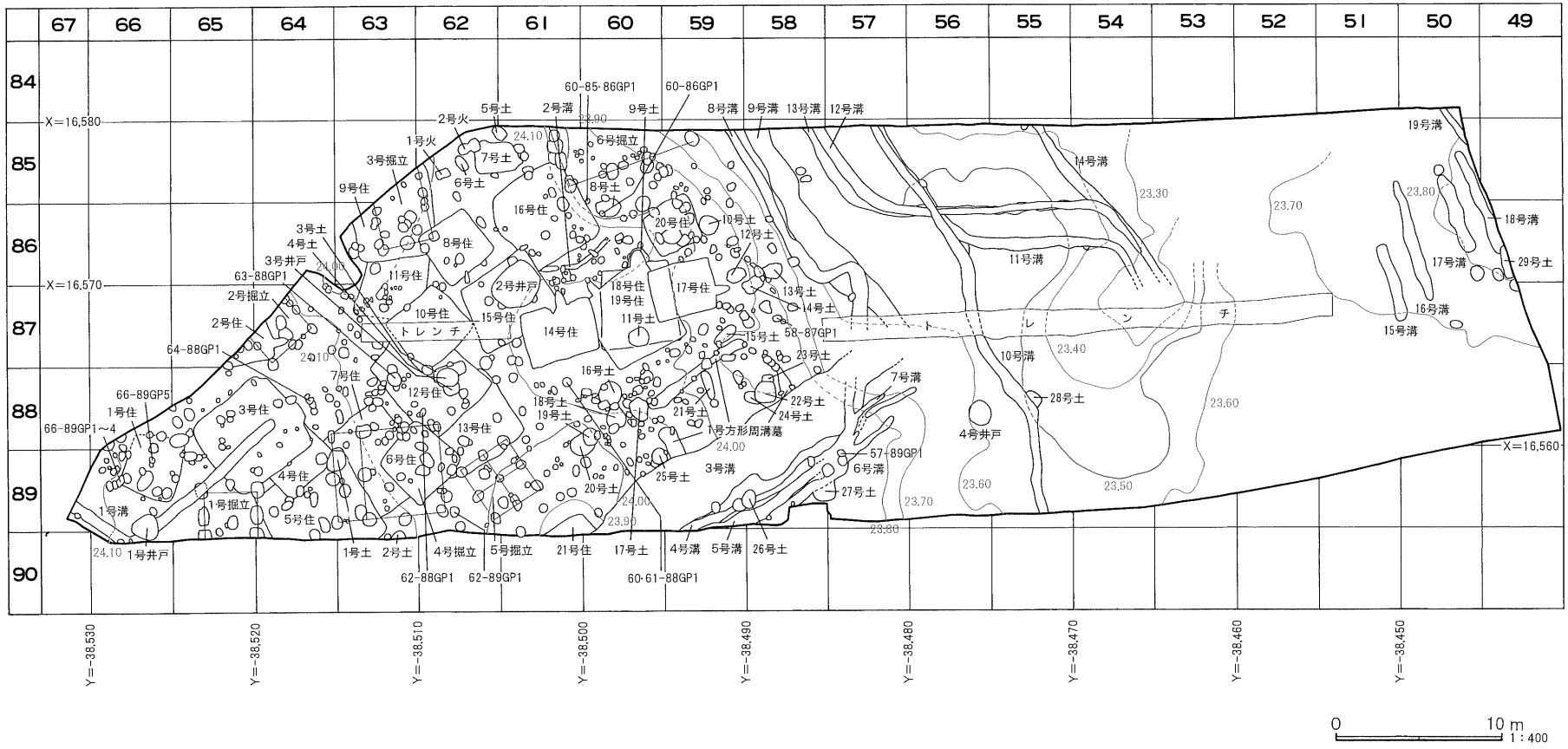
掘立柱建物跡は側柱建物跡が５棟、総柱建物跡が１棟の計６棟である。前者には庇が付くものが１棟みられた。住居跡同様、すべて調査区西側の高台に位置する。全形を検出できたものは少ない。遺物がほとんどないため具体的な時期を特定できないが、概ね古墳時代末頃と奈良・平安時代に大別される。前者が北西方向、後者が真北方向を向く傾向にある。

溝跡は高台を走るものが２条、高台縁辺部から調査区東側の谷状の落ち込みを走るものが17条の計19条である。時期は一部不明のものもあるが、概ね古墳時代と奈良・平安時代に分けられる。伴う出土遺物は、古墳時代前期及び中期の土師器、後期の須恵器、土師器、奈良・平安時代の須恵器、土師器、鉄製品、石製品などがある。３号及び９号溝跡では良好な資料を得ることができ、特に前者では水辺の祭祀に使用されたと思われる中期の土器群がほぼ完形に近い状態でまとまって検出された。

土坑は大半が高台から検出され、住居跡と溝跡間の縁辺部に位置するものが多い。高台に位置するものが25基、谷状の落ち込みに位置するものが４基の計29基である。前者には墓坑と思われるものが１基みられた。土坑の平面プランは円形ないし楕円形を呈するものと長方形のものがある。時期は不明なも

諏訪木遺跡
上之古墳群第2号墳
上之古墳群第1号墳
調査地点
藤之宮遺跡
前中西遺跡
成田支店
JAくまがや
成田幼稚園
東光寺
箱田飛地
県道
谷・羽生
25.5
25.4
25.9
25.6
25.8
25.1
24.8
24.9
25.2
25.3
26.7
26
24
23.9
24.7

第３図　調査地点位置図


67
66
65
64
63
62
61
60
59
58
57
56
55
54
53
52
51
50
49
84
85
86
87
88
89
90
X=16,580
X=16,570
X=16,560
Y=-38,530
Y=-38,520
Y=-38,510
Y=-38,500
Y=-38,490
Y=-38,480
Y=-38,470
Y=-38,460
Y=-38,450
トレンチ
1号井戸
1号住
1号溝
1号掘立
1号土
1号火
1号方形周溝墓
2号住
2号井戸
2号掘立
2号火
2号溝
2号土
3号住
3号井戸
3号掘立
3号溝
3号土
4号住
4号井戸
4号掘立
4号溝
4号土
5号住
5号土
5号掘立
5号溝
6号住
6号土
6号掘立
6号溝
7号住
7号土
7号溝
8号住
8号土
8号溝
9号住
9号土
9号溝
10号住
10号土
10号溝
11号住
11号土
11号溝
12号住
12号土
12号溝
13号住
13号土
13号溝
14号住
14号土
14号溝
15号住
15号土
15号溝
16号住
16号土
16号溝
17号住
17号土
17号溝
18号住
18号土
18号溝
19号住
19号土
19号溝
20号住
20号土
21号住
21号土
22号土
23号土
24号土
25号土
26号土
27号土
28号土
29号土
60-85·86GP1
60-86GP1
63-88GP1
64-88GP1
66-89GP5
66-89GP1~4
62-88GP1
62-89GP1
60·61-88GP1
58-87GP1
57-89GP1
24.10
24.00
23.90
23.80
23.70
23.60
23.50
23.40
23.30
0
10 m
1:400

第４図　調査区全測図

のが多いが、主に古墳時代後期と奈良・平安時代に分けられ、前者が多い。出土遺物は少ないが、古墳時代後期の須恵器、土師器、奈良・平安時代の須恵器などがある。

井戸跡は高台に位置するものが３基、谷状の落ち込みに位置するものが１基の計４基である。平面プランは円形のものが多いが、楕円形を呈する２号は他よりも非常に大きいものであった。時期はほとんど奈良・平安時代のものである。伴う出土遺物は、須恵器、土師器、石製品がある。

方形周溝墓は調査区中央の高台縁辺部から１基検出された。土坑やピット群が密集する所にあり、多くの遺構と重複関係にあるため遺存状態はあまり良くない。検出されたのは北・東・西溝である。コーナー部分に土橋を持つことから四隅が切れるタイプと思われる。時期は弥生時代中期後半から後期初頭にかけての段階である。出土遺物は壺の破片１点のみであるが、重複する３号溝跡からは同時期の土器がいくつか検出されており、本遺構からの流れ込みと思われる。方台部では主体部と思われる掘り込みは確認されなかった。

火葬跡は調査区北東部の高台から２基並んで検出された。遺存状態は悪くない。焼土や炭化物、骨片が検出されたが、礫は検出されなかった。

ピットは主に高台で多数検出された。そのほとんどが規則的に並ばないが、性格としては柱穴と思われ、建物跡や柵列跡などを構成していたと推測される。出土遺物は少ないが、図示不可能な土器片も含めて時期は古墳時代前期から奈良・平安時代までのものである。このうち最も多く検出されたのは古墳時代後期である。

遺構外出土遺物は、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代と幅広い。遺物は、縄文土器、弥生土器、古墳時代の須恵器、土師器、土製品、石製品、奈良・平安時代の須恵器、土師器、土製品などがある。縄文時代及び弥生時代の一部については、今回の調査では遺構が検出されていない。出土遺物の約1/3は確認面上層にある遺物包含層からの検出である。古墳時代後期の遺物が多い。

Ⅳ　遺構と遺物

1　住居跡

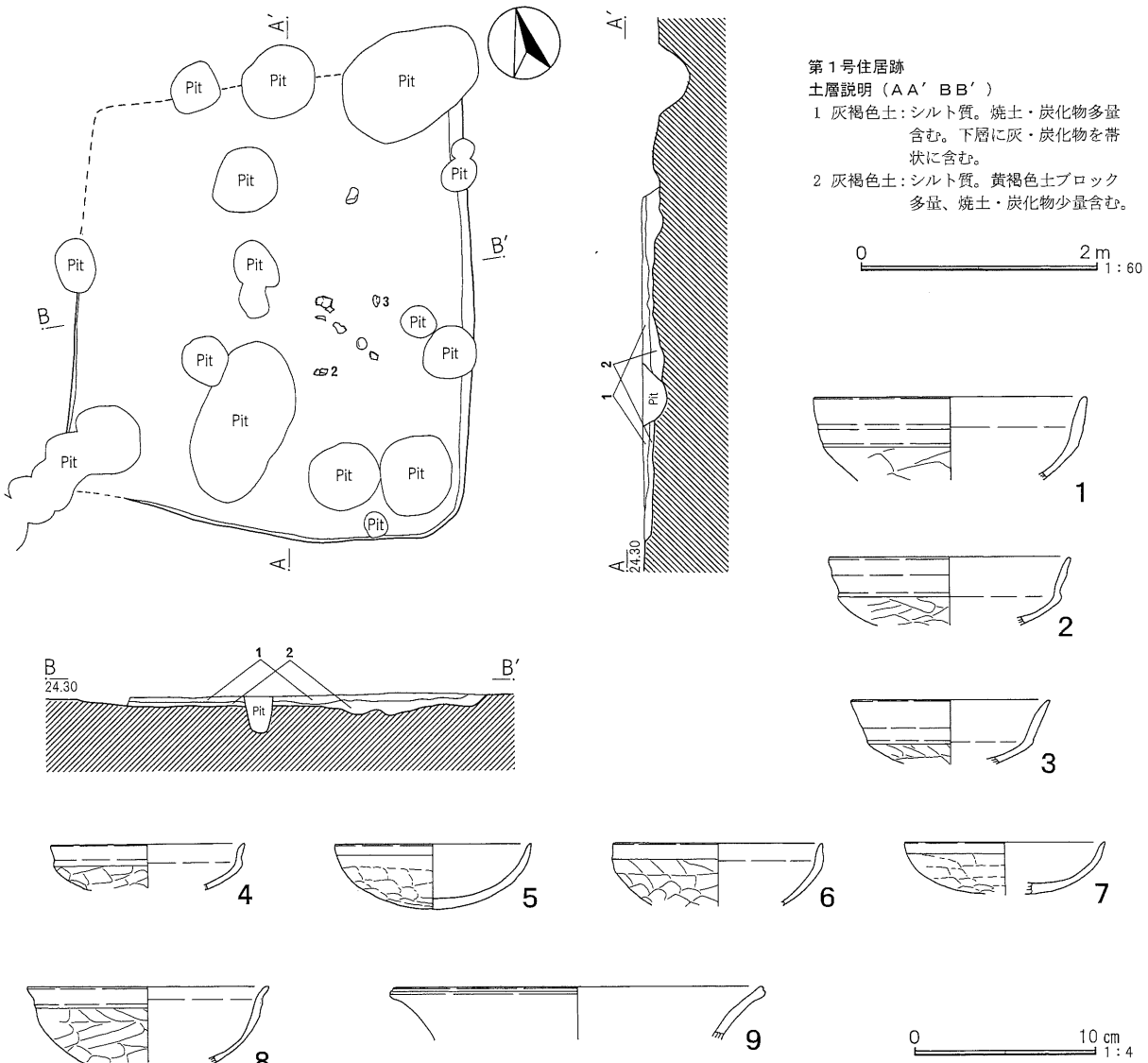
第１号住居跡（第５図）

65・66－88・89グリッドに位置する。床面や壁の所々で時期不明のピットと重複するが、新旧関係は不明である。確認面の都合から北壁及び北西隅付近は検出できなかった。

規模は長軸がおよそ3.9m、短軸は3.35mを測る。平面プランは長方形を呈すると思われる。主軸方向はＮ－16°－Ｅを指す。確認面からの深さは0.18mを測る。床面は北側及び東側でやや凹凸がみられたが、その他はほぼ平坦であった。覆土は二層（１・２層）からなる。２層はブロック土を多量に含んでおり、人為的に埋め戻された可能性がある。

カマドは確認されなかったが、検出された東西南壁には認められなかったことから北壁に設けられていたと思われる。貯蔵穴や壁溝、本住居跡に伴うピットは確認されなかった。

出土遺物は、土師器坏（１～７）、椀（８）、甕（９）がある。２・３は床面中央付近、その他は覆土



第５図　第１号住居跡・出土遺物

第２表　第１号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器　坏	(15.4)	(4.65)	—	ABDHKN	明赤褐色	B	20%	
2	土師器　坏	(13.6)	(3.8)	—	ABDGHIJN	にぶい橙色	B	20%	
3	土師器　坏	(11.2)	(3.6)	—	ABCDHIJKN	橙色	B	30%	
4	土師器　坏	(10.9)	(2.5)	—	ABGHKM	にぶい橙色	B	30%	
5	土師器　坏	(11.0)	3.65	—	BHKM	にぶい黄橙色	B	25%	
6	土師器　坏	(11.8)	(3.5)	—	ABHK	橙色	B	40%	
7	土師器　坏	(11.4)	2.9	—	ABN	橙色	B	20%	
8	土師器　坏	(13.6)	(4.3)	—	AEHIK	橙色	B	20%	
9	土師器　甕	(21.0)	(3.0)	—	ABCHMN	にぶい橙色	B	口縁部20%	

から検出された。完形品はなく、ほとんど破片での検出である。

土師器坏は口径11cm前後のものが多い。１～３はやや深身の有段口縁坏。段は一～二段である。１は段が沈線化しており、２・３は段の突出が弱い。４は小振りの坏蓋模倣坏。短い口縁部が外反する。５～７は北武蔵型坏。いずれも口縁部が内傾しない。５・７はやや外に開き、６は口縁部がほぼ直立し、口唇部のみやや外反する。８は法量的には坏の部類に入るが、口縁部が外反する器形から椀とした。９は甕の口縁部。口唇部が角張り、沈線状の窪みが巡る。器壁がやや厚手である。

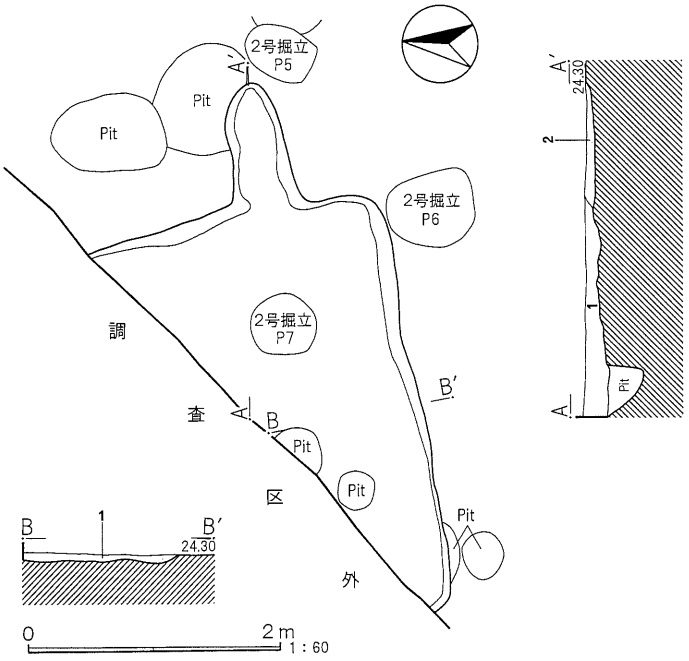
本住居跡の時期は、７世紀後半を中心とする段階と思われる。

第２号住居跡（第６図）

64・65－87・88グリッドに位置する。床面中央付近で２号掘立柱建物跡のピット７、南西隅及び床面中央の調査区境付近で本住居跡以前のピットを切って構築されている。床面南西部では時期不明のピットと重複するが、新旧関係は不明である。北西部大半は調査区外にある。

規模は南西隅の一部がかろうじて検出できたことから、長軸は3.35m程になると思われる。短軸となる南北については不明である。平面プランは縦長の長方形を呈すると思われる。主軸方向はＮ－77°－Ｅを指す。確認面からの深さは0.2mを測る。床面はカマド前付近でやや凹凸がみられたが、その他はほぼ平坦であった。覆土はカマドを除けばシルト質の褐色土（１層）のみである。ブロック土を多量含んでおり、人為的に埋め戻された可能性が高い。

カマドは東壁中央から南寄りに位置する。壁外への張り出しは0.95mと短い。袖部は確認されなかった。焚口部から煙道部はほぼ平坦であり、先端で緩やかに立ち上がる。カマド覆土に天井部崩落土はみられず、焼土を多量に含む褐色土（２層）が確認されたにとどまる。貯蔵穴や壁溝、本住居跡に伴うピットは確認されなかった。



第２号住居跡
土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′）
１ 褐 色 土：シルト質。黄褐色土ブロック多量、焼土粒少量含む。
２ 褐 色 土：シルト質。焼土多量含む。

第６図　第２号住居跡

出土遺物に図示できるものはなかったが、覆土から古墳時代後期の土師器模倣坏や９世紀代の土師器甕の「コ」の字口縁部の小片が検出されている。量的には前者が多く検出されたが、２号掘立柱建物跡との新旧関係や他の８～９世紀代の住居跡の軸や平面プランなどを考慮すると、後者が本住居跡に伴うものと思われる。よって、本住居跡の時期は９世紀代としておきたい。

第３号住居跡（第７図）

64・65－88・89グリッドに位置する。南東部で４号住居跡を切っており、南西隅付近では１号掘立柱建物跡のピット１・７、床面や壁の所々を時期不明のピットに切られている。また床面には影響がなかったが、西壁中央付近の立ち上がりから本住居跡ほぼ中央までの覆土を南西方向から北東方向に走る１号溝跡に切られている。

規模は長軸6.47m、短軸5.57mを測る。平面プランは長方形を呈する。主軸方向はＮ－52°－Ｅを指す。確認面からの深さは0.42mを測る。床面は南側が北側に比べて若干高いが、ほぼ平坦であった。覆土は八層（１～８層）からなる。ほぼレンズ状に堆積していたが、ブロック土を含む層が多いことから部分的に埋め戻された可能性がある。

炉跡は２つ（炉１･炉２）確認された。いずれも床面ほぼ中央から東寄りに位置する。ともに長軸0.6m、短軸0.5m前後の不整円形を呈し、床面からの深さは炉１が0.05m、炉２が0.03mと浅い。

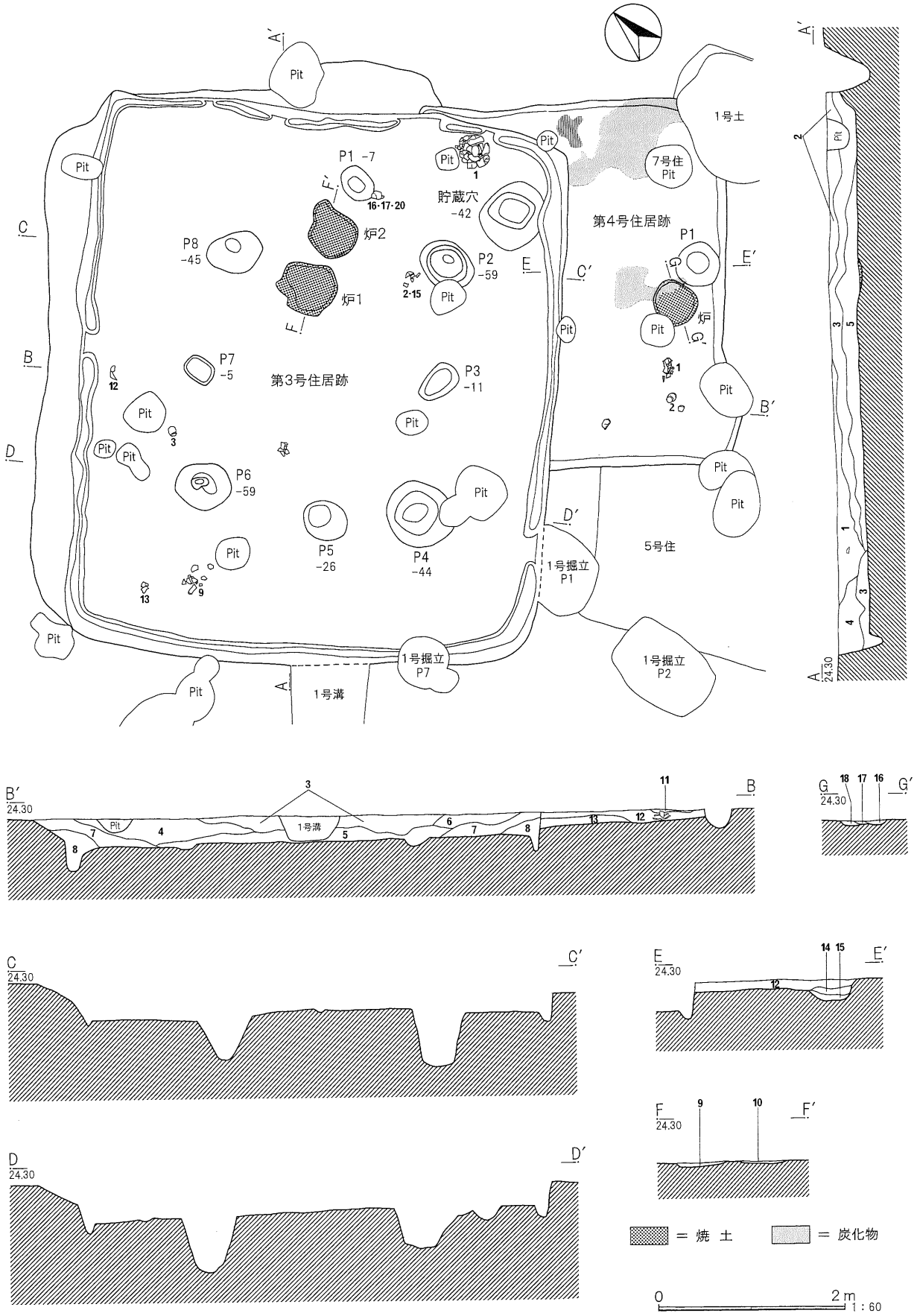
貯蔵穴は南東隅に設けられていた。長軸0.72m、短軸0.63mの隅丸方形を呈し、床面からの深さは0.42mを測る。

壁溝は所々で切れるが、ほぼ全周していた。幅は概ね0.2m前後、床面からの深さは浅い所で0.06m、深い所で0.25mを測る。なお、東壁の中央付近及び北壁の立ち上がりは、確認面から0.2mの深さまでスロープ状の傾斜が設けられており、以下はほぼ垂直ないし鋭角に掘り込まれていた。

本住居跡に伴うピットは８つ確認された。このうちＰ２・４・６・８が主柱穴となり、Ｐ１・３・５・７は径が小さく、主柱穴間に位置することから補助柱と思われる。主柱穴は床面からの深さが0.5m前後を測る。補助柱の深さはピット５が0.26mと比較的深いが、その他は0.11m以下であった。

出土遺物（第８図）は、土師器壺（１・10～14）、台付甕（２～７）、甕（15～21）、鉢（８）、器台（９）がある。１～３・９・12・13・15～17・20は南東隅及び北西隅付近の床面直上、その他は覆土から検出された。完形品はなく、破片での検出が多い。

第３・４号住居跡
土層説明（ＡＡ′ＢＢ′）
1 灰 褐 色 土：シルト質。黄褐色土ブロック・酸化鉄多量含む。
2 黄 褐 色 土：シルト質。
3 黒 褐 色 土：シルト質。黄褐色土ブロック・酸化鉄・焼土粒・炭化物少量含む。
4 灰 黄 色 土：シルト質。黄褐色土ブロック少量含む。
5 暗灰黄色土：シルト質。黄褐色土ブロック・酸化鉄多量含む。
6 灰 褐 色 土：シルト質。マンガン粒多量、黄褐色土ブロック・焼土・炭化物少量含む。
7 褐 灰 色 土：シルト質。黄褐色土ブロック・マンガン粒多量、焼土・炭化物少量含む。
8 褐 灰 色 土：シルト質。マンガン粒多量、炭化物少量含む。
9 炭 化 物 層：所々に焼土含む。
10 炭 化 物 層
11 炭 化 物 層
12 褐 灰 色 土：シルト質。マンガン粒多量、黄褐色土ブロック・焼土粒少量含む。下層に炭化物を帯状に含む。
13 褐 灰 色 土：シルト質。マンガン粒多量含む。下層に炭化物を帯状に含む。
14 褐 灰 色 土：シルト質。マンガン粒多量、黄褐色土ブロック少量含む。
15 褐 灰 色 土：シルト質。黄褐色土ブロック・マンガン粒多量含む。
16 焼　土　層
17 褐 灰 色 土：シルト質。下層に炭化物を帯状に含む。
18 灰 褐 色 土：シルト質。黄褐色土ブロック多量含む。下層に炭化物を帯状に含む。


第3号住居跡
第4号住居跡
貯蔵穴
-42
P1 -7
P2
-59
P3
-11
P4
-44
P5
-26
P6
-59
P7
-5
P8
-45
炉1
炉2
炉
1号土
7号住
Pit
5号住
1号溝
1号掘立
P1
1号掘立
P2
1号掘立
P7
Pit
24.30
= 焼 土
= 炭化物
0
2m
1:60

第7図　第3・4号住居跡

壺はヘラナデ調整のものが主体となる。１は大型の壺。口縁部は横ナデ調整であり、やや肥厚しているように見えるが、頸部以下に丁寧なヘラナデを施すことにより口縁部との境に段を作り出している。胴部は上位までの検出であるが、球形を呈すると思われる。10～14は壺の破片。10は頸部の磨耗が著しいが、１と同じくヘラナデ調整と思われる。11は壺としては唯一のハケメ、12～14は内外面ともヘラナデ調整による。台付甕は明確に分かる個体は台部（２～４）と接合部（５～７）のみである。一部にハケメがみられたが、そのほとんどがヘラナデ調整による。台部内面に折り返しのあるものはみられない。７は底面を欠く。粘土が剥がれたものである。15～21は甕の破片。外面がハケメ、内面はヘラナデ調整のものが多い。甕としたが、台付甕になる可能性が高い。このうち15は２の台部と同一個体の可能性がある。８は小型の鉢。口縁部がほぼ直立し、頸部にくびれを持つ。胴部が膨らみ、中位に最大径を有する。口縁部が横ナデ、頸部以下の外面はハケメ調整である。９は器台の台部。本住居跡唯一のヘラミガキ調整である。裾部には横ナデが施されている。赤彩はみられない。中位にやや大きめの透孔を持つ。

本住居跡の時期は、古墳時代前期である。

第４号住居跡（第７図）

64－88・89グリッドに位置する。北側大半を３号住居跡、南東隅を１号土坑及び７号住居跡のピット、南西隅や床面中央付近を時期不明のピットに切られている。南側に位置する５号住居跡との新旧関係については、５号住居跡は遺構確認段階で床面が一部露出ないし削平されていたため、発掘調査時点では本住居跡が切っていると思われた。しかし、整理調査で両住居跡の出土遺物を比較し、本住居跡の土層断面を観察した結果、本住居跡の方が古いことが判明した。

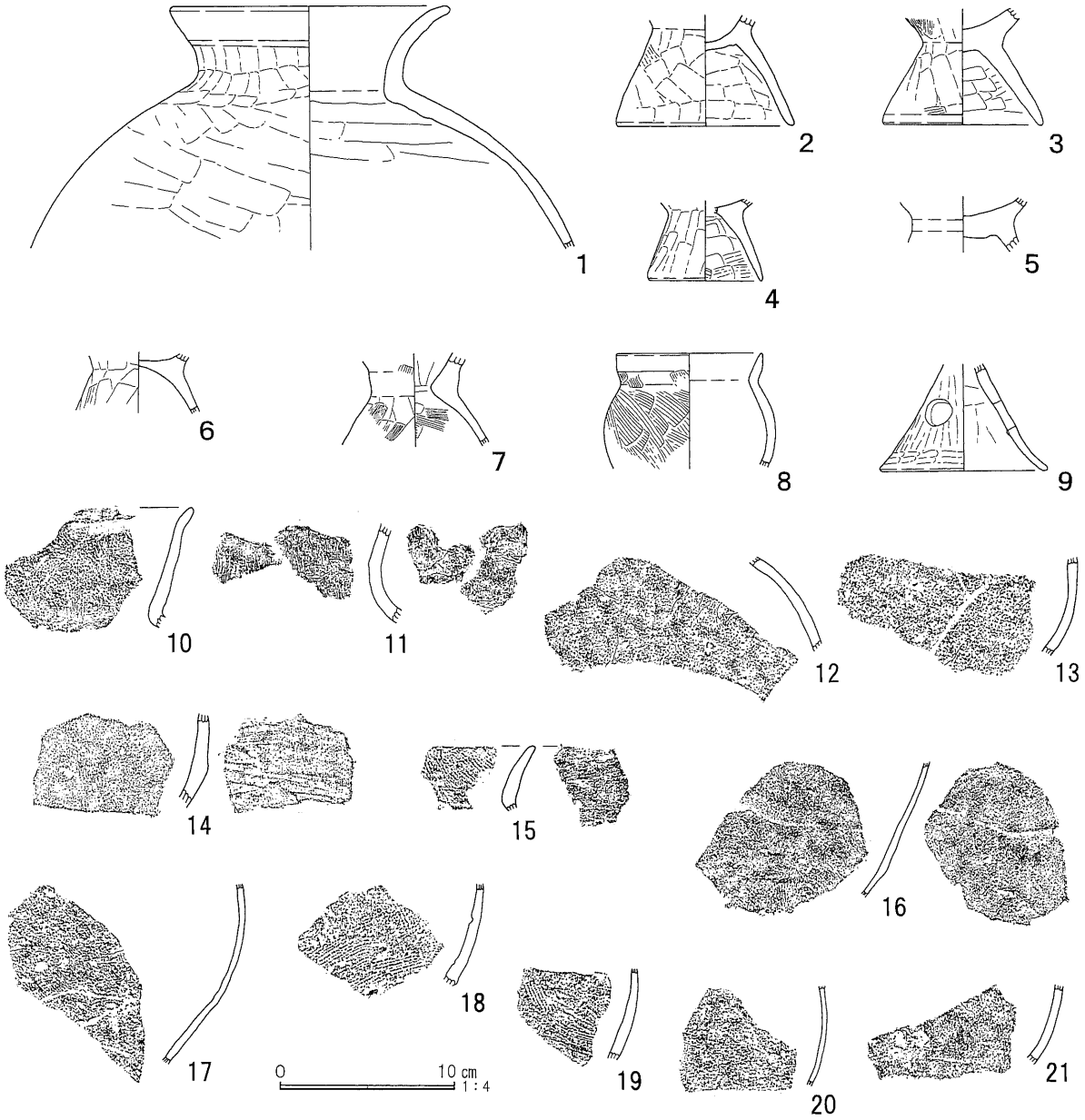
正確な規模は不明であるが、かろうじて北東隅の一部が確認できたことから長軸3.89m、短軸3.25m程のほぼ正方形を呈すると思われる。主軸方向はＮ－44°－Ｅを指す。確認面からの深さは0.16mを測る。床面はほぼ平坦であった。南東隅付近及び炉跡北側の床面直上には、炭化物が広がっていた。覆土は三層（11～13層）確認されたが、最上層の11層は炭化物層であり、本住居跡南側に位置する５号住居跡の床面直上に堆積したものと思われる。よって、12・13層が本住居跡の覆土になる。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

炉跡は南壁沿い中央付近から検出された。西側一部を時期不明のピットに切られているが、ほぼ円形を呈する。径0.5m前後、床面からの深さは0.05mと浅い。

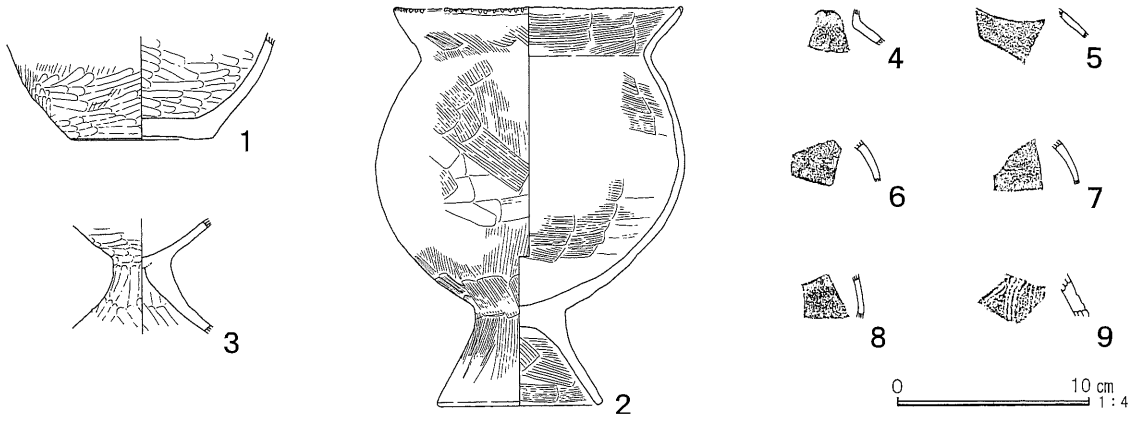
炉跡の東側からは本住居跡に伴うピットが１つ検出された。径0.47m、床面からの深さは0.11mを測る。その位置から主柱穴とは考えづらい。貯蔵穴や壁溝は確認されなかった。

出土遺物（第９図）は、土師器広口壺（１）、小型壺（４～８）、台付甕（２）、高坏（３）がある。１・２は南西隅付近、その他は覆土からの検出である。全形がわかるのは２のみである。また、これらの他に流れ込みの遺物として弥生時代中期後半の壺の胴部片（９）も検出された。

１は壺の胴下部から底部。内外面ともにヘラミガキ調整であり、その器形から広口壺であろう。外面は部分的にヘラミガキ以前のハケメが残る。４～８は小型壺の破片。すべて同一個体である。頸部内外面及び胴部外面はヘラミガキ調整、肩部外面には文様帯としてＲＬ単節縄文と刺突列が施されており、文様帯以外の外面及び頸部内面には赤彩がみられた。２は口唇部に刻みを持ち、口縁部は「く」の字、胴部は球形を呈する。胴部中位に最大径を持つが、口径とあまり差がない。調整は胴部外面の一部にヘ



第８図　第３号住居跡出土遺物



第９図　第４号住居跡出土遺物

第３表　第３号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器　壺	16.4	(14.2)	—	ABDHIKN	橙色	B	口～胴90%	外面磨耗顕著。
2	土師器台付甕	—	(6.5)	(10.3)	ABDGIMN	橙色	C	台部70%	磨耗顕著。№15と同一個体？
3	土師器台付甕	—	(6.8)	(9.4)	ADHJN	橙色	B	台部25%	外面やや磨耗。
4	土師器台付甕	—	(4.7)	(6.7)	BEHIN	にぶい橙色	B	台部40%	
5	土師器台付甕	—	(3.2)	—	ABIKMN	橙色	B	接合部70%	
6	土師器台付甕	—	(3.55)	—	ACHKN	橙色	B	接合部100%	
7	土師器台付甕	—	(5.4)	—	ACHKN	橙色	B	接合部40%	底面剥離。
8	土師器　鉢	(8.6)	(6.7)	—	ABDHN	明赤褐色	B	口～胴25%	
9	土師器　器台	—	(6.25)	(9.9)	ABHKMN	橙色	B	台部60%	磨耗顕著。透孔有。
10	土師器　壺	—	—	—	ABEGHIN	橙色	B	口縁部片	外面磨耗顕著。
11	土師器　壺	—	—	—	ABCHIN	橙色	B	頸部片	
12	土師器　壺	—	—	—	ABCDEHIKMN	橙色	B	肩部片	
13	土師器　壺	—	—	—	AGIMN	橙色	C	胴下部片	磨耗顕著。
14	土師器　壺	—	—	—	ADGHIKN	橙色	B	胴下部片	
15	土師器　甕	—	—	—	ABDIN	にぶい橙色	B	口縁部片	№２と同一個体？
16	土師器　甕	—	—	—	ABDHIMN	橙色	B	胴下部片	
17	土師器　甕	—	—	—	ABCIKN	にぶい橙色	B	胴下部片	№20と同一個体。
18	土師器　甕	—	—	—	ABHIN	橙色	B	胴下部片	
19	土師器　甕	—	—	—	ABCDGHKN	橙色	B	胴下部片	
20	土師器　甕	—	—	—	ABCHKN	橙色	B	胴下部片	№17と同一個体。
21	土師器　甕	—	—	—	AHIKMN	橙色	B	胴下部片	

第４表　第４号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器広口壺	—	(5.5)	7.5	BCGHIKN	外:にぶい褐　内:橙	B	胴～底100%	
2	土師器台付甕	(15.2)	21.25	8.8	ABDEGHKN	外:明褐　内:黒	B	35%	
3	土師器　高坏	—	(6.05)	—	ACEHIN	にぶい橙色	A	接合部95%	外面赤彩。
4	土師器小型壺	—	—	—	ABDM	浅黄色	B	頸～肩部片	頸部内外面赤彩。№５～８と同一個体。
5	土師器小型壺	—	—	—	ABDM	にぶい橙色	B	肩部片	№４・６～８と同一個体。
6	土師器小型壺	—	—	—	ABDM	にぶい橙色	B	胴上部片	外面ヘラミガキ部分赤彩。№4・5・7・8と同一個体。
7	土師器小型壺	—	—	—	ABDM	にぶい橙色	B	胴上部片	外面ヘラミガキ部分赤彩。№4～6・8と同一個体。
8	土師器小型壺	—	—	—	ABD	にぶい橙色	B	胴部片	外面ヘラミガキ部分赤彩。№4～7と同一個体。
9	弥生土器　壺	—	—	—	ABDGHK	褐灰色	B	胴部片	中期後半。

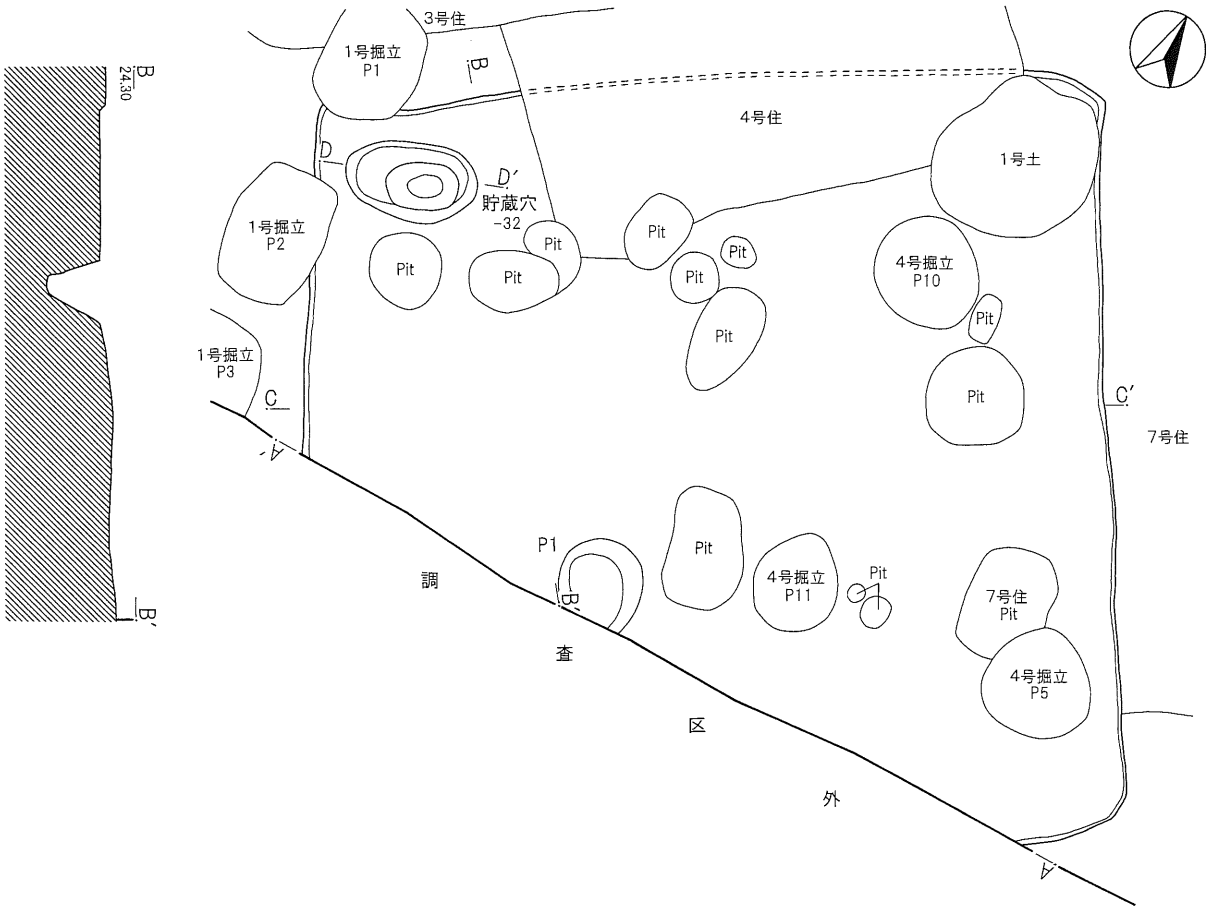
ラナデが認められたが、口縁部から台部まで主体となるのはハケメである。３は高坏の接合部。外面はヘラミガキ調整で、赤彩が施されている。内面はヘラナデ調整である。

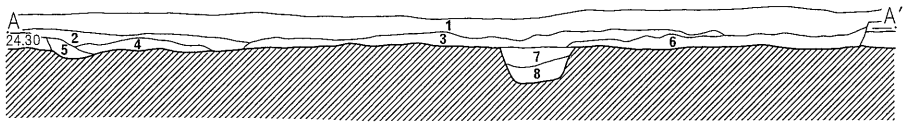
本住居跡の時期は弥生時代末から古墳時代初頭にかけての段階である。

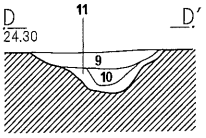
第５号住居跡（第10図）

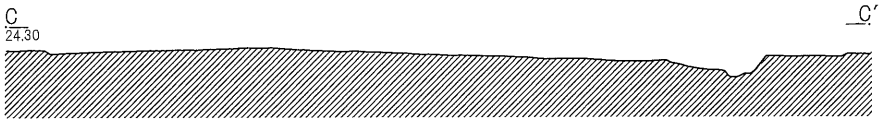
63～65－89・90グリッドに位置する。４号住居跡でも述べたとおり、本住居跡は遺構確認段階で床面が一部露出ないし削平されていたため、発掘調査時点では４号住居跡に切られていると思われたが、整理調査の結果、本住居跡が新しいことが明らかとなった。東側では７号住居跡を切っており、北西隅を１号掘立柱建物跡のピット１・２、北東隅を１号土坑、床面東側を４号掘立柱建物跡のピット５・10・11に切られている。また床面には時期不明のピットが多数みられたが、新旧関係は不明である。南西隅付近及び南壁の大半は調査区外にある。

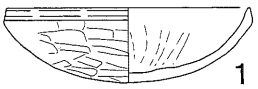
北壁の大半は確認できなかったが、規模は一辺6.2m前後を測り、平面プランはほぼ正方形を呈すると思われる。主軸方向はＮ－29°－Ｗを指す。確認面からの深さは0.08mと非常に浅いが、調査区境での土層断面では0.15m程の深さであったことが確認された。床面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。床面中央付近から西側にかけて一部貼床が確認された。覆土は調査区境の土層断面では五層（２～６層）からなる。レンズ状に堆積していたが、ブロック土や褐灰色土などを含む層がみられたことか

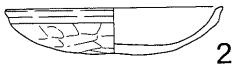


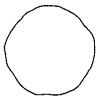












第５号住居跡

土層説明（ＡＡ′ ＤＤ′）

1 暗灰黄色土：シルト質。下層にマンガン粒少量含む。
2 暗 灰 色 土：シルト質。にぶい黄色土ブロック多量、焼土少量含む。
3 黄 灰 色 土：シルト質。褐灰色土多量、焼土粒少量含む。下層に一部貼床有。
4 黄 灰 色 土：シルト質。焼土・炭化物少量、褐灰色シルト微量含む。
5 黒 褐 色 土：シルト質。黄灰色土ブロック多量、焼土・炭化物少量含む。
6 褐 灰 色 土：シルト質。黄灰色土ブロック・焼土・マンガン粒多量、炭化物少量含む。下層に貼床有。
7 黒 褐 色 土：シルト質。焼土・炭化物微量含む。下層ににぶい黄色土を帯状に含む。
8 黒 褐 色 土
9 褐 灰 色 土：シルト質。黄灰色土ブロック・焼土粒・炭化物少量含む。
10 黄 灰 色 土：シルト質。褐灰色土少量含む。
11 灰 色 砂 層：黄灰色土ブロック・褐灰色土少量含む。

0　2m　1：60

0　10cm　1：4

第10図　第５号住居跡・出土遺物

第５表　第５号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器　坏	(13.0)	3.9	—	ABEIKN	橙色	B	25%	内面磨耗顕著、放射状暗文有。
2	土師器　坏	(11.6)	2.5	—	ABCEGHK	橙色	B	30%	
3	土製支脚	最大長（5.3）cm、最大径（4.8）cm。胎土：ABHKN。色調：明赤褐色。焼成：B。先端部のみ残存。							

ら部分的に埋め戻された可能性がある。

カマドは３・４号住居跡覆土上面や検出できた東西壁に認められなかったことから南壁に設けられていたのであろうか。詳細については不明と言わざるを得ない。

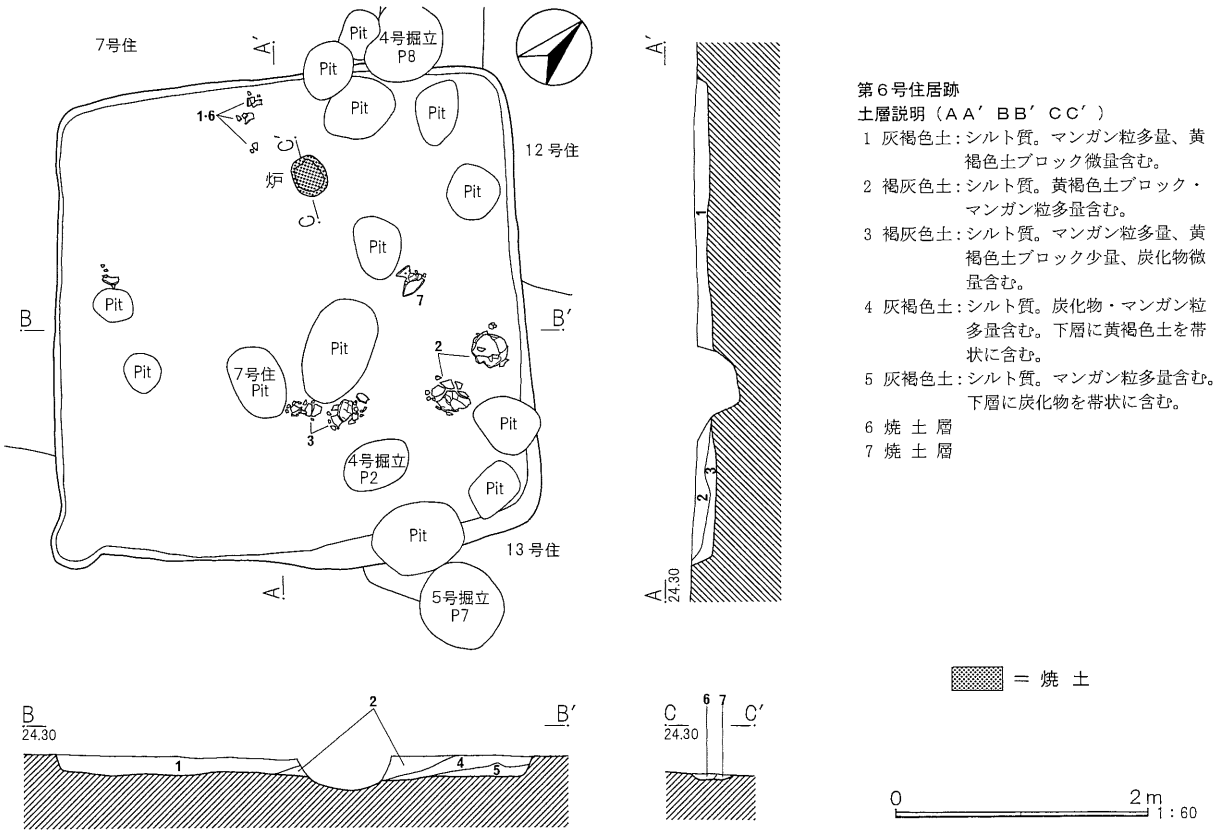
貯蔵穴は北西隅から検出された。長軸1.07m、短軸0.63mの楕円形を呈し、床面からの深さは0.32mを測る。

床面中央から南西部の調査区との境からは、ピットが１つ検出された。その位置から柱穴とは考えづらいが、土層断面では切り合い関係が認められなかったことから本住居跡に伴うものと判断した。径は0.7m前後、床面からの深さは0.28mを測る。壁溝は確認されなかった。

出土遺物は、土師器坏（１・２）、土製支脚（３）がある。１・２は貯蔵穴、３は覆土から検出された。いずれも残存状態は良くない。

１は暗文坏。やや深身で口縁部が内傾しており、器形的に北武蔵型坏に近い。２は北武蔵型暗文坏の器形を呈するが、内面に暗文はみられない。浅身で口縁部が外に開き、口唇部のみ外反する。３は土製支脚の先端部。外面に粗いヘラ削りが施されている。

本住居跡の時期は、７世紀末から８世紀初頭にかけての段階と思われる。



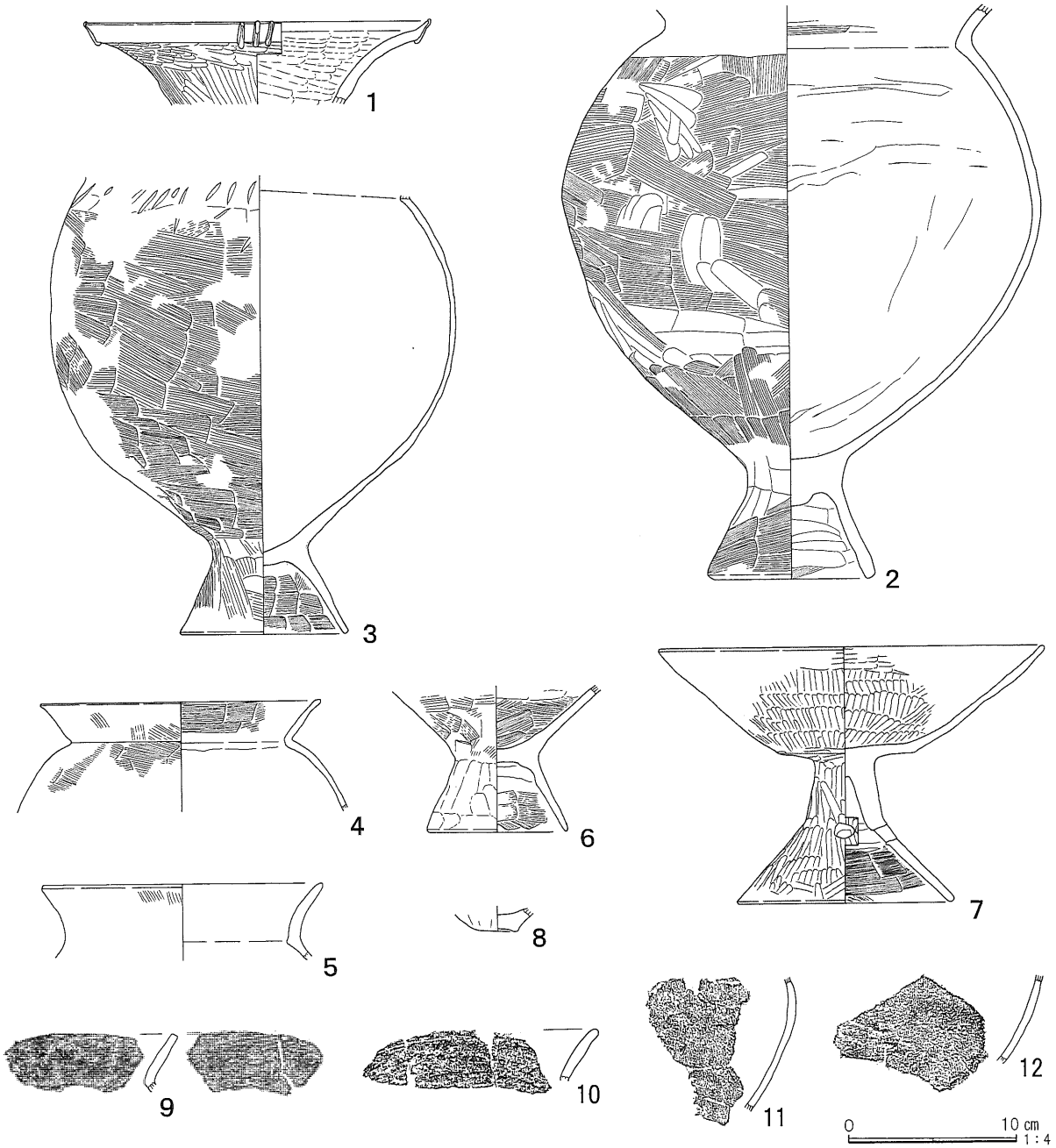
第11図　第６号住居跡

第６号住居跡（第11図）

62・63－88・89グリッドに位置する。ほぼ全面を４号掘立柱建物跡のピットや時期不明のピットに切られている。重複関係にある７・12・13号住居跡は５号住居跡同様、確認段階で既に床面が一部露出ないし削平されていたため、発掘調査時点では本住居跡がこれらの住居跡を切っていると思われたが、整理調査の結果、本住居跡が最も古いことが判明した。

規模は一辺3.8m前後を測り、平面プランはほぼ正方形を呈する。主軸方向はN－46°－Wを指す。確認面からの深さは0.18mを測る。床面はほぼ平坦であった。覆土は五層（１～５層）からなる。いずれの層にも混入物がみられたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

炉跡は床面中央からやや北西寄りに設けられていた。長軸0.34m、短軸0.27mの楕円形を呈し、床面



第12図　第６号住居跡出土遺物

第６表　第６号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器　壺	(21.0)	(5.1)	—	ABDEHKN	橙色	B	口～頸30%	内面やや磨耗。
2	土師器台付甕	—	(34.65)	(10.1)	ABCDHJN	橙色	B	頸～台80%	胴部内面輪積痕有。
3	土師器台付甕	—	(27.55)	(10.1)	ABCDN	外:橙　内:褐	B	頸～台60%	肩部外面ヘラ刻み有。
4	土師器　甕	(17.0)	(6.6)	—	ABDHKN	褐灰色	B	口～胴20%	外面剥離顕著。
5	土師器　甕	(17.1)	(4.65)	—	ABEHKN	明赤褐色	B	口縁部30%	外面剥離顕著。
6	土師器台付甕	—	(8.8)	(8.5)	ABCHIN	赤橙色	B	胴～台70%	
7	土師器　高坏	(23.3)	15.35	(13.2)	ABCHKN	赤褐色	B	70%	外面・坏部内面赤彩。透孔有。
8	土師器　坩	—	(1.35)	2.2	ACIN	明赤褐色	B	底部100%	
9	土師器　甕	—	—	—	ABHN	橙色	B	口縁部片	
10	土師器　甕	—	—	—	ACGHIJN	橙色	B	口縁部片	
11	土師器　甕	—	—	—	ABHKN	暗褐色	B	胴下部片	
12	土師器　甕	—	—	—	ABCHKN	暗褐色	B	胴下部片	

からの深さは0.05mを測る。貯蔵穴や壁溝、本住居跡に伴うピットは確認されなかった。

出土遺物（第12図）は、土師器壺（１）、台付甕（２・３・６）、甕（４・５・９～12）、高坏（７）、坩（８）がある。１～３・６・７が床面直上、その他は覆土からの検出である。全形がわかるのは７のみであるが、比較的良好な資料がまとまって出土した。

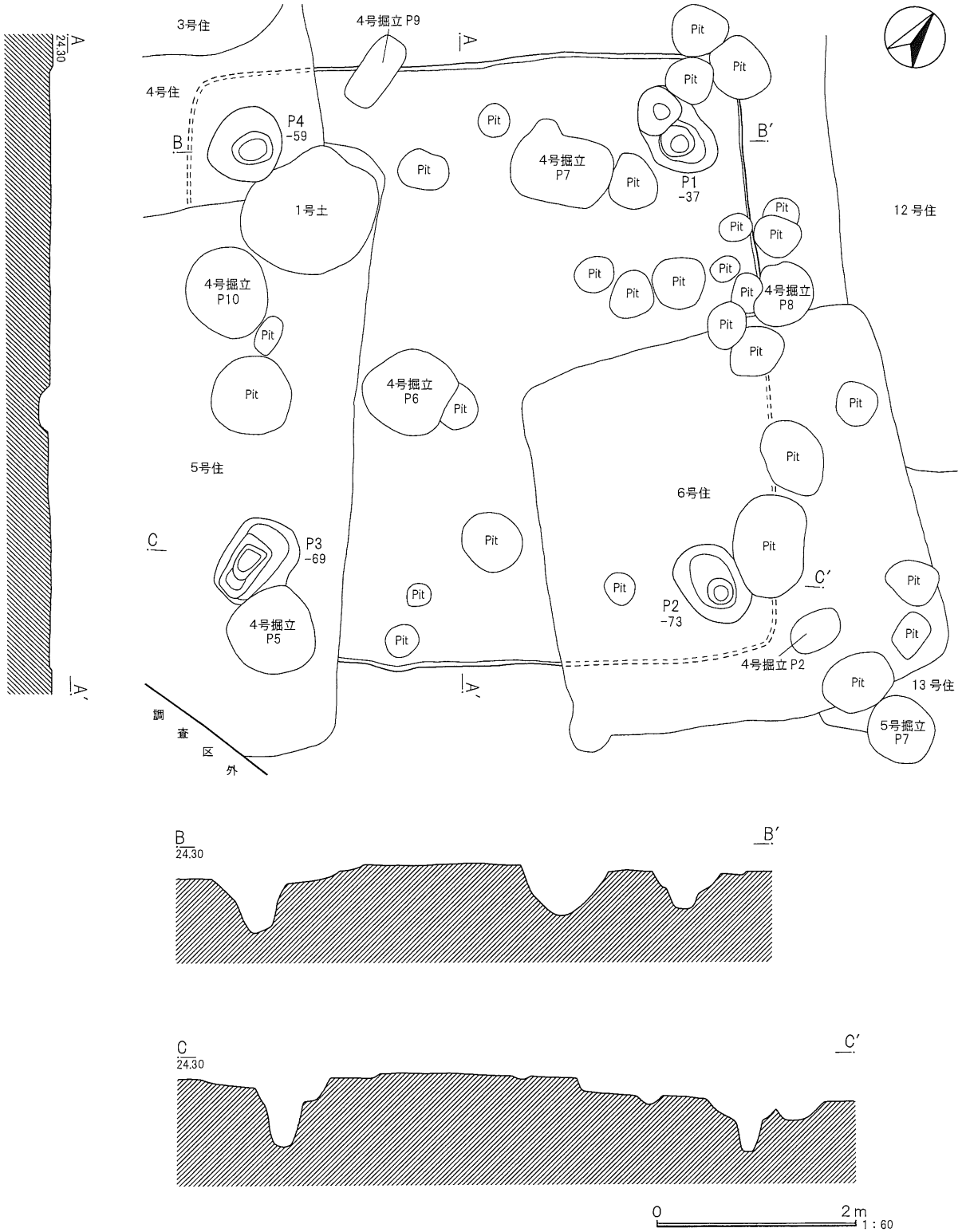
１は壺の口縁部から頸部にかけての部位。受け口状を呈する複合口縁に３個１対の棒状浮文が付く。口縁部は横ナデ、頸部は内外面ともヘラミガキ調整であるが、外面は細かく丁寧であるのに対し、内面はやや粗めである。内外面とも赤彩はみられない。台付甕及び甕は、口縁部がハケメ後横ナデ、胴部以下はハケメ調整のものが主体となる。口縁部は「く」の字、胴部は倒卵形状を呈し、胴部は口縁部よりも膨らみ、最大径を上位ないし中位に持つ。台付甕にはやや小振りな台部が付くが、内面に折り返しのあるものはみられない。２・３は残存状態が良いが、ともに口縁部を欠く。２は肩部外面まで横ナデが施されている。３は肩部外面に縦位のヘラによる刻みが等間隔に巡る。６は胴下部の調整が内外面ともにハケメであるが、台部は外面がヘラナデ、内面はハケメである。４・５・９～12は甕の破片。甕としたが、台付甕になる可能性がある。７は外面及び坏部内面に赤彩が施されている。赤彩部分はヘラミガキ調整であるが、赤彩のない脚部内面はハケメとヘラナデである。深身で坏部下位に明瞭な段を持つ。脚部は上位が柱状を呈するが、中位から裾は「ハ」の字に広がる。上位と中位の境目に透孔を持つ。８は坩の底部。若干上げ底である。調整は内外面ともヘラナデ調整であるが、外面は丁寧なのに対し内面はやや粗い。

本住居跡の時期は、古墳時代前期である。

第７号住居跡（第13図）

63・64－88・89グリッドに位置する。北西隅で４号住居跡、中央から南東隅にかけて６号住居跡と重複しているが、本住居跡は遺構確認段階で既に床面が一部露出ないし削平されていたため、発掘調査時点では４・６号住居跡に切られていると思われた。しかし、整理調査による出土遺物の比較等の結果、本住居跡がこれらの住居跡よりも新しいことが判明した。この他の遺構との重複関係については、西側を５号住居跡、北西隅を１号土坑、床面所々を４号掘立柱建物跡のピットに切られている。また、時期不明のピットとも多数重複しているが、新旧関係は不明である。

遺存状態が悪いため正確な規模及び平面プランは不明であるが、本住居跡に伴うピットの配置からみて一辺６m程の正方形を呈すると思われる。主軸方向はN－39°－Wを指す。確認面からの深さは0.03mと非常に浅い。床面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土は図示できなかったが、灰色



第13図　第７号住居跡

系の土が若干堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

カマドをはじめ貯蔵穴や壁溝は確認できなかったが、本住居跡に伴うピットが４つ検出された。いずれも四隅に近い箇所にあるが、その配置からみて主柱穴と思われる。床面からの深さは0.37～0.73mを

測り、いずれもしっかりとした掘り込みであった。

出土遺物に図示できるものはなかったが、古墳時代後期の土師器有段口縁坏や模倣坏、甕の小片が若干検出されている。本住居跡の時期は古墳時代後期としか言えない。

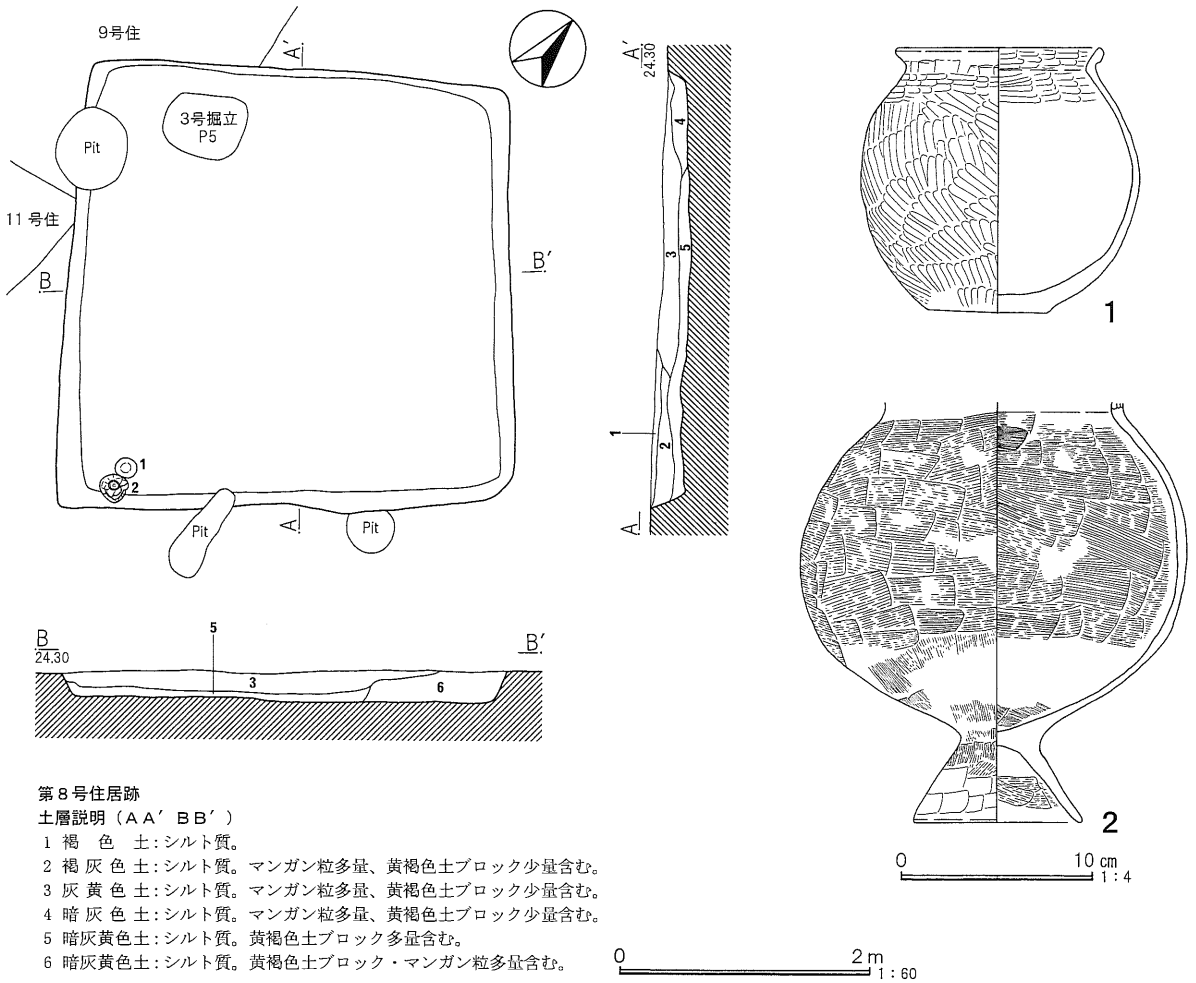
第８号住居跡（第14図）

62－86グリッドに位置する。北西隅付近を９・11号住居跡や３号掘立柱建物跡のピット５、時期不明のピットに切られている。また、南壁中央付近も時期不明のピットに切られている。

規模は一辺3.5m前後を測り、平面プランはほぼ正方形を呈する。主軸方向はN－39°－Wを指す。確認面からの深さは0.26mを測る。床面はほぼ平坦であった。覆土は六層（１～６層）からなる。１層以外はブロック土を含んでおり、人為的に埋め戻された可能性がある。

炉跡をはじめ貯蔵穴や壁溝、本住居跡に伴うピットは確認されなかった。

出土遺物は、土師器広口壺（１）、台付甕（２）がある。図示できる遺物は二点のみであるが、残存状態は良好である。ともに南西隅から逆位の状態で出土した。



第８号住居跡
土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′）
1 褐　色　土：シルト質。
2 褐 灰 色 土：シルト質。マンガン粒多量、黄褐色土ブロック少量含む。
3 灰 黄 色 土：シルト質。マンガン粒多量、黄褐色土ブロック少量含む。
4 暗 灰 色 土：シルト質。マンガン粒多量、黄褐色土ブロック少量含む。
5 暗灰黄色土：シルト質。黄褐色土ブロック多量含む。
6 暗灰黄色土：シルト質。黄褐色土ブロック・マンガン粒多量含む。

第14図　第８号住居跡・出土遺物

第７表　第８号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器広口壺	11.2	14.0	6.3	ABDHIKN	橙色	B	ほぼ完形	
2	土師器台付甕	—	(22.3)	9.0	ABHIKN	灰褐色	B	頸～台80%	

１は器形的に甕に近いが、調整の主体がヘラミガキであることから広口壺とした。ヘラミガキは胴部外面及び口縁部から胴上部の内面に施されている。口縁部外面は横ナデ調整である。短い口縁部が外に開き、頸部外面にヘラナデを施すことで口縁部との境に段を作り出している。胴部はやや球形を呈し、中位に最大径を持つ。２は頸部が横ナデ、肩部以下は台部まで内外面ともハケメ調整によるが、台部外面にはヘラナデも施されている。胴部は球形を呈し、やや小振りの台部が付く。口縁部を欠くが、胴部は口縁部よりも膨らみ、最大径を中位に持つ。

本住居跡の時期は、９・11号住居跡より古い段階の古墳時代前期である。

第９号住居跡（第15図）

62・63－85・86グリッドに位置する。南側で11号住居跡、南東隅で８号住居跡を切っており、床面ほぼ全面及び南東隅付近を３号掘立柱建物跡や時期不明のピットに切られている。北側は調査区外にある。

規模は長軸が不明であるが、検出できた南北はおよそ5.5m、短軸となる東西は4.98mを測る。平面プランは長方形を呈すると思われる。主軸方向はＮ－10°－Ｗを指す。確認面からの深さは0.09mと浅い。床面はほぼ平坦であった。覆土はシルト質の褐灰色土（１層）のみである。ブロック土を多量含んでおり、人為的に埋め戻された可能性がある。

炉跡は床面中央から北側の調査区境から一部のみ検出された。掘り込みというよりは焼土の広がりが確認されたにとどまる。貯蔵穴や壁溝、本住居跡に伴うピットは確認されなかった。

出土遺物は、土師器甕（１・３）、壺（２）がある。いずれも覆土から検出された。

甕は１が口縁部から胴部中位まで、３が胴上部までの検出である。ともに口縁部が横ナデ、胴部外面はハケメ調整による。口縁部がやや短く、開きが小さい。胴部は口縁部より膨らみ、球形を呈すると思われる。台付甕になる可能性がある。２は大型壺の胴下部片。分かりづらいが、外面はヘラミガキ、内面はヘラナデ調整による。器壁が厚い。

本住居跡の時期は、８・11号住居跡より新しい段階の古墳時代前期である。

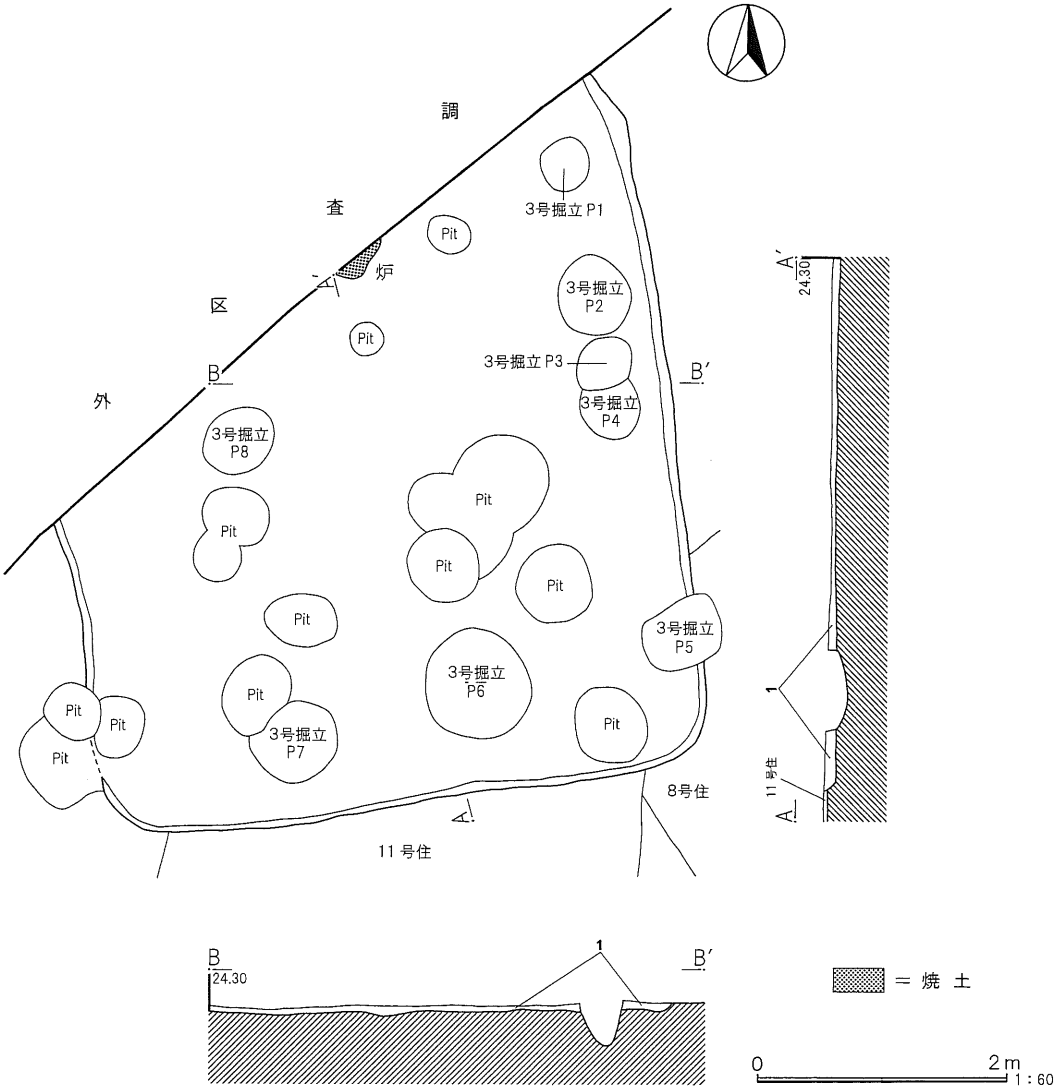
第10号住居跡（第16図）

62・63－87グリッドに位置する。北西部で11号住居跡を切っており、北側及び南側で時期不明のピットに切られている。南側では12号住居跡と重複しているが、12号住居跡は遺構確認段階で既に床面が一部露出ないし削平されていたため、発掘調査時点では本住居跡の方が新しいと思われた。しかし、整理調査による出土遺物の比較等の結果、本住居跡が12号住居跡よりも古いことが判明した。本住居跡のほぼ中央は、東西に入れた試掘調査時のトレンチにより欠く。

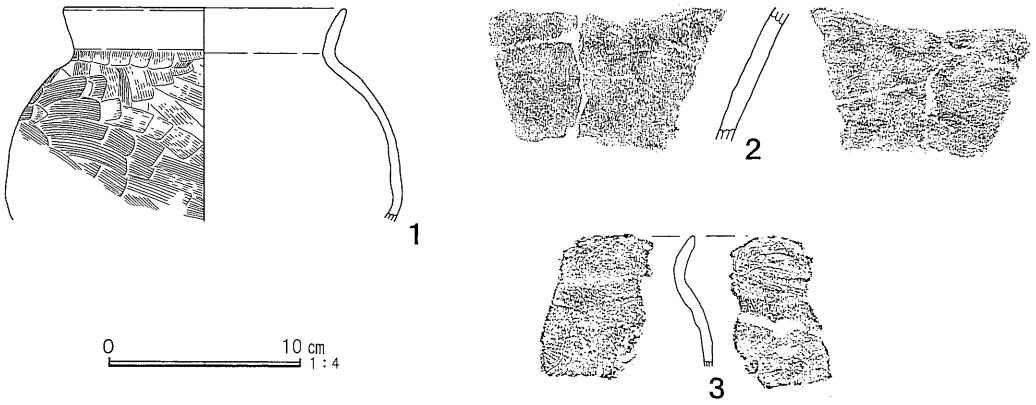
規模は一辺3.8m前後を測り、平面プランはほぼ正方形を呈する。主軸方向はＮ－46°－Ｅを指す。確認面からの深さは0.21mを測る。床面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土は四層（１～４層）からなる。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

炉跡は２つ（炉１･炉２）確認された。炉１は北壁寄り、炉２は床面中央からやや北寄りに位置する。炉１は径0.45m前後の円形を呈し、床面からの深さは0.05mを測る。炉２は径0.25m前後の隅丸方形状を呈し、床面からの深さは0.03mを測る。貯蔵穴や壁溝、本住居跡に伴うピットは確認されなかった。

出土遺物（第17図）は、土師器壺（１・２・６・７）、高坏（３）、器台（４）、坩（５）、甕（８～11）、台付甕（12～14）がある。３・６・７は北東壁沿いの床面、その他は覆土から検出された。全形



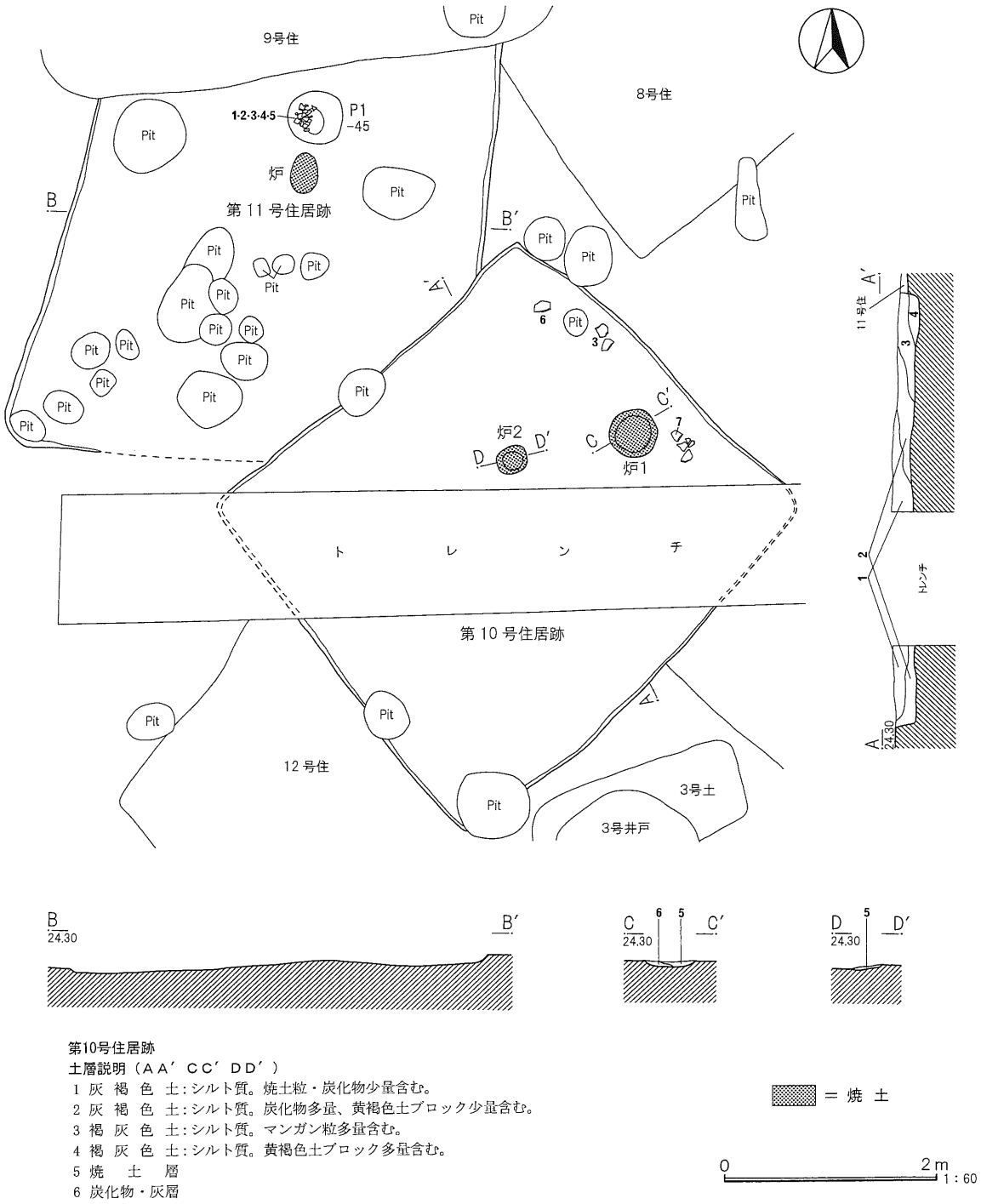
第９号住居跡
土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′）
1 褐灰色土：シルト質。黄褐色土ブロック・砂多量含む。下層に炭化物を帯状に含む。



第15図　第９号住居跡・出土遺物

第８表　第９号住居跡出土遺物観察表

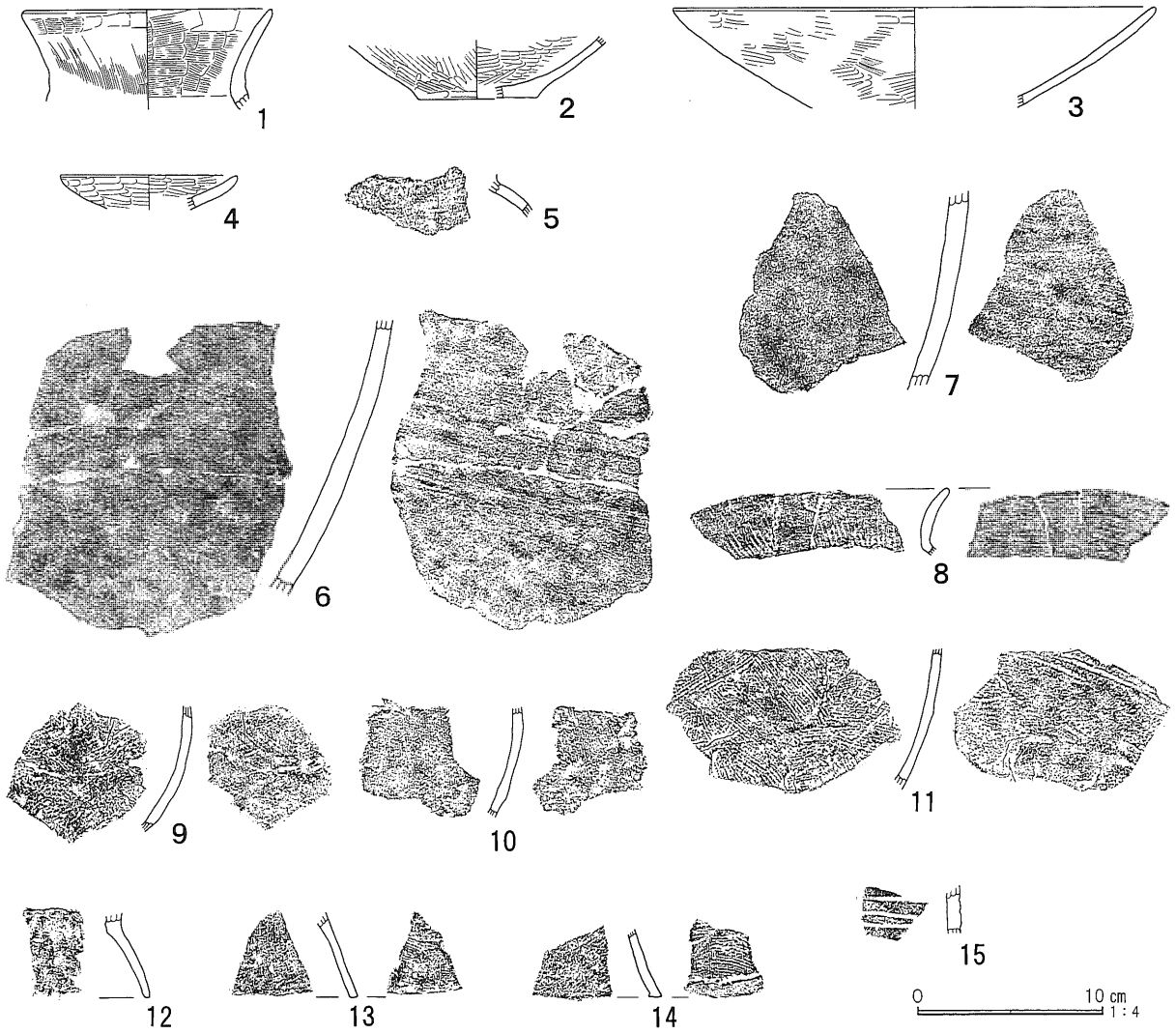
番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器　甕	(15.0)	(11.3)	—	ACHIJN	にぶい褐色	B	口～胴20%	
2	土師器　壺	—	—	—	BHIKN	にぶい黄橙色	B	胴下部片	内外面一部磨耗。
3	土師器　甕	—	—	—	ABHN	にぶい橙色	B	口～胴部片	外面剥離顕著。内面輪積痕有。



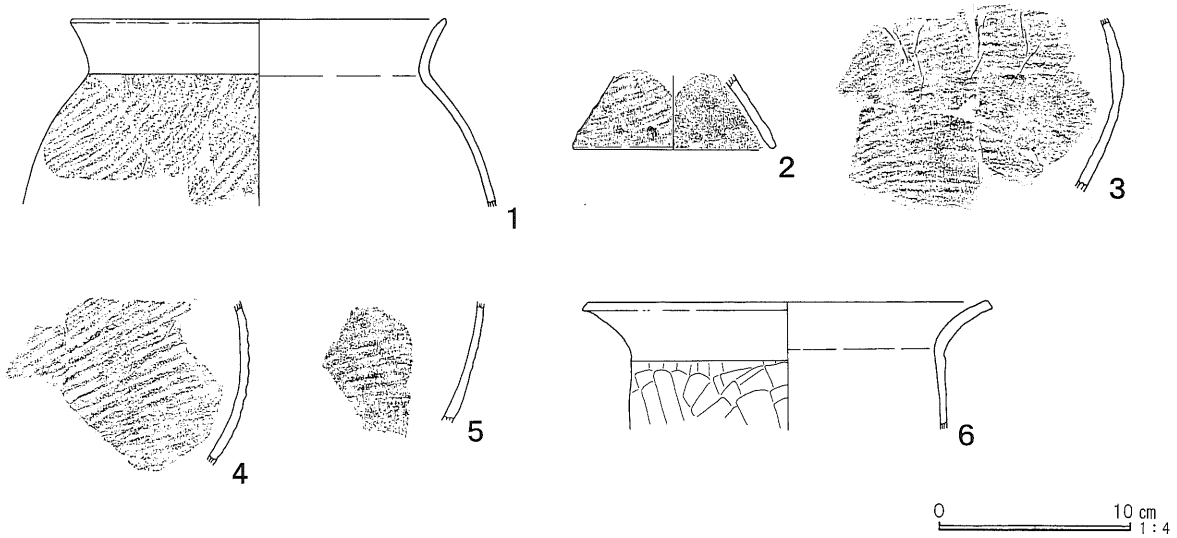
第10号住居跡
土層説明（ＡＡ′ ＣＣ′ ＤＤ′）
1 灰 褐 色 土：シルト質。焼土粒・炭化物少量含む。
2 灰 褐 色 土：シルト質。炭化物多量、黄褐色土ブロック少量含む。
3 褐 灰 色 土：シルト質。マンガン粒多量含む。
4 褐 灰 色 土：シルト質。黄褐色土ブロック多量含む。
5 焼　土　層
6 炭化物・灰層

第16図　第10・11号住居跡

がわかるものはなく、破片での検出が多い。また、これらの他に流れ込みの遺物として弥生時代中期後半の壺の胴部片（15）も検出された。



第17図　第10号住居跡出土遺物



第18図　第11号住居跡出土遺物

第９表　第10号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器　壺	(13.8)	(5.4)	—	ABDKN	にぶい橙色	B	口～頸25%	
2	土師器　壺	—	(3.3)	(6.0)	ABEGH	橙色	B	底部25%	外面赤彩。
3	土師器　高坏	(26.6)	(5.4)	—	ABHN	橙色	B	口縁部35%	外面磨耗顕著。
4	土師器　器台	(9.6)	(1.9)	—	ABEHN	赤橙色	B	器受部20%	
5	土師器　坩	—	—	—	ABGIKN	にぶい褐色	B	肩部片	
6	土師器　壺	—	—	—	ABDHIKN	にぶい橙色	A	胴下部片	№7と同一個体。
7	土師器　壺	—	—	—	ABDHIKN	明赤褐色	A	胴下部片	№6と同一個体。
8	土師器　甕	—	—	—	ABDHKN	橙色	B	口縁部片	
9	土師器　甕	—	—	—	ABIN	にぶい橙色	B	胴下部片	外面磨耗顕著。
10	土師器　甕	—	—	—	ABEHN	にぶい赤褐色	B	胴下部片	外面磨耗顕著。
11	土師器　甕	—	—	—	ABEGIN	橙色	B	胴下部片	
12	土師器台付甕	—	—	—	ABCDIN	橙色	B	台部片	
13	土師器台付甕	—	—	—	ABHKN	明赤褐色	B	台部片	
14	土師器台付甕	—	—	—	ABDGN	浅黄色	B	台部片	
15	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHN	にぶい黄橙色	B	胴部片	中期後半。

第10表　第11号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器台付甕	(20.0)	(9.9)	—	ABDHIKN	外:褐　内:橙	B	口～胴25%	№2～5と同一個体。
2	土師器台付甕	—	(3.9)	(10.8)	ABDHIN	にぶい橙色	B	台部20%	№1・3～5と同一個体。
3	土師器台付甕	—	—	—	BCDHIN	にぶい橙色	B	胴部片	№1・2・4・5と同一個体。
4	土師器台付甕	—	—	—	ABCDHIN	外:黄褐　内:橙	B	胴部片	№1～3・5と同一個体。
5	土師器台付甕	—	—	—	ABCHIN	にぶい橙色	B	胴下部片	№1～4と同一個体。
6	土師器　甕	(21.8)	(6.7)	—	ABGHJN	明赤褐色	B	口～胴20%	古墳時代後期。

１は壺の口縁部から頸部にかけての部位。素口縁で開きが小さい。内外面ともハケメとヘラナデ調整によるが主体となるの前者である。２は壺の底部。内外面ともヘラミガキ調整で、外面には赤彩が施されている。６・７は大型壺の胴下部片。同一個体である。分かりづらいが、外面がヘラミガキ、内面はヘラナデ調整である。器壁が厚い。３は高坏の口縁部。内外面ともヘラミガキ調整であるが、外面の一部にハケメが残る。浅身で口縁部が大きく開く。４は器台の器受部。口縁部がやや丸みを持って立ち上がる。内外面ともヘラミガキ調整による。５は坩の肩部片。内外面ともヘラナデ調整である。８～11は甕の破片。甕としたが、台付甕になる可能性が高い。ハケメ調整が主体となる。台付甕は明確に分かるものは台部のみである。調整はハケメとヘラナデを併用するもの（12・14）とハケメのみのもの（13）がある。いずれも内面に折り返しがあるものはみられない。

本住居跡の時期は、11号住居跡より新しい段階の古墳時代前期である。

第11号住居跡（第16図）

62・63－86・87グリッドに位置する。北東隅で８号住居跡を切っており、北側を９号住居跡、南東隅付近を10号住居跡、床面ほぼ全面を時期不明のピットに切られている。確認面の都合から南壁は一部検出されなかった。

規模は南北が不明であるが、東西は3.9mを測る。平面プランは長方形を呈すると思われる。主軸方向はＮ－７°－Ｅを指す。確認面からの深さは0.08mと非常に浅い。床面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土は図示できなかったが、灰色系の土が若干堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

炉跡は床面中央からやや北側に設けられていた。掘り込みというよりは焼土の広がりが確認されたにとどまる。焼土範囲は長軸0.48m、短軸0.25mの楕円形を呈する。

炉跡の北側からは本住居跡に伴うピットが１つ検出された。径0.5m前後の円形を呈し、床面からの深さは0.45mを測る。その位置から主柱穴とは考えづらい。貯蔵穴や壁溝は検出されなかった。

出土遺物（第18図）は、土師器台付甕（１～５）のみである。すべて同一個体であるが、接合関係はみられない。Ｐ１から出土した。この他に流れ込み遺物として７世紀代の土師器甕（６）も検出された。

１～５はタタキ甕。口縁部が横ナデ、肩部以下は台部まで外面にタタキが施されている。口縁部の開きが小さく、胴部は口縁部より膨らむ。おそらく倒卵形に近い器形を呈し、上位に最大径を持つと思われる。台部は小振りである。

本住居跡の時期は古墳時代前期であり、８号住居跡より新しく、９・10号住居跡より古い。

第12号住居跡（第19図）

62・63－87・88グリッドに位置する。南西隅で６号住居跡、北東部で10号住居跡と重複しているが、本住居跡は遺構確認段階で床面が一部露出ないし削平されていたため、発掘調査時点では６・10号住居跡の方が新しいと思われた。しかし、整理調査による出土遺物の比較等の結果、本住居跡が６・10号住居跡よりも新しいことが判明した。この他の遺構との重複関係については、南側で13号住居跡を切っており、床面中央から南東寄りでは３・４号土坑及び３号井戸跡に切られている。また、床面ほぼ全面で多数のピットと重複しており、一部のピット（62－88ＧＰ１・63－88ＧＰ１）には切られているが、その他のピットとの新旧関係は不明である。北東隅は試掘調査時のトレンチにより欠く。

規模は長軸6.23m、短軸4.92mを測る。平面プランは長方形を呈する。主軸方向はＮ－44°－Ｗを指す。確認面からの深さは0.12mを測る。床面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土はシルト質の灰褐色土（１層）のみである。ブロック土を少量含んでいた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

カマドは確認されなかったが、おそらく検出できなかった北壁東寄りか東壁北寄りに設けられていたと思われる。

本住居跡に伴うピットは１つ検出された。東壁沿いほぼ中央に位置し、西側で時期不明のピットと重複するが、新旧関係は不明である。径0.45m前後、床面からの深さは0.25mを測る。その位置から主柱穴とは考えづらい。壁溝や貯蔵穴は確認されなかった。

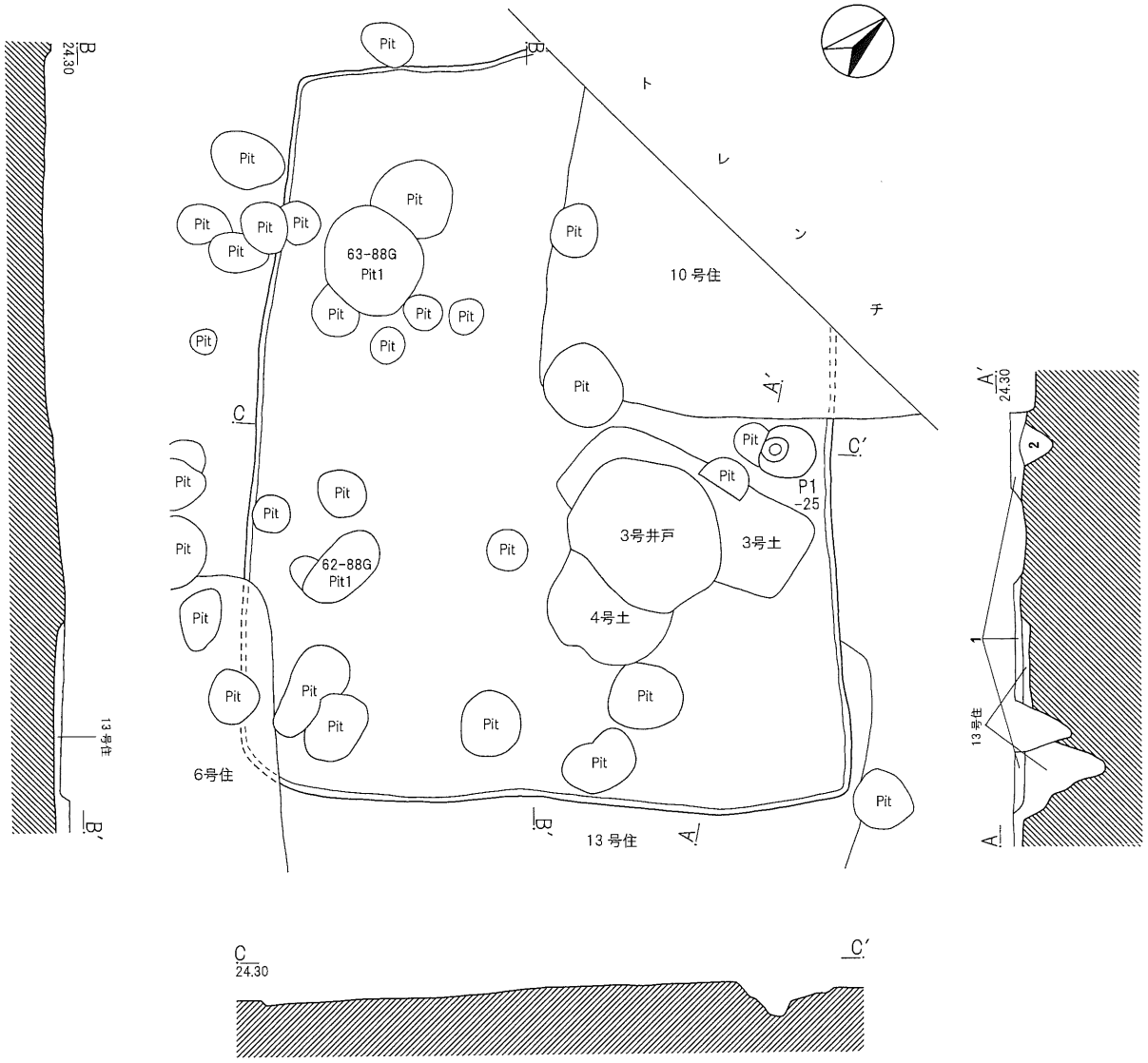
出土遺物は、土師器壺（１・２）、甕（３）がある。すべて覆土からの検出である。全形のわかるものはない。また、この他に流れ込み遺物として古墳時代前期の土師器甕（４）も検出された。

１・２はやや小型の壺。１は口縁部から胴下部まで、２は胴上部までの検出である。ともに口縁部が短く、ほぼ直立に近い。胴部は球形を呈するが、胴部外面の調整技法に違いがみられた。１はヘラ削りのみであるのに対し、２はヘラ削りとヘラナデが併用されている。３は甕の口縁部から胴上部までの部位。口縁部が大きく外反し、胴部は口縁部より膨らむ。胴部の調整は内外面ともヘラナデである。

本住居跡の時期は、６世紀初頭から前半にかけての段階と思われる。

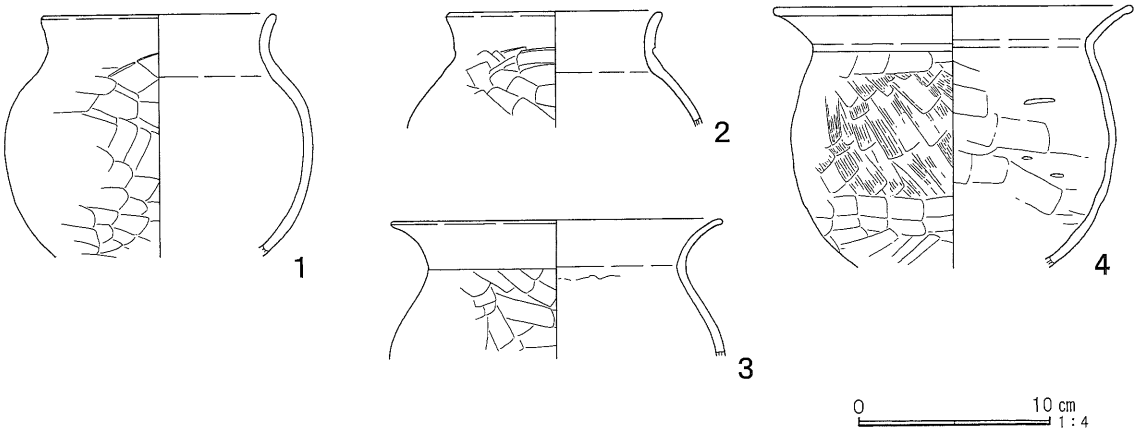
第11表　第12号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器　壺	(12.6)	(12.85)	—	ABEHIJKN	灰褐色	B	口～胴20%	胴部外面ヘラ削り調整。
2	土師器　壺	(11.4)	(6.1)	—	ABDHIN	外:灰褐　内:黒褐	B	口～胴20%	胴部外面ヘラナデ・ヘラ削り調整。
3	土師器　甕	(17.6)	(7.3)	—	ABHKN	にぶい褐色	B	口～胴20%	胴部内外面ヘラナデ調整。内面輪積痕有。
4	土師器　甕	(19.0)	(13.75)	—	ABDEHIN	外:灰褐　内:褐	B	口～胴25%	古墳時代前期。



第12号住居跡
土層説明（ＡＡ′）
1 灰褐色土：シルト質。黄褐色土ブロック少量含む。
2 灰褐色土：シルト質。黄褐色土ブロック多量含む。

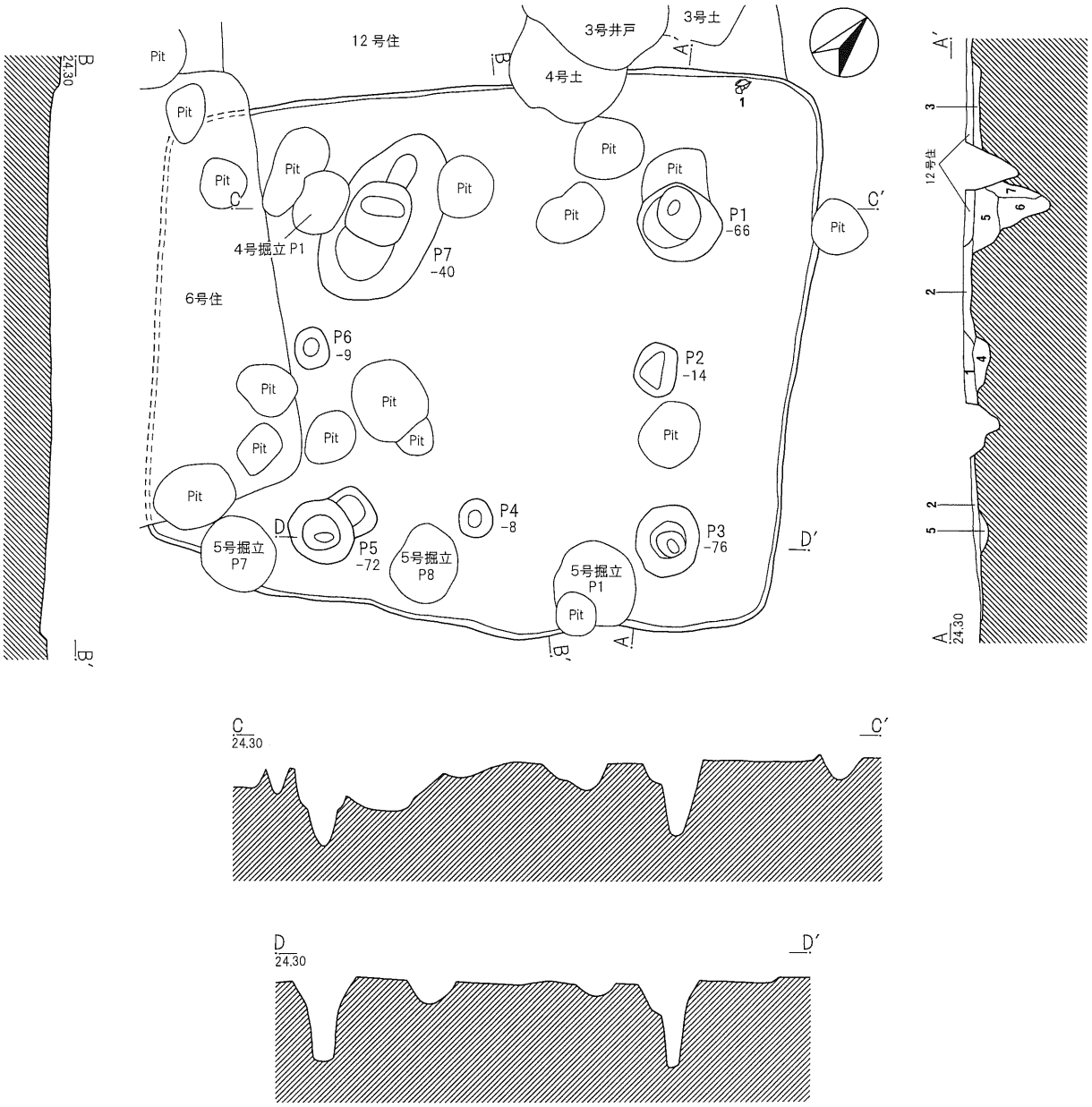
0 2m 1：60



第19図　第12号住居跡・出土遺物

第13号住居跡（第20図）

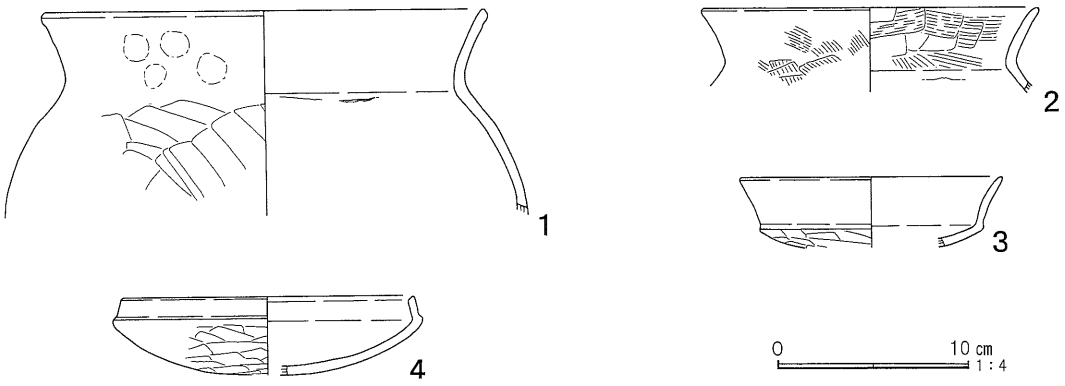
61～63－88・89グリッドに位置する。西側で６号住居跡と重複するが、本住居跡も12号住居跡同様、遺構確認段階で床面が一部露出ないし削平されていたため、発掘調査時点では６号住居跡の方が新しいと思われた。しかし、整理調査による出土遺物の比較等の結果、本住居跡が６号住居跡よりも新しいことが判明した。この他の遺構との重複関係については、北側上部を12号住居跡、北壁中央付近を４号土



第13号住居跡
土層説明（ＡＡ′）
1 灰褐色土：シルト質。黄褐色土ブロック少量含む。
2 褐 色 土：シルト質。黄褐色土ブロック・炭化物少量含む。
3 褐 色 土：シルト質。黄褐色土ブロック多量含む。
4 灰褐色土：シルト質。黄褐色土ブロック多量含む。
5 灰褐色土：シルト質。マンガン粒多量、黄褐色土ブロック・焼土・炭化物少量含む。
6 黒褐色土：シルト質。黄褐色土ブロック多量、炭化物少量含む。
7 黄灰色土：シルト質。褐灰色土少量含む。

0　2m　1：60

第20図　第13号住居跡



第21図　第13号住居跡出土遺物

第12表　第13号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器　甕	(23.6)	(10.9)	—	ABCGHIJKN	橙色	B	口～胴20%	胴部ヘラナデ調整、内面輪積痕有。
2	土師器　甕	(18.0)	(4.5)	—	ABDHIKN	淡橙色	B	口縁部15%	古墳時代前期。
3	土師器　坏	(14.0)	(3.7)	—	ABHN	橙色	B	20%	古墳時代後期（６世紀後半）。
4	土師器　坏	(15.4)	4.05	—	ACGHK	褐灰色	B	20%	古墳時代後期（６世紀後半）。

坑、北西部を４号掘立柱建物跡のピット１、南壁沿いを５号掘立柱建物跡のピットに切られている。また、床面ほぼ全面で時期不明のピットとも重複するが、新旧関係は不明である。

規模は長軸およそ5.7m、短軸4.95mを測る。平面プランは長方形を呈する。主軸方向はN－36°－Wを指す。確認面からの深さは0.1mと浅い。床面はほぼ平坦であった。覆土は三層（１～３層）からなる。ブロック土を含む層が多くみられ、特に北側の12号住居跡との重複箇所下では多量に含む層（３層）が確認された。人為的に埋め戻された可能性が高い。

本住居跡に伴うピットは６つ確認された。このうちＰ１・３・５・７は、その位置から主柱穴と思われる。床面からの深さは0.40～0.76mを測り、しっかりとした掘り込みであった。この他のピットは主柱穴よりも小さく、主柱穴間に位置することから補助柱と思われる。床面からの深さは0.1m前後を測る。

カマドをはじめ、貯蔵穴や壁溝は確認されなかった。

出土遺物（第21図）は、土師器甕（１）のみである。北東隅から検出された。この他にも流れ込み遺物として、古墳時代前期の土師器甕（２）、６世紀後半以降の土師器模倣坏（３・４）も検出された。

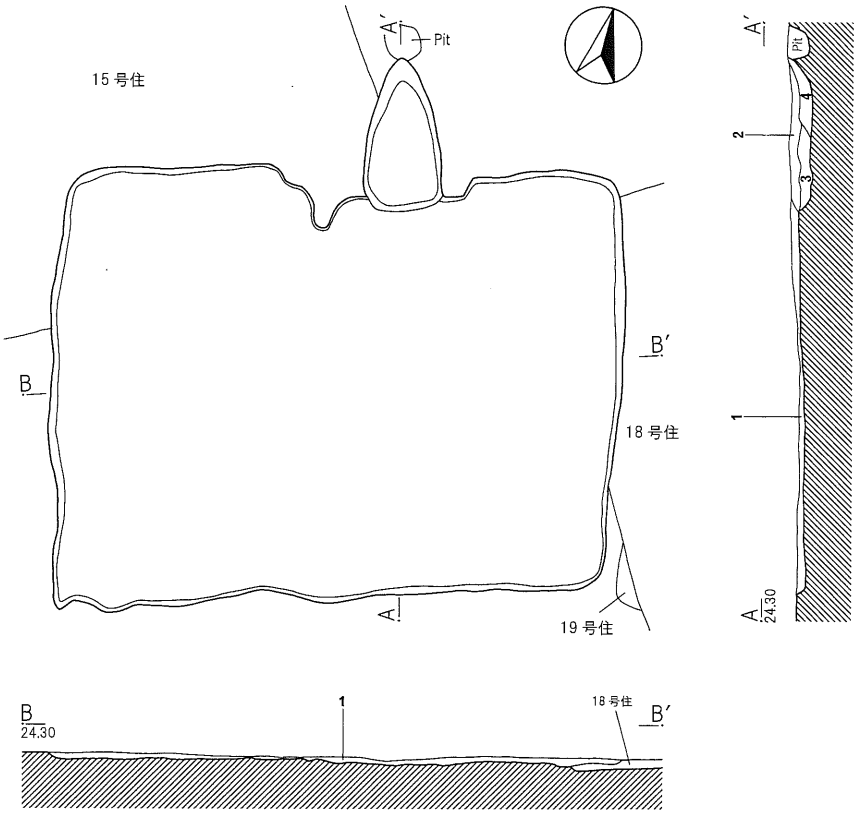
１は口縁部の開きが小さく、胴部は上位までの検出であるが、口縁部より膨らむ。口縁部は横ナデ、胴部は内外面ともヘラナデ調整である。口縁部外面には指頭圧痕が認められた。

出土遺物は土師器甕のみであり、時期の特定が難しい。12号住居跡との新旧関係から、５世紀後半から６世紀初頭にかけての段階としておきたい。

第14号住居跡（第22図）

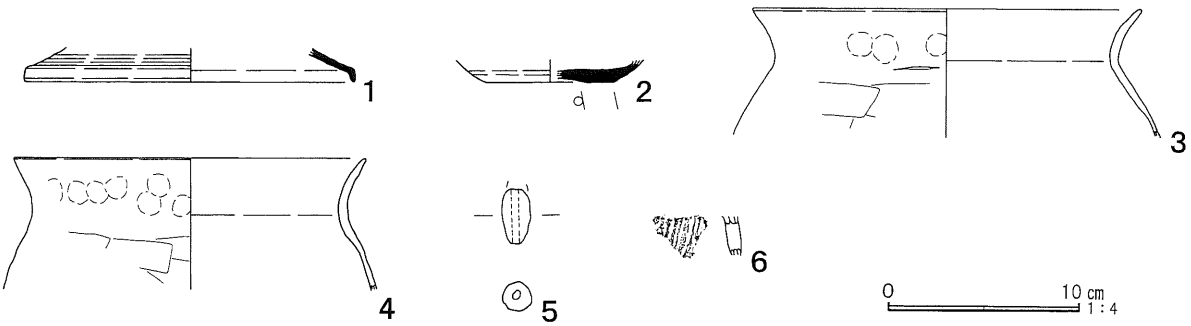
60・61－87・88グリッドに位置する。北西部で15号住居跡、東側で18号住居跡、北側に位置するカマドの先端部で時期不明のピットを切っている。

規模は長軸4.55m、短軸3.36mを測る。平面プランは横長の長方形を呈する。主軸方向はN－14°－Wを指す。確認面からの深さは0.06mと非常に浅い。床面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土はカマドを除くとシルト質の黒褐色土（１層）のみである。焼土や炭化物、ブロック土などを含んでいた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。



第14号住居跡
土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′）
1 黒褐色土：シルト質。焼土・炭化物・黄褐色土ブロック少量含む。
2 黒褐色土：シルト質。焼土・炭化物多量、黄褐色土ブロック少量含む。下層に灰を帯状に含む。
3 黒褐色土：シルト質。黄褐色土ブロック・焼土ブロック・炭化物多量含む。
4 黒褐色土：シルト質。黄褐色土ブロック多量含む。

0 2m 1：60



第22図　第14号住居跡・出土遺物

第13表　第14号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　蓋	(17.5)	(1.8)	—	ABHN	褐灰色	B	口縁部15%	末野産。
2	須恵器　坏	—	(1.2)	(6.8)	AFH	灰色	A	底部20%	南比企産。
3	土師器　甕	(20.6)	(6.7)	—	ABCGHIN	にぶい褐色	B	口～胴20%	
4	土師器　甕	(18.7)	(6.9)	—	ABEHKN	橙色	B	口～胴25%	
5	土　錘	最大長（2.9）cm、最大径1.5cm、孔径0.5cm。重量（6.0）g。上端欠。							
6	弥生土器　壺	—	—	—	ABCDIK	にぶい黄橙色	B	胴部片	中期後半。

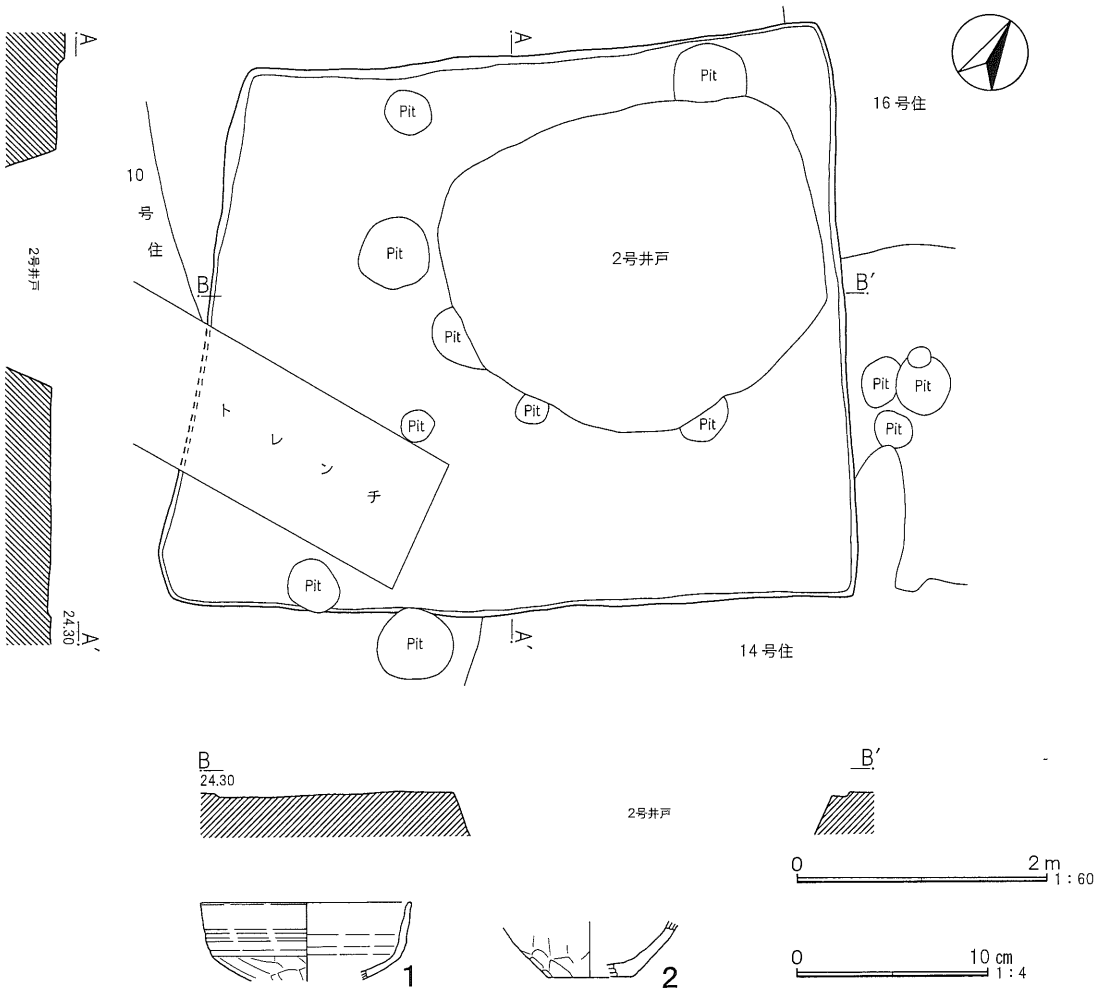
カマドは北壁中央からやや東寄りに位置する。壁外への張り出しは0.92mを測る。袖部は両袖とも確認されたが、東側は短い。焚口部から煙道部は土坑状の掘り込みになっており、床面からの深さは0.17

mを測る。カマド覆土に天井部崩落土はみられず、焼土や炭化物、灰などを含む層（２層）とブロック土を多量含む層（３・４層）が確認されたにとどまる。３層はブロック土の他に焼土ブロックや炭化物も多量に含むが、４層と併せて掘り方と思われる。貯蔵穴や壁溝、本住居跡に伴うピットは確認されなかった。

出土遺物は、須恵器蓋（１）、坏（２）、土師器甕（３・４）、土錘（５）がある。全形がわかるものはない。また、これらの他に流れ込み遺物として弥生時代中期後半の壺の胴部片（６）も検出された。

１は蓋の口縁部。その口径から椀蓋と思われる。末野産。２は坏の底部。調整は回転糸切り後に外周をヘラで削っている。南比企産。３・４は甕の口縁部から胴上部までの部位。ともに口縁部が「く」の字を呈する。口縁部は横ナデ、胴上部は横位のヘラ削りが施されている。口縁部外面には指頭圧痕もみられた。器壁が薄い。５は土錘。上端を欠くが、やや寸詰まりのタイプと思われる。

本住居跡の時期は、８世紀後半を中心とする段階と思われる。



第23図　第15号住居跡・出土遺物

第14表　第15号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器　坏	(11.2)	(4.1)	—	ABDGKN	浅黄色	B	20%	
2	土師器　甕	—	(2.9)	(4.6)	ABCGHJKN	浅黄色	B	底部20%	

第15号住居跡（第23図）

61・62－86・87グリッドに位置する。北東隅で16号住居跡を切っており、床面中央から北東部を２号井戸跡、南東隅付近は床面に影響がなかったが、上部を14号住居跡に切られている。南西部は試掘調査時のトレンチにより欠くため10号住居跡との直接的な切り合い関係は認められなかったが、出土遺物の比較から本住居跡が新しい。床面の所々で時期不明のピットとも重複するが、新旧関係は不明である。

規模は長軸が５m、短軸が4.4m前後を測り、平面プランはややいびつな長方形を呈する。主軸方向はN－34°－Wを指す。確認面からの深さは0.06mと非常に浅い。床面はほぼ平坦であり、遺構確認段階で既に一部露出していた。覆土は図示できなかったが、灰色系の土が若干堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

カマドは確認面の都合からか確認されず、貯蔵穴や壁溝、本住居跡に伴うピットも確認されなかった。

出土遺物は、土師器坏（１）、甕（２）がある。全形のわかるものはない。１は深身の有段口縁坏。口縁部の段が沈線化している。体部と底部境にある稜が弱い。２は甕の底部。器壁が厚手である。

出土遺物は二点しかないが、この他に図示不可能な土師器の小片で北武蔵型坏や口縁部が外反する皿などが検出されている。よって、本住居跡の時期は７世紀後半と思われる。

第16号住居跡（第24図）

60～62－85・86グリッドに位置する。北東隅付近を６号掘立柱建物跡のピット７・８、南西隅付近を15号住居跡と２号井戸跡、壁や床面の所々を時期不明のピットに切られている。また、南壁西寄りでは２号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模は一辺５m前後を測る。平面プランはほぼ正方形を呈する。主軸方向はN－58°－Eを指す。確認面からの深さは0.29mを測る。床面はほぼ平坦であった。覆土は六層（１～６層）からなる。いずれの層にも混入物がみられたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

炉跡は床面中央からやや北寄りに設けられていた。掘り込みというよりは焼土の広がりが確認されたにとどまる。焼土範囲は長軸0.47m、短軸0.36mの楕円形を呈する。

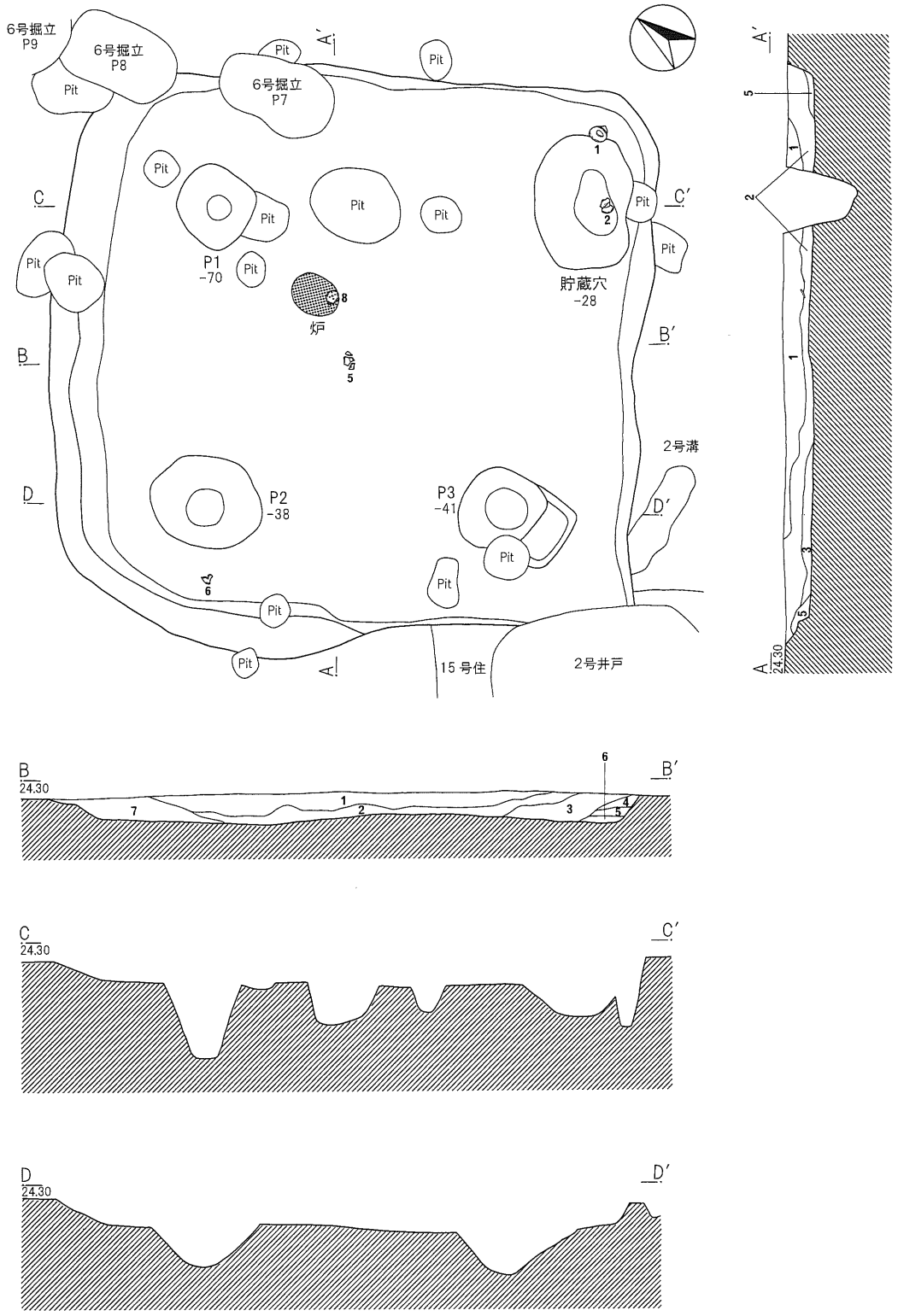
貯蔵穴は南東隅から検出された。長軸1.24m、短軸0.92mの隅丸長方形を呈し、床面からの深さは0.28mを測る。

本住居跡に伴うピットは３つ確認された。すべて主柱穴と考えられるが、南東部に相当する柱穴は確認されなかった。床面からの深さはＰ１のみ0.7mと深いが、その他は0.35m前後を測る。

壁溝は確認されなかった。

出土遺物（第25図）は、土師器壺（１・９・10）、小型壺（３・４）、坩（２・11・12）、高坏（５～７・18・19）、器台（８）、甕（13～17）がある。１・２が貯蔵穴、５が床面中央、６が北西隅、８が炉跡、その他は覆土からの検出である。破片が多く、全形がわかるのは２・８のみである。また、これらの他に流れ込み遺物として弥生時代中期後半の壺・甕の破片（20～23）、９世紀代の須恵器坏（24）、古墳時代後期の土玉（25）なども検出された。

１は壺の口縁部から頸部にかけての部位。素口縁で開きが小さい。内外面ともにヘラミガキ調整による。９・10は壺の胴下部片。分かりづらいが、外面はヘラミガキ、内面はハケメとヘラナデが施されている。器壁が厚手である。９は外面にヘラミガキ以前のハケメが一部残る。３・４は小型壺の底部。３



第16号住居跡

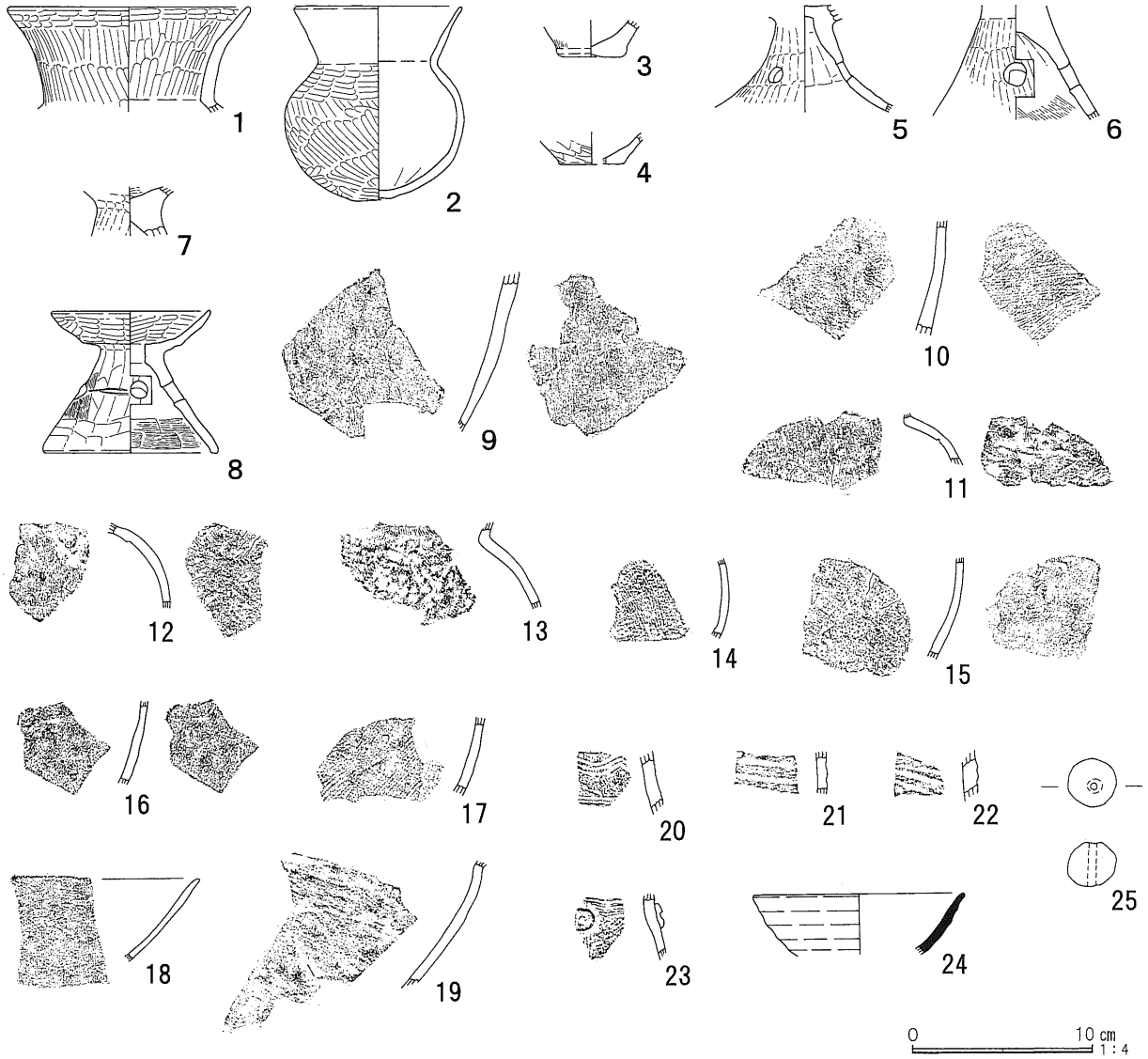
土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′）

1 褐灰色土：シルト質。マンガン粒多量、黄褐色土ブロック・焼土粒・炭化物少量含む。
2 褐灰色土：シルト質。マンガン粒多量含む。
3 黄褐色土：シルト質。褐灰色土多量含む。
4 褐 色 土：シルト質。灰色土少量含む。
5 灰 色 土：シルト質。マンガン粒多量含む。
6 褐 色 土：シルト質。灰色土少量含む。

▒ ＝ 焼 土

0 2m 1：60

第24図　第16号住居跡



第25図　第16号住居跡出土遺物

第15表　第16号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器　壺	13.8	(5.8)	—	ABEHN	明赤褐色	B	口～頸100%	
2	土師器　坩	(9.6)	10.85	1.9	ABCGHKN	にぶい橙色	B	底部80%	
3	土師器小型壺	—	(2.05)	(3.9)	ACHKN	にぶい橙色	B	底部40%	
4	土師器小型壺	—	(1.8)	(3.7)	ADHKN	にぶい黄橙色	A	底部25%	
5	土師器　高坏	—	(5.9)	—	ABEHN	橙色	B	脚部70%	透孔有。外面磨耗顕著。
6	土師器　高坏	—	(6.35)	—	ABCEHIKN	橙色	B	脚部60%	透孔有。
7	土師器　高坏	—	(2.75)	—	ADGHJN	にぶい橙色	B	接合部100%	外面赤彩。磨耗顕著。
8	土師器　器台	(9.0)	7.9	9.9	ABCHIN	橙色	B	80%	透孔有。
9	土師器　壺	—	—	—	ABCHIN	橙色	B	胴下部片	
10	土師器　壺	—	—	—	ACDGHIN	灰黄褐色	B	胴下部片	
11	土師器　坩	—	—	—	ABCDHJN	橙色	B	肩部片	内面輪積痕有。
12	土師器　坩	—	—	—	ABHJN	橙色	B	肩部片	内面輪積痕有。
13	土師器　甕	—	—	—	ABCDGHJN	橙色	B	頸～肩部片	外面アバタ状剥離。
14	土師器　甕	—	—	—	ABDHI	黒褐色	B	胴部片	
15	土師器　甕	—	—	—	ABCHIN	橙色	B	胴下部片	
16	土師器　甕	—	—	—	ABHJN	にぶい褐色	B	胴下部片	内面輪積痕有。
17	土師器　甕	—	—	—	ABDGHIN	外:黒褐　内:灰黄	B	胴下部片	
18	土師器　高坏	—	—	—	ABGI	にぶい黄橙色	B	口縁部片	

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
19	土師器　高坏	—	—	—	ABDHIN	橙色	B	坏部片	内外面赤彩。内面剥離顕著。
20	弥生土器　壺	—	—	—	ABCGHIKN	浅黄色	B	肩部片	中期後半。
21	弥生土器　壺	—	—	—	ABCGIN	浅黄色	B	胴部片	中期後半。
22	弥生土器　壺	—	—	—	ABHI	外:黒褐　内:赤褐	B	胴部片	中期後半。
23	弥生土器　甕	—	—	—	ABCHIKN	浅黄橙色	B	胴上部片	中期後半。
24	須恵器　坏	(12.0)	(3.4)	—	ABFH	黄灰色	B	口～体20%	９世紀前半。
25	土　玉	最大径2.7cm、孔径0.4cm。重量17.7ｇ。完形。							

は外面にハケメとヘラナデ、４はヘラナデ後に一部ヘラミガキが施されている。坩のうち２は残存状態が良好である。口縁部が短く、胴部から底部にかけて球形を呈する。底部は若干上げ底である。胴部中位に最大径を持ち、口径とあまり差がない。調整は口縁部が横ナデ、胴部以下の外面はヘラミガキである。11・12は坩の肩部片。ともに外面の調整はヘラナデである。高坏は５・６が脚部、７が接合部、18が口縁部片、19が坏部片である。５～７は外面がヘラミガキ調整による。脚部のうち、５は裾に向かって緩やかに広がり、６は「ハ」の字に開く。ともに中位に透孔を持つ。７はヘラミガキ部分に赤彩が施されている。18・19はともに外面がハケメ調整であるが、内面は18がヘラナデ、19はヘラミガキ調整による。19は僅かに残存する口縁部が外反しており、その特徴からみて信州系のものであろうか。内外面に赤彩が施されている。８は残存状態が良好である。器受部はやや浅身で口縁部が丸みを持って立ち上がり、坏部下位に稜を持つ。台部は「ハ」の字に開き、中位に透孔を持つ。調整は器受部がヘラミガキ、台部はヘラナデが主体となるが、部分的にハケメが残る。13～17は甕の破片。台付甕の可能性がある。調整はハケメが主体となる。

本住居跡の時期は、古墳時代前期である。

第17号住居跡（第26図）

59・60－86・87グリッドに位置する。西側で18・19号住居跡を切っている。また、北壁中央付近で時期不明のピットと重複するが、新旧関係は不明である。

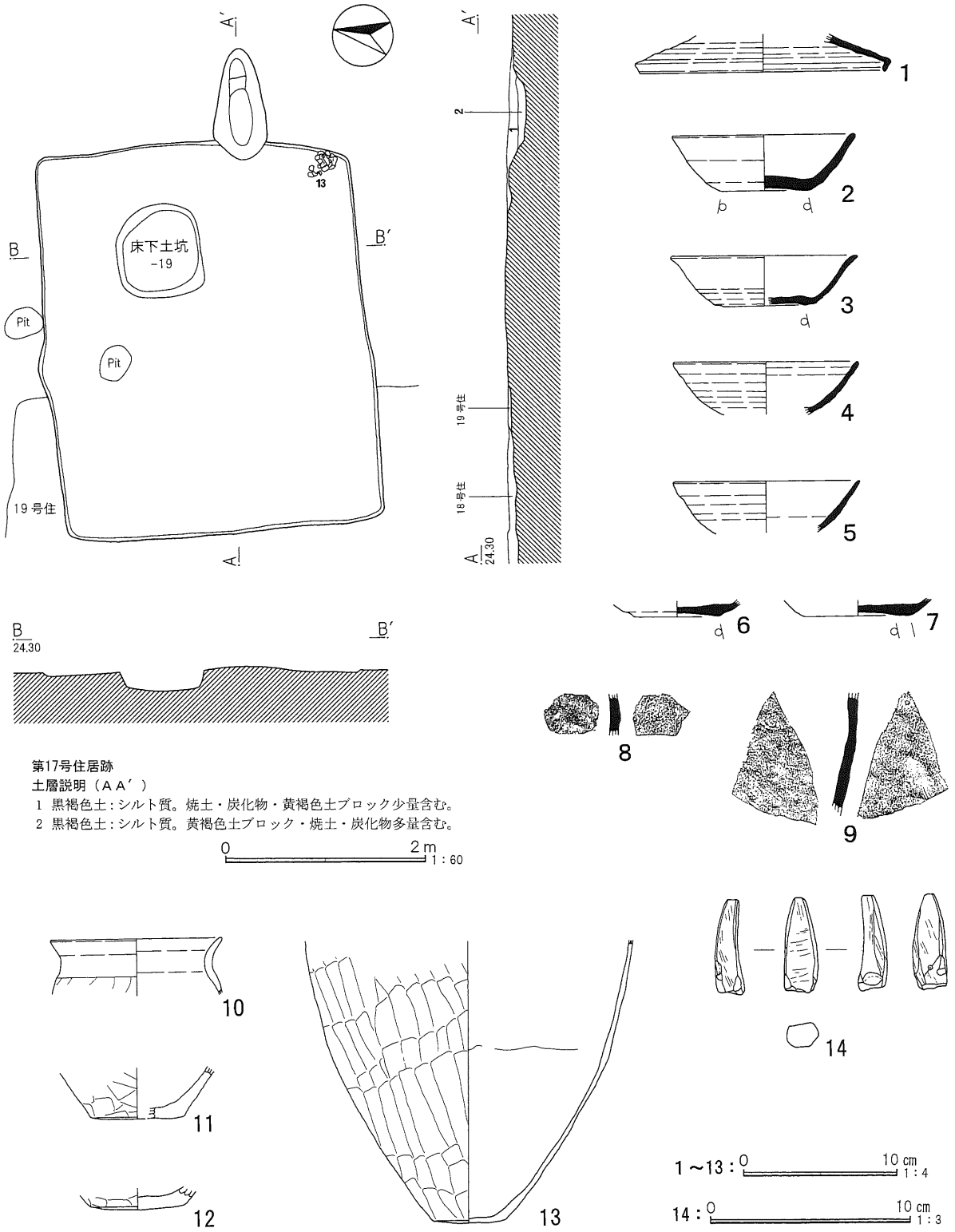
規模は長軸3.9m、短軸3.31mを測る。平面プランは縦長の長方形を呈する。主軸方向はN－77°－Eを指す。確認面からの深さは0.03mと非常に浅い。床面は確認段階で既に一部露出していた。やや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土はカマド以外図示できなかったが、褐色系の土が若干堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

カマドは東壁中央からやや南寄りに設けられていた。壁外への張り出しは0.93mを測る。袖部は確認されなかった。焚口部から燃焼部は土坑状を呈し、床面からの深さは0.16mを測る。煙道部は土坑状の立ち上がりから先端に向かってほぼ平坦に進み、緩やかに立ち上がる。カマド覆土に天井部崩落土はみられず、焼土や炭化物などを含む層（１・２層）などが確認されたにとどまる。このうち２層はブロック土を多量に含んでおり、掘り方と思われる。

床面中央からやや北東部では、隅丸方形を呈する床下土坑が検出された。一辺0.8m前後、床面からの深さは0.19mを測る。貯蔵穴や壁溝、本住居跡に伴うピットは確認されなかった。

出土遺物は、須恵器蓋（１）、坏（２～７）、甕（８・９）、土師器甕（10～13）、砥石（14）がある。13が南東隅から出土し、その他は確認段階で検出された。14以外残存状態があまり良くない。

須恵器は末野産と南比企産が約半分ずつ検出された。１は蓋の口縁部。その口径から椀蓋と思われる。坏は口径12.5cm、器高3.5cm、底径5.5cm前後のものが主体となる。口縁部はほぼ直線的に開くもの（２・



第26図　第17号住居跡・出土遺物

４・５）とやや外反するもの（３）がある。底部は７以外回転糸切り痕を残す。７は重複する18号住居跡からの流れ込みであろう。甕は８が胴部片、９が胴下部片である。土師器甕は10・13が本住居跡に伴うものである。11・12は器壁が厚く、19号住居跡からの流れ込みと思われる。10は口縁部が「コ」の字

第16表　第17号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　蓋	(16.4)	(2.5)	—	ABDH	灰色	B	20%	内面自然釉付着。
2	須恵器　坏	(12.2)	3.7	5.9	ABDEFN	灰色	B	40%	南比企産。
3	須恵器　坏	(12.4)	3.35	(5.5)	ABHLN	灰色	C	25%	末野産。
4	須恵器　坏	(12.3)	(3.5)	—	AFHN	灰色	A	口～体20%	南比企産。
5	須恵器　坏	(12.5)	(3.35)	—	ADFN	灰色	B	口～体15%	南比企産。
6	須恵器　坏	—	(1.1)	(5.8)	ADFGHN	灰色	B	底部25%	南比企産。
7	須恵器　坏	—	(1.1)	(7.1)	ABDFGHN	灰色	B	底部30%	南比企産。18号住からの流込。
8	須恵器　甕	—	—	—	ABL	灰色	B	胴部片	末野産。
9	須恵器　甕	—	—	—	ABLN	灰色	B	胴下部片	末野産。
10	土師器　甕	(11.4)	(3.75)	—	ABGHK	にぶい赤褐色	B	口～胴40%	
11	土師器　甕	—	(3.4)	(6.2)	ABDGHKN	にぶい黄橙色	B	胴～底30%	底面木葉痕有。19号住からの流込。
12	土師器　甕	—	(1.45)	(6.2)	ABCHIN	橙色	B	底部40%	19号住からの流込。
13	土師器　甕	—	(18.7)	4.8	ABCHKN	外:黒褐　内:橙	B	胴～底80%	内面輪積痕有。
14	砥　石	最大長4.7cm、最大幅1.6cm、最大厚1.35cm。重量13.7g。砂岩。完形。四面使用。							

を呈する小型の甕。胴部以下を欠く。13は胴部中位から底部までの部位。器壁が薄い。14は砂岩製の砥石。小型で側面四面を使用している。完形品。

本住居跡の時期は、９世紀前半から中頃にかけての段階と思われる。

第18号住居跡（第27図）

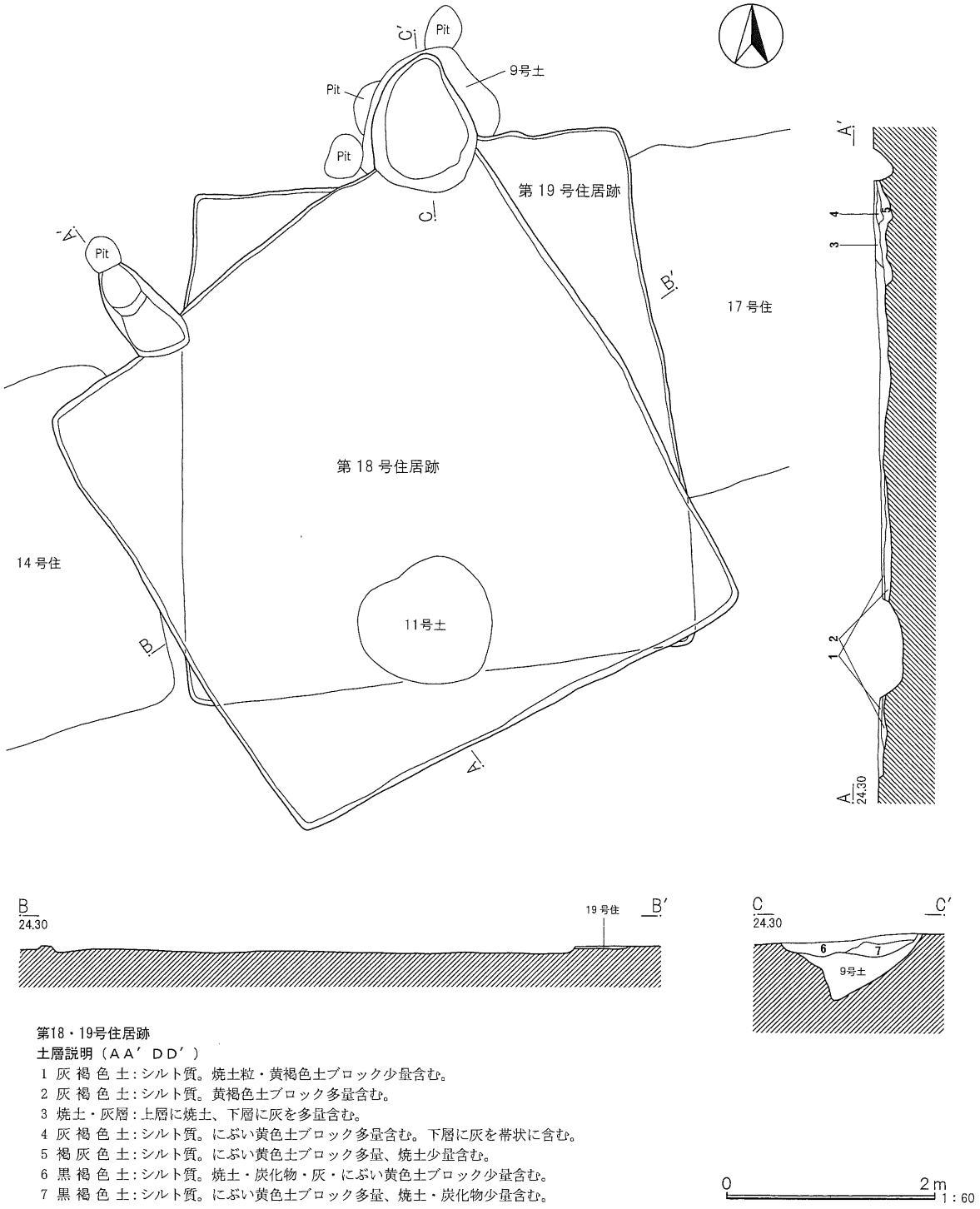
59・60－86～88グリッドに位置する。ほぼ同位置にある19号住居跡、北東隅で９号土坑を切っており、中央からやや南側を11号土坑、北壁にあるカマド先端を時期不明のピットに切られている。また床面に影響はなかったが、北西隅付近を14号住居跡、東側の上部を17号住居跡に切られている。

規模は一辺５ｍ前後を測り、平面プランはほぼ正方形を呈する。主軸方向はＮ－35°－Ｗを指す。確認面からの深さは0.1ｍと浅い。床面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土はカマドを除くと二層（１・２層）からなる。ブロック土を含んでおり、人為的に埋め戻された可能性がある。

カマドは北壁中央から西寄りに設けられていた。壁外への張り出しは先端をピットに切られているため定かではないが、0.9ｍ程になると思われる。袖部は確認されなかった。焚口部から煙道部まで土坑状を呈するが、覆土５層は掘り方と思われることから機能時には床面とほぼ同レベルであったと思われ、先端に向かって緩やかに上る。カマド覆土に天井部崩落土はみられず、焼土・灰層（３層）などが確認されたにとどまる。貯蔵穴や壁溝、本住居跡に伴うピットは確認されなかった。

出土遺物（第28図）は、須恵器蓋（１）、坏（２～８）、甕（９～12）、土師器坏（13・14）、土錘（15）、砥石（16）がある。３がカマド、その他は覆土から検出された。いずれも残存状態はあまり良くない。須恵器坏は時期に幅がみられ、カマドから出土した３が本住居跡に伴うものである。９世紀前半から中頃段階の２・４～６は17号住居跡、８世紀後半の８は14号住居跡からの流れ込みと思われる。また、これらの他にも弥生時代中期後半の壺の口縁部から頸部にかけての破片（17）が流れ込み遺物として検出された。

１は蓋の口縁部。その口径から椀蓋と思われる。末野産。坏は本住居跡に伴うものは３と７のみである。ともに南比企産であり、底部の調整は回転ヘラ削りである。３は浅身で口縁部から体部にかけて内湾しながら立ち上がる。甕は９が底部、10が頸部片、11が胴上部片、12が胴部片である。流れ込みの可能性もある。土師器坏は13・14とも浅身で口縁部がほぼ直立し、底部は丸底であるが、平底に近い。口径は13cm前後、器高は４cm弱である。15は土錘。中段がやや膨らむ。上端を欠く。16は砂岩製の砥石。全面使用しており、溝状の研ぎ痕が残る。完形品。



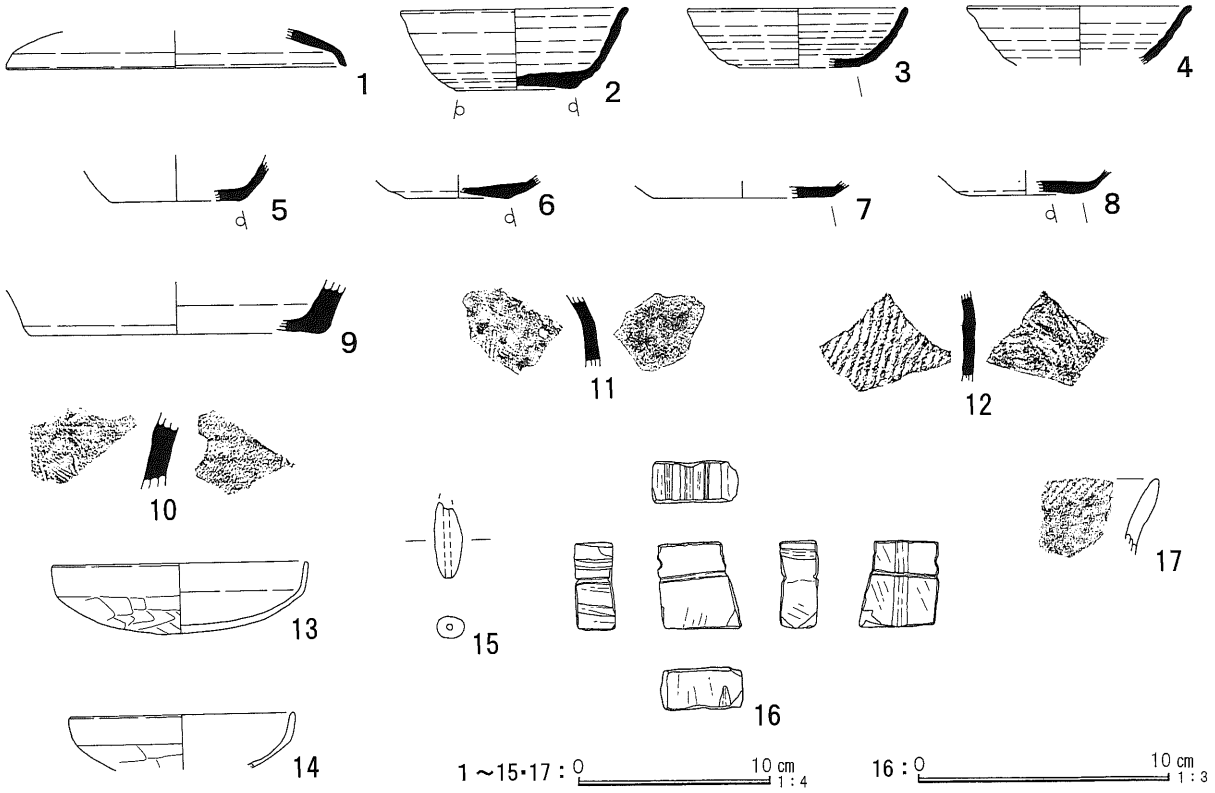
第18・19号住居跡
土層説明（AA′ DD′）
1 灰 褐 色 土：シルト質。焼土粒・黄褐色土ブロック少量含む。
2 灰 褐 色 土：シルト質。黄褐色土ブロック多量含む。
3 焼土・灰層：上層に焼土、下層に灰を多量含む。
4 灰 褐 色 土：シルト質。にぶい黄色土ブロック多量含む。下層に灰を帯状に含む。
5 褐 灰 色 土：シルト質。にぶい黄色土ブロック多量、焼土少量含む。
6 黒 褐 色 土：シルト質。焼土・炭化物・灰・にぶい黄色土ブロック少量含む。
7 黒 褐 色 土：シルト質。にぶい黄色土ブロック多量、焼土・炭化物少量含む。

第27図　第18・19号住居跡

本住居跡の時期は、８世紀中頃を中心とした段階と思われる。

第19号住居跡（第27図）

59・60－86・87グリッドに位置する。ほぼ全面を同位置にある18号住居跡、南側を11号土坑、そして床面に影響はなかったが、東側で上部を17号住居跡に切られている。またカマド部分では９号土坑や時期不明のピットと重複関係にあり、本住居跡のカマドが９号土坑を切っているが、ピットとの新旧関係



第28図　第18号住居跡出土遺物

第17表　第18号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　蓋	(18.1)	(2.0)	—	ABL	灰色	B	口縁部10%	末野産。
2	須恵器　坏	(12.1)	4.25	6.2	ABN	灰白色	A	70%	17号住からの流込。
3	須恵器　坏	(11.7)	3.15	(6.2)	ABFN	灰色	B	20%	南比企産。
4	須恵器　坏	(12.0)	(3.1)	—	ABL	灰色	B	口～体20%	末野産。17号住からの流込。
5	須恵器　坏	—	(2.4)	(7.0)	ABCHLN	灰黄褐色	B	体～底30%	末野産。17号住からの流込。
6	須恵器　坏	—	(1.2)	(5.5)	ABFHN	黄灰色	B	底部25%	南比企産。17号住からの流込。
7	須恵器　坏	—	(0.9)	(9.5)	ABDFN	青灰色	B	底部20%	南比企産。
8	須恵器　坏	—	(1.25)	(6.0)	ABFH	灰色	B	底部40%	南比企産。14号住からの流込。
9	須恵器　甕	—	(2.75)	(15.6)	ABHLN	灰色	A	底部20%	末野産。内外面自然釉付着。
10	須恵器　甕	—	—	—	ABN	灰色	B	頸部片	内外面自然釉付着。
11	須恵器　甕	—	—	—	ABN	灰白色	B	胴上部片	
12	須恵器　甕	—	—	—	ALN	灰色	B	胴部片	末野産。
13	土師器　坏	(13.6)	3.7	—	ABCHKN	橙色	B	40%	
14	土師器　坏	(12.0)	(2.9)	—	ABCDHK	橙色	B	20%	
15	土　錘	最大長（4.0）cm、最大径1.45cm、孔径0.3cm。重量（5.6）g。上端欠。							
16	砥　石	最大長3.4cm、最大幅3.2cm、最大厚1.6cm。重量29.2g。砂岩。完形。全面使用。							
17	弥生土器　壺	—	—	—	ABCGHIKN	褐灰色	B	口～頸部片	中期後半。

は不明である。本住居跡で検出できたのは、カマドを含む北壁と東壁の北寄り大半、西壁北寄りの一部、南東隅及び南西隅付近のみである。

規模は一辺4.5m前後を測り、平面プランはほぼ正方形を呈する。主軸方向はN－7°－Wを指す。確認面からの深さは0.03mと非常に浅い。床面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土は図示できなかったが、褐色系の土が若干堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

カマドは北壁ほぼ中央に設けられていた。壁外への張り出しは0.9mを測る。袖部は確認されなかった。

焚口部から煙道部まで土坑状を呈し、床面からの深さは最大0.2mを測る。カマド覆土に天井部崩落土はみられず、焼土や炭化物、灰などを含む層（６層）とブロック土を多量に含む層（７層）が確認されたにとどまる。７層は掘り方であろう。貯蔵穴や壁溝、本住居跡に伴うピットは確認されなかった。

出土遺物に図示できるものはなかったが、カマドから７世紀後半の有段口縁坏や比企型坏の小片が検出されている。よって、本住居跡の時期は７世紀後半と思われる。

第20号住居跡（第29図）

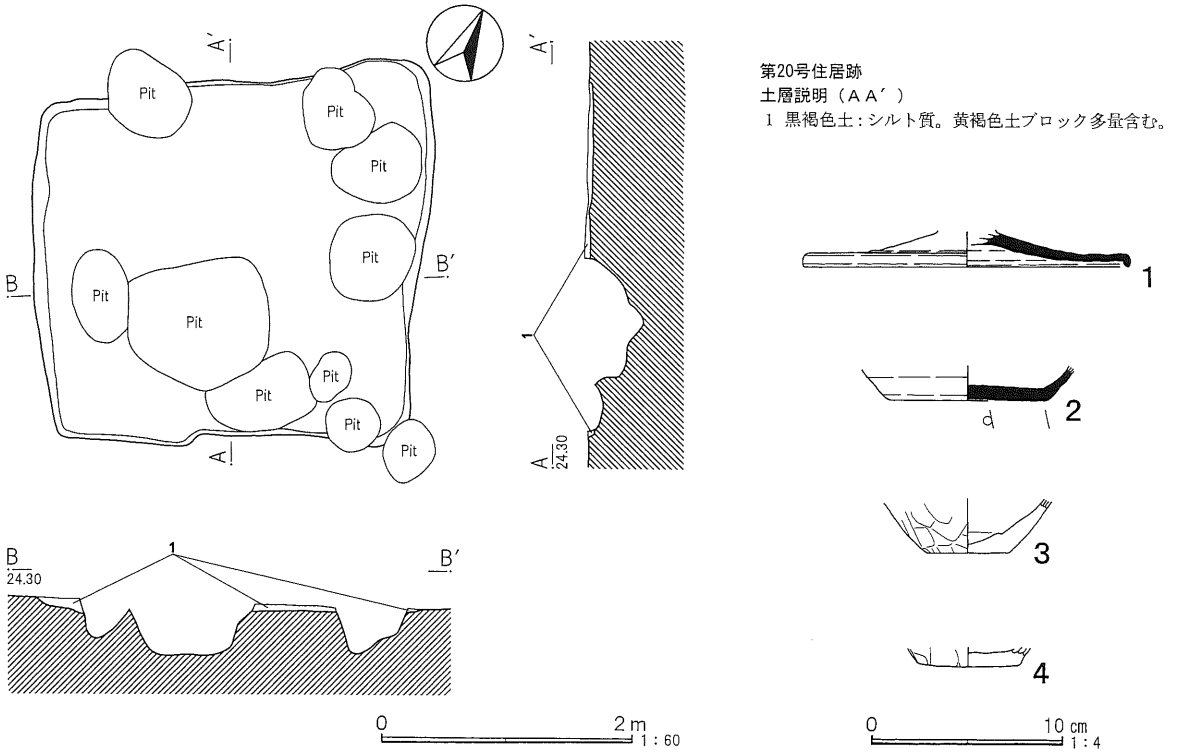
59・60－85・86グリッドに位置する。ほぼ全面で時期不明のピットと重複しており、遺存状態が悪い。ピットとの新旧関係は不明である。

規模は一辺３m前後を測り、平面プランはほぼ正方形を呈する。主軸方向はN－24°－Wを指す。確認面からの深さは0.08mと浅い。床面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土はシルト質の黒褐色土（１層）のみである。ブロック土を多量含んでおり、人為的に埋め戻された可能性が高い。

カマドは確認面の都合からか確認されず、貯蔵穴や壁溝、本住居跡に伴うピットも検出されなかった。

出土遺物は、須恵器蓋（１）、坏（２）、土師器甕（３・４）がある。すべて覆土からの検出である。

１はつまみを含む天井部を欠く。その口径から椀蓋と思われる。器高が低い。２は坏の底部。調整は回転糸切り後外周をヘラで削っている。南比企産。土師器甕は３が胴下部から底部にかけての部位、４



第29図　第20号住居跡・出土遺物

第18表　第20号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　蓋	(17.5)	(1.9)	—	AB	灰白色	A	天井部45%	外面自然釉付着。
2	須恵器　坏	—	(1.9)	(8.2)	ABDFN	灰色	B	底部30%	南比企産。
3	土師器　甕	—	(2.9)	(4.5)	ABCDHKN	赤褐色	B	胴～底30%	
4	土師器　甕	—	(0.95)	5.4	ABGHKN	橙色	B	底部60%	

が底部である。ともに器壁がやや厚手である。

本住居跡の時期は、８世紀中頃から後半にかけての段階と思われる。

第21号住居跡（第30図）

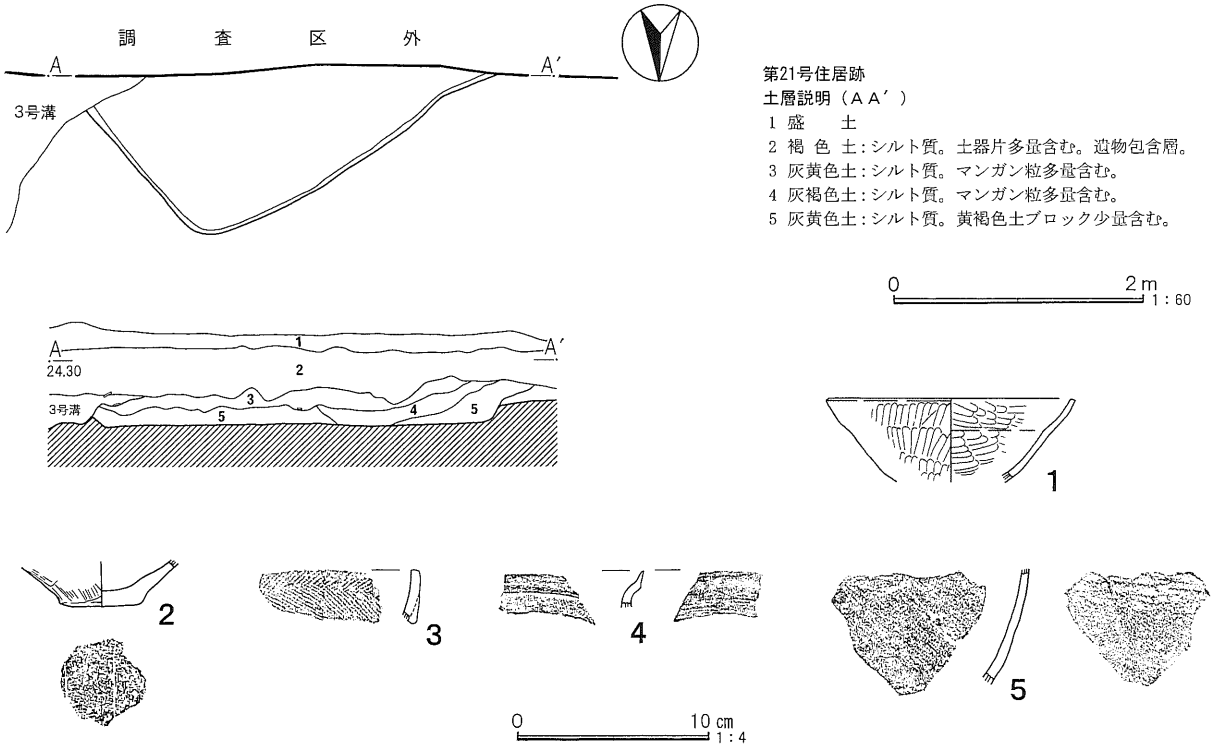
60・61－89・90グリッドに位置する。北西隅付近のみの検出であり、大半が調査区外にある。東側は３号溝跡に切られている。

規模及び平面プランは不明である。主軸方向はＮ－55°－Ｅを指すと思われる。確認面からの深さは0.13mを測るが、調査区境での土層断面では0.3m程の深さであった。床面はほぼ平坦であった。覆土は三層（３～５層）からなる。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

大半が調査区外にあるため、炉跡をはじめ貯蔵穴や壁溝、本住居跡に伴うピットは検出されなかった。

出土遺物は、土師器椀（１）、壺（２・３）、甕（４・５）がある。すべて覆土から検出された。３号溝跡との新旧関係を考慮すると、本住居跡に伴う遺物は２・３のみである。１・４・５は古墳時代前期でも新しい段階に位置づけられることから流れ込みと思われる。１は内外面ヘラミガキ調整で赤彩が施されている。４はＳ字甕の口縁部片であり、今回の調査で唯一検出された。５は内外面ともにヘラナデ調整による。

２は小型壺の底部。外面はハケメ、内面はヘラナデ調整である。底面には木葉痕がみられた。３は壺



第30図　第21号住居跡・出土遺物

第19表　第21号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器　椀	(13.3)	(4.35)	—	ACEHIN	にぶい赤褐色	B	口～体10%	内外面赤彩。流込。
2	土師器　壺	—	(2.4)	(4.3)	ABDHIN	黒褐色	B	胴～底90%	底面木葉痕有。
3	土師器　壺	—	—	—	BCDEH	外:浅黄　内:赤褐	B	口縁部片	内面赤彩、磨耗顕著。
4	土師器　甕	—	—	—	ABDEGHIK	橙色	B	口縁部片	流込。
5	土師器　甕	—	—	—	ABDHIJN	暗褐色	B	胴下部片	流込。

の口縁部片。複合口縁外面に羽状縄文が施文され、内面はヘラミガキ調整で赤彩が施されている。

本住居跡の時期は、弥生時代末から古墳時代初頭にかけての段階と思われる。

2　掘立柱建物跡

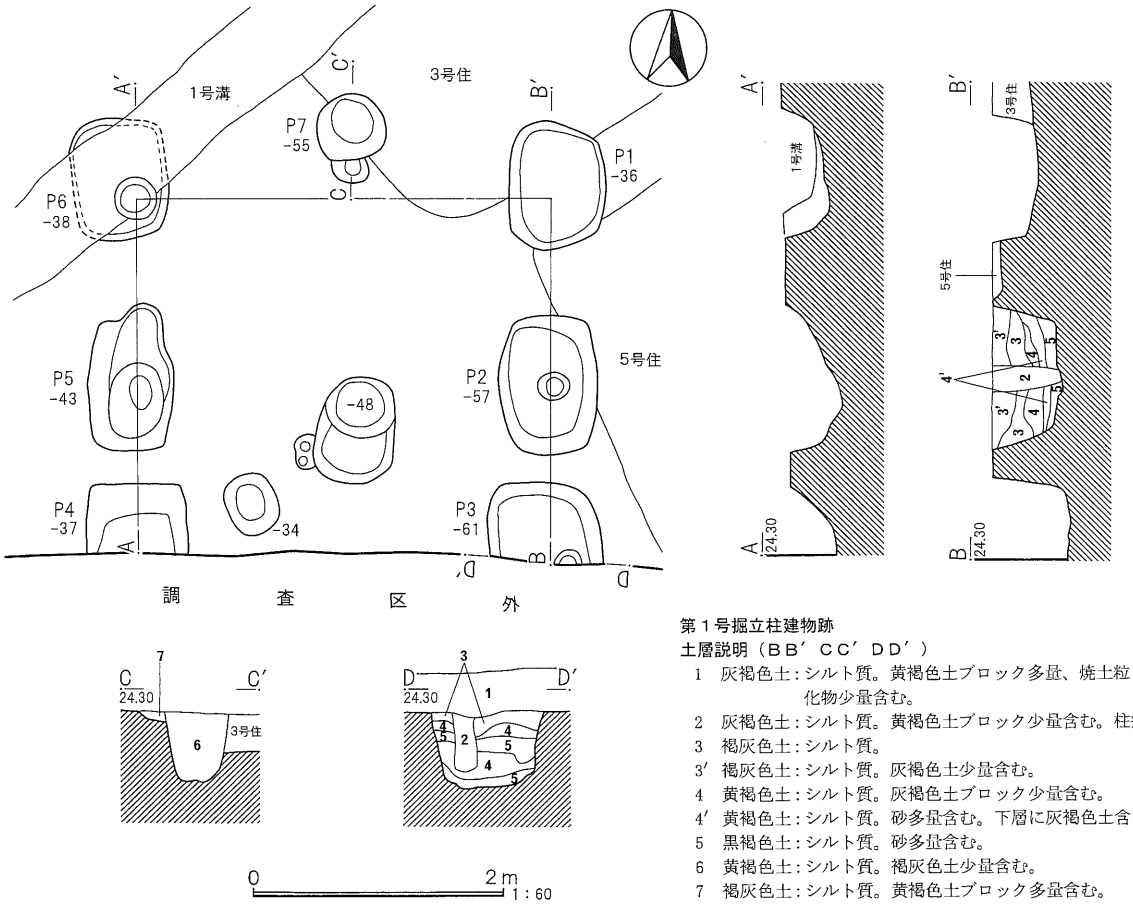
第１号掘立柱建物跡（第31図）

64・65－89・90グリッドに位置する。ピット６が１号溝跡に切られており、ピット１・２・７は３・５号住居跡を切っている。また、建物内にピットが３つみられたが、本建物跡には伴わないと思われる。南側は調査区外にある。

検出された状況は２×２間であるが、桁行は確実に南側に延びることから南北棟の側柱建物になると思われる。検出した状況での規模は桁行が2.9m、梁行は3.2mを測る。主軸方向はN－2°－Wを指し、ほぼ東西南北に軸が合っている。柱間は桁行が1.5m、梁行が1.6mの間隔で揃う。柱穴は柱筋からやや外にずれるピット７のみ径0.55m前後の円形を呈するが、その他は長軸1.1m、短軸0.75m前後の隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは浅いもので0.36m、深いもので0.61mを測る。ピット２・３では柱痕跡（２層）が認められたが、その他では確認できなかった。

遺物は古墳時代後期から９世紀代の土師器小片が出土したが、図示できるものはなかった。

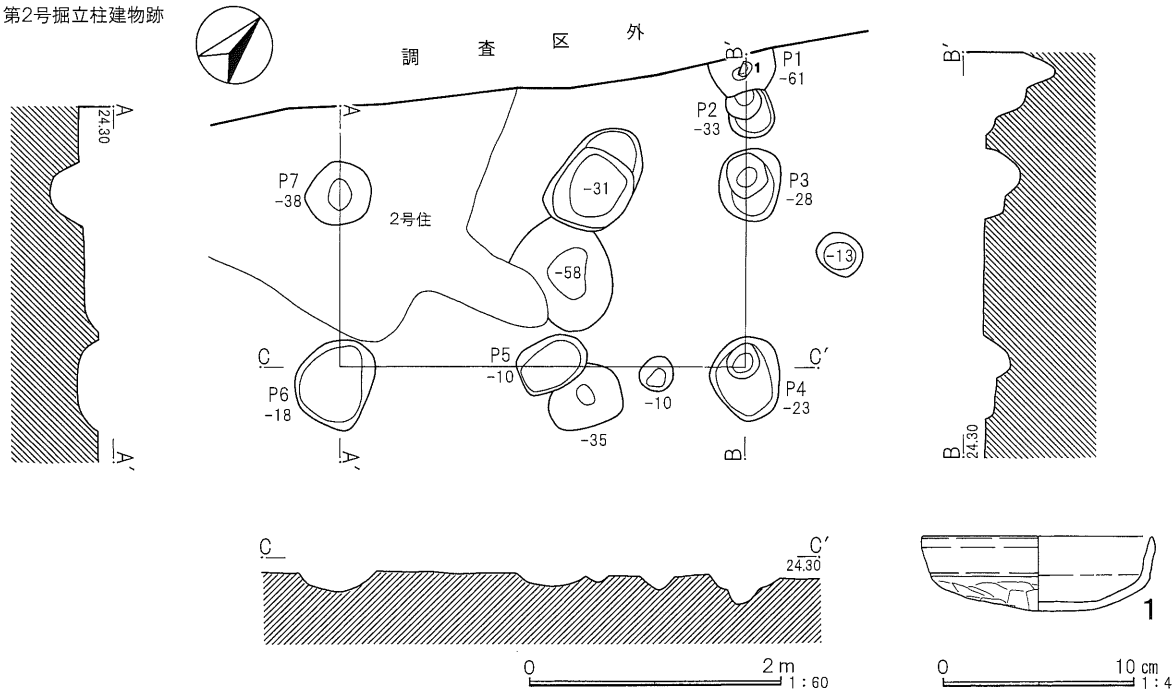
出土遺物に時期を特定できるものはないが、本建物跡の時期はその軸や周辺遺構との関係などから奈良・平安時代としておきたい。



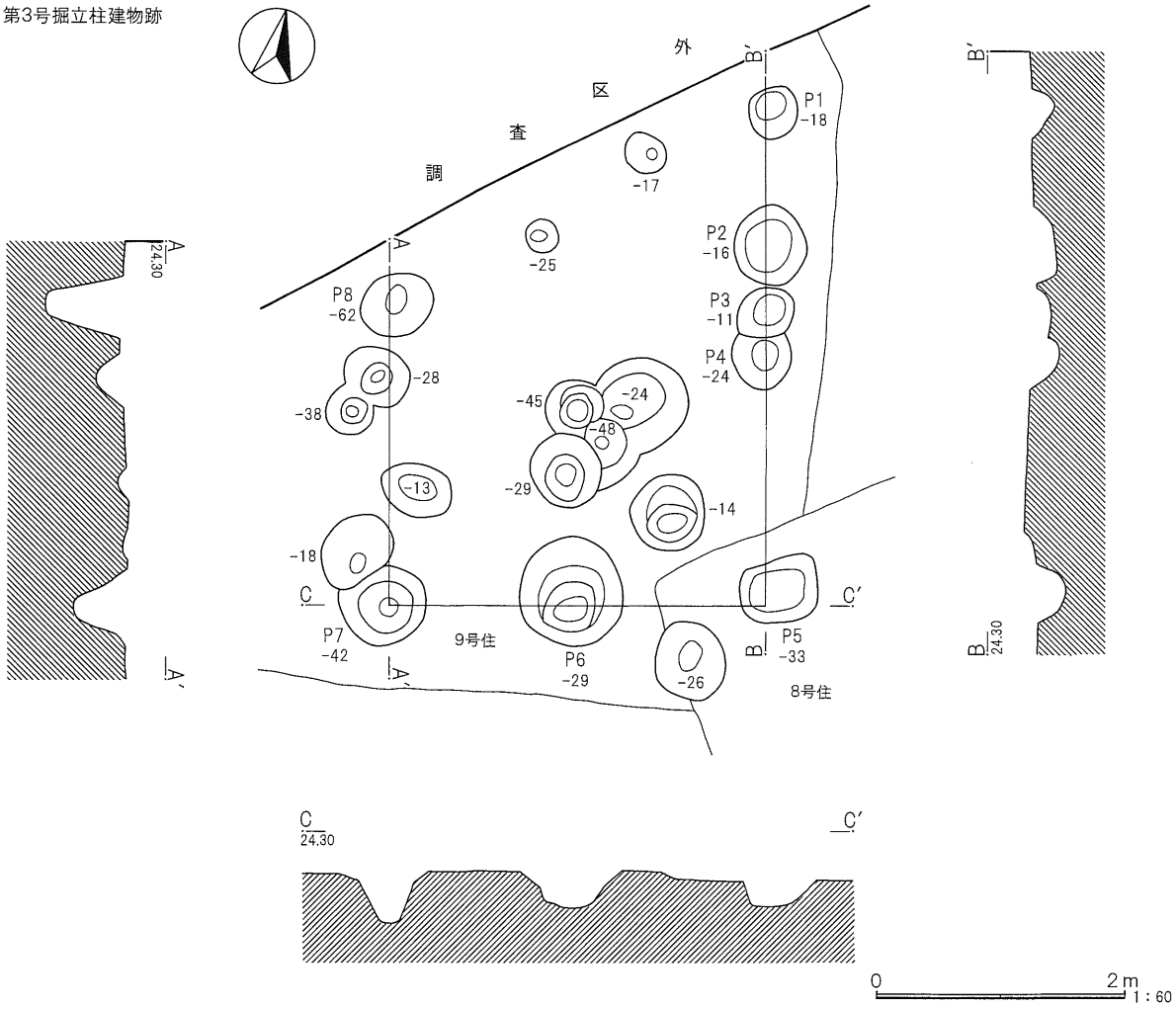
第１号掘立柱建物跡
土層説明（BB′ CC′ DD′）
1　灰褐色土：シルト質。黄褐色土ブロック多量、焼土粒・炭化物少量含む。
2　灰褐色土：シルト質。黄褐色土ブロック少量含む。柱痕跡。
3　褐灰色土：シルト質。
3′　褐灰色土：シルト質。灰褐色土少量含む。
4　黄褐色土：シルト質。灰褐色土ブロック少量含む。
4′　黄褐色土：シルト質。砂多量含む。下層に灰褐色土含む。
5　黒褐色土：シルト質。砂多量含む。
6　黄褐色土：シルト質。褐灰色土少量含む。
7　褐灰色土：シルト質。黄褐色土ブロック多量含む。

第31図　第１号掘立柱建物跡

第2号掘立柱建物跡



第3号掘立柱建物跡



第32図　第２・３号掘立柱建物跡・出土遺物

第20表　第２号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器　坏	(12.4)	3.95	―	ABCHKN	橙色	B	45%	Ｐ１出土。

第２号掘立柱建物跡（第32図）

64・65－87・88グリッドに位置する。ピット７が２号住居跡に切られている。建物内及び周辺には時期不明のピットがいくつかみられたが、新旧関係及び本建物跡に伴うものか不明である。また、東側桁はピットが４つ並ぶが、ピット１・２はピット３・４との柱間が狭く、等間隔にならないことから伴わない可能性もある。北側が調査区外にあるため詳細は不明であるが、柱筋が通ることからピット１・２も本建物跡に含めて報告する。

検出された状況は２×２間であるが、桁行は確実に北側に延びることから南北棟の側柱建物になると思われる。検出した状況での規模は桁行2.5m、梁行3.2mを測る。主軸方向はＮ－41°－Ｗを指す。柱間は桁行がピット１・２とピット３間は0.6～0.9mを測るが、その他（ピット３・４間とピット６・７間）は1.5m、梁行は1.6mの間隔で揃う。柱穴は径0.6m前後の円形ないし不整円形を呈し、確認面からの深さは浅いもので0.18m、深いもので0.61mを測る。覆土は図示できなかったが、いずれのピットからも柱痕跡は認められなかった。

出土遺物は、土師器坏（１）のみである。ピット１から検出された。坏蓋模倣坏。口縁部の開きが小さく、底部は平底に近い。体部と底部境にある稜が弱い。

遺物の出土したピット１が伴うものか定かではないが、本建物跡の時期は２号住居跡との新旧関係や古墳時代末の遺構とほぼ同軸方向であることから７世紀後半から８世紀初頭段階としておきたい。

第３号掘立柱建物跡（第32図）

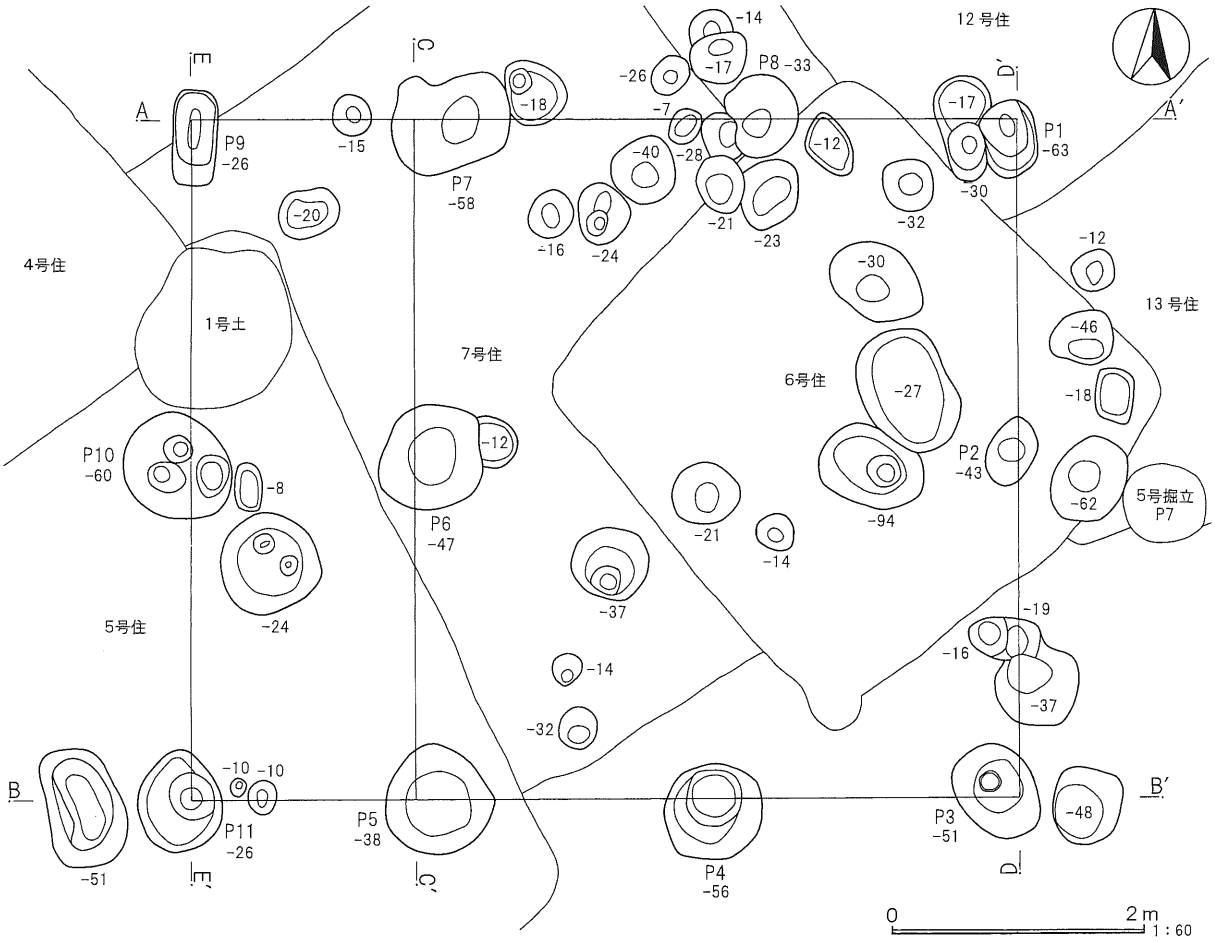
62・63－85・86グリッドに位置する。ほぼ同位置にある９号住居跡や南東隅で８号住居跡を切っている。建物内及び周辺には時期不明のピットが多数みられたが、新旧関係及び本建物跡に伴うものか不明である。また本建物跡も２号掘立柱建物跡と同じく東側桁にピットが多数並ぶが、北側が調査区外にあるため詳細については不明と言わざるを得ない。ピット２・４に関しては、柱筋が通るが柱間は揃わないことから伴わない可能性もある。

検出された状況はおよそ３×２間であるが、桁行は確実に北側に延びることから南北棟の側柱建物である。検出した状況での規模は桁行4.45m、梁行３ｍを測る。主軸方向はＮ－14°－Ｗを指す。柱間は桁行がピット２・４を除くとピット１・３間が1.5m、その他は2.4mで揃う。梁行は1.5mで揃う。柱穴は径0.4～0.9m程の円形を呈するものが主体となり、ピット５のみ長軸0.63m、短軸0.54mの隅丸方形を呈する。確認面からの深さは浅いもので0.11m、深いもので0.62mとバラツキがみられる。覆土は図示できなかったが、いずれのピットからも柱痕跡は認められなかった。

遺物は検出されなかったが、本建物跡の時期はその軸や周辺遺構との関係などから奈良・平安時代としておきたい。

第４号掘立柱建物跡（第33・34図）

62～64－88・89グリッドに位置する。遺構が密集する所にあり、多くの遺構と重複関係にある。直接的な切り合い関係にない４号住居跡も含めて重複する住居跡（４～７・12号住居跡）すべてを切ってい



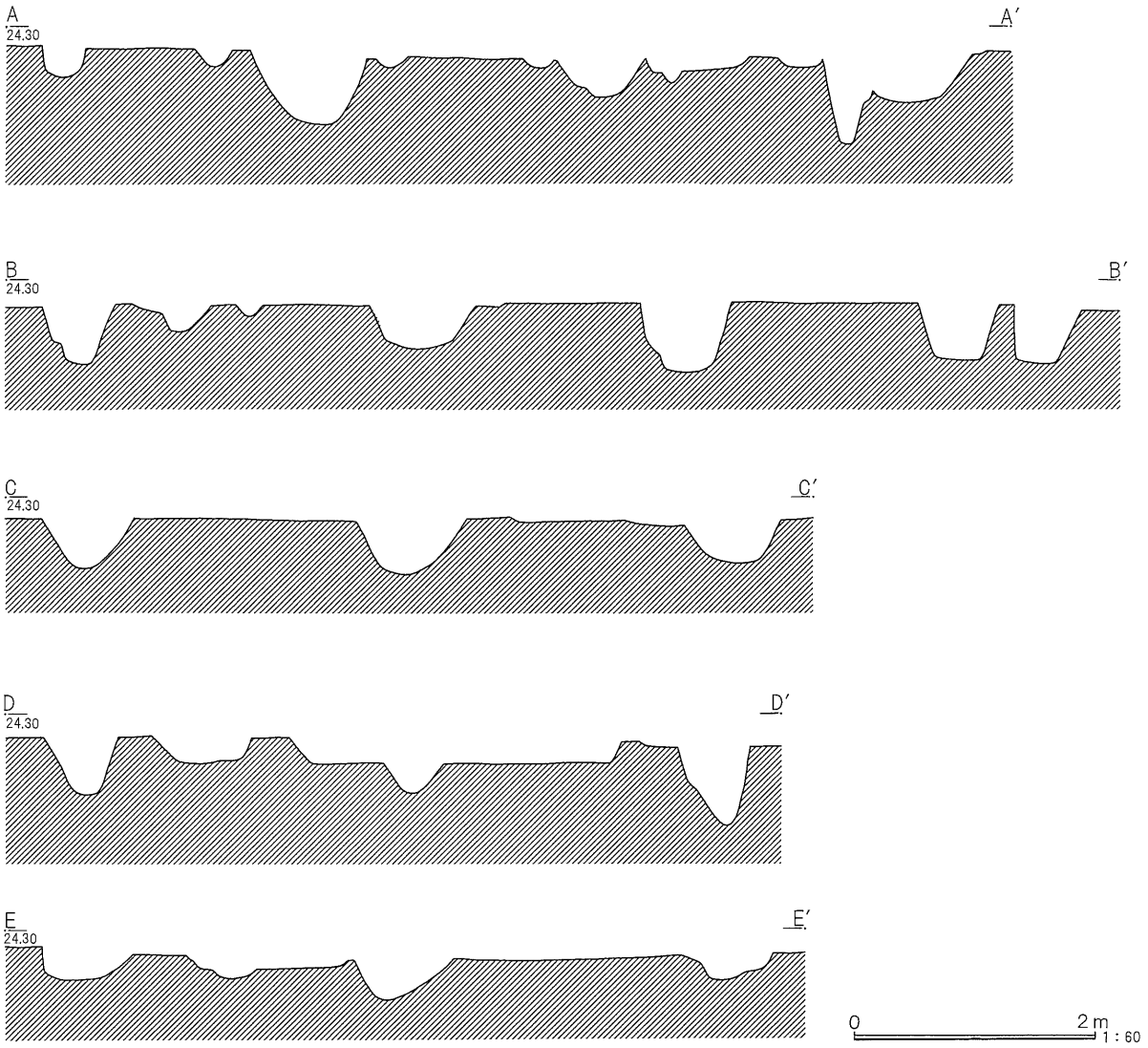
第33図　第４号掘立柱建物跡

る。北西部では１号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。また、建物内及び周辺には時期不明のピットが多数みられるが、新旧関係及び本建物跡に伴うものか不明である。

本建物跡は２×２間の身舎に西庇が付く南北棟の側柱建物である。身舎の規模は桁行5.4m、梁行4.8mを測り、庇は身舎とは1.8mの距離にある。主軸方向はN－４°－Wを指し、ほぼ東西南北に軸があっている。身舎の柱間は桁行が1.8mで等間隔となる。梁行は南側が2.4mで等間隔となるが、北側は中央のピット８がやや東寄りに位置しており、ピット１・８間が2.1m、ピット７・８間が2.7mを測る。庇は桁行と同じく1.8m間隔で並ぶ。柱穴は円形ないし楕円形を呈するものが主体となるが、庇北側のピット９のみ長方形を呈する。深さは0.5m以上の比較的しっかりした掘り込みのものが多くみられたが、一部に0.3m前後を測るやや浅めのものもみられた。覆土は図示できなかったが、いずれの柱穴からも柱痕跡は認められなかった。

遺物はピット３～５・９～11から古墳時代前期及び後期の土師器、奈良・平安時代の須恵器・土師器が若干検出されたが、いずれも小片であり、図示可能なものはみられなかった。

出土遺物に時期を特定できるものはないが、本建物跡の時期はその軸や周辺遺構との関係などから奈良・平安時代としておきたい。



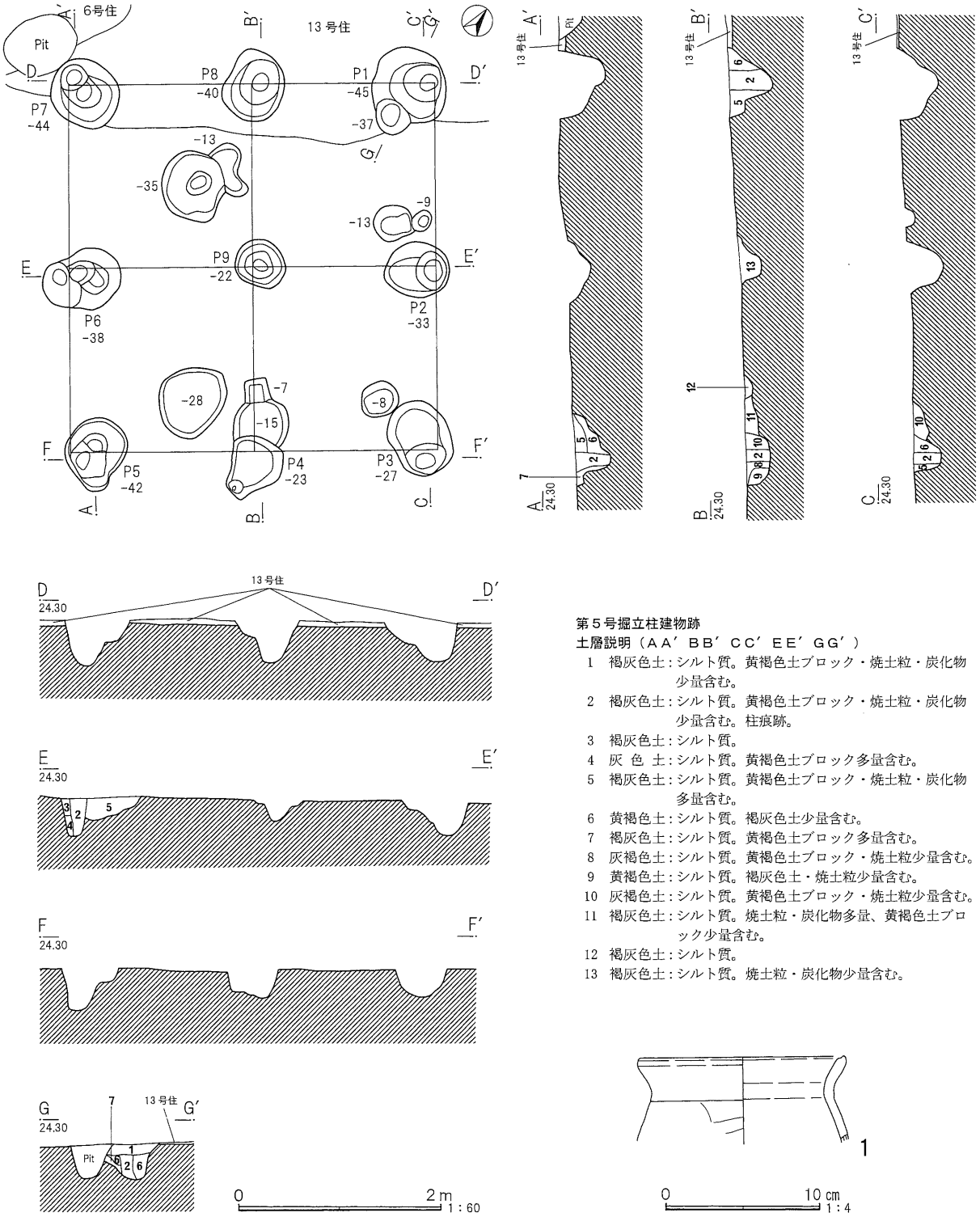
第34図　第４号掘立柱建物跡断面図

第５号掘立柱建物跡（第35図）

61・62－88・89グリッドに位置する。北側で13号住居跡を切っている。建物内には時期不明のピットがいくつかみられたが、いずれも本建物跡には伴わないと思われる。

本建物跡は２×２間の総柱建物である。規模は桁行、梁行ともに3.6mを測る。主軸方向はN－35°－Wを指す。柱間は1.8mで揃う。柱穴はややいびつなものもあるが、ほぼ楕円形を呈する。深さは確認面からの数値としては北側のピットが深いが、本建物跡の立地する箇所が南側に傾斜していることを考慮するとほぼ同じ深さに掘り込まれている。確認面からの深さは北側が0.4m程、南側は0.25m前後を測る。覆土は一部図示できなかったが、確認したピットでは柱痕跡（２層）が認められた。

出土遺物は、土師器甕（１）のみである。ピット１から検出された。13号住居跡からの流れ込みの可能性もある。口縁部から胴上部までの検出である。甕でも小型の部類に入る。器壁が厚く、口唇部内面に沈線状の窪みを有する。胴部外面はヘラ削り調整による。



第５号掘立柱建物跡
土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′ ＣＣ′ ＥＥ′ ＧＧ′）

1 褐灰色土：シルト質。黄褐色土ブロック・焼土粒・炭化物少量含む。
2 褐灰色土：シルト質。黄褐色土ブロック・焼土粒・炭化物少量含む。柱痕跡。
3 褐灰色土：シルト質。
4 灰 色 土：シルト質。黄褐色土ブロック多量含む。
5 褐灰色土：シルト質。黄褐色土ブロック・焼土粒・炭化物多量含む。
6 黄褐色土：シルト質。褐灰色土少量含む。
7 褐灰色土：シルト質。黄褐色土ブロック多量含む。
8 灰褐色土：シルト質。黄褐色土ブロック・焼土粒少量含む。
9 黄褐色土：シルト質。褐灰色土・焼土粒少量含む。
10 灰褐色土：シルト質。黄褐色土ブロック・焼土粒少量含む。
11 褐灰色土：シルト質。焼土粒・炭化物多量、黄褐色土ブロック少量含む。
12 褐灰色土：シルト質。
13 褐灰色土：シルト質。焼土粒・炭化物少量含む。

第35図　第５号掘立柱建物跡・出土遺物

第21表　第５号掘立柱建物跡出土遺物観察表

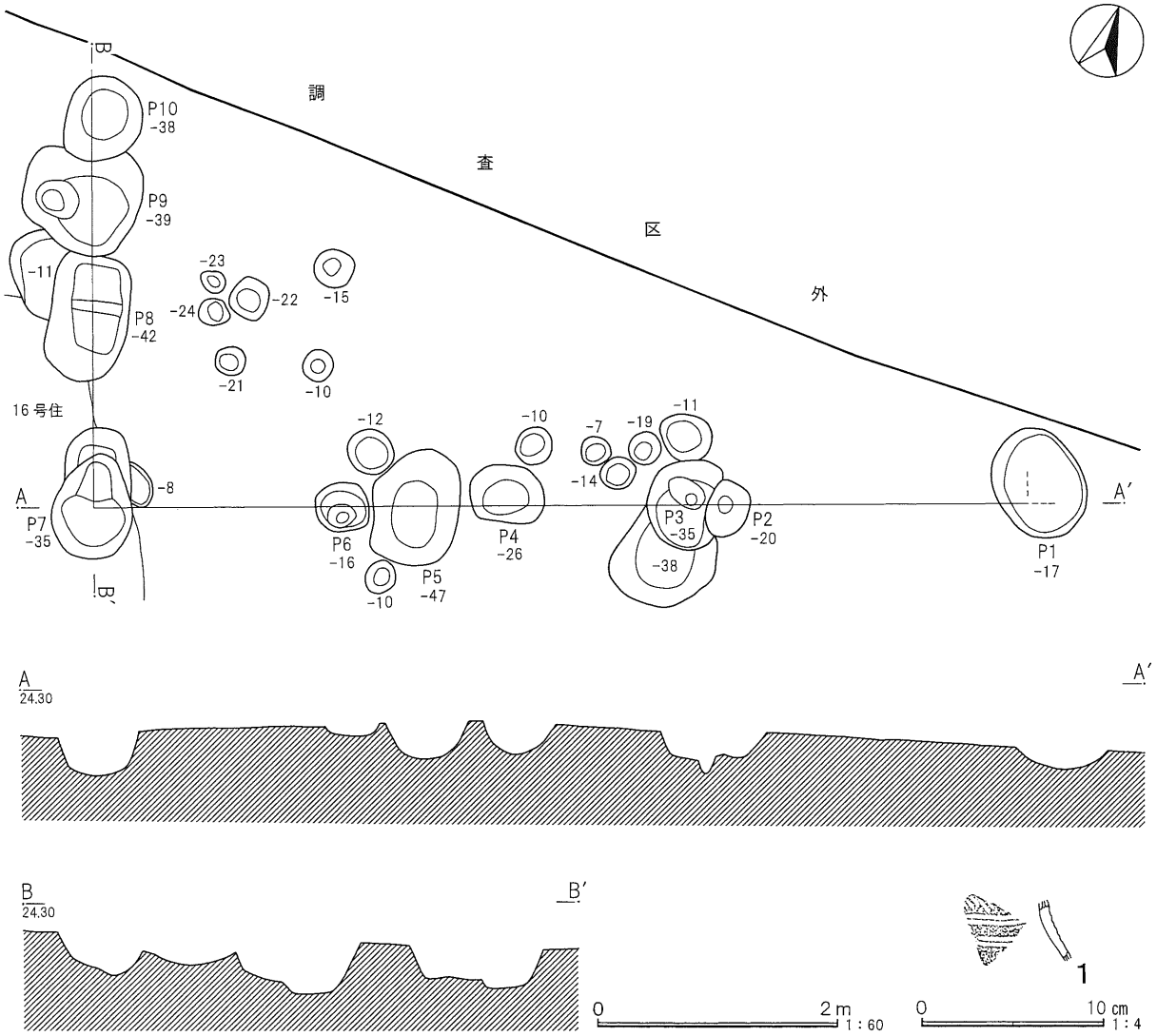
番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器　甕	(13.6)	(5.6)	—	ABDGHKN	灰白色	B	口～胴25%	Ｐ１出土。

出土遺物が本建物跡に伴うものか定かではないが、本建物跡の時期はその軸や13号住居跡との新旧関係などから７世紀後半から８世紀初頭段階としておきたい。

第６号掘立柱建物跡（第36図）

59～61－85グリッドに位置する。ピット７・８が16号住居跡を切っている。建物内外には時期不明のピットが多数みられるが、新旧関係及び伴うものか不明である。北東部大半が調査区外にあるため、南側桁はピット１以東に延びるのか、あるいは北側に曲がって梁となるのか不明である。また、本建物跡に確実に伴うピット（ピット１・３・５・７・８・10）以外に柱筋が通るものの柱間が揃わないピット（ピット２・４・６・９）があるが、これらが本建物跡に伴うか否かについても不明である。

検出された状況はおよそ３×３間であるが、それ以上の側柱建物になる可能性がある。規模は現状で



第36図　第６号掘立柱建物跡・出土遺物

第22表　第６号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	弥生土器　壺	—	—	—	ABDGIK	褐灰色	B	頸部片	Ｐ２出土。中期後半。

桁行が7.8m、梁行が3.85mを測る。主軸方向はN－70°－Eを指す。柱間は桁行のピット３・５間が2.4mであるが、ピット１・３とピット５・７間は2.7mを測る。梁行はピット９を除くと1.6m前後でほぼ揃う。柱穴は概ね円形ないし楕円形を呈するが、ピット５・８は方形状を呈する。深さは本建物跡の立地する箇所が東側に傾斜していることからピット１のみ0.17mと浅いが、その他は0.4m前後であった。覆土は図示できなかったが、いずれの柱穴からも柱痕跡は認められなかった。

出土遺物で図示可能なものは、弥生土器壺の頸部片（１）のみである。ピット２から検出された。流れ込みと思われる。この他にもピット１・２・５～７から古墳時代末から奈良・平安時代にかけての土師器が若干検出されたが、小片であるため図示不可能であった。

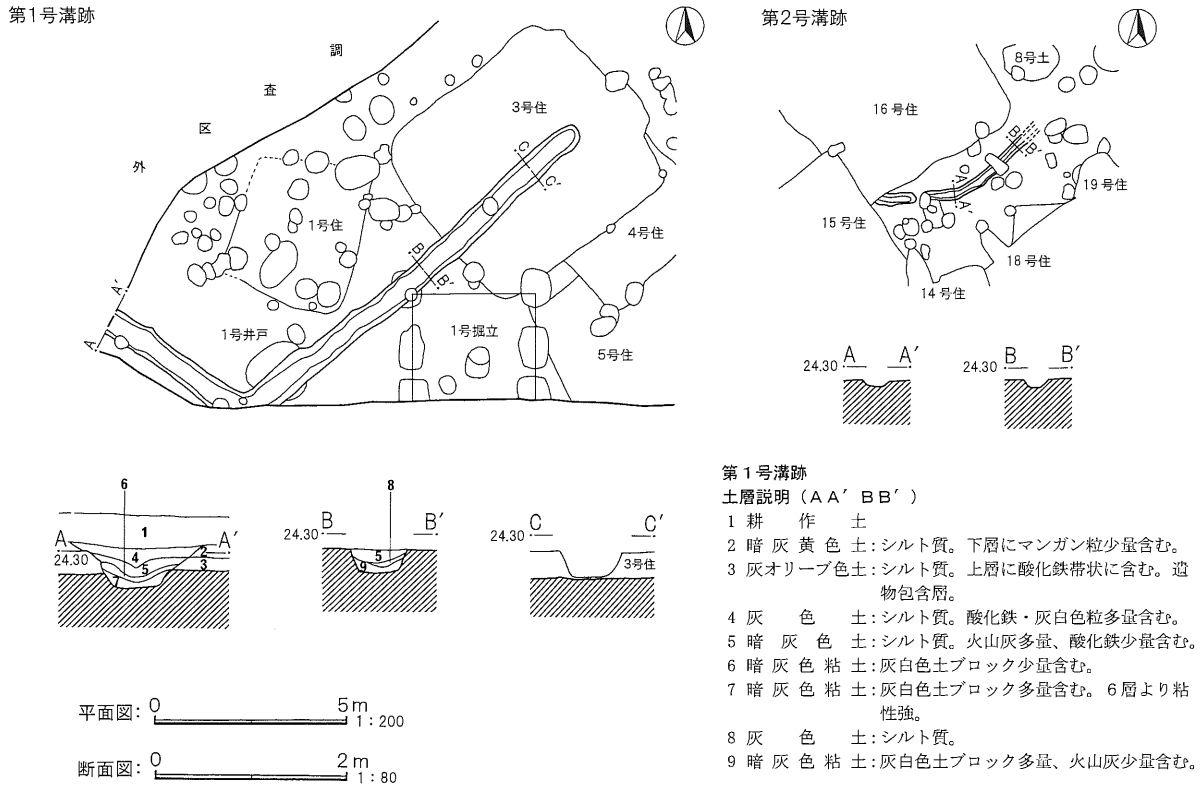
出土遺物に時期を特定できるものはないが、本建物跡の時期はその軸から７世紀後半から８世紀初頭段階としておきたい。

3　溝　跡

第１号溝跡（第37図）

64～67－88～90グリッドに位置する。64・65－88・89グリッドで３号住居跡、65－89グリッドで１号掘立柱建物跡のピット６、66－89・90グリッドで１号井戸跡を切っている。また、所々で時期不明のピットと重複するが、新旧関係は不明である。

66・67－89・90グリッドでは北西方向から南東方向に走るが、66－89・90グリッド境付近で北東方向にほぼ直角に曲がり、64－88グリッドで終息する。67－89グリッド以西は調査区外に延びる。検出された長さはおよそ15.7m、幅は0.7m前後を測る。深さは確認面からは0.25m前後であったが、調査区境



第１号溝跡
土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′）
1 耕　作　土
2 暗 灰 黄 色 土：シルト質。下層にマンガン粒少量含む。
3 灰オリーブ色土：シルト質。上層に酸化鉄帯状に含む。遺物包含層。
4 灰　色　土：シルト質。酸化鉄・灰白色粒多量含む。
5 暗 灰 色 土：シルト質。火山灰多量、酸化鉄少量含む。
6 暗 灰 色 粘 土：灰白色土ブロック少量含む。
7 暗 灰 色 粘 土：灰白色土ブロック多量含む。６層より粘性強。
8 灰　色　土：シルト質。
9 暗 灰 色 粘 土：灰白色土ブロック多量、火山灰少量含む。

第37図　第１・２号溝跡

での土層断面では最大0.44mを測る。断面形は逆台形を呈する。覆土は三～四層（４～９層）からなり、中～下層にかけて火山灰を含んでいた。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物が検出されず、重複する１号掘立柱建物跡及び１号井戸跡の時期もはっきりしないことから本溝跡の時期は奈良・平安時代以降としか言えない。

第２号溝跡（第37図）

60・61－86グリッドに位置する。61－86グリッドで16号住居跡、所々で時期不明のピットと重複するが、新旧関係は不明である。

61－86グリッドで一旦途切れるが、ほぼ東西方向に走る。60・61－86グリッド境付近からは南西方向から北東方向に走り、60－86グリッド中央付近で途切れる。検出された長さはおよそ4.6mと短く、幅は0.3m前後を測る。確認面からの深さは0.06～0.1mと浅い。断面形は逆台形を呈する。覆土は図示できなかったが、灰色系の土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物が検出せず、他の遺構との新旧関係も不明であるため、本溝跡の時期は不明と言わざるを得ない。

第３号溝跡（第38・39図）

57～60－87～90グリッドに位置する。60・61－89・90グリッドで21号住居跡、58～60－88・89グリッドで１号方形周溝墓を切っており、57－88及び59－89グリッドでは南側を走る４号溝跡に切られている。59－89グリッドでは時期不明のピットと重複するが、新旧関係は不明である。また、本溝跡の北東部延長上には８・９号溝跡がほぼ直交する形で走っているが、どの溝も途切れているため重複するのか定かではない。ただし、８号溝跡は８世紀前半段階であることから本溝跡よりも新しいことは確実である。９号溝跡については、後述する本溝跡出土遺物とほぼ同時期の段階があることから併存していた可能性があるが、詳細については不明と言わざるを得ない。

調査区西側の遺構が密集する高台縁辺部に沿って南西方向から北東方向に走る。南西部以降は調査区外に延びるが、北東部は調査区東側に広がる谷状の落ち込みに向かって走り、57－87グリッドで途切れる。検出された長さは17.５mである。幅は一定していないが、概ね3.5～４m程が主体となる。確認面からの深さは東側に傾斜する地形にあるため、南西部から北東部に向かって徐々に浅くなる。南西部は0.86m、北東部は0.56mを測る。断面形は様々であり、一定していない。北東部の57－88グリッド付近では船底状を呈するが、南側にテラス状の段を持つ。58－88・89グリッド及び60－89グリッド付近では両側にテラス状の段を持ち、中央の最も深い所が船底状ないし逆台形を呈する。59－89グリッド付近ではほぼ横長のＶ字状を呈する。覆土は層位を確認した58－88グリッドでは九層（１～９層）からなる。３・４層では炭化物が多量認められたが、これは南西部の調査区境付近で確認された土器集中地点（第38図第３号溝跡Ａ・第41図）の層位に相当する。３・４層をはじめとしていずれの層にも混入物が認められたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第44～47図）は土器のみであるが、多数検出された。特に土器集中地点からは残存率の高いものが主に４つのブロック（ａ～ｄ）に分かれて検出された。遺物の時期は弥生時代から古墳時代前期、中期、後期、末頃と幅があるが、弥生時代の土器（３－76～90）は流れ込みであり、一部を除いてそのほとんどが隣接する方形周溝墓のものと思われる。本溝跡に伴う古墳時代の遺物は、須恵器蓋（３－１～３）、坏（３－４）、甕（３－５・８）、甑（３－６）、壺（３－７）、瓶類（３－９）、土師器坏（３－

10～16)、皿（３－17)、壺（３－18～20・26・27・53・54・67)、台付甕（３－21～25)、甕（３－28～52)、高坏（３－55～66・68～70)、台付椀（３－71)、椀（３－72～74)、甑（３－75）などがあり、土師器には時期の判別が難しいものがみられた。主に下層から古墳時代前期、上～中層から古墳時代中期から末頃にかけての遺物が出土する傾向にあった。上～中層で確認された土器集中地点出土遺物は、３－11・18・19・21・29～31・43・45・55～64・66・67・69～75である。すべて土師器であり、高坏の出土が目立つ。一部流れ込みと思われるものもあるが、概ね５世紀代でも新しい段階を中心とする一群が主体となる。以下、本溝跡に伴う古墳時代の遺物について順を追って述べる。

須恵器は末野産が大半を占める。時期は６世紀代から８世紀初頭段階までに収まる。蓋はいわゆる坏Ｈの蓋（３－１・２）と内面にかえりを持つ大型の蓋（３－３）がある。１・２はともに天井部は回転ヘラ削り調整である。２は焼きが甘い。３は天井部がやや扁平な造りである。つまみを欠く。３－４はいわゆる坏Ｇの身。小振りで底部は回転ヘラ削り調整である。口縁部を欠く。甕はやや小型の３－５と大型の３－８がある。３－５は残存状態が良好であった。３－８は口縁部片。その形態から３－５よりは後出的である。３－６は口縁部を欠き、胴部以下は扁平な球形を呈する。肩部外面には波状文、胴部中位には平行沈線間に櫛描列点文が巡り、透孔を持つ。３－７は壺の肩部から胴部にかけての破片。肩部外面に２条の沈線が巡る。３－９は瓶類の肩部片。分かりづらいが、外面に回転カキ目が巡る。

土師器は４世紀代から８世紀初頭まで幅広く検出されており、様々な器種がある。坏は、有段口縁坏（３－10)、坏身模倣坏（３－11～14)、北武蔵型坏（３－15)、比企型坏（３－16）がある。６世紀代（11～14）と７世紀代（10・15・16）に分けられる。10は口径が16.2cmと大きく、口縁部の開きも大きい。坏身模倣坏は12の口縁部がほぼ直立している以外は内傾している。底部はすべて丸底であるが、13は平底に近い。14は他に比べて小振りである。なお、11は土器集中地点から出土したが、ほぼ単独での検出であり、流れ込みであろう。15は口縁部がほぼ直立する。16は口唇部のみ外反し、内面には一条の沈線が巡る。内面及び口縁部外面に赤彩が施されている。３－17は口縁部が外反し、底部は平底に近い。内面に暗文はみられない。７世紀末頃を前後する段階のものと思われる。壺は概ね４世紀代（３－20・26・27・53・54）と５世紀代（３－18・19・67）に分けられるが、破片で検出されたものについては確証が得られない。18は素口縁で短い口縁部の開きが小さい。胴部は球形を呈し、中位に最大径を持つ。調整は口縁部外面が横ナデ、胴部外面は丁寧なヘラナデが施されている。口縁部内面及び頸部外面、胴部の一部には、ハケメが使用されている。底部を欠く。19・20は底部。19は外面、20は内外面ハケメ調整による。19は土器集中地点出土であり、18と同一個体の可能性がある。26・27は口縁部片。26は素口縁、27は複合口縁である。ともに調整にハケメが使用されている。53・54は底部。壺としたが、坩とした方が良いものかもしれない。外面の調整はともにヘラナデである。67は口縁部のみの検出であるが、中位に段を持ち、大きく外反する。甕は概ね４世紀代（３－28)、５世紀代（３－29～31・43～47・49～52)、６～７世紀代（３－32～42・48）に分けられる。甕も壺同様、部位で検出されたものに関しては確証が得られない。５世紀代としたものには一部６世紀に入る可能性もある。28は口縁部片。甕としたが、台付甕になる可能性がある。外面はハケメ、内面はヘラナデ調整である。29・30は全形のわかる良好な資料である。ともに土器集中地点から出土した。29は口縁部の開きが小さく、胴部が球形から長胴に移行する過渡的な様相を呈する。調整は口縁部が横ナデ、胴部は内外面とも上位に縦･横位のヘラナデ、下位に横位のヘラ削りが施されている。

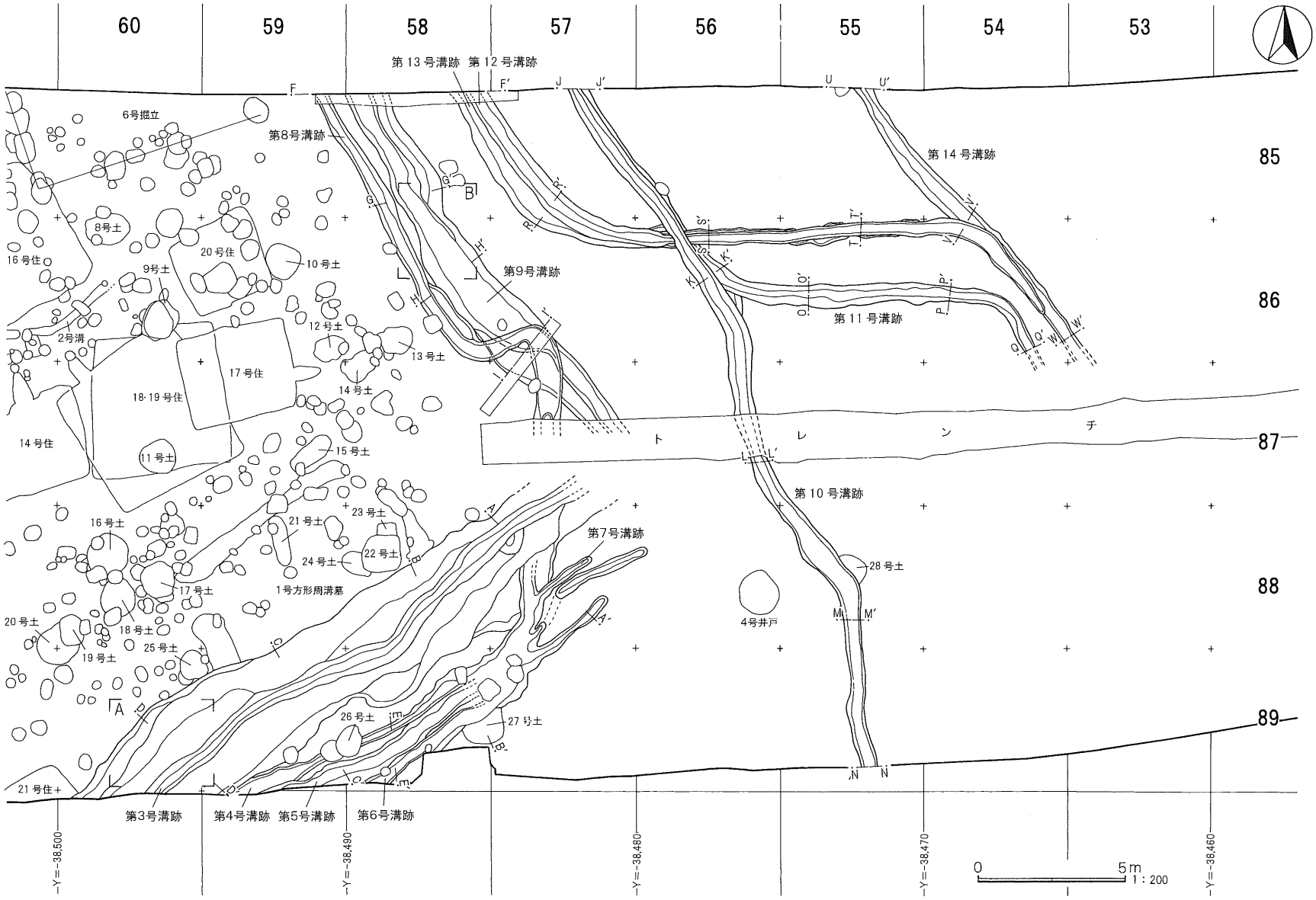
30は口縁部が外反し、胴部は球形を呈するものの、29と同じくやや長胴化している。調整は口縁部が横ナデ、胴部外面は全面ヘラナデ調整による。壺とみても良いものかもしれない。31は口縁部が外反し、胴部はおそらく29・30と同じくやや長胴化した器形になると思われる。調整は口縁部が横ナデ、胴部外面はヘラナデである。32～42は口縁部から胴上部までの部位で胴部外面の調整がヘラ削りによる一群である。32・33・42は丸胴、34～41は長胴の甕である。43～52は肩部以下の部位である。甕に含めたが、壺の可能性もある。48のみ外面の調整がヘラ削りであるが、その他はすべてヘラナデ調整である。46は内面にハケメが残る。台付甕はすべて４世紀代のものである。３－21は唯一全形がわかる資料であり、残存状態が良好である。小型で口縁部が「く」の字、胴部は球形を呈する。最大径を胴部中位に持つが、口径とほとんど差がない。外面は磨耗が著しいが、口縁部内外面及び胴部外面はハケメ、胴下部から台部はヘラナデ調整である。土器集中地点出土であるが、ほぼ単独で下層から検出された。３－22～25は台付甕の接合部及び台部である。高坏は３－65・68以外すべて土器集中地点から検出された。５世紀代を中心とするが、一部６世紀との過渡的な様相を呈するものもみられる。いずれも口縁部が大きく開くが、その器形から３つのタイプが認められた。深身で坏部下位の稜が明瞭なもの（３－55～60・63・64・66)、浅身で坏部下位の稜が不明瞭なもの（３－61・62・65)、浅身で口縁部が大きく外反するもの（３－68)などである。このうち55・56は脚部の調整がヘラミガキであることから同タイプの中でも古い要素を持つ。55・56以外はヘラナデ調整である。61は同タイプの62に比べて脚部の膨らみが大きいことから62よりは新しい。68は明らかに６世紀代のものである。３－71は台付椀、３－72～74は椀、３－75は甑である。すべて土器集中地点から検出され、残存状態は良好である。72が４世紀代、その他は５世紀代と思われる。71は後述する頸部にくびれを持つ椀に主体となる高坏と同じ脚部が付く。口縁部及び台部裾は横ナデ、胴部から台部外面はヘラナデ調整である。外面と口縁部内面には赤彩が施されている。ほぼ完形。椀は頸部にくびれを持たないもの（72）と持つもの（73・74）がある。口縁部はいずれも横ナデ調整である。72は胴部外面にヘラナデ調整が施されるが、部分的にハケメが残る。土器集中地点でも台付甕21と同じくほぼ単独で下層からの出土である。73・74の胴部外面の調整は73が全面ヘラナデであるが、74は上位がヘラナデ、下位はヘラ削りが施されている。74は胴部に焼成後穿孔が認められた。75は甑。器高が低く、口縁部は複合口縁である。調整は口縁部が横ナデ、胴部は内外面ともにヘラナデである。

本溝跡は出土遺物や周辺遺構との関係などから古墳時代前期に掘削され、以後徐々に埋没しながら８世紀初頭段階までの長期間にわたって存続していたと思われる。また、上～中層で確認された土器集中地点は、その出土状況からみて水辺の祭祀が行われた痕跡と思われる。

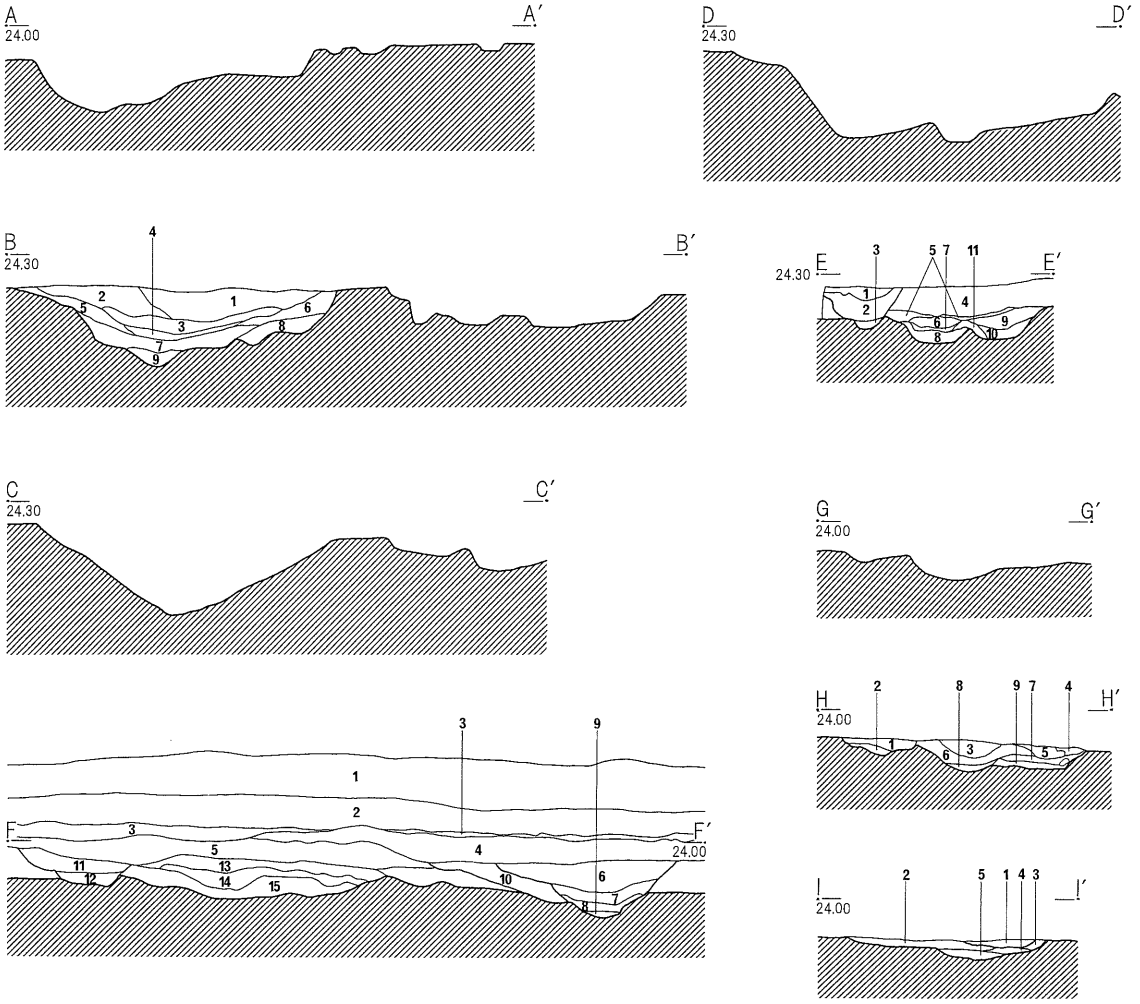
第４号溝跡（第38・39図）

57～59－88～90グリッドに位置する。57－88及び59－89グリッドで北側を走る３号溝跡を切っており、58・59－89グリッドでは26号土坑に切られている。また、南側にはほぼ同方向に５・６号溝跡が併走しており、57・58－88・89グリッドをはじめ所々で重複するが、本溝跡が５・６号溝跡よりも新しい。58－89グリッド及び59－89グリッドでは時期不明のピットと重複し、57－88グリッドでは７号溝跡が本溝跡から派生する形で重複しているが、新旧関係は不明である。

58・59－89グリッドでは北側の３号溝跡に沿って南西方向から北東方向に走るが、57－88グリッドで北方向に曲がり、３号溝跡内で終息する。本溝跡北端の延長上には８号溝跡の南端があるが、同一遺構



第38図　第３～14号溝跡



第３号溝跡
土層説明（ＢＢ′）
1 暗灰黄色土：シルト質。酸化鉄多量、黄褐色土ブロック・炭化物少量含む。
2 暗灰黄色土：シルト質。マンガン粒多量含む。
3 黒褐色粘土：黄褐色土ブロック・酸化鉄・砂・炭化物多量含む。
4 黒褐色粘土：黄褐色土ブロック・酸化鉄・炭化物多量、灰褐色粘土ブロック少量含む。
5 褐灰色土：シルト質。マンガン粒多量、酸化鉄少量含む。
6 黄灰色土：シルト質。酸化鉄多量、黄褐色土ブロック少量含む。
7 暗灰黄色粘土：黄褐色土ブロック・酸化鉄・砂少量含む。
8 緑灰色土：砂質。暗灰黄色粘土ブロック・酸化鉄少量含む。
9 暗灰黄色粘土：酸化鉄・緑灰色粘土ブロック少量含む。

第４～６号溝跡
土層説明（ＥＥ′）
1 褐灰色土：シルト質。黄褐色土ブロック多量、マンガン粒少量含む。
2 褐色土：シルト質。マンガン粒多量、にぶい黄色土ブロック少量含む。
3 褐灰色粘土：灰白色粘土ブロック・マンガン粒少量含む。
4 褐色土：シルト質。マンガン粒多量、焼土粒・炭化物・にぶい黄色土ブロック少量含む。
5 褐灰色土：シルト質。炭化物・灰白色粘土ブロック・マンガン粒少量含む。
6 褐灰色土：シルト質。炭化物・灰白色粘土ブロック多量、灰・マンガン粒少量含む。
7 褐灰色土：シルト質。下層に炭化物を帯状に含む。
8 褐灰色土：シルト質。灰白色土ブロック・マンガン粒少量含む。
9 褐灰色土：シルト質。黄褐色土ブロック・炭化物多量、焼土粒・灰・マンガン粒少量含む。
10 褐灰色土：シルト質。黄灰色土ブロック・灰白色土ブロック多量含む。
11 褐灰色土：シルト質。灰白色土ブロック・マンガン粒少量含む。

第８・９・12・13号溝跡
土層説明（ＦＦ′）
1 盛土
2 暗灰黄色土：シルト質。下層にマンガン粒少量含む。
3 灰オリーブ色土：シルト質。上層に酸化鉄帯状に含む。遺物包含層。
4 オリーブ黒色土：粘土質。酸化鉄多量含む。遺物包含層。
5 オリーブ黒色土：粘土質。マンガン粒多量含む。
6 青灰色シルト：灰白色粘土少量含む。
7 灰白色土：粘土質。
8 灰色粘土
9 灰色粘土
10 青灰色シルト：酸化鉄少量含む。
11 褐灰色シルト：黄灰色粒・火山灰少量含む。
12 灰褐色土：黄灰色粒多量、焼土・炭化物少量含む。
13 褐灰色土：シルト質。火山灰・焼土・炭化物少量含む。
14 黄灰色シルト：暗灰色粘土少量含む。
15 暗褐灰色土：粘土質。黄灰色粒微量含む。

第８・９号溝跡
土層説明（ＨＨ′）
1 灰褐色土：シルト質。黄灰色粒・焼土・炭化物多量含む。
2 暗灰褐色土：粘土質。黄灰色粒少量、焼土粒・炭化物微量含む。
3 黄灰色シルト：暗灰色粘土少量含む。
4 灰白色シルト：黄灰色シルトブロック微量含む。
5 暗灰色土：黄灰色粒・炭化物微量含む。
6 暗褐灰色土：粘土質。黄灰色粒微量含む。
7 灰色土：粘土質。暗灰色粒多量含む。
8 暗灰色粘土
9 暗灰色粘土：灰色粘土ブロック多量含む。

第８・９号溝跡
土層説明（ＩＩ′）
1 灰褐色土：シルト質。黄灰色粒・火山灰・炭化物微量含む。
2 暗灰色粘土：黄灰色粒・黒色粘土少量含む。
3 灰白色土：シルト質。黄灰色粒・ブロック・黒色粘土ブロック多量含む。
4 灰色粘土：黄灰色粒少量含む。
5 暗緑灰色粘土：黒色粘土ブロック微量含む。

0　2m
1：80

第39図　第３～14号溝跡断面図(1)

ではない。南西部以降は調査区外に延びる。検出された長さは13.7m、幅は58－89グリッド付近が0.3m前後と狭いが、その他は概ね0.6m前後を測る。確認面からの深さは0.05m程と浅いが、土層断面を観察した南西部では0.42mの深さであった。３号溝跡同様、東側に傾斜する地形にあるため南西部から北東部に向かって徐々に浅くなる。断面形は船底状を呈する。覆土は層位を確認した所では三層（１～３層）からなる。混入物がみられたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第48図）は、土師器椀（４－１）、小型甕（４－２）があるが、後述する５号溝跡との新旧関係を考慮すると本溝跡に伴うものではないと思われる。４・５号溝跡出土として掲載した遺物のうち、皿（４・５－５）が本溝跡に伴うものであろうか。４・５－５は短い口縁部が僅かに外反し、底部は平底に近い。内面には放射状暗文が施されている。

本溝跡の時期は、皿の存在と５号溝跡との新旧関係から７世紀末から８世紀初頭段階としておきたい。

第５号溝跡（第38・39図）

56～59－88～90グリッドに位置する。57・58－88・89及び59－89グリッドで併走する４・６号溝跡と重複しており、４号溝跡には切られているが、６号溝跡とは覆土の堆積状況からほぼ同時期と思われる。57・58－89グリッドでは時期不明のピットと重複するが、新旧関係は不明である。

３・４号溝跡と同じく南西方向から北東方向へ走る。57－88グリッドで一旦途切れ、やや蛇行しながら56－88グリッドで終息する。南西部以降は調査区外に延びる。検出された長さは14.8mである。幅は南西部から北東部に向かって徐々に狭くなる。南西部で0.8m、北東部で0.3m前後を測る。深さは３・４号溝跡と同じく南西部から北東部に向かって徐々に浅くなる。南西部で0.28m、北東部で0.08m程を測る。断面形は逆台形を呈する。覆土は層位を確認した所では五層（５～８・11層）からなり、11層は南側を併走する６号溝跡にも堆積していた。ブロック土を含んでおり、人為的に埋め戻された可能性がある。

出土遺物（第48図）は、土師器坏（５－１・２）、皿（５－３）、甕（５－４・５）があり、４・５号溝跡出土遺物として掲載した坏のうち、４・５－３・４も本溝跡に伴うものである。この他にも弥生時代中期後半段階の壺の胴部片（５－６・７）、古墳時代前期の土師器坩の底部（５－８）、甕の肩部片（５－９）なども流れ込み遺物として検出された。

５－１はやや深身の有段口縁坏。口縁部の段は一段のみである。５－２はやや浅身の比企型坏。口縁部が外反し、口唇部内面には一条の沈線が巡る。内面及び口縁部外面には赤彩が施されている。４・５－３・４は北武蔵型坏。ともに残存状態が良好であり、口径10.5cm前後を測る小振りのものである。３は口縁部がほぼ直立し、４は内傾している。５－３は有段口縁坏の器形に近い皿。底部を欠くが、平底気味になると思われる。５－４・５は甕の底部及び胴下部から底部までの部位。ともに器壁が厚手である。

本溝跡の時期は、７世紀後半と思われる。

第６号溝跡（第38・39図）

57～58－88～89グリッドに位置する。57・58－89グリッドで27号土坑、所々で時期不明のピットと重複するが、新旧関係は不明である。また、本溝跡北側立ち上がりのほとんどが５号溝跡と重複しているが、覆土の堆積状況から本溝跡と５号溝跡はほぼ同時期と思われる。

３～５号溝跡と同じく南西方向から北東方向へ走り、57－88グリッドで終息する。南西部以降は調査区外に延びる。検出された長さは10.2mを測る。幅は57－88グリッドで一部狭い所があるが、概ね0.5

m前後である。深さは３～５号溝跡同様、南西部から北東部に向かって徐々に浅くなる。南西部で0.34m、北東部で0.08m程である。断面形は逆台形を呈する。覆土は層位を確認した所では四層（５・９～11層）からなる。５号溝跡でも述べたとおり、11層は５号溝跡にも堆積していた。ブロック土を多量含んでおり、人為的に埋め戻された可能性がある。

出土遺物は、土師器坏（第48図６－１）のみである。北武蔵型坏。口縁部がやや外に開く。底部を欠く。

本溝跡の時期は、出土遺物と５号溝跡との関係から７世紀後半と思われる。

第７号溝跡（第38・39図）

57－88グリッドに位置する。４号溝跡から派生する形で南西方向から北東方向へ走り、同グリッド内で終息する。４号溝跡との新旧関係は不明である。検出された長さは2.23mと短く、幅は0.3m前後を測る。確認面からの深さは0.06mと非常に浅い。断面形は船底状を呈する。覆土は図示できなかったが、灰色系の土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

出土遺物に図示できるものはなかったが、古墳時代後期の土師器甕の小片が若干検出されている。本溝跡の時期は古墳時代後期としか言えない。

第８号溝跡（第38・39図）

57～59－85～87グリッドに位置する。東側を併走する９号溝跡を57・58－86・87グリッドで切っている。57－87及び58－86グリッドでは時期不明のピットと重複するが、新旧関係は不明である。

調査区西側の遺構が密集する高台縁辺部に沿って走る。58・59－85・86グリッドでは北西方向から南東方向へほぼ直線的に走るが、57－86グリッドでＳ字状に大きく蛇行し、57－87グリッドからはほぼ南に向かって走る。南端は試掘調査時のトレンチにより欠くが、トレンチ以南ではその続きが確認されていない。４号溝跡でも述べたが、本溝跡南端の延長上に４号溝跡の北端があるが、同一遺構ではない。北西部以降は調査区外に延びる。検出された長さは15.9mを測る。幅は概ね0.6m前後であるが、58－86グリッド及び南端付近は１m程であった。深さは北西部から南東部に向かって徐々に浅くなる。北西部は調査区境の土層断面で0.28m、南東部は確認面からであるが0.05mを測る。断面形は船底状を呈するが、58－86グリッドでは東側にテラス状の段が設けられていた。覆土は層位を確認した所で異なるが、概ね灰褐色系の土が一～二層堆積していた。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第48図）は、８世紀前半の須恵器坏（８－１）、５～６世紀前半の土師器甕（８－２）、古墳時代前期の台付甕（８－３）があるが、９号溝跡との新旧関係を考慮すると８－１が本溝跡に伴うものであろう。底部付近のみの検出であるが、底径は12.2cmを測り、調整は回転ヘラ削りである。

本溝跡の時期は、須恵器坏の存在と９号溝跡との関係から８世紀前半としておきたい。

第９号溝跡（第38・39図）

57・58－85～87グリッドに位置する。西側を併走する８号溝跡に57・58－86・87グリッドで切られている。57－86・87グリッドでは時期不明のピットと重複するが、新旧関係は不明である。

８号溝跡同様、北西方向から南東方向へ走る。北西部は調査区外に延び、南端は試掘調査時のトレンチにより欠くが、トレンチ以南ではその続きが確認されていない。３号溝跡でも述べたが、本溝跡は３号溝跡の延長上を直交する形で走るが、途切れているため重複するのか定かではない。本溝跡出土遺物に３号溝跡とほぼ同時期のものがあることから併存していた可能性があるが、詳細については不明と言

わざるを得ない。検出された長さは14.35m、幅は概ね1.5m前後であるが、57・58－86グリッド付近では２m程になる所もみられた。深さは８号溝跡と同じく北西部から南東部に向かって徐々に浅くなる。北西部は調査区境の土層断面で0.42m、南東部は確認面からであるが0.2mを測る。断面形は船底状を呈するが、58－85グリッドでは東側、57・58－86・87グリッドでは西側にそれぞれテラス状の段が設けられていた。覆土は層位を確認した所で異なるが、概ね灰色系の土や粘土が堆積しており、多い所では七層、少ない所では三層確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

本溝跡からは時期を特定できる遺物が多数検出された。出土遺物（第49・50図）は、須恵器甕（９－１）、土師器坏（９－２～７）、壺（９－８～11）、甕（９－12～19）、甑（９－20～22）、高坏（９－23）、鉢（９－24）、軽石（９－25）、不明鉄製品（９－26）がある。これらは主に58－85・86グリッドから検出された（第38図第９号溝跡Ｂ・第42図）。同グリッド出土遺物は、９－３・７・８・13～17・20～22・24である。また、この他に弥生時代中期後半の甕の破片（９－27・28）、古墳時代前期の土師器壺の底部（９－29・30）、高坏の脚部（９－31・32）、甕の胴下部片（９－33）、６世紀代の円筒埴輪片（９－34）なども流れ込み遺物として検出された。

９－１は甕の頸部片。本溝跡唯一の須恵器であるが、流れ込みの可能性もある。土師器坏は、有段口縁坏（９－２・４）、坏蓋模倣坏（９－３・５）、比企型坏（９－６・７）がある。２は口縁部の開きが小さく、段が沈線化している。完形品。４は底部の器壁が厚く、平底化している。３は法量・器形が２に似るが、口縁部に段を持たない。甑９－20・21の下から検出された。５は小振りで口縁部が短い。６は口唇部のみ外反し、内面には一条の沈線が巡る。７は底部が平底気味である。６・７は赤彩が施されている。９－８～11は頸部と肩部境ににくびれを持つことから壺とした。８は残存状態が比較的良好である。口縁部の開きが小さく、胴部はやや長胴化した球形を呈する。甑20・21と重なって出土した。９は口縁部が緩やかに外反し、胴部は上位までの検出であるが、おそらく８と同じくやや長胴化した球形を呈すると思われる。器壁が厚手である。10は頸部から胴下部にかけての部位。胴部外面の調整がヘラナデであることから古相を呈する。流れ込みの可能性もある。11は頸部と肩部境のくびれが弱い。甕としても良いものかもしれない。胴部中位以下を欠く。甕は全形がわかるものはない。９－12・13は最大径を有する口縁部が大きく開き、胴部は上位までの検出であるが、ほぼ直線的である。９－14～19は甕の底部。14～16は丸胴、17～19は長胴の甕であるが、前者は壺の可能性もある。甑は残存状態の良好な資料が２個体（９－20・21）まとまって検出された。ともに口縁部に最大径を有するが、口縁部の開きは21の方が大きい。胴部側面に把手が付くが、21は両側とも欠損している。９－22も甑。口縁部から胴上部までの検出であるが、口径は20・21よりも大きい。９－23は高坏の脚部。外面の調整はすべて横ナデである。９－24は鉢。最大径を持つ口縁部が大きく外反する。９－25は軽石。完形品。９－26は角錘状を呈する不明鉄製品。両端を欠く。

本溝跡の時期は、７世紀後半を中心とする段階と思われる。

第10号溝跡（第38・40図）

55～57－85～89グリッドに位置する。57－85グリッドから56－86グリッドで同方向を走る11号溝跡、56－86グリッドで東西に走る12・13号溝跡、55－88グリッドで28号土坑を切っている。56－87グリッドでは、試掘調査時のトレンチにより一部を欠く。

調査区東側に広がる谷状の落ち込みを北西方向から南東方向へ蛇行しながら走る。北西端及び南東端以降は調査区外に延びる。検出された長さは26.25m、幅は0.7m前後を測る。深さは0.3～0.4mである。

断面形は一部逆台形を呈する所もみられたが、概ね船底状を呈する。覆土は層位を確認した所で異なるが、概ね灰色系の土や粘土が堆積しており、調査区南端で五層、その他では二～三層確認された。一部にブロック土を含む層がみられたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第50図）は、須恵器坏（10－１・２）、小型壺（10－３）、甕（10－４～７）、土師器坏（10－８）がある。また、これらの他にスラグも若干検出されたが、小塊であるため図示しなかった。

須恵器は甕の６・７が南比企産である以外すべて末野産である。10－１・２は坏の底部。底径６cm前後を測り、底部は回転糸切り痕を残す。10－３は小型壺の肩部から胴下部にかけての部位。頸部以上と底部を欠くが、底部には高台が付く。10－４～７は甕の破片。土師器は図示可能なものは10－８のみである。やや肥厚した口縁部が直線的に大きく開き、底部は平底に近い。体部外面には多数の指頭圧痕がみられた。

本溝跡の時期は、９世紀後半を中心とする段階と思われる。

第11号溝跡（第38・40図）

54～57－85・86グリッドに位置する。57－85グリッドから56－86グリッドで同方向を走る10号溝跡に切られ、56－86グリッドで東西に走る12・13号溝跡を切っている。56－85グリッドでは時期不明のピットと重複するが、新旧関係は不明である。

56・57－85・86グリッドでは北西方向から南東方向に走るが、55・56－86グリッド境付近から東西方向に走り、54－86グリッド中央付近で再度南東方向に向きを変えて同グリッド内で途切れる。北西端以降は調査区外に延びる。検出された長さは20.1m、幅は概ね0.6m前後を測る。深さは北西部から南東部に向かって徐々に浅くなる。北西部は0.45m、南東部は途切れる手前で0.1mを測る。断面形は一部いびつな所もみられたが、概ね逆台形を呈する。覆土は層位を確認した所で異なるが、北西部では三～四層、南東部では一～二層確認された。灰色系の土やシルト、粘土が堆積しており、混入物にブロック土がみられたことから一部埋め戻された可能性がある。

出土遺物（第50図）は、須恵器甕（11－１～３）の破片のみである。１が末野産、２・３が南比企産。

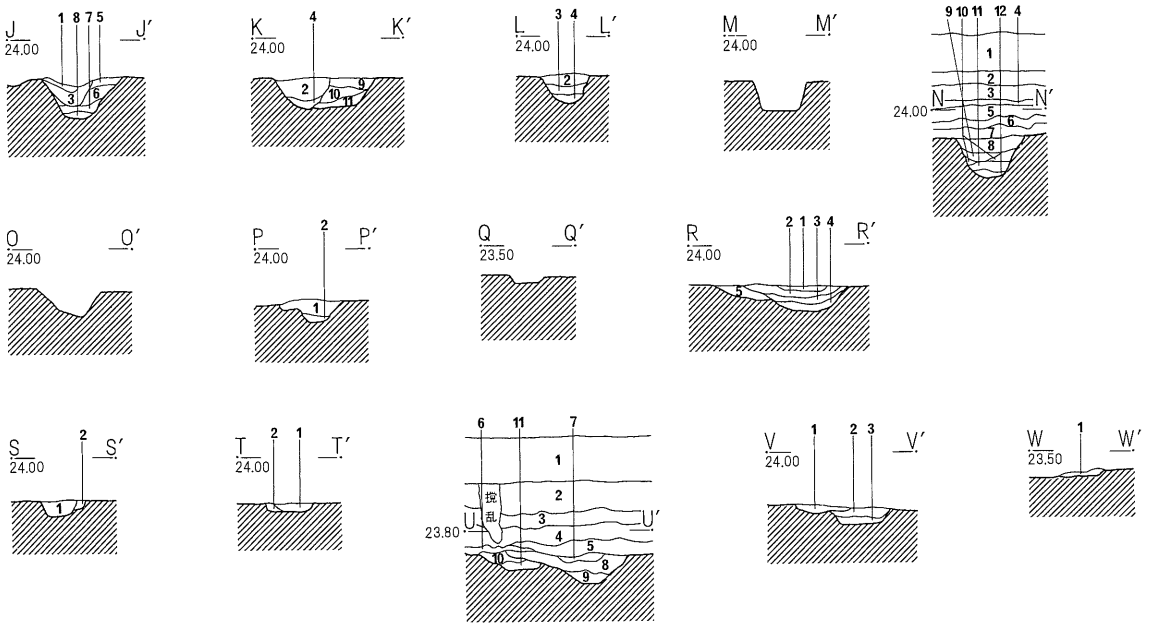
本溝跡の時期は、10号溝跡との新旧関係から10号溝跡以前の奈良・平安時代としておきたい。

第12号溝跡（第38～40図）

54～58－85・86グリッドに位置する。55～58－85・86グリッドで本溝跡とほぼ同位置を走る13号溝跡、54－86グリッドで14号溝跡を切っており、56－86グリッドでは10・11号溝跡に切られている。

57・58－85グリッドでは北西方向から南東方向に走るが、57－86グリッドから54・55－86グリッドは東西方向に走り、54－86グリッドで再度南東方向に向きを変えて同グリッド内で終息する。北西端以降は調査区外に延びる。検出された長さは23.4m、幅は57・58－85・86グリッド付近が0.7m、その他は0.5m前後を測る。深さは北西部から南東部に向かって徐々に浅くなる。北西部は調査区境の土層断面で0.6m、南東部は確認面からであるが0.1mを測る。断面形は一部逆台形を呈する所もみられたが、概ね船底状を呈する。覆土は層位を確認した所で異なるが、北西部で四層、南東部で一層確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第50・51図）は、須恵器甕の破片（12－１～８）、土師器坏（12－９）のみである。土師器坏は北武蔵型坏であり、流れ込みである。これらの他にも奈良・平安時代の須恵器・土師器の小片とスラグの小塊が若干検出されたが、図示不可能であった。



第10・11号溝跡
土層説明（ＪＪ′ ＫＫ′ ＬＬ′）
1 灰 白 色 土：粘土質。
2 灰 色 土：シルト質。火山灰多量、炭化物少量含む。
3 暗 灰 色 土：粘土質。炭化物多量、火山灰少量含む。
4 暗青灰色粘土：黒色粒多量含む。
5 灰 白 色 土：粘土質。
6 灰白色シルト：黒色粘土ブロック微量含む。
7 灰 色 粘 土：黒色粘土ブロック多量含む。
8 灰色シルト
9 灰 白 色 土：マンガン粒少量含む。
10 灰 色 土：粘土質。
11 灰 色 土：粘土質。黒色粘土ブロック多量含む。

第10号溝跡
土層説明（ＮＮ′）
1 盛 土
2 暗 灰 黄 色 土：シルト質。下層にマンガン粒少量含む。
3 暗 灰 黄 色 土：シルト質。マンガン粒多量含む。
4 灰オリーブ色土：シルト質。上層に酸化鉄帯状に含む。遺物包含層。
5 オリーブ黒色土：粘土質。酸化鉄多量含む。遺物包含層。
6 オリーブ黒色土：粘土質。マンガン粒多量含む。
7 黒 褐 色 土：シルト質。マンガン粒多量、酸化鉄少量含む。
8 褐 灰 色 土：シルト質。黄灰色粒・炭化物微量含む。
9 灰 色 土：粘土質。黄灰色粒・炭化物微量含む。
10 灰 色 土：粘土質。暗灰色粘土ブロック・黄灰色粒・ブロック多量含む。
11 灰 色 粘 土：黄灰色粒・ブロック多量含む。
12 暗青灰色粘土：黄灰色粒・黒色粒少量含む。

第11号溝跡
土層説明（ＰＰ′）
1 灰白色シルト：酸化鉄多量、暗灰色粘土ブロック少量含む。
2 暗灰色粘土：酸化鉄多量、黄灰色粘土ブロック少量含む。

第12・13号溝跡
土層説明（ＲＲ′）
1 青灰色シルト：灰白色粘土少量含む。
2 灰 白 色 土：粘土質。
3 灰 色 粘 土
4 灰 色 粘 土
5 青灰色シルト：酸化鉄少量含む。

第12・13号溝跡
土層説明（ＳＳ′ ＴＴ′）
1 灰白色シルト：酸化鉄多量含む。
2 灰色シルト：黒色粒少量含む。

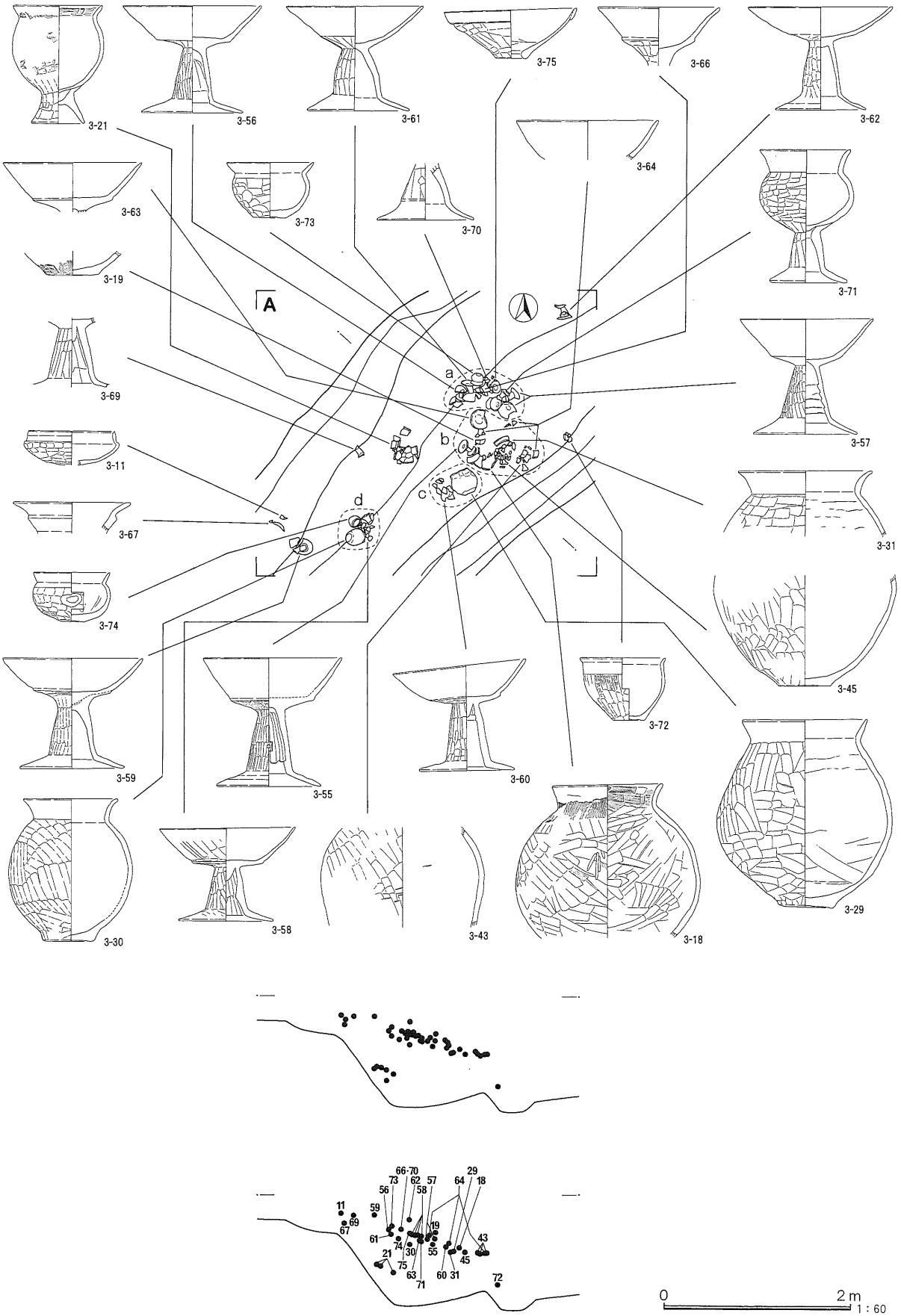
第14号溝跡
土層説明（ＵＵ′）
1 盛 土
2 暗 灰 黄 色 土：シルト質。下層にマンガン粒少量含む。
3 暗 灰 黄 色 土：シルト質。マンガン粒多量含む。
4 灰オリーブ色土：シルト質。上層に酸化鉄帯状に含む。遺物包含層。
5 灰褐色シルト：酸化鉄多量含む。
6 灰黄色シルト：酸化鉄多量含む。
7 灰黄色シルト：酸化鉄多量、灰色土ブロック少量含む。
8 灰 黄 色 砂 層：酸化鉄多量、暗灰色粘土ブロック少量含む。
9 暗灰黄色砂層：酸化鉄少量含む。
10 黄灰色シルト：酸化鉄多量、暗灰色粘土ブロック少量含む。
11 灰 色 土：砂質。酸化鉄多量、暗灰色粘土ブロック少量含む。

第12・14号溝跡
土層説明（ＶＶ′）
1 灰白色シルト：酸化鉄多量含む。
2 灰褐色シルト：酸化鉄多量含む。
3 灰黄褐色シルト：暗灰色粘土ブロック・酸化鉄少量含む。

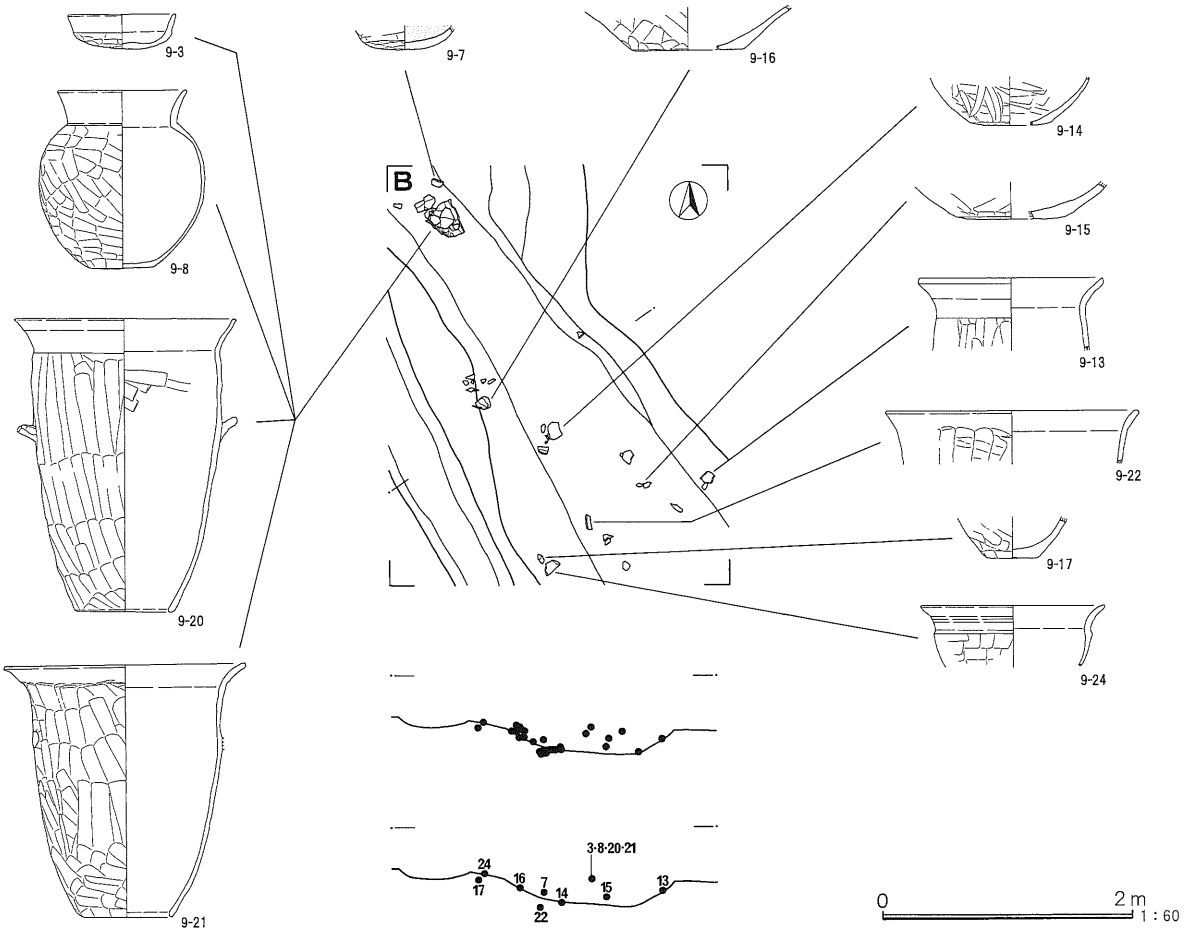
第14号溝跡
土層説明（ＷＷ′）
1 灰白色シルト：黒色粒少量含む。

0 2m 1：80

第40図 第３～14号溝跡断面図(2)



第41図　第３号溝跡土器集中地点遺物出土状況



第42図　第９号溝跡遺物出土状況

本溝跡の時期は、出土遺物と周辺溝跡との関係から10・11号溝跡以前の奈良･平安時代としておきたい。

第13号溝跡（第38～40図）

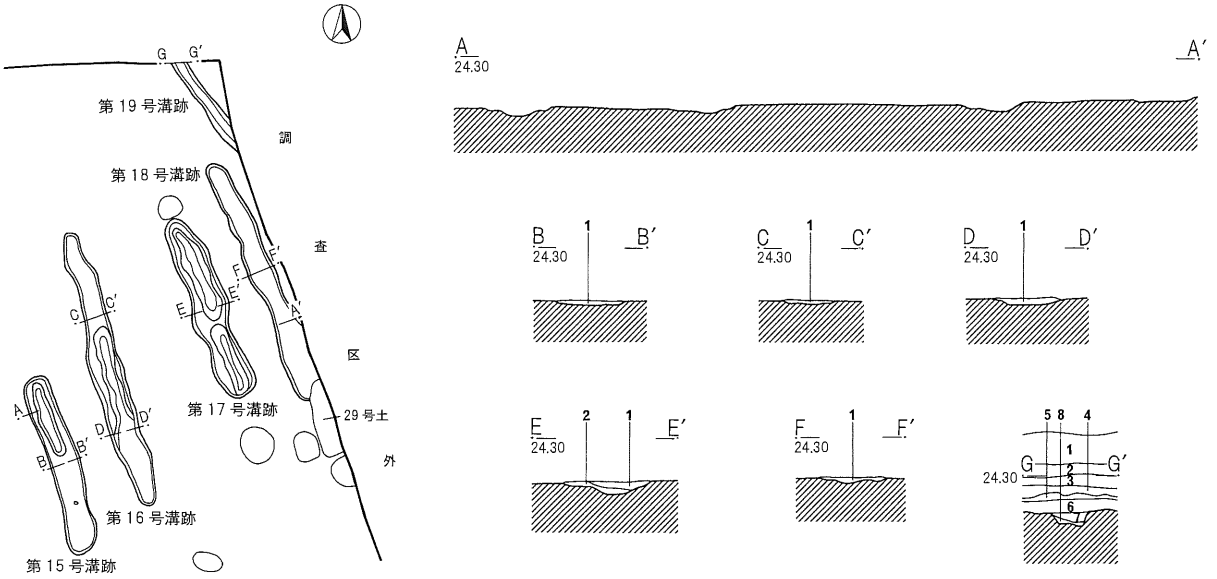
54～58－85・86グリッドに位置する。55～58－85・86グリッドで本溝跡とほぼ同位置を走る12号溝跡、56－86グリッドで10・11号溝跡に切られている。

12号溝跡同様、57・58－85グリッドでは北西方向から南東方向、57－86グリッドから54・55－86グリッドでは東西方向に走るが、54－86グリッド以東は12号溝跡に切られているため確認されなかった。北西端以降は調査区外に延びる。検出された長さはおよそ18.3mである。幅は正確な数値が得られないが、12号溝跡同様、57・58－85・86グリッド付近が幅広で、その他は0.5m前後になろうか。深さは北西部から東に向かって徐々に浅くなる。北西部は調査区境の土層断面で0.42m、東側は確認面からであるが0.1m程を測る。断面形は57・58－85・86グリッドが船底状、その他は概ね逆台形を呈すると思われる。覆土は一層のみであるが、北西部では青灰色、東側では灰色のシルトが堆積していた。自然堆積と思われる。

遺物は検出されなかったが、12号溝跡をはじめとする周辺溝跡との新旧関係などから本溝跡の時期は10～12号溝跡以前の奈良・平安時代としておきたい。

第14号溝跡（第38・40図）

53～55－85～86グリッドに位置し、今回報告する溝跡で最も低い標高にある。54－86グリッドで12号



第15号溝跡
土層説明（ＢＢ′）
1 灰 色 土：粘土質。黄灰色粒・酸化鉄少量含む。

第16号溝跡
土層説明（ＣＣ′ ＤＤ′）
1 灰 色 土：粘土質。黄灰色粒・酸化鉄少量含む。

第17号溝跡
土層説明（ＥＥ′）
1 暗灰色土：粘土質。黄灰色粒少量含む。
2 灰 色 土：粘土質。黄灰色粒微量含む。

第18号溝跡
土層説明（ＦＦ′）
1 暗灰色土：粘土質。黄灰色土ブロック多量、火山灰少量含む。

第19号溝跡
土層説明（ＧＧ′）
1 盛　　土
2 褐灰色土：火山灰少量含む。
3 灰 色 土：火山灰少量含む。
4 青灰色土：粘土質。火山灰・酸化鉄少量含む。
5 灰 色 土：粘土質。火山灰・酸化鉄少量含む。
6 黒褐色土：粘土質。火山灰・酸化鉄微量含む。
7 暗灰色土：シルト質。黄灰色粒微量含む。
8 暗灰色土：シルト質。黄灰色粒少量含む。

平面図：0　5m　1：200
断面図：0　2m　1：80

第43図　第15～19号溝跡

溝跡に切られており、55－85グリッドの調査区境で時期不明のピットを切っている。

北西方向から南東方向へ走り、53・54－86グリッド境付近で途切れる。北西端以降は調査区外に延びる。検出された長さは11.78m、幅は概ね0.7m前後を測る。深さは北西部から南東部に向かって徐々に浅くなる。北西部は調査区境の土層断面で0.32m、南東部は確認面からであるが0.06mを測る。断面形は12号溝跡との重複箇所付近では逆台形を呈するが、その他は船底状を呈する。覆土は層位を確認した所で異なり、北西部の調査区との境で三層、12号溝跡との重複箇所で二層、南東端で一層確認された。色調及び混入物は様々であったが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

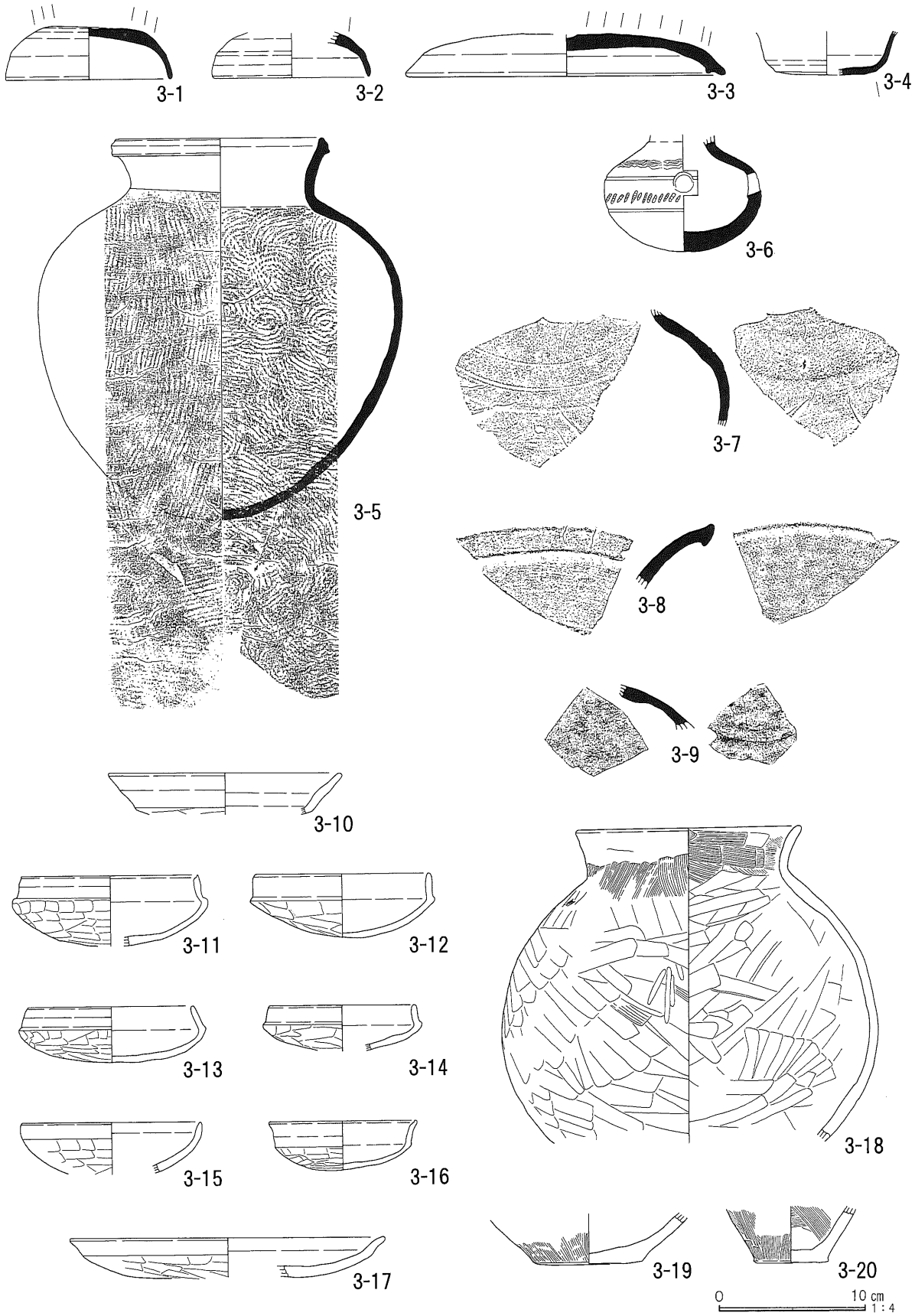
出土遺物に図示できるものはなかったが、古墳時代後期の土師器小片が若干検出されている。本溝跡の時期は古墳時代後期としか言えない。

第15号溝跡（第43図）

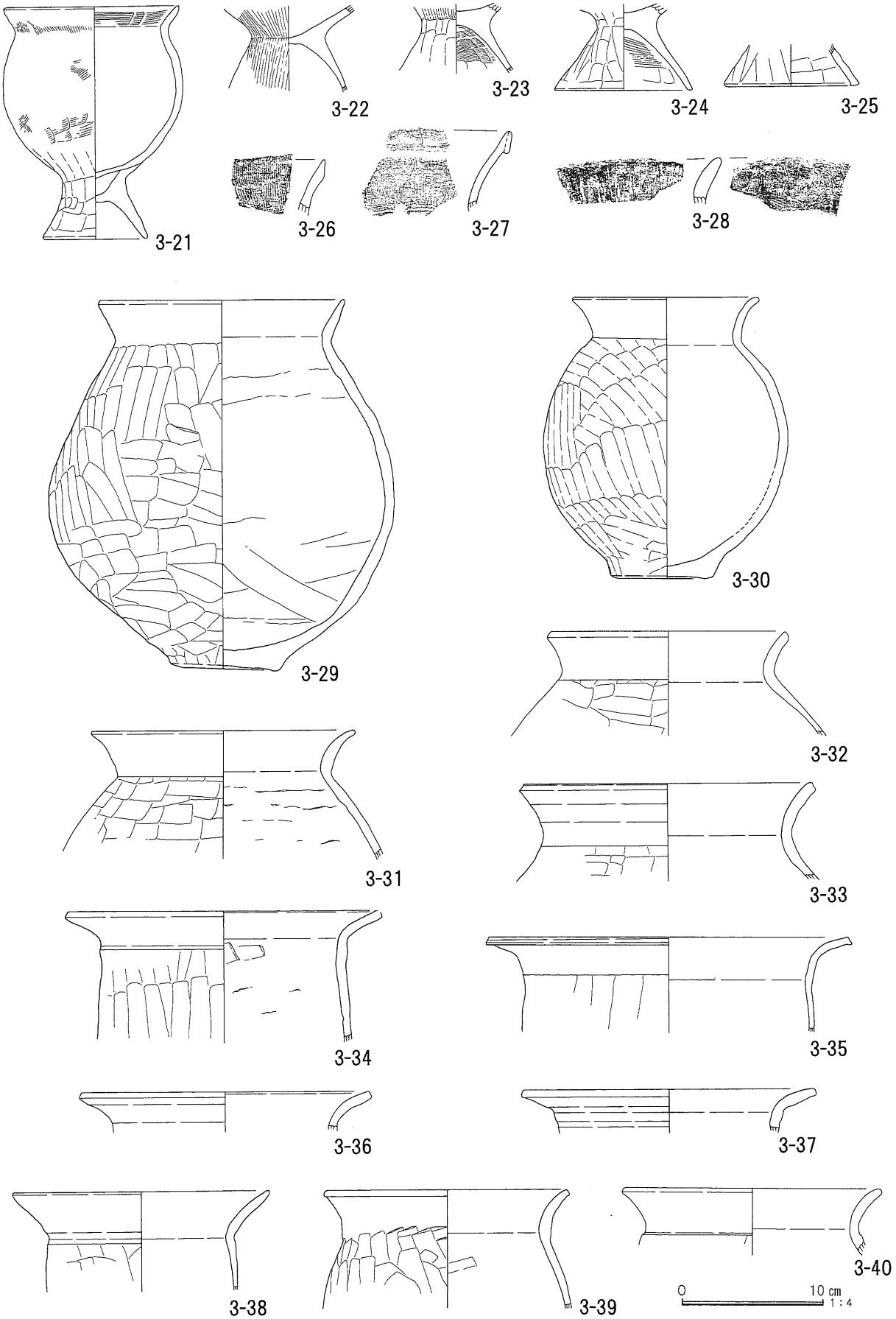
50・51－86・87グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられないが、本溝跡の東側には類似した溝（16～18号溝跡）が併走している。

北西方向から南東方向に走る。検出された長さは4.82mと短く、幅は0.8m前後を測る。確認面から

第３号溝跡

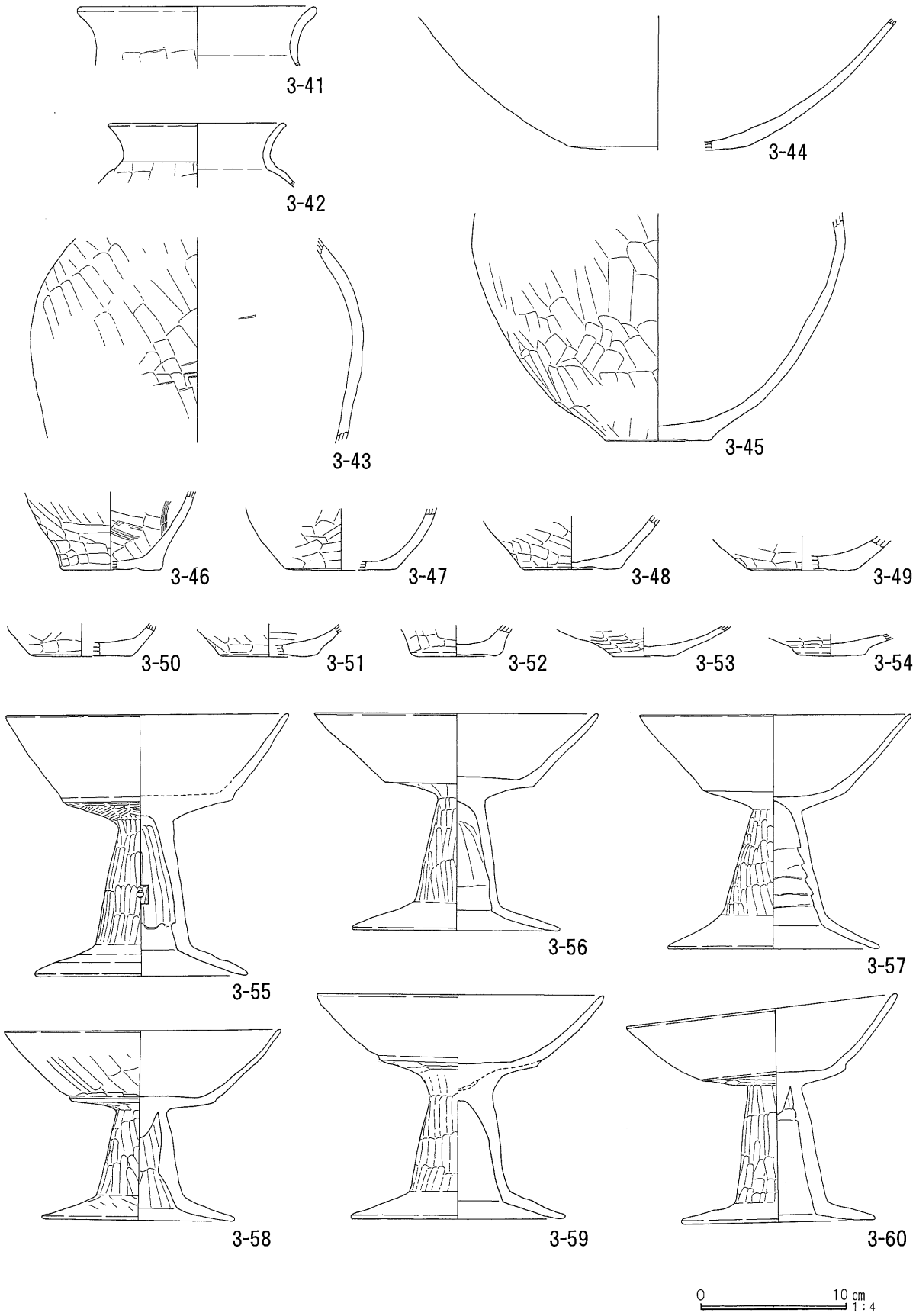


第44図　溝跡出土遺物(1)



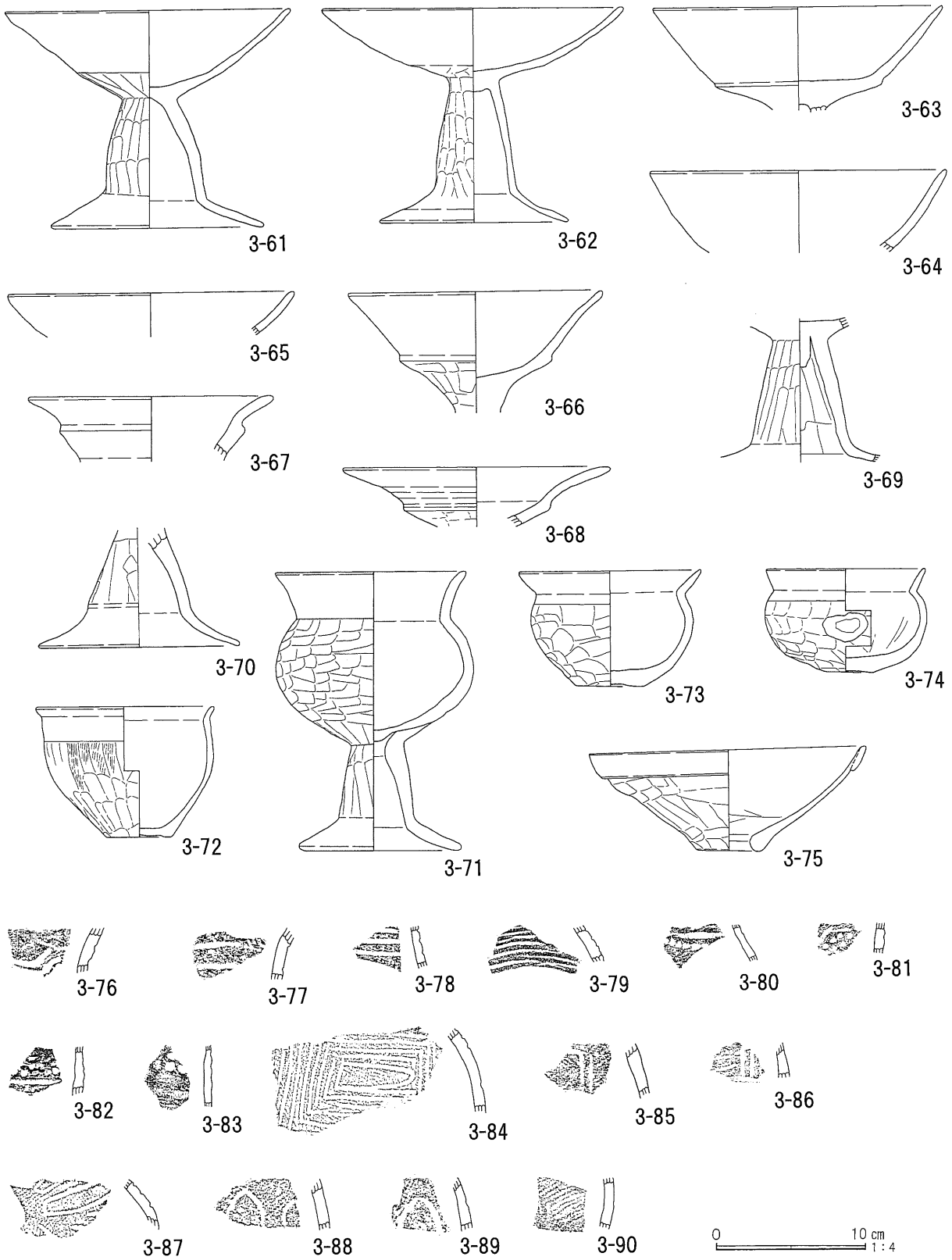
第45図　溝跡出土遺物(2)

第３号溝跡

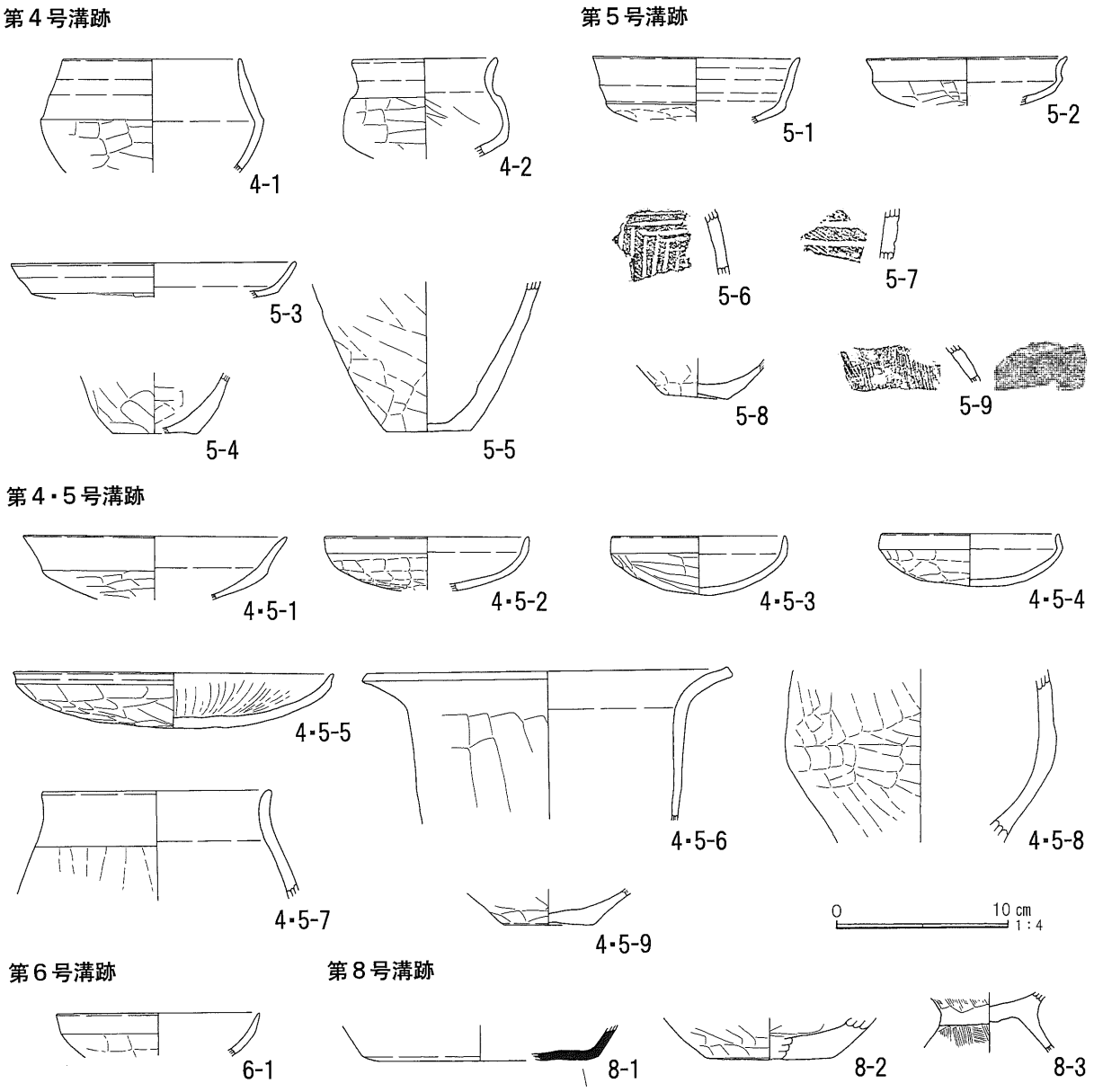


第46図　溝跡出土遺物(3)

第３号溝跡



第47図　溝跡出土遺物(4)



第48図　溝跡出土遺物(5)

の深さは概ね0.05m程であるが、北西部では底面からさらに一段深く掘り込まれており、0.1m程を測る。断面形は船底状を呈する。覆土は粘土質の灰色土（１層）のみである。自然堆積と思われる。

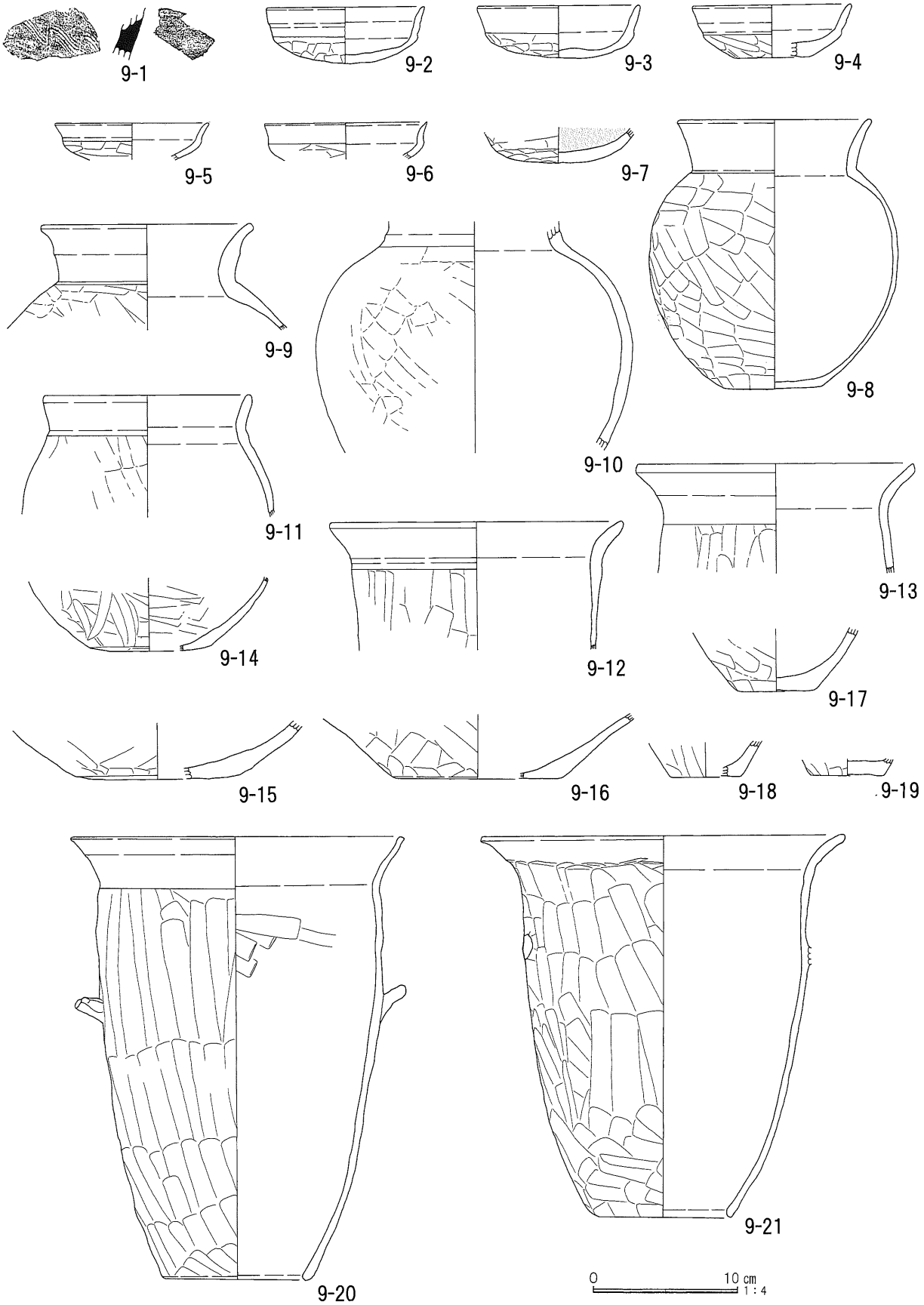
遺物は検出されなかったが、本溝跡に類似した16～18号溝跡からは古墳時代後期の土師器小片が検出されている。よって、本溝跡の時期は古墳時代後期としか言えない。

第16号溝跡（第43図）

50・51－85～87グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられないが、本溝跡の両側には類似した溝（15・17・18号溝跡）が併走している。

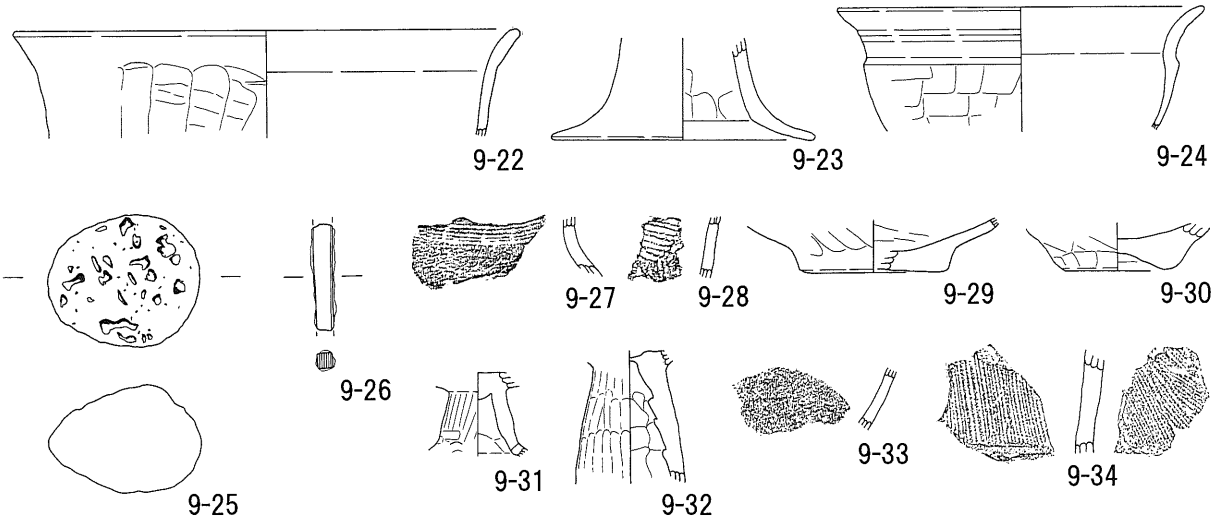
北西方向から南東方向に走る。検出された長さは7.5m、幅は0.7m前後を測る。深さは浅い北西部で0.05m、真中から南東部の一段深く掘り込まれた所で0.08m程を測る。断面形は船底状を呈する。覆土は粘土質の灰色土（１層）のみである。自然堆積と思われる。

第９号溝跡

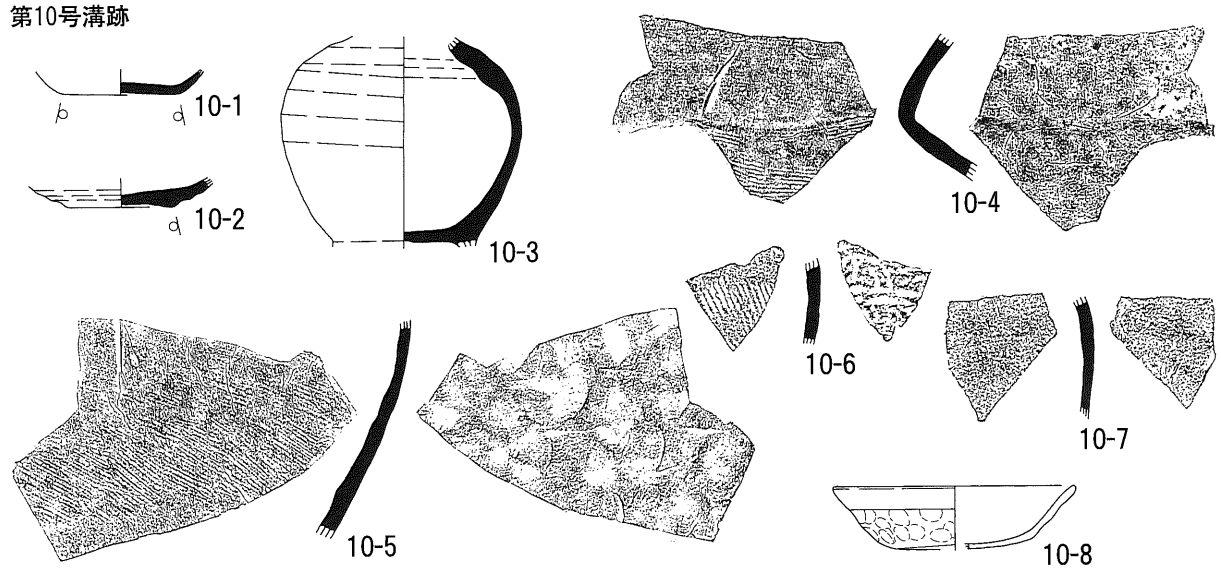


第49図　溝跡出土遺物(6)

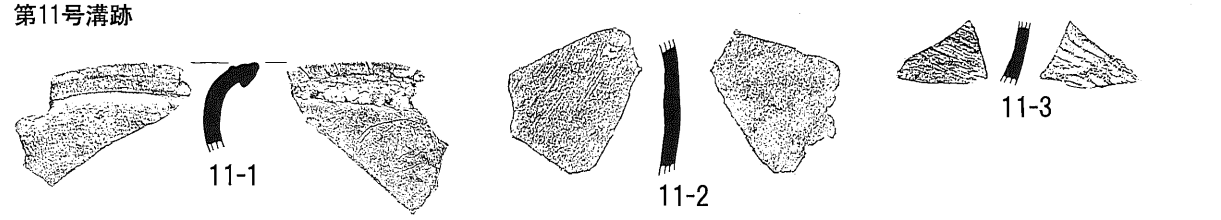
第９号溝跡



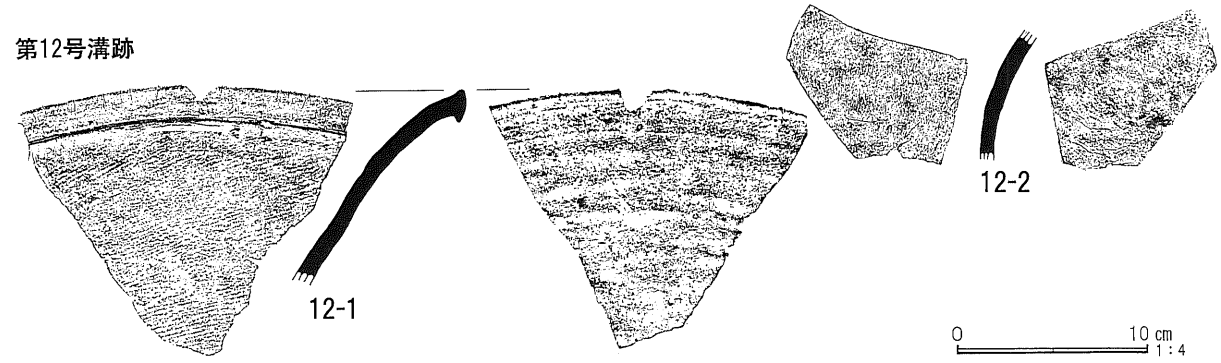
第10号溝跡



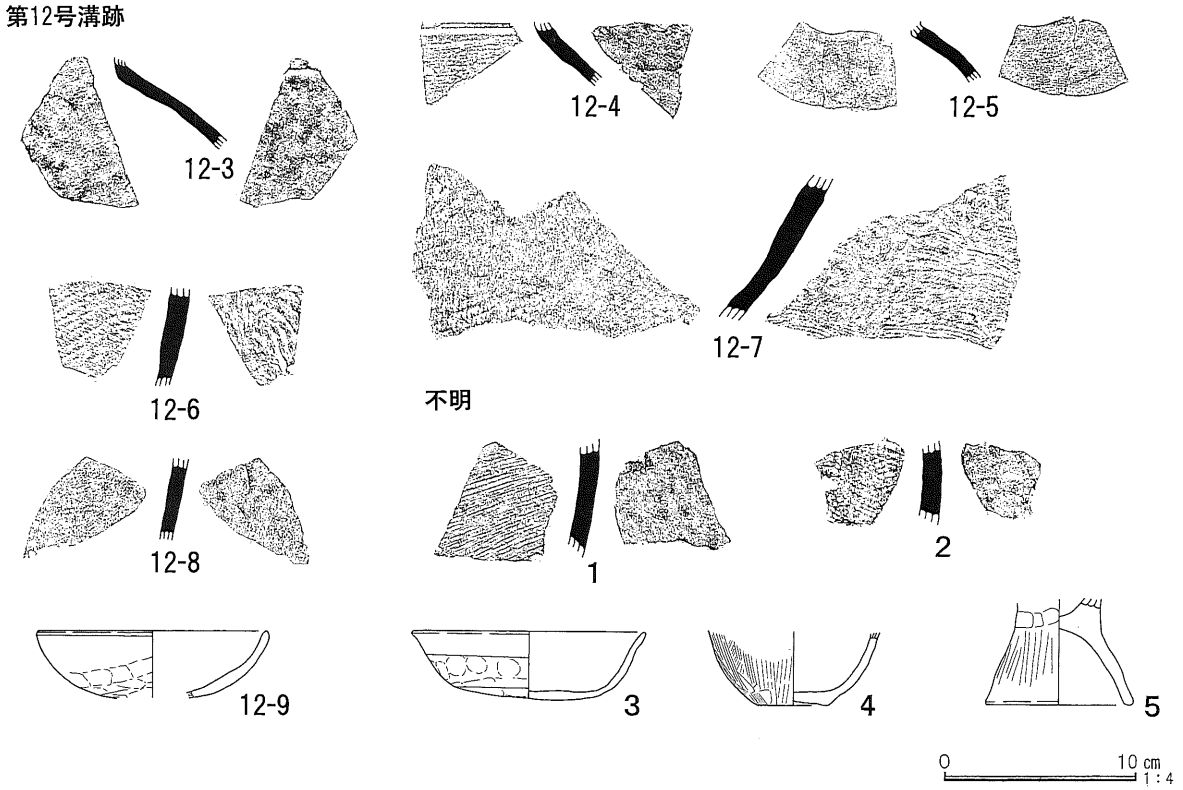
第11号溝跡



第12号溝跡



第50図　溝跡出土遺物(7)



第51図　溝跡出土遺物(8)

出土遺物に図示できるものはなかったが、古墳時代後期の土師器甕の小片が１点検出されている。本溝跡の時期は古墳時代後期としか言えない。

第17号溝跡（第43図）

50－85・86グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられないが、本溝跡の両側には類似した溝（15・16・18号溝跡）が併走している。また、南北端延長上に時期不明のピットがあるが、本溝跡との関係は不明である。

北西方向から南東方向に走る。検出された長さは５ｍと短く、幅は0.9m前後を測る。深さは概ね0.1ｍ程を測り、底面ほぼ全面がさらに一段深く掘り込まれていた。断面形は船底状を呈する。覆土は二層（１・２層）からなる。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物に図示できるものはなかったが、古墳時代後期の土師器甕の小片が１点検出されている。本溝跡の時期は古墳時代後期としか言えない。

第18号溝跡（第43図）

調査区東端の49・50－85・86グリッドに位置する。南東端を29号土坑に切られており、南東部東側立ち上がりは調査区外にある。本溝跡の両側には類似した溝（15・16・18号溝跡）が併走している。

北西方向から南東方向に走る。検出された長さは6.78m、幅は0.6m前後を測り、深さは0.05mと浅い。断面形は船底状を呈する。覆土は粘土質の暗灰色土（１層）のみである。火山灰を含むが、ブロック土を多量含んでおり、人為的に埋め戻された可能性がある。

本溝跡からは奈良・平安時代の須恵器・土師器の小片やスラグの小塊が若干検出されたが、図示不可

能であり、これらは29号土坑からの流れ込みと思われる。よって、本溝跡の時期は類似する15～17号溝跡と同じく古墳時代後期としか言えない。

第19号溝跡（第43図）

調査区北東端の50－84・85グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

北西方向から南東方向に走るが、隣接する15～18号溝跡とは向きがやや異なる。検出された長さは2.4

第23表　溝跡出土遺物観察表

番号	出土遺構	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
3-1	3号溝跡	須恵器　蓋	11.6	3.7	—	ABL	灰白色	A	75%	末野産。
3-2	3号溝跡	須恵器　蓋	(11.0)	(3.1)	—	ABKLN	にぶい黄橙色	C	20%	末野産。
3-3	3号溝跡	須恵器　蓋	(22.2)	(2.9)	—	ABN	灰白色	B	40%	
3-4	3号溝跡	須恵器　坏	—	(3.0)	(7.0)	ACL	灰色	B	体～底25%	末野産。
3-5	3号溝跡	須恵器　甕	14.2	26.4	—	ABDL	褐灰色	B	70%	末野産。
3-6	3号溝跡	須恵器　瓶	—	(8.0)	—	AHLN	灰白色	A	肩～底80%	末野産。胴部透穴有。
3-7	3号溝跡	須恵器　壺	—	—	—	ACHKN	外:灰　内:褐	B	肩～胴部片	
3-8	3号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	ABL	灰色	B	口縁部片	末野産。内外面自然釉付着。
3-9	3号溝跡	須恵器　瓶類	—	—	—	AND	青灰色	B	肩部片	
3-10	3号溝跡	土師器　坏	(16.2)	(2.8)	—	ABDGH	明赤褐色	B	15%	
3-11	3号溝跡	土師器　坏	(12.2)	(4.8)	—	ABDHK	明赤褐色	B	30%	土器集中地点出土。
3-12	3号溝跡	土師器　坏	(12.2)	4.4	—	ABEHKN	橙色	B	40%	
3-13	3号溝跡	土師器　坏	11.5	3.9	—	ABHKN	明赤褐色	B	90%	
3-14	3号溝跡	土師器　坏	(10.2)	(3.15)	—	ABDK	橙色	B	40%	
3-15	3号溝跡	土師器　坏	(12.6)	(3.5)	—	ABHJKN	橙色	B	20%	
3-16	3号溝跡	土師器　坏	(10.4)	3.4	—	ABDHKN	橙色	B	45%	比企型坏。内面・口縁部外面赤彩。
3-17	3号溝跡	土師器　皿	(22.0)	(2.75)	—	ABHKN	にぶい褐色	B	20%	
3-18	3号溝跡	土師器　壺	(15.6)	(21.7)	—	AHJKN	にぶい橙色	B	口～胴40%	土器集中地点出土。№19と同一個体？
3-19	3号溝跡	土師器　壺	—	(3.45)	(7.5)	ABDHJN	外:灰褐　内:浅黄	B	底部45%	土器集中地点出土。№18と同一個体？
3-20	3号溝跡	土師器　壺	—	(3.9)	(5.1)	ABGHN	橙色	B	底部25%	
3-21	3号溝跡	土師器台付甕	12.6	16.7	7.6	ABDEGHIKN	にぶい橙色	B	90%	土器集中地点出土。
3-22	3号溝跡	土師器台付甕	—	(6.1)	-	ABDHKN	にぶい橙色	B	接合部40%	
3-23	3号溝跡	土師器台付甕	—	(4.9)	-	ABDHJN	浅黄橙色	B	接合部100%	
3-24	3号溝跡	土師器台付甕	—	(6.1)	(10.0)	ABCHIJN	明赤褐色	B	台部45%	
3-25	3号溝跡	土師器台付甕	—	(3.0)	(9.8)	ABGHN	にぶい褐色	B	台部20%	
3-26	3号溝跡	土師器　壺	—	—	—	ABCHI	褐灰色	B	口縁部片	
3-27	3号溝跡	土師器　壺	—	—	—	ABCHIKN	浅黄橙色	B	口縁部片	
3-28	3号溝跡	土師器　甕	—	—	—	AHKN	赤褐色	B	口縁部片	
3-29	3号溝跡	土師器　甕	17.6	26.6	7.9	ABEGHJKN	にぶい黄橙色	B	ほぼ完形	土器集中地点出土。胴部内面輪積痕有。
3-30	3号溝跡	土師器　甕	13.4	20.25	7.2	ABEHIKN	橙色	B	90%	土器集中地点出土。
3-31	3号溝跡	土師器　甕	19.0	(9.3)	—	ABCHIKN	褐灰色	B	口～胴80%	土器集中地点出土。胴部内面輪積痕有。
3-32	3号溝跡	土師器　甕	(17.5)	(7.45)	—	ABGHKN	橙色	A	口～胴25%	
3-33	3号溝跡	土師器　甕	(21.4)	(6.95)	—	ABCDGKN	橙色	B	口～胴25%	
3-34	3号溝跡	土師器　甕	(22.8)	(9.45)	—	ABDEHKN	にぶい褐色	B	口～胴20%	胴部内面輪積痕有。
3-35	3号溝跡	土師器　甕	(26.3)	(6.75)	—	ABCEH	にぶい褐色	B	口～胴25%	
3-36	3号溝跡	土師器　甕	(21.1)	(2.85)	—	ABEGHKMN	橙色	B	口縁部30%	
3-37	3号溝跡	土師器　甕	(21.3)	(3.15)	—	ABCGHMN	灰褐色	B	口縁部20%	
3-38	3号溝跡	土師器　甕	(18.6)	(7.1)	—	ABEHIMN	橙色	B	口～胴20%	
3-39	3号溝跡	土師器　甕	(17.7)	(8.5)	—	ABDHIKN	にぶい橙色	B	口～胴30%	
3-40	3号溝跡	土師器　甕	(18.7)	(4.75)	—	BEGHJKN	褐灰色	B	口縁部25%	
3-41	3号溝跡	土師器　甕	(16.7)	(4.15)	—	ACHKN	にぶい橙色	B	口縁部25%	
3-42	3号溝跡	土師器　甕	(12.4)	(4.45)	—	ABCGHN	明赤褐色	B	口～胴40%	
3-43	3号溝跡	土師器　甕	—	(14.1)	—	ABDHKN	にぶい褐色	B	胴部20%	土器集中地点出土。
3-44	3号溝跡	土師器　甕	—	(9.3)	(12.5)	ABHMN	浅黄橙色	B	胴～底40%	
3-45	3号溝跡	土師器　甕	—	(15.75)	(7.5)	ABCHKN	にぶい褐色	B	胴～底40%	土器集中地点出土。
3-46	3号溝跡	土師器　甕	—	(5.4)	(7.2)	ADHIN	外:赤褐　内:黒	B	胴～底25%	
3-47	3号溝跡	土師器　甕	—	(4.3)	(7.7)	ABEGHN	橙色	B	胴～底25%	
3-48	3号溝跡	土師器　甕	—	(3.7)	(6.9)	ABGHIM	にぶい黄橙色	B	胴～底25%	外面やや磨耗。
3-49	3号溝跡	土師器　甕	—	(2.4)	(7.7)	ABCHIKN	橙色	B	底部30%	
3-50	3号溝跡	土師器　甕	—	(2.25)	(7.1)	ABCHIKN	橙色	B	底部25%	
3-51	3号溝跡	土師器　甕	—	(2.15)	(6.8)	ABHKN	にぶい橙色	B	底部50%	

番号	出土遺構	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
3-52	3号溝跡	土師器　甕	—	(2.15)	(6.4)	ABEHKN	にぶい黄橙色	B	底部25%	
3-53	3号溝跡	土師器　壺	—	(2.0)	4.3	ABDIKN	外:赤褐　内:橙	B	底部80%	
3-54	3号溝跡	土師器　壺	—	(1.55)	(4.9)	ABEGHJKN	浅黄色	B	底部30%	
3-55	3号溝跡	土師器　高坏	(19.6)	18.1	14.8	ABHIKN	明赤褐色	B	70%	土器集中地点出土。脚部透孔有。
3-56	3号溝跡	土師器　高坏	(19.8)	15.05	14.5	ABEHJN	明黄褐色	B	60%	土器集中地点出土。
3-57	3号溝跡	土師器　高坏	18.9	16.25	14.8	ABEHJKN	明赤褐色	B	ほぼ完形	土器集中地点出土。
3-58	3号溝跡	土師器　高坏	19.3	13.3	13.4	ABDHKN	浅黄橙色	B	70%	土器集中地点出土。
3-59	3号溝跡	土師器　高坏	19.95	15.65	15.0	ABEN	橙色	B	80%	土器集中地点出土。
3-60	3号溝跡	土師器　高坏	18.9	15.75	13.4	ABGHKN	にぶい橙色	B	80%	土器集中地点出土。
3-61	3号溝跡	土師器　高坏	19.4	14.75	14.45	ABGHN	橙色	B	80%	土器集中地点出土。
3-62	3号溝跡	土師器　高坏	(20.4)	14.5	(12.8)	ABCGKN	浅黄橙色	B	30%	土器集中地点出土。磨耗顕著。
3-63	3号溝跡	土師器　高坏	19.7	(6.95)	—	ABKN	赤褐色	B	坏部80%	土器集中地点出土。
3-64	3号溝跡	土師器　高坏	(20.2)	(5.5)	—	ABEHN	明赤褐色	B	口縁部40%	土器集中地点出土。
3-65	3号溝跡	土師器　高坏	(19.5)	(2.9)	—	ABEHKN	浅黄橙色	B	口縁部15%	
3-66	3号溝跡	土師器　高坏	(17.2)	(8.2)	—	ABCHIK	明赤褐色	B	坏部80%	土器集中地点出土。
3-67	3号溝跡	土師器　壺	(16.6)	(4.4)	—	ABCHN	にぶい橙色	B	口縁部60%	土器集中地点出土。
3-68	3号溝跡	土師器　高坏	(18.1)	(4.0)	—	ABCHIJ	橙色	B	坏部20%	磨耗顕著。
3-69	3号溝跡	土師器　高坏	—	(9.7)	—	ABHKN	橙色	B	脚部80%	土器集中地点出土。
3-70	3号溝跡	土師器　高坏	—	(7.95)	(13.9)	ABCGHJKN	明赤褐色	B	脚部90%	土器集中地点出土。
3-71	3号溝跡	土師器台付椀	13.0	18.85	(11.0)	ABDHJN	橙色	B	ほぼ完形	土器集中地点出土。外面・口縁部内面赤彩。
3-72	3号溝跡	土師器　椀	(12.1)	8.85	4.4	ABDHKN	浅黄橙色	B	75%	土器集中地点出土。
3-73	3号溝跡	土師器　椀	(12.4)	7.9	4.6	ABCHIKN	橙色	B	ほぼ完形	土器集中地点出土。
3-74	3号溝跡	土師器　椀	10.8	7.0	3.2	ABHIJKN	浅黄橙色	B	ほぼ完形	土器集中地点出土。胴部焼成後穿孔有。
3-75	3号溝跡	土師器　甑	18.8	7.0	4.5	ABCKN	浅黄橙色	B	90%	土器集中地点出土。
3-76	3号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABCIJKN	にぶい褐色	B	胴部片	前期末？
3-77	3号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABGIK	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	中期後半。
3-78	3号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABDEHIK	にぶい黄橙色	B	頸部片	中期後半。
3-79	3号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIJMN	にぶい黄橙色	B	肩部片	中期後半。
3-80	3号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABCHIN	橙色	B	肩部片	中期後半。
3-81	3号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABEHK	橙色	B	胴部片	中期後半。
3-82	3号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	AEHIJK	灰褐色	B	胴部片	中期後半。
3-83	3号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	AGHN	橙色	B	胴部片	中期後半。
3-84	3号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABDGJ	にぶい赤褐色	B	胴上部片	中期後半。
3-85	3号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABCHIKN	浅黄橙色	B	胴上部片	中期後半。
3-86	3号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABGI	灰黄褐色	B	胴上部片	中期後半。
3-87	3号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	AGIJKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	中期後半。
3-88	3号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABCHIKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	中期後半。
3-89	3号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABGIKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	中期後半。
3-90	3号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIK	外:黒褐　内:黄橙	B	胴部片	中期後半。
4-1	4号溝跡	土師器　椀	(10.6)	(6.65)	—	ABHK	橙色	B	20%	古墳時代後期。
4-2	4号溝跡	土師器小型壺	(8.6)	(5.8)	—	ABEHIK	にぶい橙色	B	20%	古墳時代後期。
5-1	5号溝跡	土師器　坏	(12.2)	(3.8)	—	ABEGHIKN	明褐色	B	20%	
5-2	5号溝跡	土師器　坏	(11.8)	(2.8)	—	ABCHKN	暗赤褐色	B	20%	比企型坏。内面・口縁部外面赤彩。
5-3	5号溝跡	土師器　皿	(16.8)	(2.05)	—	ABHN	黒褐色	B	15%	
5-4	5号溝跡	土師器　甕	—	(3.55)	(5.0)	ABCGIKN	にぶい橙色	B	底部25%	
5-5	5号溝跡	土師器　甕	—	(8.7)	(5.0)	ABHKN	外:赤褐　内:黄橙	B	胴～底25%	
5-6	5号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHKN	にぶい橙色	B	胴上部片	中期後半。
5-7	5号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHN	黒褐色	B	胴部片	中期後半。
5-8	5号溝跡	土師器　坩	—	(2.4)	3.7	ABDIKN	橙色	B	底部100%	古墳前期。
5-9	5号溝跡	土師器　甕	—	—	—	ACHIKN	明赤褐色	B	肩部片	古墳前期。
4·5-1	4・5号溝跡	土師器　坏	(15.4)	(3.7)	—	ABDHIKN	灰黄褐色	B	20%	
4·5-2	4・5号溝跡	土師器　坏	(12.1)	(3.15)	—	ABDJK	浅黄橙色	B	20%	
4·5-3	4・5号溝跡	土師器　坏	10.3	3.5	—	ABCHJN	橙色	B	完形	5号溝跡出土。
4·5-4	4・5号溝跡	土師器　坏	(10.6)	3.1	—	ABHJKN	橙色	B	ほぼ完形	5号溝跡出土。外面やや磨耗。
4·5-5	4・5号溝跡	土師器　皿	(18.8)	3.2	—	ABCGHIKN	明赤褐色	B	40%	内面放射状暗文有。
4·5-6	4・5号溝跡	土師器　甕	(21.8)	(8.9)	—	ABCHKN	にぶい橙色	B	口～胴20%	
4·5-7	4・5号溝跡	土師器　甕	(13.5)	(6.4)	—	ABCHJN	橙色	B	口～胴25%	
4·5-8	4・5号溝跡	土師器　甕	—	(10.1)	—	ABCKN	明褐色	B	胴部20%	外面磨耗顕著。
4·5-9	4・5号溝跡	土師器　甕	—	(2.15)	(5.4)	AHKN	外:赤褐　内:黒	B	底部45%	
6-1	6号溝跡	土師器　坏	(12.0)	(2.5)	-	ABEKN	橙色	B	20%	磨耗顕著。
8-1	8号溝跡	須恵器　坏	—	(2.1)	(12.2)	ABL	黄灰色	B	底部25%	末野産。

番号	出土遺構	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
8-2	8号溝跡	土師器　甕	—	(2.45)	(7.5)	ABDEKN	橙色	B	底部25%	古墳時代中～後期。
8-3	8号溝跡	土師器台付甕	—	(3.55)	—	ABDHN	にぶい赤褐色	B	接合部25%	古墳時代前期。
9-1	9号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	AE	黒色	B	頸部片	内外面自然釉付着。
9-2	9号溝跡	土師器　坏	11.2	3.95	-	ABEHJKN	にぶい褐色	B	完形	
9-3	9号溝跡	土師器　坏	11.5	3.85	-	ABHJKN	明赤褐色	B	80%	
9-4	9号溝跡	土師器　坏	(11.2)	(3.65)	(4.3)	ABCEHJKN	橙色	B	25%	
9-5	9号溝跡	土師器　坏	(10.8)	(2.55)	—	ABHKN	にぶい橙色	B	25%	
9-6	9号溝跡	土師器　坏	(11.4)	(2.6)	—	ABCKN	明赤褐色	B	15%	比企型坏。内面・口縁部外面赤彩。
9-7	9号溝跡	土師器　坏	—	(2.5)	—	ABEIKN	外:褐　内:赤褐	B	底部100%	比企型坏。内面赤彩。
9-8	9号溝跡	土師器　壺	13.6	18.9	6.9	ABCHN	浅黄橙色	B	60%	
9-9	9号溝跡	土師器　壺	(14.9)	(7.4)	—	BDK	浅黄橙色	B	口～胴40%	
9-10	9号溝跡	土師器　壺	—	(16.05)	—	ABCKN	明赤褐色	B	頸～胴30%	磨耗顕著。
9-11	9号溝跡	土師器　壺	(14.7)	(8.5)	—	ABEH	灰白色	B	口～胴35%	外面やや磨耗。
9-12	9号溝跡	土師器　甕	(20.7)	(8.95)	—	ABEGHKN	にぶい褐色	B	口～胴30%	
9-13	9号溝跡	土師器　甕	(19.6)	(7.7)	—	BCDHKN	灰白色	B	口～胴20%	
9-14	9号溝跡	土師器　甕	—	(5.1)	(8.5)	ABCHIN	外:浅黄橙　内:黒	B	胴～底30%	
9-15	9号溝跡	土師器　甕	—	(3.95)	(11.7)	ADHJKN	にぶい黄褐色	B	胴～底25%	
9-16	9号溝跡	土師器　甕		(4.5)	(11.9)	AGHJN	黒色	B	胴～底25%	
9-17	9号溝跡	土師器　甕	—	(4.4)	(5.5)	ABEHKN	外:赤橙　内:黒褐	B	胴～底45%	
9-18	9号溝跡	土師器　甕	—	(2.4)	(5.1)	ABDHIKN	にぶい褐色	B	底部20%	底面木葉痕有。
9-19	9号溝跡	土師器　甕	—	(1.15)	5.1	ABDHIJN	外:赤黒　内:橙	B	底部100%	
9-20	9号溝跡	土師器　甑	23.4	31.0	10.6	ABDN	明褐色	B	80%	胴部両側面把手有。
9-21	9号溝跡	土師器　甑	25.6	26.75	9.8	ABDHJKN	明褐灰色	B	70%	胴部両側面把手欠。
9-22	9号溝跡	土師器　甑	(26.8)	(5.65)	-	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	口～胴15%	
9-23	9号溝跡	土師器　高坏	-	(5.4)	(14.0)	ABDHKN	明赤褐色	A	脚部20%	
9-24	9号溝跡	土師器　鉢	(19.4)	(6.55)	—	ACDHIK	にぶい橙色	B	口～胴25%	
9-25	9号溝跡	軽　石	長径8.1cm、短径7.0cm、最大厚5.6cm。重量158.8g。完形。							
9-26	9号溝跡	不明鉄製品	最大長 (5.7)cm、最大幅 (1.0)cm。重量 (18.9)g。両端欠。							
9-27	9号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABCHKN	浅黄橙色	B	肩部片	中期後半。
9-28	9号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABGHIKN	褐色	B	胴部片	中期後半。
9-29	9号溝跡	土師器　壺	—	(2.8)	(7.9)	ABDHIN	橙色	B	底部25%	古墳時代前期。
9-30	9号溝跡	土師器　壺	—	(2.4)	(6.1)	ABDHIKN	橙色	B	底部45%	古墳時代前期。
9-31	9号溝跡	土師器　高坏	—	(4.45)	—	ADHN	黒褐色	B	接～脚60%	古墳時代前期。
9-32	9号溝跡	土師器　高坏	—	(6.95)	—	ABDHK	外:橙　内:明褐	B	脚部70%	古墳時代前期。
9-33	9号溝跡	土師器　甕	—	—	—	ABDGIN	橙色	B	胴下部片	古墳時代前期。
9-34	9号溝跡	円筒埴輪	—	—	—	ABCHJKN	橙色	B	胴部片	古墳時代後期（6世紀代)。
10-1	10号溝跡	須恵器　坏	—	(1.3)	6.4	ABHL	灰色	A	底部100%	末野産。
10-2	10号溝跡	須恵器　坏	—	(1.5)	(5.8)	ABHL	灰色	B	底部25%	末野産。
10-3	10号溝跡	須恵器小型壺	—	(11.05)	—	ABHL	灰色	B	肩～胴100%	末野産。
10-4	10号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	ABHL	青灰色	B	頸～肩部片	末野産。外面自然釉付着。
10-5	10号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	AL	黄灰色	B	胴部片	末野産。
10-6	10号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	AFN	灰色	B	胴部片	南比企産。
10-7	10号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	ABFN	外:黒褐　内:暗褐	B	胴下部片	南比企産。
10-8	10号溝跡	土師器　坏	(12.8)	(3.35)	—	ABEN	にぶい黄橙色	B	70%	
11-1	11号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	ABL	黄灰色	B	口縁部片	末野産。内面自然釉付着。
11-2	11号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	AFN	灰色	B	胴部片	南比企産。
11-3	11号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	AFN	灰色	A	胴下部片	南比企産。
12-1	12号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	ABFN	灰色	B	口縁部片	南比企産。内面自然釉付着。
12-2	12号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	AHN	灰色	B	頸部片	
12-3	12号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	AHL	灰色	B	肩部片	末野産。
12-4	12号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	AHN	灰黄褐色	B	肩部片	
12-5	12号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	ABH	灰白色	B	肩部片	
12-6	12号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	AHN	灰色	A	胴部片	
12-7	12号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	ABHKL	にぶい褐色	C	胴下部片	末野産。
12-8	12号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	ACGHN	灰色	B	胴下部片	
12-9	12号溝跡	土師器　坏	(12.3)	(3.55)	—	ABCHIJK	にぶい褐色	B	20%	外面磨耗顕著。
1	不明	須恵器　甕	—	—	—	ABHL	灰白色	A	胴部片	末野産。外面自然釉付着。
2	不明	須恵器　甕	—	—	—	AFHN	灰色	A	胴部片	南比企産。
3	不明	土師器　坏	12.4	3.65	8.3	ABHMN	にぶい橙色	B	80%	磨耗顕著。
4	不明	土師器　壺	—	(3.85)	3.8	ABHIKN	にぶい黄橙色	B	胴～底80%	
5	不明	土師器台付甕	—	(5.6)	(7.8)	ABCHKN	浅黄橙色	B	台部100%	

mと短く、大半が調査区外に延びる。幅は0.4m前後、深さは0.14mを測る。断面形は逆台形を呈する。覆土は二層（７・８層）からなる。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物に図示できるものはなかったが、古墳時代後期の土師器甕の小片やスラグの小塊が検出されている。本溝跡の時期は古墳時代後期としか言えない。

なお、溝跡出土遺物で出土遺構が不明なもの（第51図不明１～５）があるが、これらは主に調査区東側に広がる谷状の落ち込みを走る溝跡から出土した。１・２は須恵器甕の破片で奈良・平安時代、３は９世紀後半に相当することから10～13号溝跡のいずれかに伴うものと思われる。特に３は同タイプの坏が出土した10号溝跡に伴う可能性が高い。４・５は古墳時代前期のものであり、溝跡に該当する時期のものがないことから流れ込みと思われる。

４　土　坑

第１号土坑（第52図）

63・64－89グリッドに位置する。西側で４号住居跡、ほぼ全面で５号住居跡を切っている。底面中央から北寄りにはピットが２つあるが、伴うものか定かではない。また、直接的な切り合い関係にないが、本土坑は４号掘立柱建物跡内に位置している。ピット及び４号掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。

長軸1.44m、短軸1.17mのややいびつな楕円形を呈する。確認面からの深さは、ピットを含めると0.29mを測る。立ち上がりは鋭角であり、底面はピットを除くとほぼ平坦であった。覆土は図示できなかったが、褐色系の土が若干堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物は検出されなかったが、５号住居跡との新旧関係から本土坑の時期は８世紀初頭以降としか言えない。

第２号土坑（第52図）

63－89・90グリッドに位置する。南側大半が調査区外にある。西側には時期不明のピットと若干重複するが、新旧関係は不明である。

規模は不明であるが、検出された南北は0.45m、東西は1.06mを測る。確認面からの深さは0.04mと非常に浅い。平面プランは楕円形ないし円形を呈すると思われる。立ち上がりは鋭角であり、底面はほぼ平坦であった。覆土は図示できなかったが、褐色系の土が若干堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

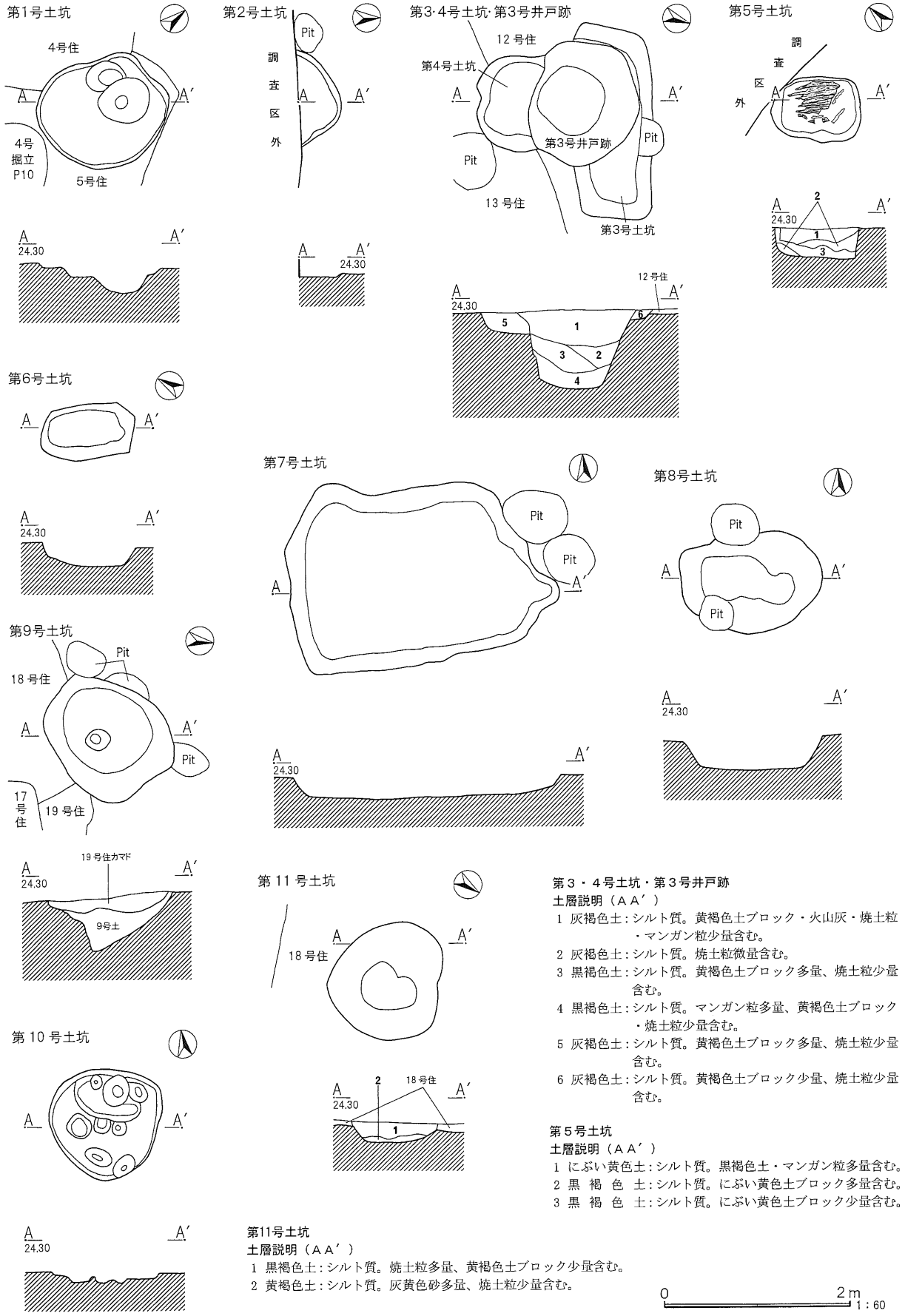
遺物が検出されなかったため、本土坑の時期は不明である。

第３号土坑（第52図）

62－87・88グリッドに位置する。12号住居跡を切っている。４号土坑及び３号井戸跡とも重複関係にあるが、本土坑は４号土坑を切る３号井戸跡に切られている。また、北側立ち上がり中央付近では時期不明のピットと重複するが、新旧関係は不明である。

長軸2.05m、短軸0.82m程の長方形を呈する。確認面からの深さは0.1mと浅い。立ち上がりはやや緩やかであり、底面はほぼ平坦であった。覆土はシルト質の灰褐色土（６層）のみである。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物は検出されなかったが、12号住居跡との新旧関係から本土坑の時期は６世紀前半以降としか言え



第３・４号土坑・第３号井戸跡
土層説明（ＡＡ′）

1 灰褐色土：シルト質。黄褐色土ブロック・火山灰・焼土粒・マンガン粒少量含む。
2 灰褐色土：シルト質。焼土粒微量含む。
3 黒褐色土：シルト質。黄褐色土ブロック多量、焼土粒少量含む。
4 黒褐色土：シルト質。マンガン粒多量、黄褐色土ブロック・焼土粒少量含む。
5 灰褐色土：シルト質。黄褐色土ブロック多量、焼土粒少量含む。
6 灰褐色土：シルト質。黄褐色土ブロック少量、焼土粒少量含む。

第５号土坑
土層説明（ＡＡ′）

1 にぶい黄色土：シルト質。黒褐色土・マンガン粒多量含む。
2 黒 褐 色 土：シルト質。にぶい黄色土ブロック多量含む。
3 黒 褐 色 土：シルト質。にぶい黄色土ブロック少量含む。

第11号土坑
土層説明（ＡＡ′）

1 黒褐色土：シルト質。焼土粒多量、黄褐色土ブロック少量含む。
2 黄褐色土：シルト質。灰黄色砂多量、焼土粒少量含む。

0　2 m
1：60

第52図　第１～11号土坑・第３号井戸跡

ない。

第４号土坑（第52図）

62－88グリッドに位置する。12・13号住居跡を切っており、北側を３号井戸跡に切られている。南東部では時期不明のピットと若干重複するが、新旧関係は不明である。

規模は不明であるが、検出された南北は0.6m、東西は1.03mを測る。平面プランはややいびつな円形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.23mを測る。立ち上がりはやや鋭角であり、底面はやや北側に傾く。覆土はシルト質の灰褐色土（５層）のみである。ブロック土を多量に含んでおり、人為的に埋め戻された可能性が高い。

出土遺物（第55図）は、土師器甕の口縁部片（４－１）のみである。古墳時代前期のものであり、12号住居跡との新旧関係を考慮すると流れ込みと思われる。よって、本土坑の時期は３号土坑と同じく６世紀前半以降としか言えない。

第５号土坑（第52図）

61・62－85グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。北東隅が調査区外にある。

長軸0.98m、短軸0.72mの長方形を呈する。確認面からの深さは0.32mを測る。立ち上がりはほぼ垂直であり、底面はほぼ平坦であった。底面からは炭化した木材や木片、人歯などが検出された。覆土は三層（１～３層）からなる。ブロック土を含んでおり、人為的に埋め戻されたと思われる。

人歯の検出、覆土の埋め戻し状況などから本土坑は墓坑と思われるが、遺物が検出されなかったため、時期は不明と言わざるを得ない。

第６号土坑（第52図）

62－85グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

長軸0.98m、短軸0.61mの長方形を呈する。確認面からの深さは0.23mを測る。立ち上がりは鋭角であり、底面は中央に向かってやや窪む。覆土は図示できなかったが、褐色系の土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物が検出されなかったため、本土坑の時期は不明である。

第７号土坑（第52図）

61・62－85グリッドに位置する。北西隅で２号火葬跡と重複するが、本土坑の立ち上がりにあまり影響はなかった。新旧関係は本土坑が２号火葬跡に切られている。東側では時期不明のピットと重複するが、新旧関係は不明である。

長軸2.86m、短軸2.03mのいびつな長方形を呈する。確認面からの深さは0.25mを測る。立ち上がりはやや緩やかであり、底面はほぼ平坦であった。覆土は図示できなかったが、褐色系の土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

出土遺物に図示できるものはなかったが、古墳時代後期の土師器や奈良・平安時代の須恵器・土師器の小片が検出されている。どちらかが伴うと思われるが、本土坑の時期は不明と言わざるを得ない。

第８号土坑（第52図）

60－85・86グリッドに位置する。北側立ち上がり中央付近及び南西隅付近で時期不明のピットと重複するが、新旧関係は不明である。

長軸1.53m、短軸1.06mのややいびつな楕円形を呈する。確認面からの深さは0.34mを測る。立ち上がりはやや鋭角であり、底面はほぼ平坦であった。覆土は図示できなかったが、褐色系の土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物が検出されなかったため、本土坑の時期は不明である。

第９号土坑（第52図）

60－86グリッドに位置する。19号住居跡カマド下にあり、18・19号住居跡に切られている。北側から西側の立ち上がりで時期不明のピット３つと重複するが、新旧関係は不明である。

長軸1.48m、短軸1.2mのややいびつな楕円形を呈する。確認面からの深さは0.2mを測る。立ち上がりから底面まで擂鉢状を呈し、底面ほぼ中央はピット状の掘り込みとなっていた。覆土は図示できなかったが、褐色系の土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物は検出されなかったが、19号住居跡との新旧関係から本土坑の時期は７世紀後半以前としか言えない。

第10号土坑（第52図）

59－86グリッドに位置する。土坑や時期不明のピット群が密集する所にあり、本土坑底面からは多数のピットが検出されたが、伴うものか定かではない。

径1.2m前後の円形を呈する。確認面からの深さは、ピットを含めても0.12mと浅い。立ち上がりはほぼ垂直であり、底面はピットにより凹凸が著しい。覆土は図示できなかったが、褐色系の土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

出土遺物に図示できるものはなかったが、古墳時代後期の土師器小片が若干検出されている。本土坑の時期は古墳時代後期としか言えない。

第11号土坑（第52図）

60－87グリッドに位置する。18・19号住居跡内にあり、両住居跡を切っている。

径1.25m前後のややいびつな円形を呈する。確認面からの深さは0.22mを測る。立ち上がりは緩やかであり、底面はほぼ平坦であった。覆土は二層（１・２層）からなる。１層は焼土やブロック土を含んでおり、人為的に埋め戻された可能性が高い。

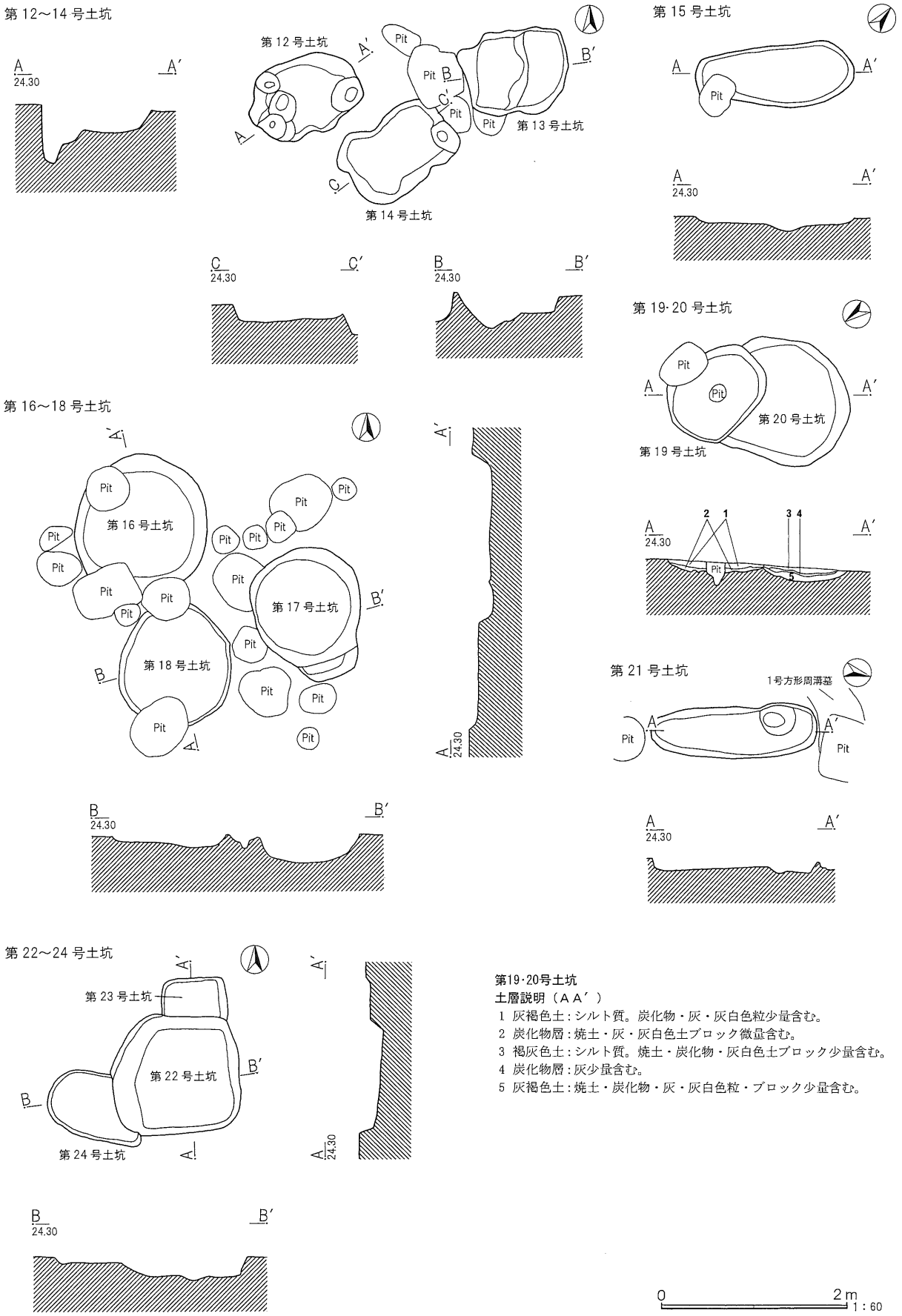
遺物は検出されなかったが、18号住居跡との新旧関係から本土坑の時期は８世紀中頃以降としか言えない。

第12号土坑（第53図）

58・59－86・87グリッドに位置する。土坑や時期不明のピット群が密集する所にあり、本土坑内からはピットが４つ検出されたが、伴うものか定かではない。

長軸1.23m、短軸0.84mのいびつな楕円形を呈する。確認面からの深さは、ピットを含めると0.62mを測る。立ち上がりは鋭角であり、底面はピットを除くとほぼ平坦であった。覆土は図示できなかったが、褐色系の土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

出土遺物（第55図）は、須恵器坏の底部（12－１）のみである。底径が小さく、器壁が薄い。底部は回転糸切り痕を残す。この他にも同時期と思われる土師器・須恵器の小片が若干検出されていることから本土坑の時期は９世紀後半と思われる。



第19･20号土坑
土層説明（ＡＡ′）

1 灰褐色土：シルト質。炭化物・灰・灰白色粒少量含む。
2 炭化物層：焼土・灰・灰白色土ブロック微量含む。
3 褐灰色土：シルト質。焼土・炭化物・灰白色土ブロック少量含む。
4 炭化物層：灰少量含む。
5 灰褐色土：焼土・炭化物・灰・灰白色粒・ブロック少量含む。

第53図　第12～24号土坑

第13号土坑（第53図）

58－86グリッドに位置する。土坑や時期不明のピット群が密集する所にあり、西側から南西隅の立ち上がりでピット２つと重複するが、新旧関係は不明である。

長軸1.09m、短軸0.92mのややいびつな長方形を呈する。立ち上がりは西側が緩やか、東側は鋭角である。底面は西側が東側よりも一段深く掘り込まれており、確認面からの深さは0.37mを測る。覆土は図示できなかったが、褐色系の土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物が検出されなかったため、本土坑の時期は不明である。

第14号土坑（第53図）

58・59－86・87グリッドに位置する。土坑や時期不明のピット群が密集する所にあり、北東部立ち上がりでピット２つと重複するが、新旧関係は不明である。また、本土坑内北東隅からピットが検出されたが、伴うものか定かではない。

長軸1.18m、短軸0.86mのややいびつな長方形を呈する。確認面からの深さは0.19mを測る。立ち上がりは鋭角であり、底面はほぼ平坦であった。覆土は図示できなかったが、褐色系の土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

出土遺物に図示できるものはなかったが、古墳時代後期の土師器小片が若干検出されている。本土坑の時期は古墳時代後期としか言えない。

第15号土坑（第53図）

59－87グリッドに位置する。土坑や時期不明のピット群が密集する所にあり、南西隅でピットと重複するが、新旧関係は不明である。

長軸1.7m、短軸0.67mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.14mと浅い。立ち上がりは緩やかであり、底面は中央付近が窪むが、その他はほぼ平坦であった。覆土は図示できなかったが、褐色系の土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物が検出されなかったため、本土坑の時期は不明である。

第16号土坑（第53図）

60－88グリッドに位置する。土坑や時期不明のピット群が密集する所にあり、北西部や南側でピットと重複するが、新旧関係は不明である。

径1.45m前後の円形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.23mを測る。立ち上がりはやや鋭角であり、底面はほぼ平坦であった。覆土は図示できなかったが、褐色系の土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

出土遺物（第55図）は、土師器甕（16－１）のみである。短い口縁部が大きく外反し、胴部は上位までの検出であるが膨らまず、直線的である。器壁が厚い。

本土坑の時期は７世紀代としか言えない。

第17号土坑（第53図）

60－88グリッドに位置する。土坑や時期不明のピット群が密集する所にあり、西側でピットと重複するが、新旧関係は不明である。

径1.2m前後を測る円形掘り込みの南側にテラス状の段が付く。円形掘り込みの深さは、確認面から

0.32mを測る。立ち上がりは緩やかであり、底面は中央付近がやや窪む。覆土は図示できなかったが、褐色系の土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

出土遺物に図示できるものはなかったが、古墳時代後期の土師器小片が若干検出されている。本土坑の時期は古墳時代後期としか言えない。

第18号土坑（第53図）

60－88グリッドに位置する。土坑や時期不明のピット群が密集する所にあり、南側及び北側でピットと重複するが、新旧関係は不明である。

径1.25m前後の円形を呈する。確認面からの深さは0.12mを測る。立ち上がりは緩やかであり、底面はやや東側に傾く。覆土は図示できなかったが、褐色系の土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

出土遺物に図示できるものはなかったが、古墳時代後期の土師器小片が若干検出されている。本土坑の時期は古墳時代後期としか言えない。

第19号土坑（第53図）

60－88グリッドに位置する。西側で20号土坑を切っており、底面中央及び東側立ち上がりで時期不明のピットと重複するが、新旧関係は不明である。

長軸1.12m、短軸0.84mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.12mを測る。立ち上がりは東側が緩やか、西側はほぼ垂直であり、底面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土は二層（１・２層）からなる。２層は炭化物層であり、焼土や灰などを含んでいた。１層は自然堆積と思われる。

出土遺物（第55図）は、土師器坏（19－１）のみである。坏蓋模倣坏。口径が16cmと大きい。口縁部が大きく開き、底部は平底に近い。

本土坑の時期は、６世紀後半と思われる。

第20号土坑（第53図）

60・61－88・89グリッドに位置する。東側を19号土坑に切られている。

正確な規模は不明であるが、長軸がおよそ1.4m、短軸は1.32mの楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.16mを測る。立ち上がりから底部にかけて擂鉢状を呈する。覆土は三層（３～５層）からなる。炭化物層である４層も含めてレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第55図）は、土師器甑の底部（20－１）のみである。

本土坑の時期は、19号土坑との新旧関係から６世紀後半以前の古墳時代後期としか言えない。

第21号土坑（第53図）

59－88グリッドに位置し、土坑や時期不明のピット群が密集する所にある。弥生時代中期後半段階の１号方形周溝墓の方台部に位置しており、直接的な切り合い関係はないが、本土坑が１号方形周溝墓よりも新しい。北西部底面からはピットが１つ検出されたが、本土坑に伴うものか定かではない。

長軸1.78m、短軸0.56mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.13mを測る。立ち上がりはほぼ垂直ないし鋭角であり、底面は中央付近が周囲よりもやや高くなっていた。覆土は図示できなかったが、褐色系の土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物が検出されなかったため、本土坑の時期は不明である。

第22号土坑（第53図）

58－88グリッドに位置し、土坑や時期不明のピット群が密集する所にある。北側で23号土坑、西側で24号土坑と重複するが、新旧関係は確認できなかった。また、23・24号土坑とともに弥生時代中期後半段階の１号方形周溝墓の方台部に位置しているが、本土坑が１号方形周溝墓よりも新しい。

一辺1.2m前後のいびつな方形を呈する。確認面からの深さは0.25mを測る。立ち上がりは北側と西側がやや鋭角、東側と南側はほぼ垂直であった。底面は北側に傾いており、中央付近にやや凹凸がみられた。覆土は重複する23・24号土坑も含めて図示できなかったが、褐色系の土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

出土遺物に図示できるものはなかったが、古墳時代後期の土師器小片が若干検出されている。本土坑の時期は古墳時代後期としか言えない。

第23号土坑（第53図）

58－88グリッドに位置し、土坑や時期不明のピット群が密集する所にある。南側で22号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。22号土坑でも述べたとおり、22・24号土坑とともに弥生時代中期後半段階の１号方形周溝墓の方台部に位置しているが、本土坑が１号方形周溝墓よりも新しい。

正確な規模は不明であるが、検出された南北は0.42m、東西は0.72mを測る。平面プランは方形ないし長方形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.06mと浅い。立ち上がりは緩やかであり、底面はほぼ平坦であった。覆土は図示できなかったが、褐色系の土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物が出土せず、22号土坑との新旧関係も不明であるため、本土坑の時期は不明と言わざるを得ない。

第24号土坑（第53図）

58・59－88グリッドに位置し、土坑や時期不明のピット群が密集する箇所にある。東側で22号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。22・23号土坑でも述べたとおり、23・24号土坑とともに弥生時代中期後半段階の１号方形周溝墓の方台部に位置しているが、本土坑が１号方形周溝墓よりも新しい。

正確な規模は不明であるが、長軸がおよそ1.1m、短軸は0.72mを測る。平面プランは楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.08mと浅い。立ち上がりはやや鋭角であり、底面はほぼ平坦であった。覆土は図示できなかったが、褐色系の土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

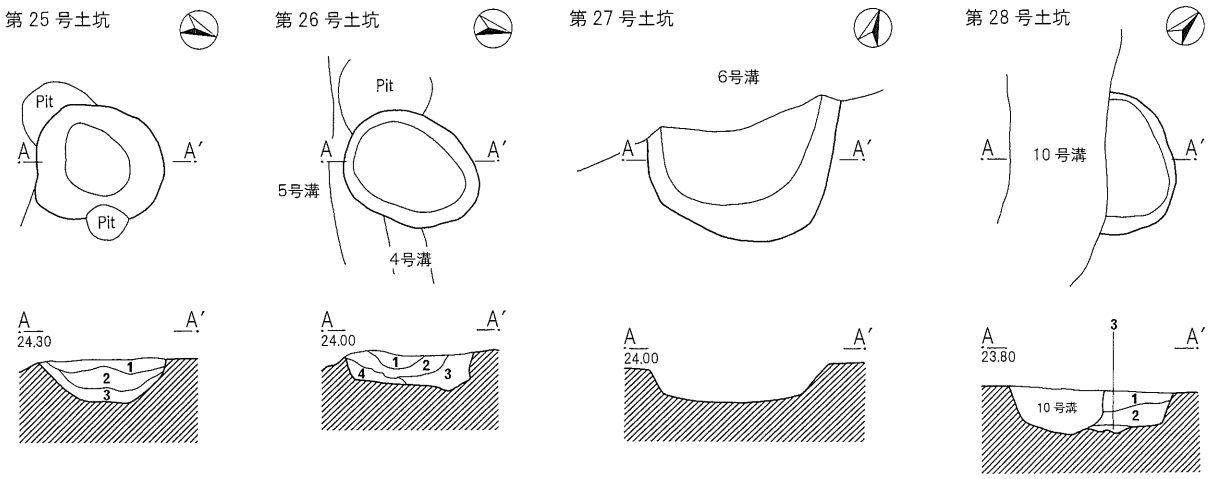
出土遺物に図示できるものはなかったが、古墳時代後期及び奈良・平安時代の土師器小片が若干検出されている。どちらかが伴うと思われるが、本土坑の時期は不明と言わざるを得ない。

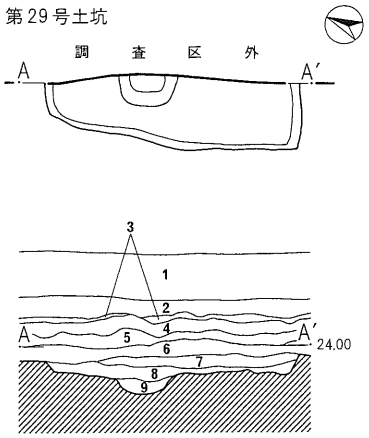
第25号土坑（第54図）

59・60－89グリッドに位置する。南側で３号溝跡、南西部及び北東部で時期不明のピットと重複するが、新旧関係は不明である。

径１m前後の円形を呈する。確認面からの深さは0.34mを測る。立ち上がりから底部まで擂鉢状を呈する。覆土は三層（１～３層）からなる。レンズ状に堆積していたが、１・２層はブロック土を含んでおり、人為的に埋め戻された可能性が高い。

出土遺物（第55図）は、土師器皿（25－１）、坏（25－２）がある。25－１は口縁部が大きく開き、





第25号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 灰 褐 色 土：シルト質。焼土・炭化物少量、灰白色土ブロック微量含む。
2 褐 灰 色 土：シルト質。灰白色土ブロック多量、焼土・炭化物微量含む。
3 灰白色シルト：褐灰色土少量含む。

第26号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 暗 灰 黄 色 土：粘土質。酸化鉄少量含む。
2 暗 灰 黄 色 土：粘土質。黄褐色土ブロック多量、酸化鉄少量含む。
3 灰褐色シルト：黄褐色土ブロック多量含む。
4 灰褐色シルト：マンガン粒多量含む。

第28号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 灰 色 土：シルト質。黄灰色粒少量、炭化物微量含む。
2 灰 白 色 土：粘土質。焼土粒・炭化物微量含む。
3 灰白色粘土：炭化物少量含む。

第29号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 盛 土
2 褐灰色土：火山灰少量含む。
3 灰 色 土：火山灰少量含む。
4 青灰色土：粘土質。火山灰・酸化鉄少量含む。
5 灰 色 土：粘土質。火山灰・酸化鉄少量含む。
6 黒褐色土：粘土質。酸化鉄少量、火山灰微量含む。
7 暗灰色土：粘土質。火山灰・酸化鉄・マンガン粒少量含む。
8 暗灰色土：粘土質。黄灰色粒・火山灰・酸化鉄・マンガン粒微量含む。
9 灰 色 土：粘土質。黄灰色土ブロック少量含む。

0 2m
1：60

第54図　第25～29号土坑

外反する。25－２は北武蔵型暗文坏。口唇部が僅かに外反する。内面には放射状暗文が施されている。

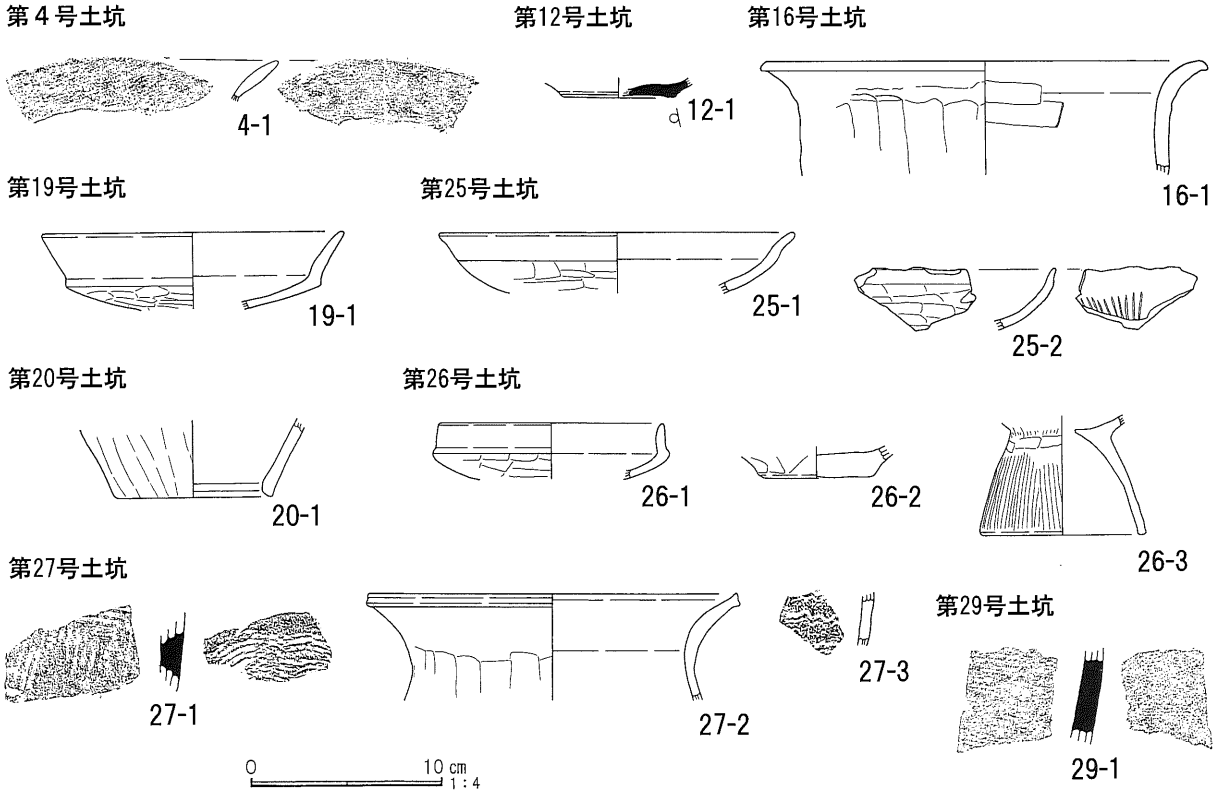
本土坑の時期は、７世紀末から８世紀初頭にかけての段階と思われる。

第26号土坑（第54図）

58・59－89グリッドに位置する。４号溝跡を切っており、南西部では時期不明のピットと重複するが、新旧関係は不明である。

長軸1.11m、短軸0.85mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.28mを測る。立ち上がりはほぼ垂直であり、底面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土は四層（１～４層）からなる。レンズ状に堆積していたが、２・３層はブロック土を多量含んでおり、人為的に埋め戻された可能性がある。

出土遺物（第55図）は、土師器坏（26－１）、甕（26－２）、台付甕（26－３）があるが、26－１は６世紀後半、26－２は６～７世紀代、26－３は古墳時代前期のものであり、４号溝跡との新旧関係を考慮するといずれも伴わない。よって、本土坑の時期は４号溝跡との新旧関係から８世紀初頭以降としか言えない。



第55図　土坑出土遺物

第24表　土坑出土遺物観察表

番号	出土遺構	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
4-1	4号土坑	土師器　甕	—	—	—	ABDK	灰黄褐色	B	口縁部片	古墳時代前期。
12-1	12号土坑	須恵器　坏	—	(1.0)	(6.1)	ABDH	灰色	B	底部25%	
16-1	16号土坑	土師器　甕	(23.7)	(6.0)	—	ABCHKN	橙色	B	口～胴20%	口縁部外面輪積痕有。
19-1	19号土坑	土師器　坏	(16.0)	(4.0)	—	ABHKN	灰白色	C	20%	
20-1	20号土坑	土師器　甑	—	(4.05)	(8.4)	ABHIKN	外:黄橙　内:黒褐	B	底部25%	
25-1	25号土坑	土師器　皿	(18.8)	(3.2)	—	BDH	にぶい橙色	A	10%	
25-2	25号土坑	土師器　坏	—	—	—	ABGHKN	橙色	B	口～体部片	内面放射状暗文有。
26-1	26号土坑	土師器　坏	(12.0)	(2.95)	—	ABCHJN	にぶい橙色	B	20%	古墳時代後期。
26-2	26号土坑	土師器　甕	—	(1.65)	(6.2)	ABDHIJ	外:暗灰　内:橙	B	底部30%	古墳時代後期。
26-3	26号土坑	土師器台付甕	—	(6.3)	(8.8)	ABDHKN	にぶい橙色	B	台部65%	古墳時代前期。底部焼成後穿孔有。
27-1	27号土坑	須恵器　甕	—	—	—	ABDHN	灰白色	B	胴部片	
27-2	27号土坑	土師器　甕	(19.8)	(5.6)	—	ABCEHKN	浅黄橙色	B	口～胴25%	
27-3	27号土坑	弥生土器　甕	—	—	—	ABEH	外:黄灰褐　内:黄灰	B	胴部片	中期末～後期初頭。
29-1	29号土坑	須恵器　甕	—	—	—	ABHN	灰色	B	胴下部片	

第27号土坑（第54図）

57・58－89グリッドに位置する。北側で６号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。

正確な規模は不明であるが、検出された南北は0.92m、東西は1.44mを測る。平面プランは隅丸の方形ないし長方形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.27mを測る。立ち上がりは緩やかであり、底面は中央付近がやや窪む。覆土は図示できなかったが、褐色系の土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

出土遺物（第55図）は、須恵器甕（27－１）、土師器甕（27－２）がある。この他に流れ込み遺物として弥生土器甕の胴部片（27－３）も検出された。27－１は甕の胴部片。27－２は口縁部が大きく外反し、胴部は上位までの検出であるが、やや膨らむ。口唇部が角張り、沈線状の窪みが巡る。

１・２は重複する６号溝跡とほぼ同時期のものであることから流れ込みの可能性もあるが、本土坑の時期も６号溝跡と同じく７世紀後半としておきたい。

第28号土坑（第54図）

55－88グリッドに位置する。南西部大半を10号溝跡に切られている。

正確な規模は不明であるが、おそらく径1.15m前後の円形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.34mを測る。立ち上がりは鋭角であり、底面は中央付近にやや凹凸がみられたが、その他はほぼ平坦であった。覆土は三層（１～２層）からなる。ほぼレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物に図示できるものはなかったが、古墳時代前期及び後期の土師器小片が若干検出されている。どちらかが伴うと思われるが、本土坑の時期は不明と言わざるを得ない。

第29号土坑（第54図）

49－86グリッドに位置する。北側で18号溝跡を切っており、東側半分は調査区外にある。

長軸2.04m、短軸は不明であるが、検出された東西は0.58mを測る。平面プランは長方形を呈すると思われる。立ち上がりは鋭角であり、底面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。底面中央からやや北寄りではピット状の掘り込みが検出された。確認面からピット状の掘り込み底面までの深さは0.29mを測る。覆土は三層（７～９層）からなる。７・８層では火山灰が認められた。自然堆積と思われる。

出土遺物（第55図）で図示可能なものは、須恵器甕の胴下部片（29－１）のみであるが、この他に９世紀後半の須恵器坏や土師器の小片が検出されている。よって、本土坑の時期は９世紀後半と思われる。

5　井戸跡

第１号井戸跡（第56図）

66－89・90グリッドに位置する。１号溝跡に切られている。北側では時期不明のピットと接しているが、新旧関係は不明である。

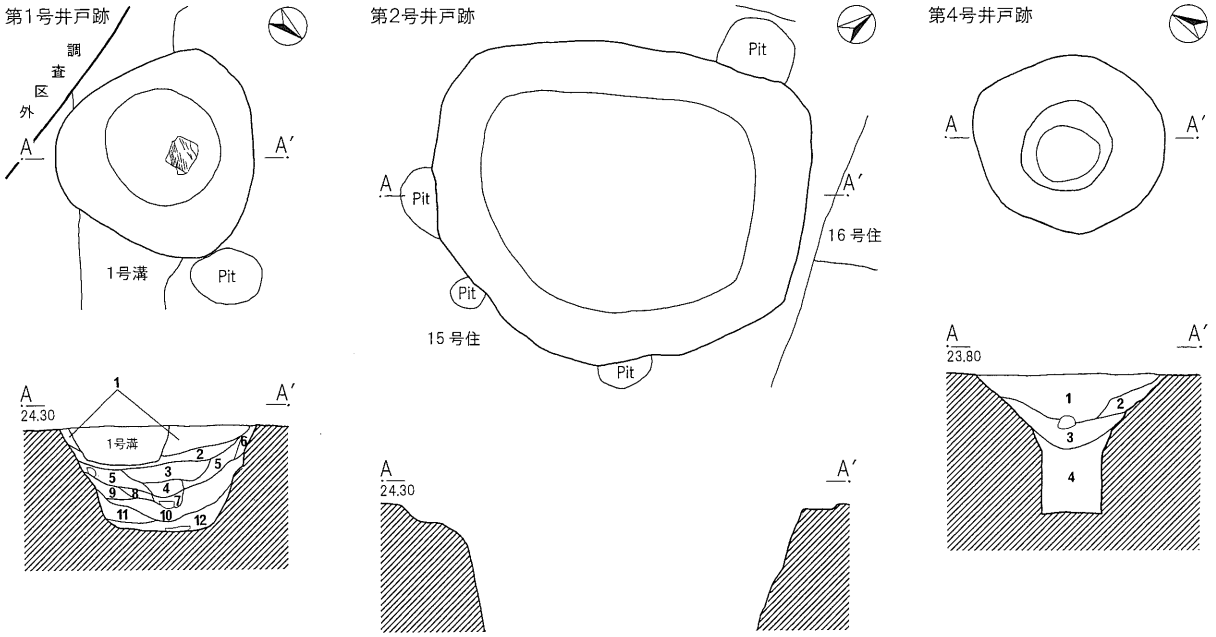
径1.6m前後の不整円形を呈する。確認面からの深さは0.83mを測る。立ち上がりは鋭角であり、底面はほぼ平坦であった。覆土は12層（１～12層）確認された。上層（１・６層）に火山灰を含み、中層（４層）以下は灰色系の粘土が堆積していた。７層からは木片、12層からは緑泥片岩が検出された。レンズ状に堆積していたが、ブロック土を含む層がみられたことから一部埋め戻された可能性がある。

出土遺物（第57図）で図示可能なものは、砥石（１－１）のみである。砂岩製で全面を使用している。完形品。この他では奈良・平安時代の須恵器・土師器の小片が検出されている。よって、本井戸跡の時期は１号溝跡以前の奈良・平安時代としておきたい。

第２号井戸跡（第56図）

61・62－86・87グリッドに位置する。15号住居跡を切っている。また、所々で時期不明のピットと重複するが、新旧関係は不明である。

長軸2.96m、短軸2.54mの非常に大きい井戸である。平面プランはやや角張った楕円形を呈する。深さは未完掘であるため不明であるが、検出した状況では１mを測る。立ち上がりは鋭角であった。覆土は図示できなかったが、上層にはシルト質ないし粘土質の褐色系の土が、下層には灰色系の粘土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。



第１号井戸跡
土層説明（ＡＡ′）
1 灰　色　土：シルト質。火山灰多量、焼土粒・炭化物少量含む。
2 灰　色　土：粘土質。黄灰色土ブロック・火山灰微量含む。
3 灰 白 色 土：粘土質。黄灰色粒・ブロック多量、炭化物少量含む。
4 灰褐色粘土
5 灰 色 粘 土：黄灰色粒微量含む。
6 灰 白 色 土：シルト質。火山灰微量含む。
7 灰 色 粘 土：木片少量含む。
8 灰白色粘土
9 灰　色　土：粘土質。酸化鉄多量含む。
10 灰 色 粘 土：暗灰色粘土ブロック多量、黄灰色シルトブロック少量含む。
11 灰オリーブ色粘土
12 褐灰色粘土：暗灰色粘土ブロック・緑泥片岩少量含む。

第４号井戸跡
土層説明（ＡＡ′）
1 黒 褐 色 土：シルト質。木片多量、褐色土ブロック微量含む。
2 褐 灰 色 土：シルト質。酸化鉄・木片多量含む。
3 褐灰色シルト：木片多量含む。暗灰黄色粘土を帯状に含む。
4 黒 褐 色 粘 土：酸化鉄・木片多量含む。

0　2m
1：60

第56図　第１・２・４号井戸跡

出土遺物（第57図）で図示可能なものは、須恵器甕（２－１）、土師器坏（２－２）がある。この他にも土師器坏や皿の小片が検出されているが、すべて15号住居跡出土遺物と同時期のものであることから流れ込みと思われる。また、これらの遺物に混じって９世紀代の須恵器坏の小片も若干検出されていることから、これが本溝跡に伴うものと思われる。よって、本井戸跡の時期は９世紀代としておきたい。

第３号井戸跡（第52図）

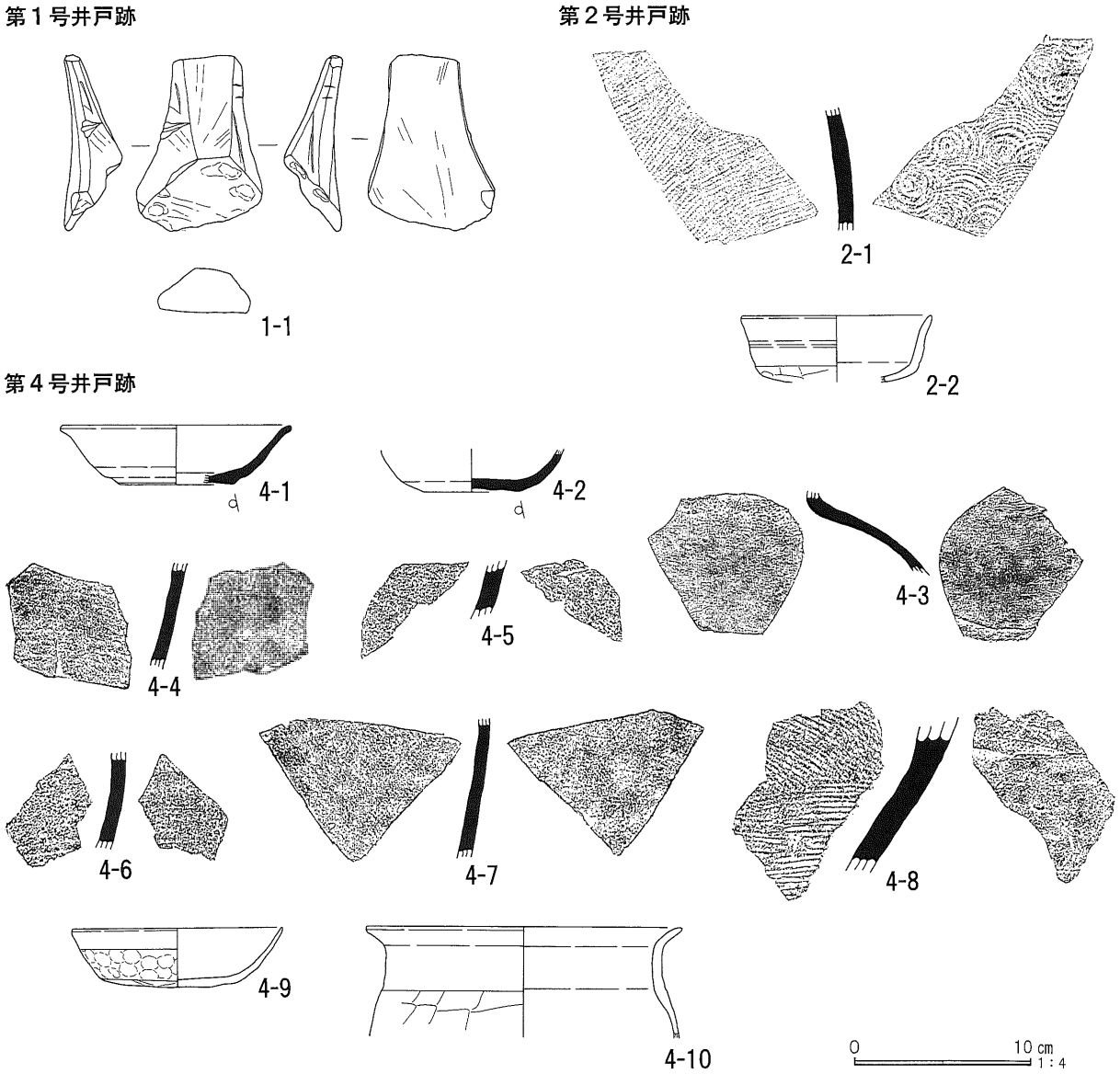
62－88グリッドに位置する。重複する遺構（12・13号住居跡、３・４号土坑）すべてを切っている。

径1.2m前後のいびつな円形を呈する。確認面からの深さは0.84mを測る。立ち上がりは鋭角であり、底面はやや中央付近がやや窪む。覆土は四層（１～４層）からなる。ブロック土を含んでおり、人為的に埋め戻された可能性が高い。

遺物が検出されなかったため、時期の特定が難しい。３・４号土坑同様、12・13号住居跡を切っていることから６世紀前半以降としか言えないが、３・４号土坑よりは新しい。

第４号井戸跡（第56図）

56－88グリッドに位置する。調査区東側に広がる谷状の落ち込みにある。他の遺構との重複はない。



第57図　井戸跡出土遺物

第25表　井戸跡出土遺物観察表

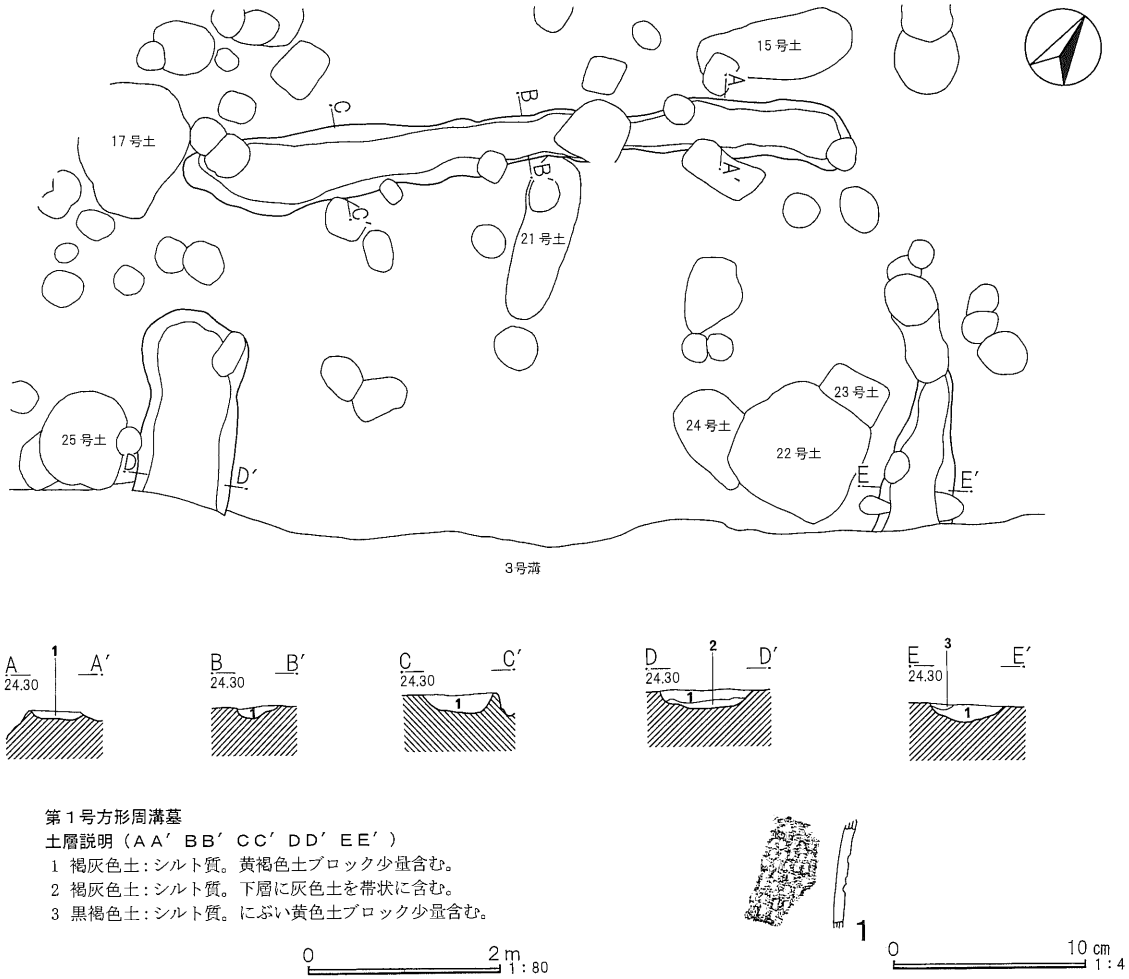
番号	出土遺構	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1-1	１号井戸跡	砥　石	最大長10.1cm、最大幅7.25cm、最大厚2.9cm。重量162.3ｇ。砂岩。完形。全面使用。							
2-1	２号井戸跡	須恵器　甕	—	—	—	ABL	灰色	A	胴上部片	末野産。外面自然釉付着。
2-2	２号井戸跡	土師器　坏	(11.0)	(3.8)	—	ABDHK	浅黄橙色	B	20%	
4-1	４号井戸跡	須恵器　坏	(13.4)	3.4	(6.8)	ABHL	灰色	B	25%	末野産。
4-2	４号井戸跡	須恵器　坏	—	(2.4)	(5.6)	ABL	褐灰色	B	体～底40%	末野産。
4-3	４号井戸跡	須恵器　甕	—	—	—	BF	灰色	A	肩部片	南比企産。
4-4	４号井戸跡	須恵器　甕	—	—	—	ABHL	灰色	B	胴下部片	末野産。
4-5	４号井戸跡	須恵器　甕	—	—	—	ABHL	外:灰　内:褐	A	胴下部片	末野産。
4-6	４号井戸跡	須恵器　甕	—	—	—	AL	灰色	B	胴下部片	末野産。
4-7	４号井戸跡	須恵器　甕	—	—	—	ABEL	灰色	B	胴下部片	末野産。
4-8	４号井戸跡	須恵器　甕	—	—	—	ABHL	褐灰色	B	胴下部片	末野産。
4-9	４号井戸跡	土師器　坏	(12.2)	3.4	7.6	ABCHN	にぶい黄橙色	B	40%	
4-10	４号井戸跡	土師器　甕	(18.2)	(6.3)	—	ABGH	黒褐色	B	口～胴30%	

径1.5m前後の円形を呈する。確認面からの深さは1.09mを測る。中段までは緩やか、以下はほぼ垂直に掘り込まれていた。底面はほぼ平坦であった。覆土は四層（１～４層）からなる。すべての層に木片を含んでいた。１～３層はレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われるが、４層については自然堆積か人為的な埋め戻しか不明である。

出土遺物（第57図）は、須恵器坏（４－１・２）、甕（４－３～８）、土師器坏（４－９）、甕（４－10）がある。完形品はないが、時期を特定できる資料が得られた。

須恵器は３のみ南比企産であり、その他はすべて末野産である。坏は全形がわかるものは１のみであるが、口縁部が外反し、底部は回転糸切り痕を残す。４－３～８は甕の破片。胴下部片が多く検出されたが、同一個体のものはない。４－９は口縁部が直線的に大きく開き、底部は平底である。体部外面には多数の指頭圧痕がみられた。底面はヘラ削り調整である。４－10は口縁部が「コ」の字を呈する。胴部は上位までの検出であるが、膨らみが小さい。

本井戸跡の時期は９世紀中頃から後半にかけての段階と思われる。



第58図　第１号方形周溝墓・出土遺物

第26表　第１号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	弥生土器　壺	―	―	―	ABDHKN	にぶい黄橙色	B	頸部片	

6　方形周溝墓

第１号方形周溝墓（第58図）

58～60－87～89グリッドに位置する。高台縁辺部に立地し、土坑や時期不明のピット群が密集する所にある。多くの遺構と重複関係にあり、遺存状態はあまり良くない。東・西溝及び方台部の南側半分は３号溝跡、方台部の北側は21号土坑、東側は22～24号土坑に切られている。また、時期不明のピットとも多数重複しており、おそらくそのほとんどが本遺構より新しいと思われる。なお、検出されなかった南溝については３号溝跡に切られているのか、あるいは縁辺部に立地することから元々存在していなかったのか定かではない。

規模は東・西溝外縁で8.58mを測ることから平面プランは一辺8.6m前後の方形を呈すると思われる。コーナー部分に土橋を持つことから四隅が切れるタイプであろう。北溝の長さは7.04m、東・西溝は大半を３号溝跡に切られているが、検出された長さは東溝が1.74m、西溝が２mを測る。幅は東に下る地形の影響からか西側が幅広の傾向にある。北溝は東側が0.6m、西側が0.8m、東溝は0.6m、西溝は1.1m前後を測る。確認面からの深さは北溝が0.1m前後、東・西溝は0.2m前後を測る。断面形は一部逆台形を呈する所もみられたが、概ね船底状を呈する。方台部側と外側の立ち上がりは形態に違いがみられなかった。覆土は主にシルト質の褐灰色土一層であるが、西溝のみ二層確認された。自然堆積と思われる。なお、東溝も二層確認されたが、３層は北側に位置する時期不明のピットのものと思われる。

方台部は東西が７m前後を測ることから一辺約７mの方形を呈すると思われる。方台部は土坑やピットと多数重複しており、また削平されていたことから主体部らしき掘り込みは確認されなかった。

出土遺物は、弥生土器壺の頸部片（１）のみである。北溝から検出された。外面に刺突列が巡る。

遺物は一点のみであるが、重複関係にある３号溝跡では同時期の弥生土器がいくつか検出されており、本遺構からの流れ込みと思われる。

本遺構の時期は、弥生時代中期後半から後期初頭段階としておきたい。

7　火葬跡

第１号火葬跡（第59図）

62－85グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

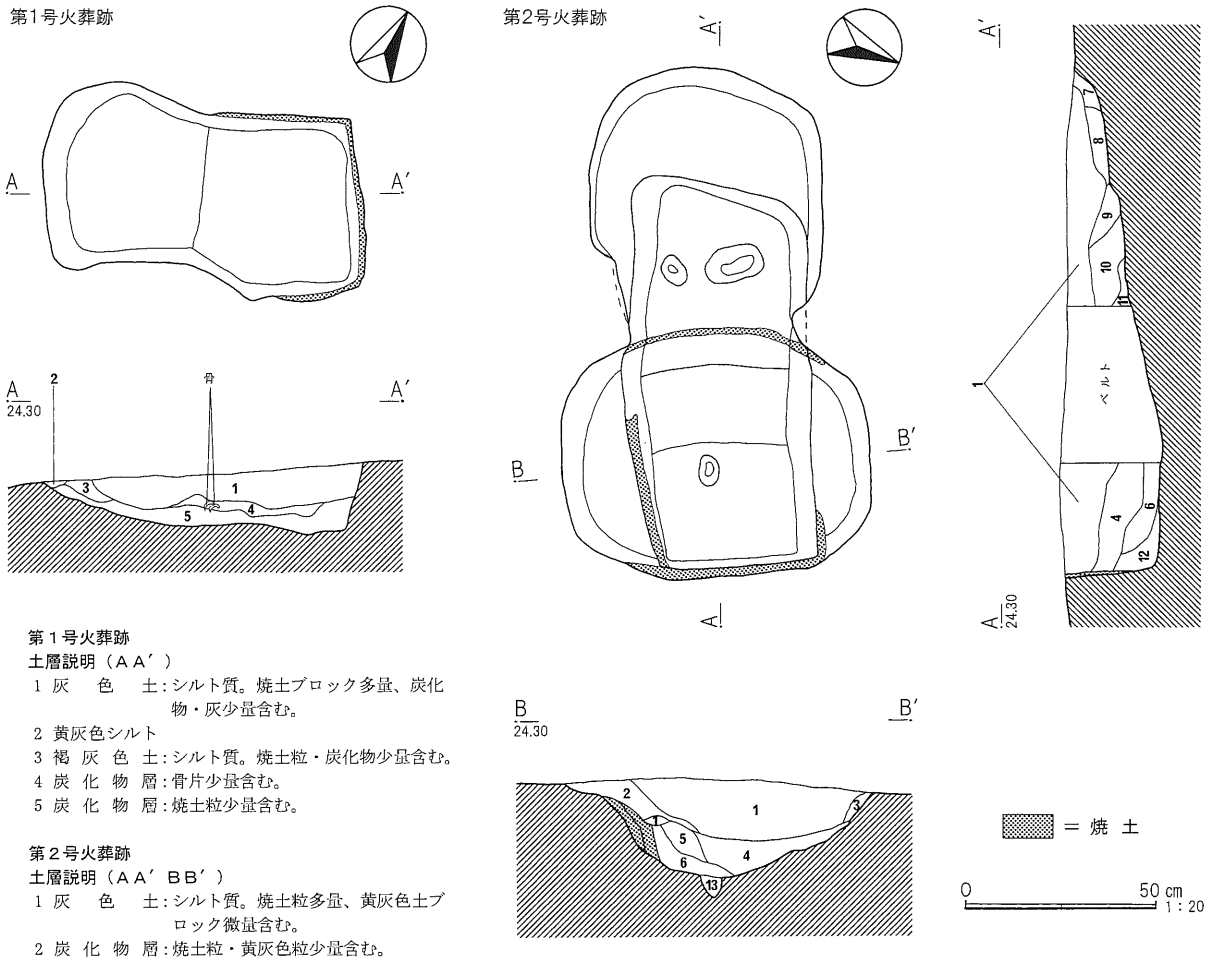
長軸0.86m、短軸0.5mのいびつな長方形を呈する。深さは東側燃焼部の最も深い所で0.18mを測る。立ち上がりは燃焼部が鋭角、西側の煙道部は緩やかであり、底面は燃焼部から煙道部に向かって緩やかに上る。燃焼部の立ち上がり上面は被熱していた。覆土は五層（１～５層）からなる。上層の１・３層は焼土や炭化物、灰などを含んでいた。中～下層の４・５層は炭化物層である。４層からは骨片が少量検出された。礫などは検出されなかった。

遺物は検出されなかったが、本火葬跡の時期は中世と思われる。

第２号火葬跡（第59図）

62－85グリッドに位置する。南東部で７号土坑の上部を切っている。

平面プランは凸形に近い。燃焼部となる東側が南北方向に長い隅丸長方形の土坑状となり、燃焼部西側に煙道部となる突出部が付く。燃焼部の規模は長軸0.82m、短軸0.66mを測る。煙道部の長さは0.69



第1号火葬跡
土層説明（ＡＡ′）
1 灰　色　土：シルト質。焼土ブロック多量、炭化物・灰少量含む。
2 黄灰色シルト
3 褐 灰 色 土：シルト質。焼土粒・炭化物少量含む。
4 炭 化 物 層：骨片少量含む。
5 炭 化 物 層：焼土粒少量含む。

第2号火葬跡
土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′）
1 灰　色　土：シルト質。焼土粒多量、黄灰色土ブロック微量含む。
2 炭 化 物 層：焼土粒・黄灰色粒少量含む。
3 黄灰色シルト：焼土粒・炭化物少量含む。
4 灰 褐 色 土：シルト質。焼土・炭化物多量、骨片少量含む。
5 黄灰色シルト
6 褐 灰 色 土：シルト質。焼土粒・炭化物・骨片少量含む。
7 黄灰色シルト：炭化物微量含む。
8 黄灰色シルト：灰白色粘土ブロック多量、焼土・炭化物少量含む。
9 黄灰色シルト及び灰白色土ブロック混合層
10 灰　色　土：粘土質。黄灰色粒・焼土粒少量含む。
11 灰 色 粘 土
12 炭 化 物 層：焼土粒・骨片少量含む。
13 暗 褐 色 土：粘土質。骨片多量含む。

第59図　第１・２号火葬跡

m、幅は燃焼部との接合部で0.43m、その他は概ね0.6m前後を測る。立ち上がりは燃焼部東側がほぼ垂直、その他は緩やかであり、燃焼部と煙道部の接合部付近のみオーバーハングしていた。底面は燃焼部から煙道部に向かって徐々に上り、深さは燃焼部の最も深い所で0.31mを測る。底面からはピット状の掘り込みが燃焼部で１つ、煙道部で２つ検出された。覆土は13層（１～13層）からなる。主に燃焼部で焼土や炭化物など、煙道部ではシルトや粘土が認められた。燃焼部下層の12・13層では骨片が確認された。礫などは検出されなかった。

遺物は検出されなかったが、本火葬跡の時期は中世と思われる。

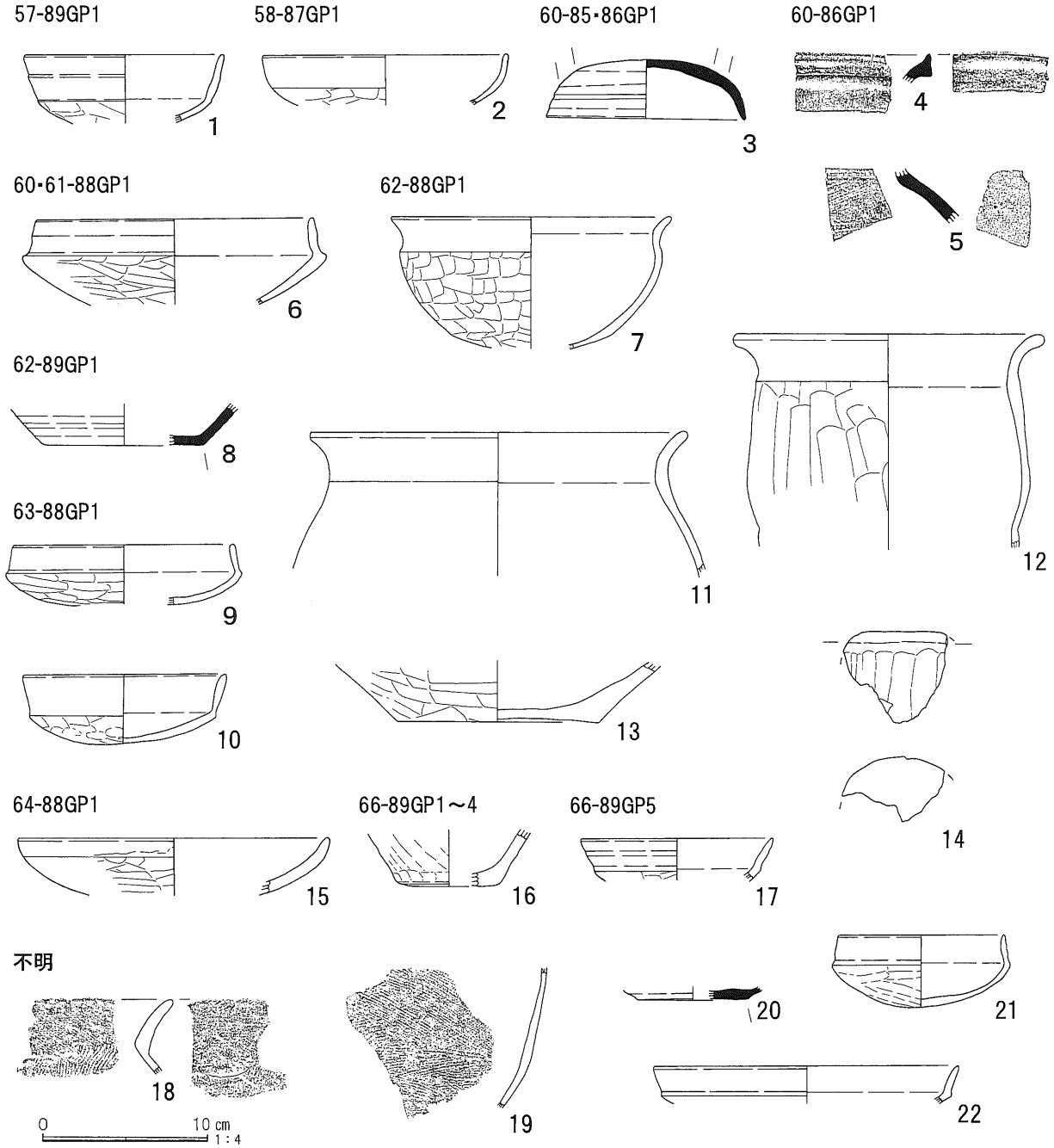
8　ピット

ピットは主に調査区西側の遺構が密集する高台で多数検出された。多くの遺構と重複するが、時期の特定が難しいため、新旧関係を把握することは困難であった。検出されたピットのほとんどが規則的に並ばないが、性格としては柱穴と思われ、建物跡や柵列跡などを構成していたと推測される。特に58～

61－87～89グリッドや58・59－85～87グリッドのピットは、住居跡と溝跡を隔てるように高台縁辺部を列状に分布していたことから柵列跡になる可能性がある。また、掘立柱建物跡周辺にあるピットは建物跡に付随するものがあるかもしれない。出土遺物が少なく、規則性が見出せないことからあくまでも可能性を指摘するにとどまる。詳細については不明と言わざるを得ない。

出土遺物は少ないが、図示不可能な土器片も含めて時期は古墳時代前期から奈良・平安時代までのものである。このうち、最も多く検出されたのは古墳時代後期である。

図示した遺物（第60図）は、古墳時代前期の土師器甕（18・19）、古墳時代後期の須恵器蓋（3）、土師器坏（1・6・9・10・17・21）、皿（15・22）、椀（7）、甕（11～13・16）、土製支脚（14）、奈良・



第60図　ピット出土遺物

第27表　ピット出土遺物観察表

番号	出土遺構	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	57-89ＧＰ１	土師器　坏	(12.3)	(4.15)	—	ABCHKN	淡黄色	B	30%	
2	58-87ＧＰ１	土師器　坏	(15.2)	(3.1)	—	ABHIKN	にぶい橙色	A	15%	
3	60-85･86ＧＰ１	須恵器　蓋	(12.3)	(3.6)	—	ABCKN	灰白色	C	ほぼ完形	
4	60-86ＧＰ１	須恵器　甕	—	—	—	ABL	灰白色	B	口縁部片	末野産。
5	60-86ＧＰ１	須恵器　甕	—	—	—	ABFN	灰白色	B	肩部片	南比企産。
6	60･61-88ＧＰ１	土師器　坏	(17.0)	(5.3)	—	ABCGHKN	橙色	B	25%	
7	62-88ＧＰ１	土師器　椀	(17.2)	(8.1)	—	ABCDHN	灰黄褐色	B	30%	
8	62-89ＧＰ１	須恵器　坏	—	(2.55)	(9.8)	ABFN	黄灰色	B	体～底20%	南比企産。
9	63-88ＧＰ１	土師器　坏	(13.6)	(3.6)	—	BEHKN	にぶい黄橙色	B	40%	
10	63-88ＧＰ１	土師器　坏	12.5	4.45	—	ABCHIKN	橙色	B	50%	
11	63-88ＧＰ１	土師器　甕	(23.3)	(8.8)	—	ACEGHIKN	橙色	B	口～胴25%	外面剥離顕著。
12	63-88ＧＰ１	土師器　甕	(19.2)	(13.1)	—	BCHIJKN	橙色	A	口～胴20%	
13	63-88ＧＰ１	土師器　甕	—	(3.7)	(12.2)	ABCHIN	赤褐色	B	胴～底40%	
14	63-88ＧＰ１	土製支脚	最大長(5.6)cm、最大幅(6.2)cm。胎土:ABDHJMN。色調:にぶい褐色。焼成:B。先端部30%のみ残存。							
15	64-88ＧＰ１	土師器　皿	(19.2)	(3.5)	—	ADHKN	外:明赤褐　内:橙	B	15%	口縁部外面輪積痕有。
16	66-89ＧＰ１～4	土師器　甕	—	(3.5)	(6.2)	ABDHI	にぶい橙色	B	胴～底25%	磨耗顕著。
17	66-89ｇＰ５	土師器　坏	(11.8)	(2.6)	—	ABCHKN	にぶい橙色	B	20%	
18	不明	土師器　甕	—	—	—	ABDHN	にぶい褐色	B	口～肩部片	古墳時代前期。
19	不明	土師器　甕	—	—	—	ABHN	褐灰色	B	胴下部片	古墳時代前期。
20	不明	須恵器　坏	—	(0.8)	(6.8)	ABFN	灰色	B	底部30%	南比企産。
21	不明	土師器　坏	(10.2)	(4.4)	—	ABHK	橙色	B	60%	外面アバタ状剥離。
22	不明	土師器　皿	(18.7)	(2.3)	—	ABGHK	にぶい黄褐色	B	25%	

平安時代の須恵器坏（８・20)、甕（４・５)、土師器坏（２）である。以下、順を追って述べるが、これらの遺物が出土したピットのみ全測図にピット名を記載してある。

１は深身の有段口縁坏。段が沈線化している。57－89ＧＰ１出土。２は北武蔵型坏。口縁部がほぼ直立する。58－87ＧＰ１出土。３はいわゆる坏Ｈの蓋。ほぼ完形品。60－85・86ＧＰ１出土。４・５は甕の破片。60－86ＧＰ１出土。６は坏身模倣坏。大型の部類に入る。60・61－88ＧＰ１出土。７は口縁部が外反し、胴部以下は半球形を呈する。62－88ＧＰ１出土。８は底径が9.8cmと大きく、底部は回転ヘラ削り調整である。62－89ＧＰ１出土。９～14は63－88ＧＰ１出土。９は坏身模倣坏。口縁部が内傾し、底部は平底に近い。10は坏蓋模倣坏。口縁部の開きが小さく、体部と底部の境にある稜が弱い。甕は11・13が丸胴、12が長胴の甕である。14は土製支脚の先端部。一部のみ検出された。外面に粗いヘラ削りが施されている。15は口縁部の開きが小さく、器壁が厚い。内面に暗文はみられない。64－88ＧＰ１出土。16は長胴甕の底部。66－89ＧＰ１～４出土。17は有段口縁坏。段が沈線化している。66－89ＧＰ５出土。18～22はピット出土遺物であるが、出土ピットが不明な一群である。18・19は土師器甕の破片。台付甕になる可能性が高い。調整の主体はハケメである。20は底部調整が回転ヘラ削りである。底径が小さい。21は坏身模倣坏。深身で内傾する口縁部がやや長い。22は器形的に坏蓋模倣坏に近い。

９　遺構外出土遺物

遺構外出土遺物は、縄文時代から弥生時代、古墳時代、奈良･平安時代と幅広い。遺物は、縄文土器、弥生土器、古墳時代の須恵器、土師器、土製品、石製品、奈良・平安時代の須恵器、土師器、土製品などがあり、図示したものだけでも222点と非常に多い。このうち、約１／３は確認面上層にある遺物包含層からの検出である。古墳時代は、特に後期の遺物が多く検出されている。以下、時代・時期及び遺物ごとに順を追って述べる。

第61図１は縄文時代晩期前半の安行式である。深鉢の胴部片。今回の調査では縄文時代の遺構は確認されていない。ヘラによる平行沈線間にＬＲ単節縄文を充填している。無文部にはナデが施されている。

第61図２は縄文時代晩期末から弥生時代初頭にかけてのものと思われる。同段階の遺構も今回の調査では確認されていない。ヘラによる平行沈線が数条描かれている。浅鉢の胴部片か。

第61図３～32は弥生土器。４・５が前期末から中期初頭、３・６～23が中期後半、24～32が中期末から後期初頭に相当する。前期末から中期初頭段階については、今回の調査で遺構は検出されていない。４・５はともに壺の口縁部から頸部にかけての破片。４は口縁部に刺突列を２列、中間に一条の沈線を巡らせ、頸部にはヘラによる短い沈線を横・斜位に描いている。５は口唇部に指頭圧痕、以下はナデが施されている。４・５は前述の２と同時期とみても良いものかもしれない。中期後半の土器のうち、３・６～18が壺、19～23が甕である。３は頸部付近のみの検出であるが、残存状態は比較的良好であった。口縁部にはＬＲ単節縄文、頸部上位にはヘラによる波状沈線、下位は無文でヘラミガキが施されている。６～18は破片。６が口縁部から頸部にかけて、その他は肩部ないし胴部片である。６の口縁部はＬＲ単節縄文地に二本一単位の櫛歯状工具で波状沈線を描く。頸部はヘラナデである。７～16はＬＲないしＲＬ単節縄文を地文とし、櫛歯状工具やヘラで波状文や平行沈線、重四角文などを描く。17・18もヘラにより重四角文を描くが、地文に縄文は施文されていない。甕はＬＲ単節縄文のみのもの（19～21）、櫛歯状工具によるもの（22）、円形浮文が付き、羽状縄文地にヘラによる沈線を描かれるもの（23）などがある。24～32はすべて甕の破片である。同一個体のものがいくつかみられた。文様はすべて櫛描波状文であり、26・31・32には円形浮文が付く。32は焼成前の穿孔が２つみられた。

第61図33～51、第62図52～61は弥生時代末から古墳時代初頭段階及び古墳時代前期の土師器。33～36・46・47が壺、37が坩、38・48～58が甕、39・40・59・60が台付甕、41～43・61が高坏、44が器台、45が椀である。壺は口縁部が素口縁のもの（33～35・46）が主体となるが、47のみ複合口縁である。47は内面端部にＬＲ単節縄文が施文されており、頸部外面には赤彩が施されていた。弥生時代末から古墳時代初頭段階のものであろう。47以外の調整はヘラナデが主体となるが、34にはハケメ、35の頸部にはヘラミガキが施されている。37は坩の底部。外面の調整はヘラミガキである。38・48～58は甕としたが、台付甕になる可能性が高い。口唇部に刻みを持つもの（48・49）と持たないもの（38・50～52）があり、前者は弥生時代末から古墳時代初頭段階のものであろう。調整はいずれもハケメが主体となる。台付甕と明確に分かるものは台部及び接合部のみの検出である。ヘラナデ調整のもの（39・40）とハケメ調整のもの（59・60）に分けられる。高坏は口縁部片（61）と脚部（41～43）がある。調整はヘラミガキである。61の口縁部は大きく開き、坏部はやや深身になると思われる。脚部は開きが小さいもの（41・43）と大きく開くもの（42）がある。44は器台の器受部。坏部下位に弱い稜を持ち、口縁部が外に開く。調整は内外面とも横ナデである。45は椀の口縁部から胴上部までの部位。調整は口縁部が横ナデ、頸部は指頭圧痕、胴部はヘラナデが主体となるが、ハケメも一部みられた。

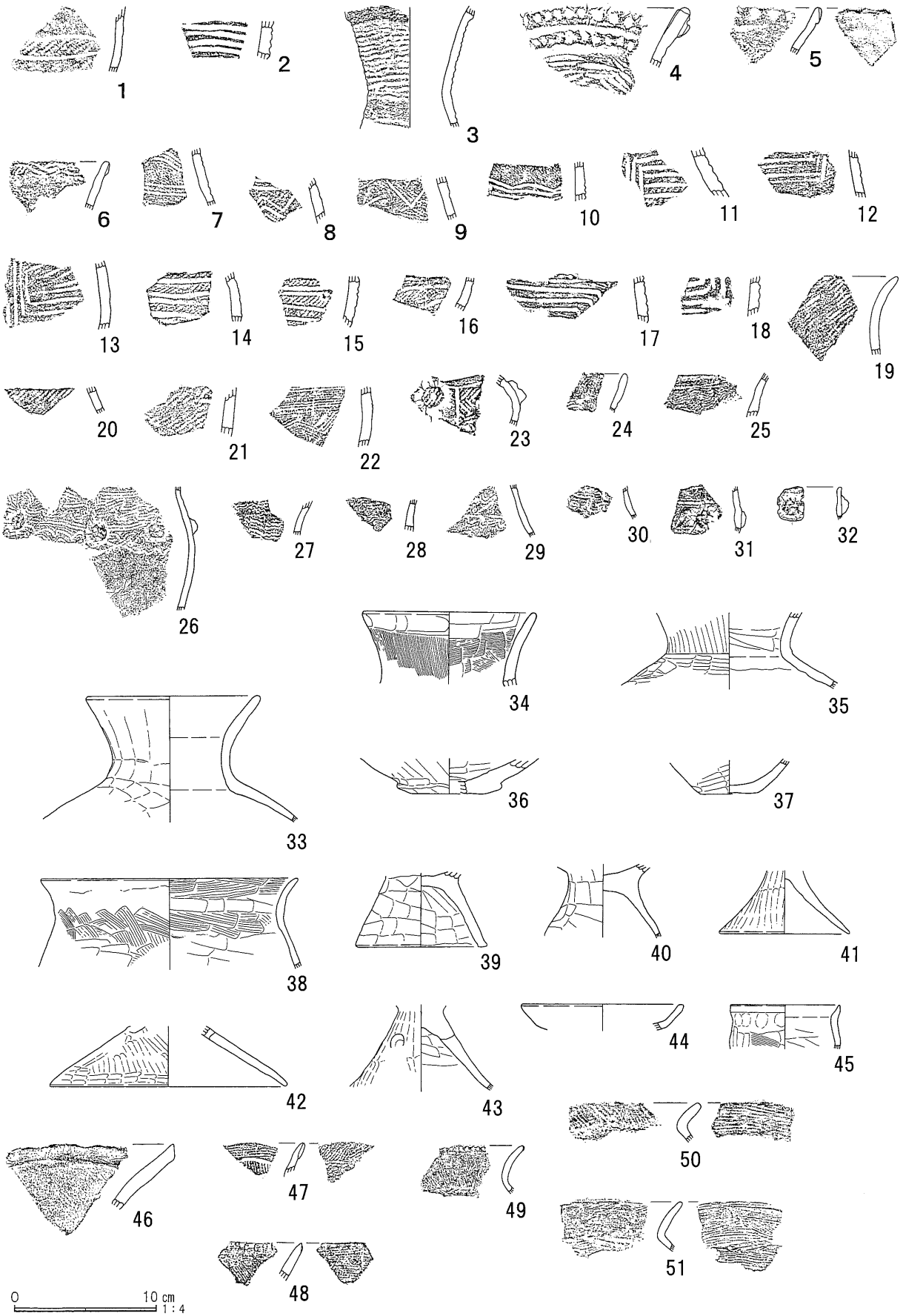
第64図154・155、第66図210・211は古墳時代中期の土師器。154が壺、155が甕、210・211が高坏である。明確に中期と判別できるものは非常に少ないが、この他に甕の底部でヘラナデ調整によるもの（第65図172～175、第66図189・190）には同段階に該当するものがあるかもしれない。154は残存状態が比較的良好である。短い口縁部が外反し、頸部との境に僅かな段を有する。胴部は球形を呈し、中位に最

大径を有する。調整は内外面とも口縁部が横ナデ、胴部はヘラナデである。155は胴下部以下を欠くが、胴部はやや長胴化している。調整は口縁部が横ナデ、胴部外面はハケメとヘラナデが併用されている。210・211はともに高坏の接合部から脚部にかけての部位。210は浅身で坏部下位の稜が明瞭でないタイプ、211は深身で坏部下位の稜がはっきりしているタイプと思われる。ともに脚部は膨らまない。外面の調整はヘラナデである。

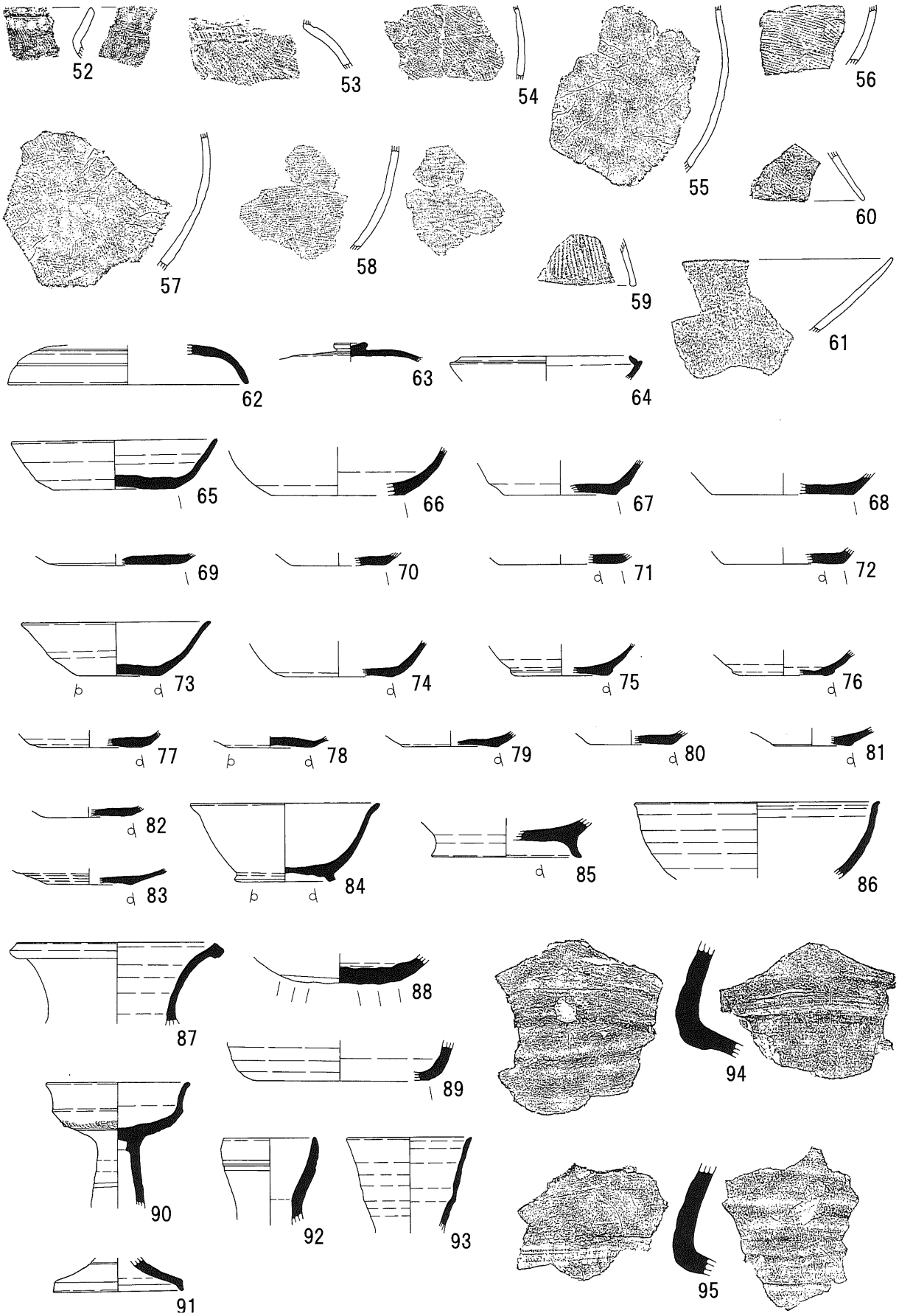
第62図62・64・88・90～93、第63図118・119、第64図120～140・145～153・156、第65図157～167、第66図208・209・212～218・221・222は、古墳時代後期から末期の遺物である。末期の遺物は８世紀初頭段階まで含む。検出数が非常に多いが、奈良・平安時代との区別が困難な須恵器壺・甕の破片（第62図94・95、第63図96～117）や土師器甕の底部（第65図176～183、第66図184～188・191～205）には同段階に該当するものがあるかもしれない。また、中期で述べた甕の底部でヘラナデ調整のものにも同段階のものがあるかもしれない。

第62図62・64・88・90～93、第63図118・119は須恵器。62は蓋、64は坏、88は甕、90・91は高坏、92・93は瓶類である。末野産の他に産地不明のものもみられた。すべて７世紀代のものである。62はいわゆる坏Ｈの蓋であるが、口径が17.2cmと大きい。64は坏Ｈ身の口縁部。内傾する口縁部が短い。88は甕の底部。器壁が厚い。底部は回転ヘラ削り調整である。90は口縁部が外反し、細身のほぼ直立する脚部が付く。裾部を欠く。坏部下位に櫛描列点文が施されており、脚部外面に一条の沈線が巡る。91は高坏の裾部。端部が直立する。外面付け根に一条の沈線が巡る。92・93・118・119は瓶類。92・93は口縁部。92は内湾し、外面に二条の沈線が巡る。器壁が厚い。93はほぼ直線的に開く。器壁が薄い。118・119は肩部片。外面に回転カキ目が巡る。

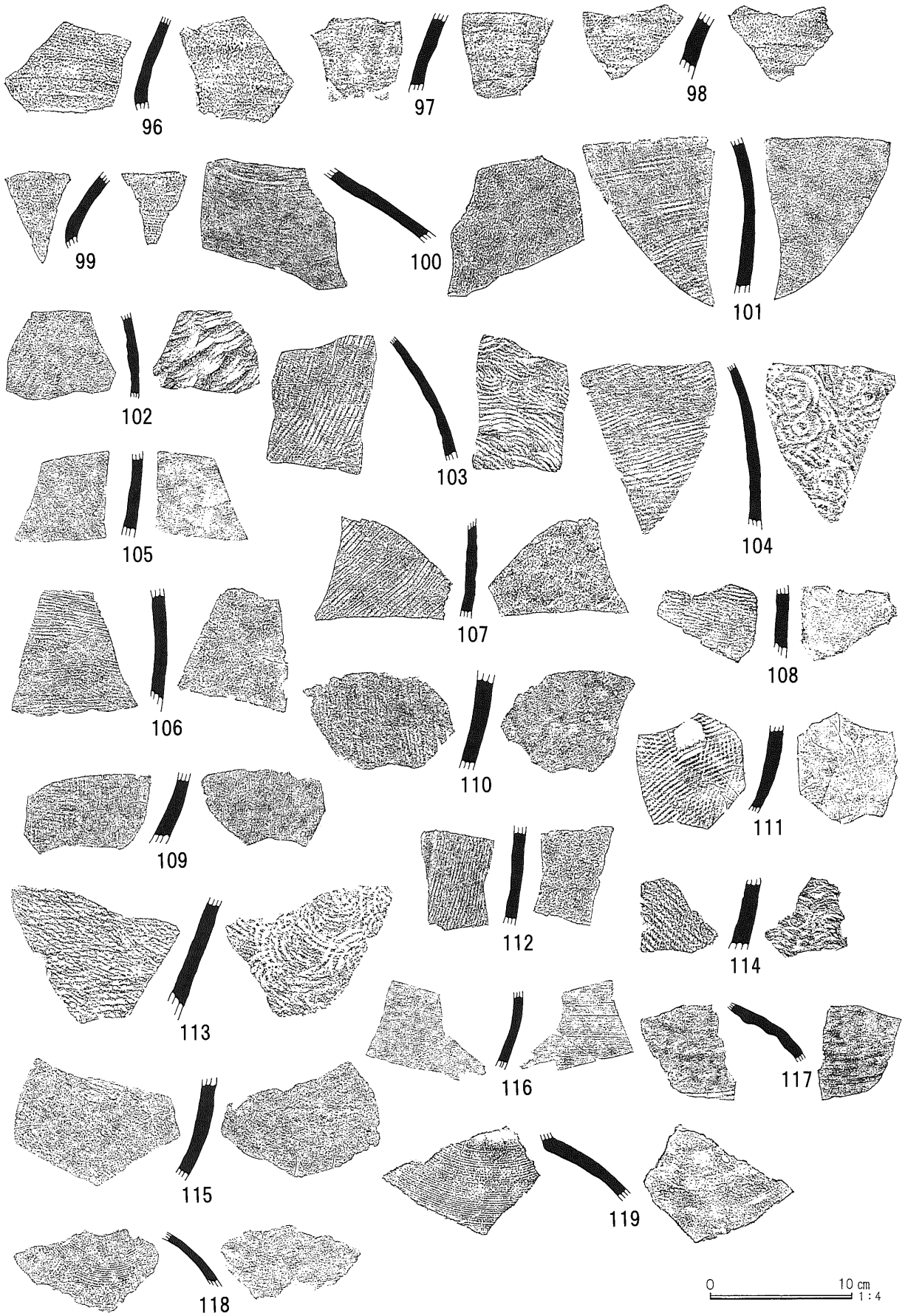
第64図120～140・145～153・156、第65図157～167、第66図208・209・212～217は土師器。120～140・145～150は坏、151～153は皿、156～167は甕、208・209は甑、212・213は高坏、214は鉢、215～217は椀である。坏は有段口縁坏（120～124）、模倣坏（125～128）、比企型坏（129）、北武蔵型坏（130～140）、暗文坏（145～150）がある。有段口縁坏は口縁部の段が多段のもの（120・121・123）と一～二段のもの（122・124）がある。模倣坏は125・126が坏蓋模倣坏、127・128が坏身模倣坏である。後者のうち、127は深身で口縁部が長いことから128よりも古相を呈する。129は浅身で口唇部のみ僅かに外反する。内面には一条の沈線が巡る。内面及び口縁部外面に赤彩が施されている。北武蔵型坏は法量にバラツキがあり、口縁部形態もやや外に開くもの（130・137・138）、ほぼ直立するもの（131・134・140）、内傾するもの（132・133・135・136・139）など様々である。暗文坏はすべて破片での検出である。口縁部が外に開くもの（145）、Ｓ字状を呈するもの（146～148・150）、ほぼ直立するもの（149）がある。北武蔵型坏と暗文坏については８世紀前半段階まで下るものがあるかもしれない。皿はそれぞれタイプが異なる。151はやや長めの口縁部が大きく開く。152は口縁部の開きが小さく、坏蓋模倣坏を扁平化した器形を呈する。153は短い口縁部が大きく開く。皿も８世紀前半まで下るものがあるかもしれない。甕は156～160が丸胴、161～167が長胴の甕である。前者は口縁部形態にやや違いがみられた。器壁が厚手で胴部外面の調整はヘラ削りである。後者のうち、161は口縁部の開きが小さく、やや膨らむ胴部に最大径を持つことや胴部外面の調整がヘラナデであることから他より古相を呈する。162も胴部がやや膨らむが、外面の調整はヘラ削りであり、161よりやや新しい段階のものと思われる。163～167は口縁



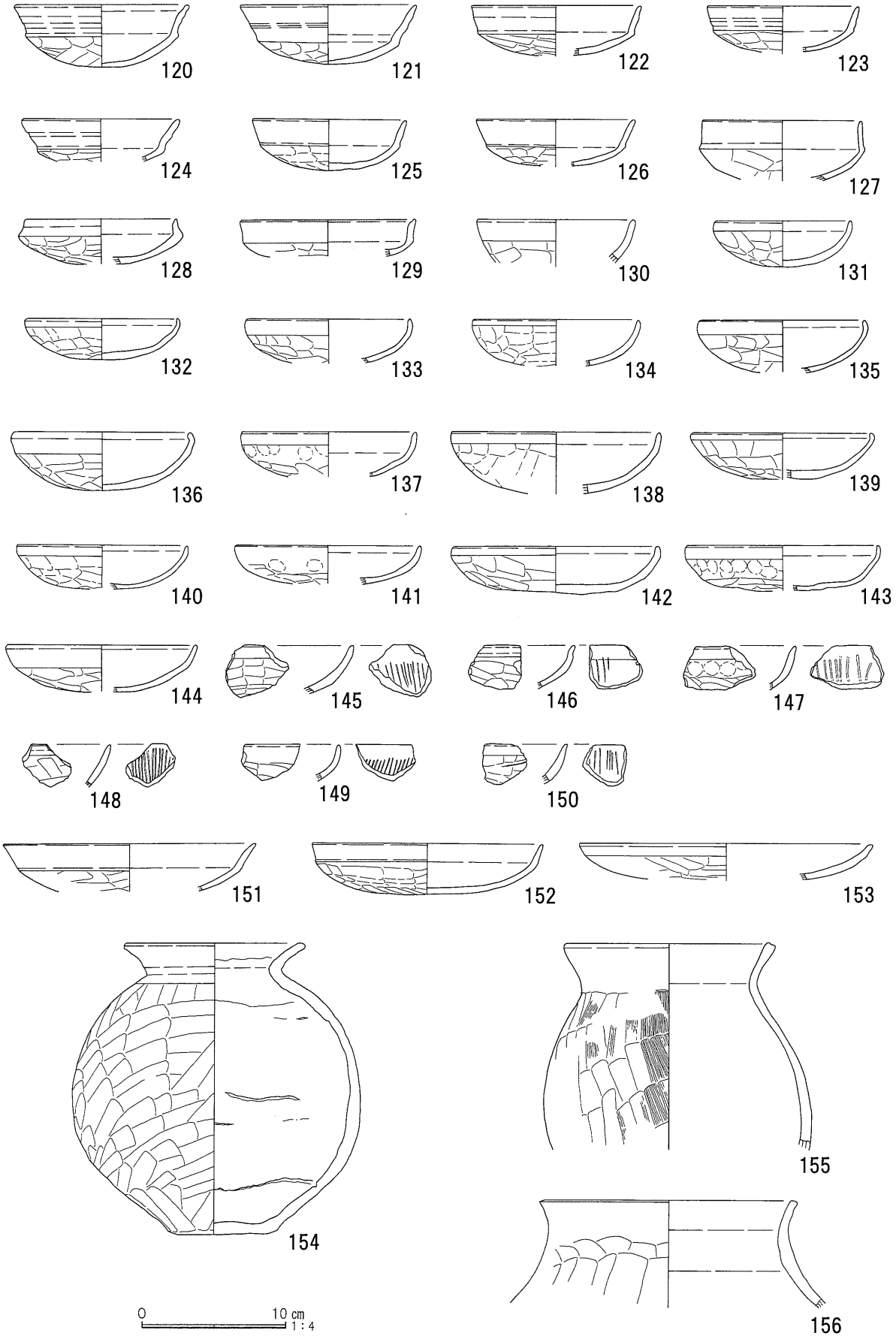
第61図　遺構外出土遺物(1)



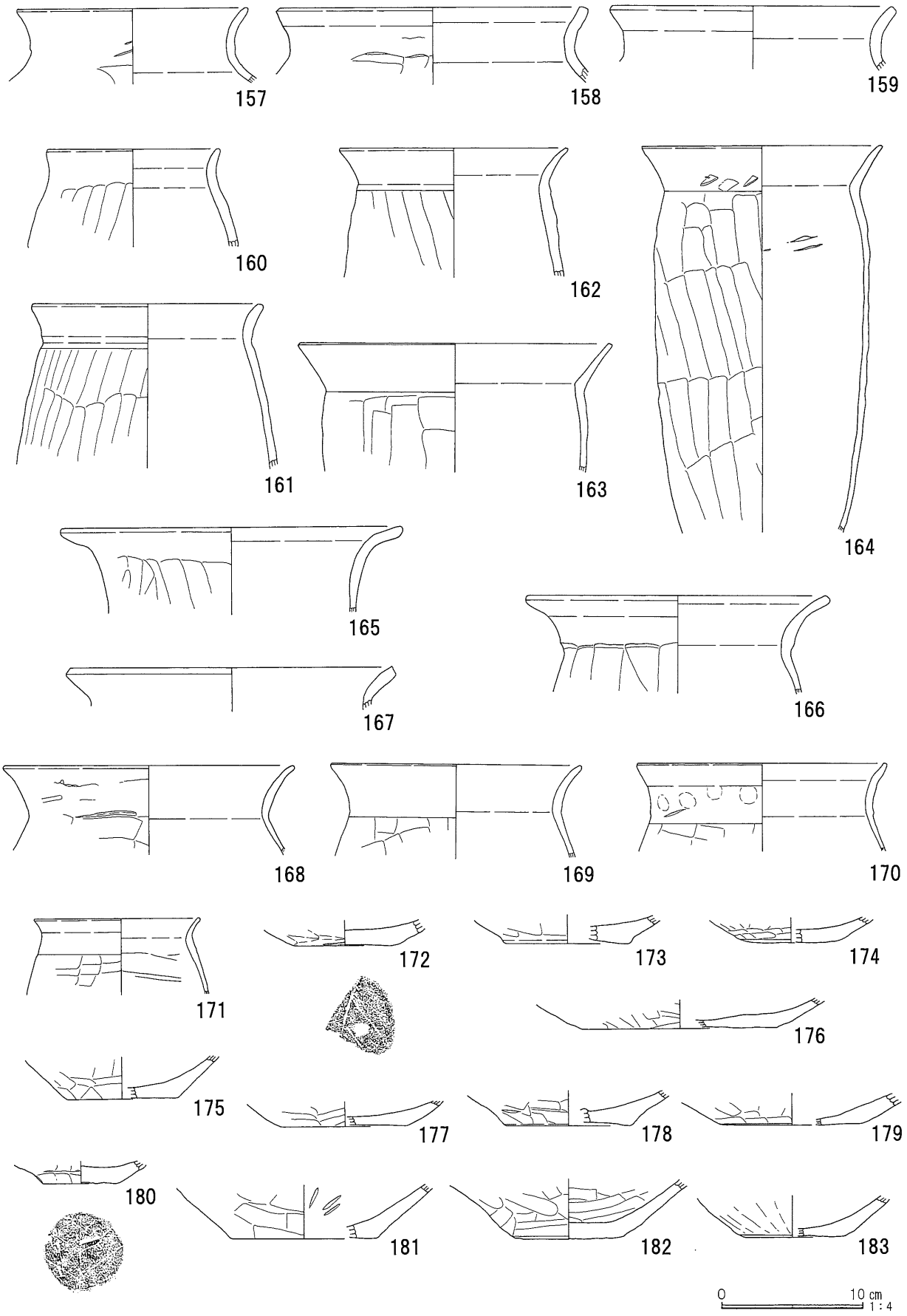
第62図　遺構外出土遺物(2)



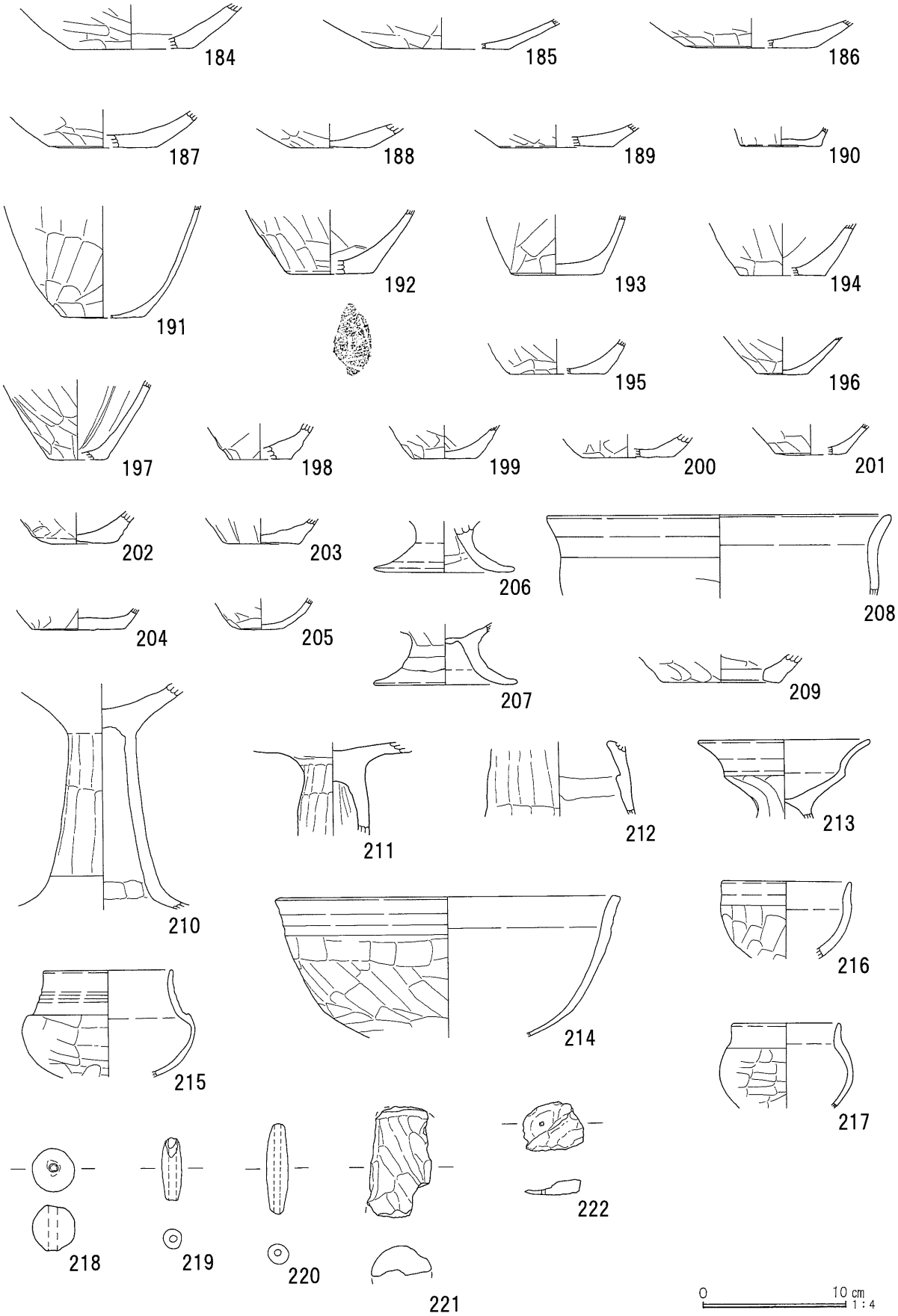
第63図　遺構外出土遺物(3)



第64図　遺構外出土遺物(4)



第65図　遺構外出土遺物(5)



第66図　遺構外出土遺物(6)

部に最大径を持つ一群であり、口縁部がほぼ直線的に開くもの（163・164）、短い口縁部が大きく外反するもの（165・167）、緩やかに外反するもの（166）などがある。甑は口縁部（208）と底部（209）がある。同一個体ではないが、ともに器壁が厚手である。高坏は脚部（212）と坏部（213）がある。212は太めで外面の調整はヘラナデであることから古相を呈する。213は口縁部が大きく外反する小振りの坏部。短い脚部が付くと思われる。214は大型の鉢。口縁部から底部に向かって徐々に器壁が薄くなる。椀は口縁部形態がそれぞれ異なる。215は坏身模倣坏の口縁部を長くした器形、216は口縁部が僅かに外反する。216は頸部にくびれを持ち、口縁部はほぼ直立する。

第66図218は土玉、221は土製支脚、222は滑石製の有孔円板である。218・222は完形品。221は先端部から中位にかけての部位で約１／２のみ検出された。221は外面に粗いヘラ削りが施されている。

第62図63・65～87・89、第64図141～144、第65図168～171、第66図206・207・219・220は奈良・平安時代の遺物である。前述のとおり、須恵器壺･甕の破片や土師器甕の底部は古墳時代との区別が難しい。須恵器に関しては同段階に該当するものが多いと思われるが、確証は得られない。

第62図63・65～87・89は須恵器。63は蓋、65～82は坏、83は皿、84・85は高台付椀、86は椀、87・89は甕である。概ね８世紀前半から９世紀後半までのものである。主に南比企産と末野産があるが、南比企産は８世紀代に多い。63は口縁部を欠くが、その径からみて坏蓋であろう。時期は８世紀後半と思われる。坏は全形のわかるものはほとんどないが、底部調整や径からみて65～69が８世紀前半から中頃、71・72は８世紀後半、73～82は９世紀後半段階に相当する。70は底部調整が回転ヘラ削りであるが、径が小さく末野産であることから９世紀後半のものであろうか。皿・高台付椀は９世紀後半段階に相当する。83は皿の底部。今回の調査で唯一検出された須恵器皿である。器壁が薄い。高台付椀は全形のわかるもの（84）と高台部（85）がある。84は口縁部が外反し、短い高台が付く。85はやや大型でハの字に開く高台が付く。84は調査区東側に広がる谷状の落ち込みからの検出であり、10号溝跡に伴うものかもしれない。86は口唇部のみ外反する椀。８世紀後半段階に相当する。甕は口縁部から頸部にかけての部位（87）と底部（89）がある。ともに末野産であるが、同一個体ではない。９世紀後半段階のものと思われる。

第64図141～144、第65図168～171、第66図206・207は土師器。141～144は坏、168～171は甕、206・207は台付甕である。坏は北武蔵型坏である。すべて浅身で底部が平底に近いが、口縁部がやや外に開くもの（141・144）とほぼ直立するもの（142・143）がある。概ね８世紀前半から中頃に相当するが、144はその器形と口縁部の横ナデの幅が広いことから新しい様相を呈する。甕は口縁部が「く」の字のもの（168・169）、「コ」の字に近いもの（170）、「コ」の字が崩れ気味のもの（171）がある。いずれも胴上部の外面調整は横位のヘラ削りが施され、器壁が薄い。168・169は８世紀中頃、170は８世紀後半、171は９世紀末頃に相当する。206・207は台付甕の台部。ともに９世紀後半段階に相当すると思われる。207は谷状の落ち込みからの検出であり、10号溝跡に伴うものかもしれない。

第66図219・220は土錘。219は上端一部を欠く。220は完形品。奈良・平安時代の遺物としたが、古墳時代の可能性もある。

第28表　遺構外出土遺物観察表

番号	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	60-86G	縄文土器深鉢	—	—	—	ABGIJN	明赤褐色	B	胴部片	晩期前半安行式。
2	一括	縄文～弥生浅鉢?	—	—	—	ABCHIN	にぶい黄橙色	B	胴部片	縄文末～弥生初頭？
3	一括	弥生土器　壺	—	(8.5)	—	ABDHIKN	にぶい黄褐色	B	口～頸90%	中期後半。
4	一括	弥生土器　壺	—	—	—	ABCGHIJKN	にぶい赤褐色	B	口～頸部片	前期末～中期初頭。
5	66-88G	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIKN	灰黄褐色	B	口～頸部片	前期末～中期初頭。
6	包含層	弥生土器　壺	—	—	—	ABEGHIK	褐灰色	B	口～頸部片	中期後半。
7	一括	弥生土器　壺	—	—	—	ABEHIK	灰黄褐色	B	肩部片	中期後半。
8	一括	弥生土器　壺	—	—	—	ABCKN	浅黄橙色	B	肩部片	中期後半。
9	包含層	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIJ	黒褐色	B	肩部片	中期後半。
10	包含層	弥生土器　壺	—	—	—	ABN	にぶい橙色	B	胴部片	中期後半。
11	一括	弥生土器　壺	—	—	—	ABEHKN	灰黄色	B	肩部片	中期後半。
12	包含層	弥生土器　壺	—	—	—	ABCGHIKN	灰黄褐色	B	胴部片	中期後半。
13	一括	弥生土器　壺	—	—	—	ABCHIJKN	浅黄橙色	B	胴部片	中期後半。
14	一括	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHJK	にぶい黄橙色	B	胴部片	中期後半。
15	一括	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIN	灰褐色	B	胴部片	中期後半。
16	一括	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIJK	にぶい褐色	B	胴部片	中期後半。
17	包含層	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIKN	にぶい橙色	B	胴部片	中期後半。
18	一括	弥生土器　壺	—	—	—	ABCHIN	浅黄橙色	B	胴部片	中期後半。
19	一括	弥生土器　甕	—	—	—	ABDHIN	にぶい褐色	B	口～頸部片	中期後半。
20	一括	弥生土器　甕	—	—	—	ABHJ	灰黄褐色	B	頸部片	中期後半。
21	包含層	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIJK	灰黄褐色	B	胴部片	中期後半。
22	一括	弥生土器　甕	—	—	—	ABEGHIK	黒褐色	B	胴上部片	中期後半。
23	包含層	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIJK	灰黄褐色	B	胴上部片	中期後半。
24	一括	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIKN	にぶい黄褐色	B	口縁部片	中期末～後期初。№26·29·30·32と同一。
25	包含層	弥生土器　甕	—	—	—	ABDGN	灰色	B	頸部片	中期末～後期初頭。№28と同一個体。
26	一括	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIKN	灰黄褐色	B	頸～胴部片	中期末～後期初。№24·29·30·32と同一。
27	包含層	弥生土器　甕	—	—	—	ABIN	浅黄橙色	B	頸部片	中期末～後期初頭。
28	包含層	弥生土器　甕	—	—	—	ABDGN	灰色	B	頸部片	中期末～後期初頭。№25と同一個体。
29	一括	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIKN	黒褐色	B	頸部片	中期末～後期初。№24·26·30·32と同一。
30	一括	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIKN	灰黄褐色	B	頸部片	中期末～後期初。№24·26·29·32と同一。
31	一括	弥生土器　甕	—	—	—	ABDHIJ	黒褐色	B	胴上部片	中期末～後期初頭。
32	一括	弥生土器　甕	—	—	—	ABHK	灰黄褐色	B	口縁部片	中期末～後期初。№24·26·29·30と同一。
33	一括	土師器　壺	(12.5)	(9.0)	—	ABCGHIKN	橙色	B	口～胴60%	磨耗顕著。
34	一括	土師器　壺	(12.5)	(5.15)	—	ABDIKN	にぶい黄橙色	B	口縁部30%	
35	一括	土師器　壺	—	(5.4)	—	ABHN	黒褐色	B	頸～肩100%	胴部内面輪積痕有。
36	一括	土師器　壺	—	(2.5)	(7.6)	ABCHIN	橙色	B	底部30%	
37	一括	土師器　坩	—	(2.4)	4.0	ABDHIN	橙色	B	底部80%	
38	一括	土師器　甕	(18.4)	(6.5)	—	ABGHIN	にぶい黄褐色	B	口～胴25%	口縁部外面・胴部内面輪積痕有。
39	一括	土師器台付甕	—	(5.3)	(9.4)	ABEGHJN	橙色	B	台部80%	接合部外面輪積痕有。
40	包含層	土師器台付甕	—	(5.25)	—	ABCEHJN	にぶい黄色	B	接合部100%	
41	包含層	土師器　高坏	—	(4.5)	9.4	ABCHIKN	明赤褐色	B	脚部90%	磨耗顕著。
42	包含層	土師器　高坏	—	(4.3)	(17.0)	ABHJKN	にぶい黄橙色	A	脚部20%	外面磨耗顕著。透孔有。
43	60-89G	土師器　高坏	—	(6.1)	—	ABCGKN	橙色	B	脚部40%	外面磨耗顕著。透孔有。
44	一括	土師器　器台	(11.6)	(1.85)	—	ABDHJN	橙色	B	口縁部20%	
45	包含層	土師器　椀	(7.9)	(3.15)	—	ABDHIN	灰黄色	B	口～胴25%	
46	一括	土師器　壺	—	—	—	ABCN	浅黄橙色	B	口縁部片	磨耗顕著。
47	一括	土師器　壺	—	—	—	ABDN	浅黄橙色	B	口～頸片	外面下位赤彩。
48	包含層	土師器　甕	—	—	—	ABHIN	橙色	B	口縁部片	
49	包含層	土師器　甕	—	—	—	ABCHJN	明赤褐色	B	口縁部片	
50	包含層	土師器　甕	—	—	—	ABCHJN	橙色	B	口～肩部片	
51	一括	土師器　甕	—	—	—	AEIK	橙色	B	口～肩部片	
52	一括	土師器　甕	—	—	—	ABIN	にぶい黄橙色	B	口～肩部片	
53	包含層	土師器　甕	—	—	—	ABEHJN	にぶい橙色	B	肩部片	
54	一括	土師器　甕	—	—	—	ABCHJN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	
55	一括	土師器　甕	—	—	—	ABHKN	明赤褐色	B	胴部片	
56	一括	土師器　甕	—	—	—	ACHKN	橙色	B	胴下部片	
57	一括	土師器　甕	—	—	—	ABCEGKN	明黄褐色	B	胴下部片	
58	一括	土師器　甕	—	—	—	ABCH	外:黒褐　内:明褐	B	胴下部片	外面輪積痕有。
59	包含層	土師器台付甕	—	—	—	ABCHJ	にぶい橙色	B	台部片	
60	一括	土師器台付甕	—	—	—	ABHKN	明赤褐色	B	台部片	

番号	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
61	包含層	土師器　高坏	—	—	—	ABGHN	灰黄褐色	B	口縁部片	
62	一括	須恵器　蓋	(17.2)	(2.8)	—	ABHN	灰白色	B	15%	
63	一括	須恵器　蓋	—	(1.4)	—	ABFN	灰色	B	天井部50%	南比企産。
64	一括	須恵器　坏	(12.2)	(1.75)	—	AB	灰白色	B	口縁部20%	
65	一括	須恵器　坏	(14.7)	3.5	(9.1)	ABFN	灰色	B	45%	南比企産。
66	一括	須恵器　坏	—	(3.5)	(9.6)	ABHN	灰色	A	体～底15%	
67	一括	須恵器　坏	—	(2.4)	(8.3)	ABFN	灰白色	B	体～底40%	南比企産。
68	一括	須恵器　坏	—	(1.55)	(10.2)	ABFN	灰色	B	体～底30%	南比企産。
69	一括	須恵器　坏	—	(0.8)	(10.0)	ABFN	灰色	B	底部25%	南比企産。
70	一括	須恵器　坏	—	(0.9)	(6.8)	ABHL	灰白色	B	底部20%	末野産。
71	一括	須恵器　坏	—	(0.7)	(8.8)	ACFN	にぶい赤褐色	A	底部20%	南比企産。
72	一括	須恵器　坏	—	(1.2)	(8.8)	ABFN	黄灰色	B	底部25%	南比企産。
73	一括	須恵器　坏	(13.6)	3.9	6.0	ABCHK	褐灰色	C	60%	酸化焔焼成。
74	一括	須恵器　坏	—	(2.6)	(7.7)	ABCN	にぶい褐色	B	体～底20%	
75	一括	須恵器　坏	—	(2.3)	(6.6)	ABDL	灰色	B	体～底25%	末野産。
76	包含層	須恵器　坏	—	(1.8)	(7.1)	AB	灰白色	B	体～底25%	
77	一括	須恵器　坏	—	(1.2)	(7.5)	ABFN	灰色	B	底部25%	南比企産。
78	一括	須恵器　坏	—	(0.8)	5.9	ABCFN	灰色	B	底部50%	南比企産。
79	包含層	須恵器　坏	—	(1.1)	(6.9)	ABHL	灰色	A	底部25%	末野産。
80	一括	須恵器　坏	—	(1.0)	(6.2)	AFN	灰色	B	底部25%	南比企産。
81	谷状落込	須恵器　坏	—	(1.3)	(5.8)	ABHLN	灰色	B	底部30%	末野産。
82	一括	須恵器　坏	—	(0.7)	(6.3)	AFHN	灰色	B	底部25%	南比企産。
83	一括	須恵器　皿	—	(1.2)	(6.1)	AHL	黄灰色	B	底部30%	末野産。
84	谷状落込	須恵器高台椀	(13.7)	5.6	7.3	ABCLN	灰色	B	40%	末野産。
85	包含層	須恵器高台椀	—	(2.8)	(10.8)	ABCHL	灰色	B	高台部20%	末野産。
86	一括	須恵器　椀	(17.6)	(5.55)	—	ABDFHN	灰白色	A	口～体15%	南比企産。
87	包含層	須恵器　甕	(15.3)	(5.85)	—	ABL	灰色	B	口～頸50%	末野産。内外面自然釉付着。
88	一括	須恵器　甕	—	(2.2)	8.5	ABL	灰白色	A	底部100%	末野産。
89	一括	須恵器　甕	—	(2.9)	(12.9)	ABL	灰色	B	底部100%	末野産。
90	一括	須恵器　高坏	(10.4)	(9.05)	—	ABL	灰色	B	40%	末野産。内外面自然釉付着。
91	一括	須恵器　高坏	—	(2.4)	(9.2)	ABN	灰色	B	脚裾部20%	
92	谷状落込	須恵器　瓶類	6.0	(6.2)	—	ABLN	灰色	B	口縁部80%	末野産。内面自然釉付着。
93	包含層	須恵器　瓶類	(9.0)	(6.8)	—	AB	灰色	B	口縁部40%	
94	谷状落込	須恵器　甕	—	—	—	AFHN	灰色	B	頸～肩部片	南比企産。
95	一括	須恵器　甕	—	—	—	ABEFN	黄灰色	B	頸～肩部片	南比企産。
96	一括	須恵器　甕	—	—	—	ABL	灰色	B	頸部片	末野産。内外面自然釉付着。
97	包含層	須恵器　甕	—	—	—	ABHL	灰白色	B	頸部片	末野産。
98	一括	須恵器　甕	—	—	—	ABN	灰色	B	頸部片	内面自然釉付着。
99	谷状落込	須恵器　甕	—	—	—	ABL	黄灰色	B	頸部片	末野産。
100	包含層	須恵器　甕	—	—	—	ABN	灰白色	B	肩部片	
101	包含層	須恵器　甕	—	—	—	ABFN	灰色	B	胴上部片	南比企産。
102	一括	須恵器　甕	—	—	—	AB	灰色	B	胴上部片	外面自然釉付着。
103	一括	須恵器　甕	—	—	—	ABL	明褐灰色	B	胴上部片	末野産。
104	一括	須恵器　甕	—	—	—	ABL	青灰色	B	胴上部片	末野産。
105	包含層	須恵器　甕	—	—	—	ABFN	灰色	B	胴部片	南比企産。
106	包含層	須恵器　甕	—	—	—	ABHL	灰白色	A	胴部片	末野産。
107	一括	須恵器　甕	—	—	—	ABFN	外:灰　内:褐灰	B	胴部片	南比企産。
108	66-88G	須恵器　甕	—	—	—	ADFN	灰色	B	胴部片	南比企産。外面自然釉付着。
109	一括	須恵器　甕	—	—	—	ABFN	灰色	B	胴下部片	南比企産。
110	一括	須恵器　甕	—	—	—	ABL	灰色	B	胴下部片	末野産。
111	61-87G	須恵器　甕	—	—	—	AB	灰色	B	胴下部片	外面上位・内面下位自然釉付着。
112	包含層	須恵器　甕	—	—	—	ABL	灰色	B	胴下部片	末野産。内外面自然釉付着。
113	一括	須恵器　甕	—	—	—	ADL	褐灰色	C	胴下部片	末野産。
114	一括	須恵器　甕	—	—	—	ABHN	灰白色	B	胴下部片	
115	一括	須恵器　甕	—	—	—	ABHL	灰色	B	胴下部片	末野産。
116	一括	須恵器　甕	—	—	—	AB	灰白色	B	胴下部片	外面上位自然釉付着。
117	一括	須恵器　壺	—	—	—	AB	灰色	B	肩部片	
118	一括	須恵器　瓶類	—	—	—	ABN	灰色	B	肩部片	
119	一括	須恵器　瓶類	—	—	—	AEHN	灰色	A	肩部片	
120	包含層	土師器　坏	(12.4)	4.4	—	ABCHK	橙色	B	50%	
121	一括	土師器　坏	12.5	4.2	—	ABEHJKN	にぶい橙色	B	90%	

番号	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
122	包含層	土師器　坏	(12.0)	(3.5)	—	ABGHK	橙色	B	30%	
123	包含層	土師器　坏	(10.8)	(3.3)	—	ABDKN	橙色	B	40%	
124	一括	土師器　坏	(11.0)	(2.95)	—	ABDHKN	橙色	B	10%	
125	包含層	土師器　坏	(10.9)	3.55	—	ABHKN	橙色	B	50%	磨耗顕著。
126	包含層	土師器　坏	(11.2)	(3.25)	—	ABEHIKN	橙色	B	25%	
127	一括	土師器　坏	(11.4)	(4.2)	—	ABCHKN	橙色	B	20%	
128	包含層	土師器　坏	(10.6)	(3.15)	—	ABCHN	にぶい橙色	B	45%	
129	包含層	土師器　坏	(12.4)	(2.55)	—	ABCHJN	橙色	B	20%	比企型坏。内面・口縁部外面赤彩。
130	一括	土師器　坏	(11.2)	(3.1)	—	ABDHJN	橙色	B	45%	
131	包含層	土師器　坏	9.8	3.2	—	ABK	橙色	B	50%	磨耗顕著。
132	一括	土師器　坏	(10.9)	2.85	—	ABGHKN	橙色	B	75%	
133	63-85G	土師器　坏	(11.8)	(3.1)	—	ABEIK	橙色	B	40%	
134	包含層	土師器　坏	(12.0)	(3.3)	—	ABCHJN	黄灰色	B	30%	
135	谷状落込	土師器　坏	(11.8)	(3.7)	—	ABCKN	橙色	B	20%	
136	一括	土師器　坏	(12.5)	4.2	—	ABEHJKN	橙色	B	60%	
137	一括	土師器　坏	(12.4)	(3.15)	—	ABDHJKN	にぶい橙色	B	25%	
138	一括	土師器　坏	(14.8)	(4.3)	—	ABJKN	明赤褐色	B	30%	外面磨耗顕著。
139	一括	土師器　坏	(13.0)	3.25	—	ABDHKN	にぶい橙色	B	30%	
140	包含層	土師器　坏	(12.1)	3.05	—	ABEGHK	橙色	B	75%	
141	一括	土師器　坏	(13.2)	(2.65)	—	ABCHIJKN	橙色	B	20%	
142	一括	土師器　坏	(14.8)	3.4	—	ABHIKN	橙色	B	45%	
143	一括	土師器　坏	(13.8)	3.15	—	ABGHIK	明赤褐色	B	40%	
144	一括	土師器　坏	(13.5)	3.3	—	ABCHKN	にぶい黄橙色	B	30%	
145	包含層	土師器　坏	—	—	—	ABCGHKN	明赤褐色	B	口～体部片	内面放射状暗文有。
146	包含層	土師器　坏	—	—	—	ABCHJKN	明赤褐色	B	口～体部片	内面放射状暗文有。
147	一括	土師器　坏	—	—	—	ABCHJK	橙色	B	口～体部片	内面放射状暗文有。
148	一括	土師器　坏	—	—	—	ABKN	明赤褐色	B	口～体部片	内面放射状暗文有。
149	一括	土師器　坏	—	—	—	ABGHK	橙色	B	口～体部片	内面放射状暗文有。
150	一括	土師器　坏	—	—	—	ABEKN	明赤褐色	B	口～体部片	内面放射状暗文有。
151	一括	土師器　皿	(17.8)	(3.3)	—	ABCHKN	橙色	B	20%	
152	包含層	土師器　皿	(16.3)	3.6	—	ABCEHJN	にぶい褐色	B	70%	
153	一括	土師器　皿	(20.8)	(2.5)	—	ABCHKN	橙色	B	10%	
154	一括	土師器　壺	(12.8)	20.45	7.8	ABGHJKN	にぶい黄橙色	B	70%	胴部ヘラナデ調整。内面輪積痕有。
155	一括	土師器　甕	15.0	(14.5)	—	ABDGHJKN	にぶい橙色	B	口～胴60%	胴部ハケメ・ヘラナデ調整。
156	一括	土師器　甕	(18.2)	(7.5)	—	ABCEGHN	橙色	B	口～胴30%	
157	包含層	土師器　甕	(16.6)	(5.3)	—	ABEHIKN	にぶい黄橙色	B	口～胴25%	
158	一括	土師器　甕	(22.4)	(5.4)	—	ABDGHJ	明赤褐色	B	口縁部20%	口縁部外面輪積痕有。
159	一括	土師器　甕	(20.6)	(4.5)	—	ABCHMN	橙色	B	口縁部20%	
160	包含層	土師器　甕	(12.4)	(7.0)	—	ABCIN	橙色	B	口～胴20%	
161	62-87G	土師器　甕	(16.6)	(11.7)	—	ABCGHIN	橙色	B	口～胴30%	胴部ヘラナデ調整。
162	包含層	土師器　甕	(16.4)	(9.2)	—	ABDHKN	にぶい赤褐色	A	口～胴25%	
163	一括	土師器　甕	(22.6)	(9.15)	—	ABEHN	にぶい橙色	B	口～胴25%	
164	一括	土師器　甕	(17.4)	(27.6)	—	ABCHIKN	灰黄褐色	B	口～胴20%	胴部内面輪積痕有。
165	一括	土師器　甕	(24.6)	(6.15)	—	AEHIMN	にぶい褐色	B	口～胴25%	
166	一括	土師器　甕	(21.8)	(6.95)	—	ABCEHIKN	橙色	B	口～胴25%	
167	一括	土師器　甕	(23.7)	(3.05)	—	ABCHMN	橙色	B	口縁部20%	
168	一括	土師器　甕	(21.0)	(6.4)	—	ABCDHJM	橙色	B	口～胴20%	口縁部外面輪積痕有。
169	包含層	土師器　甕	(18.0)	(6.6)	—	ABCHKN	にぶい赤褐色	B	口～胴25%	
170	一括	土師器　甕	(18.0)	(6.3)	—	ABEHJKN	橙色	B	口～胴40%	
171	一括	土師器　甕	(11.9)	(5.4)	—	ABDHJK	にぶい赤褐色	B	口～胴25%	
172	包含層	土師器　甕	—	(1.8)	(7.1)	ABMN	にぶい褐色	B	底部25%	ヘラナデ調整。底面木葉痕有。磨耗顕著。
173	一括	土師器　甕	—	(2.05)	(9.3)	ABCHIJKN	赤褐色	B	底部25%	ヘラナデ調整。
174	一括	土師器　甕	—	(1.8)	(7.5)	ABGHJKN	にぶい赤褐色	B	底部35%	ヘラナデ調整。
175	包含層	土師器　甕	—	(3.0)	(8.0)	ABCHIN	橙色	B	底部20%	ヘラナデ・ヘラ削り調整。外面やや磨耗。
176	包含層	土師器　甕	—	(2.05)	(13.9)	BDHIN	浅黄橙色	B	底部25%	
177	包含層	土師器　甕	—	(1.7)	(8.4)	ABCEHJN	明赤褐色	B	底部25%	
178	包含層	土師器　甕	—	(2.5)	(9.0)	ABCHKN	明赤褐色	B	底部25%	
179	一括	土師器　甕	—	(2.25)	(10.2)	ABHIK	外:橙　内:褐灰	B	底部20%	
180	一括	土師器　甕	—	(1.6)	5.5	ABCEGHIN	にぶい橙色	B	底部100%	外面輪積痕有。底面木葉痕有。
181	一括	土師器　甕	—	(3.85)	(10.5)	ABCDHJKN	灰黄褐色	B	底部20%	
182	一括	土師器　甕	—	(4.3)	8.0	ABCDHJKN	浅黄橙色	B	底部100%	

番号	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
183	一括	土師器　甕	—	(3.0)	7.6	ABEJN	にぶい橙色	B	底部50%	磨耗顕著。
184	包含層	土師器　甕	—	(3.15)	(8.7)	ABDHKN	淡橙色	B	底部25%	
185	包含層	土師器　甕	—	(2.2)	(9.7)	ABCGHKN	灰白色	B	底部25%	
186	包含層	土師器　甕	—	(2.05)	(9.2)	ABDHIJK	にぶい橙色	B	底部30%	
187	包含層	土師器　甕	—	(2.7)	(7.7)	ABCDHIKN	灰白色	B	底部30%	
188	包含層	土師器　甕	—	(1.65)	(5.7)	ABEHKN	にぶい黄橙色	B	底部25%	
189	一括	土師器　甕	—	(1.6)	(8.2)	ABCH	橙色	B	底部25%	ヘラナデ調整。
190	一括	土師器　甕	—	(1.4)	(5.8)	ABCIJKN	にぶい橙色	B	底部70%	ヘラナデ調整。
191	一括	土師器　甕	—	(7.9)	(5.8)	ABEHN	橙色	B	胴～底60%	
192	66-89G	土師器　甕	—	(4.45)	(6.1)	ABCGHIKN	橙色	B	底部30%	底面木葉痕有。
193	包含層	土師器　甕	—	(4.2)	(6.5)	ABCHIJKN	橙色	B	底部100%	
194	一括	土師器　甕	—	(3.7)	(6.0)	ABCHKN	にぶい褐色	B	底部30%	
195	一括	土師器　甕	—	(2.45)	(6.6)	ABCGHJKN	橙色	B	底部25%	
196	一括	土師器　甕	—	(2.7)	(3.6)	ABCHK	にぶい黄褐色	B	底部25%	
197	包含層	土師器　甕	—	(5.6)	(4.1)	ABDHIN	にぶい黄橙色	B	胴～底30%	
198	包含層	土師器　甕	—	(2.55)	(4.3)	ABCHKN	にぶい褐色	B	底部25%	
199	一括	土師器　甕	—	(2.35)	(4.6)	ABCHJKN	明赤褐色	B	底部25%	
200	包含層	土師器　甕	—	(1.65)	(6.5)	ABEGHKN	橙色	B	底部25%	
201	包含層	土師器　甕	—	(2.2)	(5.1)	ABDGHJN	外:黒　内:褐	B	底部25%	
202	62-87G	土師器　甕	—	(2.2)	(6.0)	ABEIKN	にぶい赤褐色	B	底部100%	
203	一括	土師器　甕	—	(1.8)	(5.3)	ABDHN	にぶい橙色	B	底部60%	
204	一括	土師器　甕	—	(1.45)	(6.6)	ABCHIKN	浅黄橙色	B	底部45%	
205	包含層	土師器　甕	—	(2.15)	(3.2)	ABDGHN	灰黄褐色	B	底部100%	
206	一括	土師器台付甕	—	(3.6)	(10.0)	ABHKN	にぶい黄橙色	B	台部100%	
207	谷状落込	土師器台付甕	—	(4.3)	(10.2)	BDHK	灰白色	B	台部70%	外面輪積痕有。
208	一括	土師器　甑	(24.6)	(5.6)	—	ABHIKN	赤褐色	B	口～胴25%	
209	包含層	土師器　甑	—	(2.0)	(8.2)	ACGHIN	にぶい黄褐色	B	底部20%	
210	包含層	土師器　高坏	—	(15.85)	—	ABCHN	橙色	B	坏～脚40%	
211	一括	土師器　高坏	—	(6.6)	—	ABEMN	浅黄橙色	B	接合部100%	
212	包含層	土師器　高坏	—	(5.2)	—	ABCDHKN	橙色	B	脚部40%	
213	一括	土師器　高坏	(12.2)	(5.6)	—	ABJKN	にぶい黄橙色	B	坏部40%	
214	一括	土師器　鉢	(24.4)	(9.9)	—	ABEHKM	にぶい橙色	B	口～胴25%	
215	一括	土師器　椀	(9.2)	(7.6)	—	ABGHKN	灰白色	B	40%	
216	包含層	土師器　椀	(9.2)	(5.45)	—	ABDIJN	橙色	B	30%	
217	一括	土師器　椀	(7.8)	(6.0)	—	ABHIKN	にぶい黄橙色	B	15%	
218	谷状落込	土　玉	最大径3.0cm、孔径0.6cm。重量26.8g。完形。							
219	一括	土　錘	最大長4.45cm、最大幅1.35cm、孔径0.55cm。重量（6.0）g。上端一部欠。							
220	包含層	土　錘	最大長6.4cm、最大幅1.5cm、孔径0.45cm。重量11.8g。完形。							
221	包含層	土製支脚	最大長（7.85）cm、最大幅（4.3）cm。胎土：ABCH。色調：褐色。焼成：B。先端部～中位50%残存。							
222	包含層	有孔円板	最大長4.2cm、最大幅3.35cm、最大厚1.0cm。重量15.6g。滑石製。完形。							

V　調査のまとめ

藤之宮遺跡における発掘調査及び報告は今回が初となる。調査は区画整理に伴う街路築造部分のみであり、かつ一部の調査であったことから現時点で遺跡の全貌を把握することは困難である。しかし、確認された遺構や地形からその様相の一端を明らかにすることはできたと言える。紙数に限りもあるため、ここでは検出された遺構のうち、弥生時代末から古墳時代前期にかけての集落跡と古墳時代中期の祭祀跡が確認された３号溝跡土器集中地点に重点を置き、続いてその他の時代及び時期の遺構、そして最後に地形から明らかになった遺跡の範囲について簡単に述べてみたい。

弥生時代末から古墳時代前期の集落跡について

藤之宮遺跡の所在する上之地区では、古墳時代前期の遺構は隣接する諏訪木遺跡で溝跡が確認されていることから周辺に集落跡が存在することは想定されていたが、住居跡が確認されたのは今回が初めてである。また、弥生時代末から古墳時代初頭段階に相当する住居跡が確認されたのも初めてとなる。

検出された遺構で該当するのは、３・４・６・８～11・16・21号住居跡と３号溝跡である。３号溝跡は詳細については第Ⅳ章のとおりであるが、出土遺物から掘削期は古墳時代前期であり、同段階にも該当する。

各遺構からは時期を特定できる土器が比較的まとまって検出された。重複する遺構の新旧関係を基に出土土器を分析すると、主に壺と台付甕ないし甕の器形や調整技法から集落跡の変遷を辿ることができる。まず壺は口縁部形態が複合口縁から素口縁に、調整はヘラミガキないしハケメからヘラナデへと移行する。台付甕及び甕は、口唇部に刻みを持つものから無いものへ、台付甕は台部調整がハケメからヘラナデへと移行する。これらのことを踏まえると、本遺跡の集落跡の変遷は以下のとおりになる。

集落跡の上限となるのは４・21号住居跡である。４号住居跡では肩部文様帯に縄文や刺突列を施文し、赤彩の施された壺（第９図４～８）やヘラミガキの広口壺（同図１）がある。台付甕（同図２）は口唇部に刻みを持ち、口縁部から台部までハケメが施される。21号住居跡は壺のみであるが、ハケメ調整のもの（第30図２）と複合口縁外面に羽状縄文、内面はヘラミガキ調整で赤彩が施されたもの（同図３）がある。次に続くのは６号住居跡である。壺（第12図１）は複合口縁に棒状浮文が付き、ヘラミガキ調整である。台付甕（同図２・３・６）は、２・３が胴部から台部までハケメ調整が主体となるが、６は台部のみヘラナデであり、次段階につながる要素を持つ。６号住居跡では残存状態の良好な東海地方元屋敷系の有段高坏（同図７）も検出されている。６号住居跡と併行もしくはやや後出的なのは８号住居跡である。８号住居跡ではヘラミガキを主体とする広口壺（第14図１）が検出されており、４号住居跡の広口壺に後続するものであろう。台付甕（同図２）は台部外面の調整にハケメとヘラナデが併用されており、過渡的な様相を呈する。８号住居跡に後続するのは11号住居跡である。遺物は外来系と思われるタタキ調整の台付甕（第18図１～５）のみである。次に続くのは９・10・16号住居跡である。若干時期差を持つと思われるが、全形の分かる土器がほとんどないため、その対比が難しい。10・16号住居跡では破片であるが、いくつかの器種が比較的まとまって検出された。９号住居跡はヘラミガキの壺（第15図２）と胴部調整がハケメの甕（同図１・３）がある。10号住居跡では、壺は素口縁でハケメ主体のもの（第17図１）とヘラミガキのもの（同図２・６・７）がある。台付甕は台部の調整がハケメとヘラナデを併用するもの（同図12・14）とハケメのみのもの（同図13）があり、この段階も過渡的な様相を呈している。16号住居跡は

壺（第25図１・９・10）がヘラミガキ調整であり、口縁部は素口縁である。台付甕及び甕はハケメ調整の胴部片のみであるため把握できないが、おそらくハケメのみかヘケメとヘラナデを併用するものと思われる。次に続くのは３号住居跡と３号溝跡である。今回検出された古墳時代前期の遺構で最も新しい段階に位置づけられる。３号住居跡では壺（第８図１・10～14）がこれまでと一変してヘラナデ調整のものが主体となり、台付甕（同図２～７）の台部調整もヘラナデが主体となる。３号溝跡は一部流れ込みと思われるもの（第44図20、第45図22・26～28）も含まれるが、伴う台付甕の台部（第45図21・23～25）と椀（第47図72）はヘラナデ調整が主体となる。以上の変遷を図式化すると、次のようになる。

４・21号住居跡→６号住居跡（→）８号住居跡→11号住居跡→９・10・16号住居跡→３号住居跡・３号溝跡

集落跡は概ね５段階に大別され、ほぼ絶えることなく営まれていたことが明らかとなったが、出土土器の様相から４・21号住居跡と６号住居跡間に空白期間が見受けられる。また21号住居跡からは流れ込み遺物に前期でも新しい段階のもの（第30図１・４・５）が存在することから、集落跡の下限はさらに延びる可能性がある。空白期間及び下限に相当する遺構の有無については、今後の調査成果を待ちたい。

なお、隣接する諏訪木遺跡では本遺跡に向かって走る前期の溝跡（６号溝跡）が検出されている（熊谷市教育委員会2007）。出土土器にはヘラミガキ調整で赤彩された複合口縁壺や全面ハケメ調整の台付甕などがあることから時期的には６号住居跡よりも古い段階に相当すると思われる。また、今回の調査ではＳ字甕が図化しなかった小片も含めて僅か１点のみ（第30図４）の検出であった点は、北武蔵地域の前期集落跡におけるＳ字甕の状況を考えると疑問が残る。諏訪木遺跡の６号溝跡との関係、そしてＳ字甕の僅少さについても今後の調査成果を待って検討してみたい。

第３号溝跡土器集中地点について

はじめに出土土器の具体的な時期について述べる。出土土器は、一部流れ込みのもの（第44図11、第45図21、第47図72）が含まれるが、大半は５世紀代のいわゆる和泉式に相当する。該当する土器は、壺（第44図18・19、第47図67）、甕（第45図29～31、第46図43・45）、高坏（第46図55～60、第47図61～64・66・69・70）、台付椀（第47図71）、椀（第47図73・74）、甑（第47図75）である。これらは第41図のとおり、出土位置が４つのブロック（ａ～ｄ）と単独出土に分けられるが、各ブロック間で土器を比較してみると、時期差があることが認められた。５世紀代の土器については、深谷市域における４・５世紀の土器編年を提示した中村倉司氏の案（埼玉県埋蔵文化財調査事業団1999）があることから、氏の案を基にその時期を追うと以下のとおりになる。

まず最も古い段階に位置づけられるのはブロックｂである。該当する土器は、壺（18・19）、甕（31・43・45）、高坏（55・63・64）である。ハケメが残り、口縁部が短い壺（18）や脚部がヘラミガキ調整の高坏(55)などから中村氏の編年でⅤ期に相当する。次に続くのはブロックａである。該当するのは、高坏(56・57・61・66・70)、台付椀（71）、椀（73）、甑（75）であるが、時期に幅がみられた。新古二段階に大別され、古相を示すものは56・57・66・73・75、新相を示すものは61・70・71である。前者は高坏の脚部調整がヘラミガキのもの（56）とヘラナデのもの（57・66）があることからさらに新旧関係が認められる。古相がⅤ期、新相はⅥ期に相当する。ａに続くのはブロックｄである。該当するのは、甕（30）、高坏（58）、椀（74）である。胴部調整がヘラナデでやや長胴化した甕、器高の低い高坏、扁平化した椀からⅥ期に相当する。最も新しい段階に位置づけられるのがブロックｃである。該当するのは、甕（29）と高坏（60）で

ある。甕はやや長胴化し、胴部の調整が上位にヘラナデ、下位にヘラ削りが施されることから古墳時代後期との過渡的な様相を呈する。高坏はブロックｄの58と同じく器高が低い。これらはⅥ～Ⅶ期に相当する。

次に単独出土の土器について述べる。該当するのは、壺（67）、高坏（59・62・69）である。67は口縁部に段を持つことからⅤ期に相当し、ブロックｂとほぼ同時期と思われる。59は器形がｄの58やｃの60に似ていることからⅥ期前後に相当する。62は坏部下位の稜が不明稜であることからブロックａ新相段階の61に近いが、脚部の膨らみが小さいことから61より若干古い段階のⅥ期に相当する。69は脚部のみであるため特定が難しいが、その短さなどから概ねⅥ期に相当すると思われる。

以上をまとめると、ブロックはｂ→ａ→ｄ→ｃという流れが捉えられ、単独出土の土器も４つのブロックの時期、特にⅥ期段階に収まる。土器集中地点出土土器は、中村編年のⅤ期からⅦ期に相当し、５世紀でも新しい段階が中心となる。

３号溝跡土器集中地点は、出土土器の残存状態の良さ、穿孔土器の存在、そしてその出土状況から水辺に際して土器を供え、何らかの儀礼が行われた痕跡と思われる。水辺の祭祀については、出土遺物や規模に違いがあるものの、隣接する諏訪木遺跡で古墳時代後期から平安時代にかけて河川跡での祭祀跡が確認されている（熊谷市遺跡調査会2001）。藤之宮遺跡周辺ではこうした行為が行われる土壌にあったことが窺えるが、祭祀の具体的な内容などについては不明と言わざるを得ない。

なお、今回の調査では土器集中地点に伴う住居跡は明確には確認されなかった。可能性があるものとしては12・13号住居跡があるが、ともに出土土器が甕のみであり、何とも言い難い。５世紀代の遺構は隣接する前中西遺跡で少数ながら住居跡や土坑が確認されている（熊谷市教育委員会2002）が、これらは古墳時代前期との過渡的な様相を呈する一群であり、本遺跡土器集中地点よりも古い段階に相当する。土器集中地点に伴う集落跡が周辺に存在することは間違いなく、今後の調査で確認されるだろう。

次に上記以外の時代及び時期について述べる。まず縄文時代について。縄文時代は晩期前半の土器片が１点のみ検出されている。今回の調査では遺構が検出されなかったが、集落跡は諏訪木遺跡で確認されていることからその影響と思われる。次に弥生時代について。方形周溝墓が１基のみであるが、検出されたことから墓域であることが明らかとなった。方形周溝墓は隣接する前中西遺跡でもほぼ同時期のものが確認されているが、距離で約0.5km離れており、地形的にも両遺跡間に小河川が流れていることから同一の墓域とは考えにくい。古墳時代後期から末頃及び奈良・平安時代の集落跡については、高台縁辺部から谷状落ち込みにかけて排水用と思われる溝跡が掘削されたことにより縁辺部に近い所まで住居跡や掘立柱建物跡が位置する。溝跡は前者の集落跡に付随するものがほぼ直線的、後者に付随するものは蛇行して走る。前者の集落跡は主に７世紀代のものが多く検出されたが、土坑や遺構外出土遺物には６世紀後半段階のものもあることから周辺に集落跡が存在する可能性が高い。また、古墳時代後期の円筒埴輪片が１点出土したが、これは本遺跡東側に分布する上之古墳群からの影響と思われる。時代及び時期の不明な遺構は、土坑をはじめとしていくつか検出されたが、これらについては今回の調査で確認された弥生時代を除くいずれかの時代及び時期に該当することは間違いない。

最後に地形から明らかになった遺跡の範囲について述べる。調査区は東西に細長いトレンチ状を呈するが、その東西で地形に違いがみられた。西側は高台、東側には谷状の落ち込みが広がっており、東端では東に向かって徐々に上がり、諏訪木遺跡や上之古墳群が所在することとなる。よって、藤之宮遺跡

と諏訪木遺跡及び上之古墳群は、今回確認された谷状の落ち込みを挟んで立地すると思われ、調査区東端で検出された15～19号溝跡や29号土坑、ピット群については諏訪木遺跡の西端と捉えた方が妥当であろう。また、今回の調査地点は遺跡範囲北東端にあたるが、検出された遺構の配置や等高線からみると遺跡は北西方向に広がる可能性が高い。藤之宮遺跡の範囲については修正の余地があると思われ、今後調査の機会を得た際に確認したい。

以上、紙数の都合もあり、駆足で述べた。不足な面があることは否めないが、本書が熊谷市の埋蔵文化財資料として今後活用していただけたら幸いである。

引用・参考文献

熊谷市遺跡調査会　2001　『諏訪木遺跡』

熊谷市教育委員会　1979　『中条条里遺跡調査報告書Ⅰ』

1980　『中条遺跡群・中島遺跡』

1982　『中条遺跡群Ⅲ　権現山古墳・常光院東遺跡』

1982　『中条遺跡群』

1983　『めづか』

1988　『寺東・八反田・東耕地・入川・深町遺跡』

1999　『横間栗遺跡』

2000　『寺東遺跡・別府氏館跡』

2001　『肥塚中島遺跡・出口上遺跡・出口下遺跡・肥塚古墳群14・15・16号墳』

2002　『前中西遺跡Ⅱ』

2003　『前中西遺跡Ⅲ』

2004　『籠原裏遺跡』

2007　『諏訪木遺跡Ⅱ・上之古墳群第２号墳』

埼玉県遺跡調査会　1971　『横塚山古墳』

埼玉県教育委員会　1984　『池守・池上』

1988　『埼玉の中世城館跡』

㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1989　『北島遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第81集

1989　『北島遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第88集

1991　『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集

1991　『北島遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第103集

1993　『上敷免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第128集

1999　『岡部条里／戸森前』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第217集

2002　『北島遺跡Ⅴ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第278集

2002　『池上／諏訪木』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第283集

2003　『北島遺跡Ⅵ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第286集

2004　『北島Ⅷ／田谷』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第292集

2007　『諏訪木遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第336集

写　真　図　版

図版1

調査区全景
（真上から）

調査区遠景
（北東から）

図版２

第２号住居跡

第５号住居跡

第３号住居跡

第６号住居跡

第３号住居跡遺物出土状況

第６号住居跡遺物出土状況（1）

第４号住居跡

第６号住居跡遺物出土状況（2）

第６号住居跡遺物出土状況（3）

第８号住居跡遺物出土状況

第６号住居跡遺物出土状況（4）

第９号住居跡

第７号住居跡

第10号住居跡

第８号住居跡

第11号住居跡

図版４

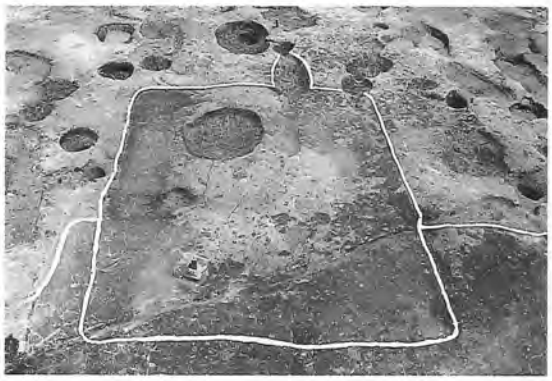
第12号住居跡

第16号住居跡

第13号住居跡

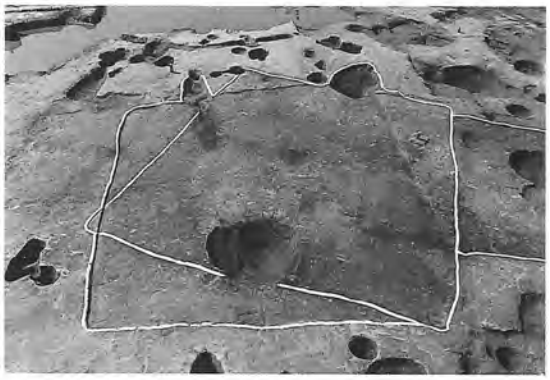
第16号住居跡遺物出土状況

第14号住居跡

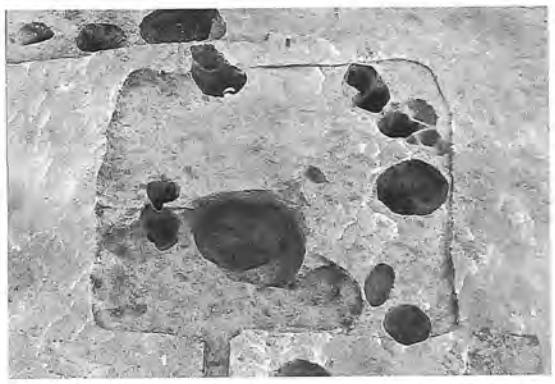


第17号住居跡

第15号住居跡・第２号井戸跡



第18・19号住居跡



第20号住居跡

第１号溝跡

第１号掘立柱建物跡

第３号溝跡
（南西から）

第２号掘立柱建物跡遺物出土状況

第３号溝跡
（北東から）

第５号掘立柱建物跡

図版６

第３号溝跡土器集中地点遺物出土状況（1）

第３号溝跡土器集中地点遺物出土状況（2）

第３号溝跡土器集中地点遺物出土状況（3）

第３号溝跡土器集中地点遺物出土状況（4）

第３号溝跡土器集中地点遺物出土状況（5）

第３号溝跡土器集中地点遺物出土状況（6）

第３号溝跡土器集中地点遺物出土状況（7）

第３号溝跡土器集中地点遺物出土状況（8）

第４～６号溝跡

第９号溝跡遺物出土状況（2）

第８・９号溝跡

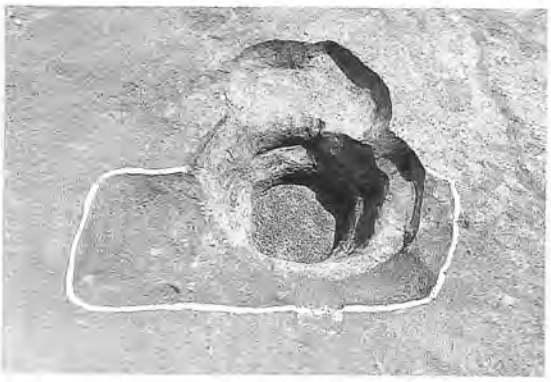
第８～14号溝跡（北西から）

第８～14号溝跡（南東から）

第９号溝跡遺物出土状況（1）

図版８

第10号溝跡



第３・４号土坑・第３号井戸跡

第５号土坑

第10～14号溝跡

第６号土坑

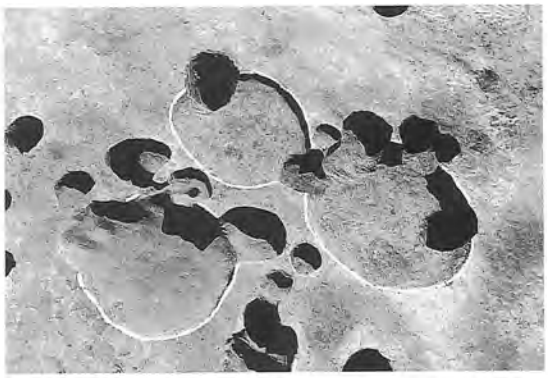
第15～19号溝跡

第７号土坑

第８号土坑

第15号土坑

第９号土坑

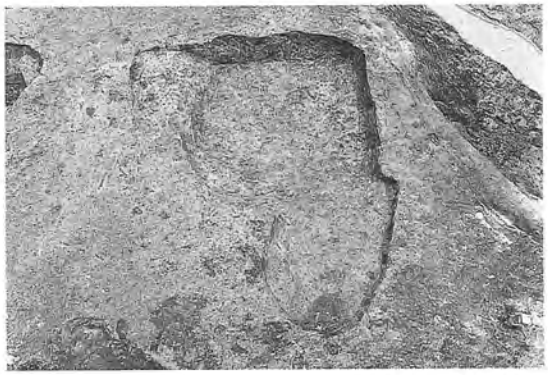


第16～18号土坑

第10号土坑

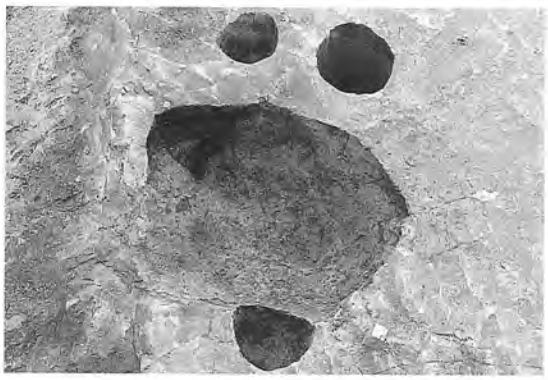
第21号土坑

第12～14号土坑



第22～24号土坑

図版10



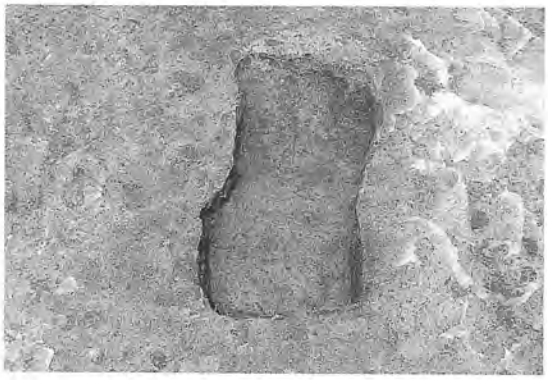
第25号土坑

第４号井戸跡

第26号土坑

第１号方形周溝墓

第29号土坑



第１号火葬跡

第１号井戸跡

第２号火葬跡

第３号住居跡　第８図１

第３号住居跡　第８図２

第３号住居跡　第８図９

第４号住居跡　第９図１

第４号住居跡　第９図２

第６号住居跡　第12図１

第６号住居跡　第12図２

図版12

第６号住居跡　第12図３

第８号住居跡　第14図２

第６号住居跡　第12図７

第９号住居跡　第15図１

第８号住居跡　第14図１

第11号住居跡　第18図１

第12号住居跡　第19図４

第16号住居跡　第25図１

第16号住居跡　第25図２

第16号住居跡　第25図８

第３号溝跡　第45図21

第３号溝跡　第45図72

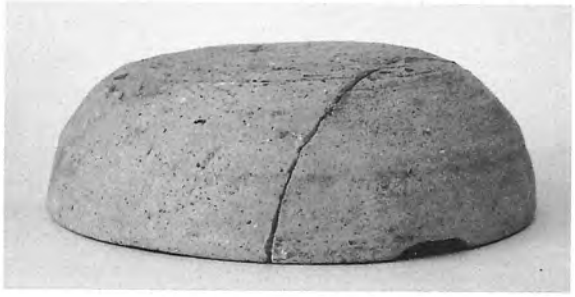
遺構外　第61図33

図版14

第１号住居跡　第５図６

第２号掘立柱建物跡　第32図１

第17号住居跡　第26図２



第３号溝跡　第44図１

第18号住居跡　第28図２

第３号溝跡　第44図３

第18号住居跡　第28図13

第３号溝跡　第44図11

第20号住居跡　第29図１

第３号溝跡　第44図13

第３号溝跡　第44図14

第３号溝跡　第44図16

第４・５号溝跡　第48図３

第４・５号溝跡　第48図４

第４・５号溝跡　第48図５

第９号溝跡　第49図２

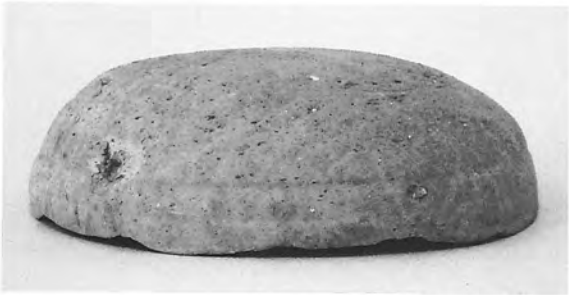
第９号溝跡　第49図３

第10号溝跡　第50図８

不明溝跡　第51図３

第４号井戸跡　第57図９

図版16



60－85・86ＧＰ１　第60図３

63－88ＧＰ１　第60図９

63－88ＧＰ１　第60図10

遺構外　第64図121

遺構外　第64図123

遺構外　第64図125

遺構外　第64図131

遺構外　第64図136

遺構外　第64図143

遺構外　第64図152

第17号住居跡　第26図13

第３号溝跡　第44図18

第３号溝跡　第44図５

第３号溝跡　第45図29

第３号溝跡　第44図６

第３号溝跡　第45図31

図版18

第３号溝跡　第45図30

第３号溝跡　第46図57

第３号溝跡　第46図55

第３号溝跡　第46図58

第３号溝跡　第46図56

第３号溝跡　第46図59

第３号溝跡　第46図60

第３号溝跡　第47図61

第３号溝跡　第47図62

第３号溝跡　第47図63

第３号溝跡　第47図66

第３号溝跡　第47図67

第３号溝跡　第47図70

第３号溝跡　第47図71

第３号溝跡　第47図73

第３号溝跡　第47図74

第３号溝跡　第47図75

第９号溝跡　第49図８

第９号溝跡　第49図20

第９号溝跡　第49図21

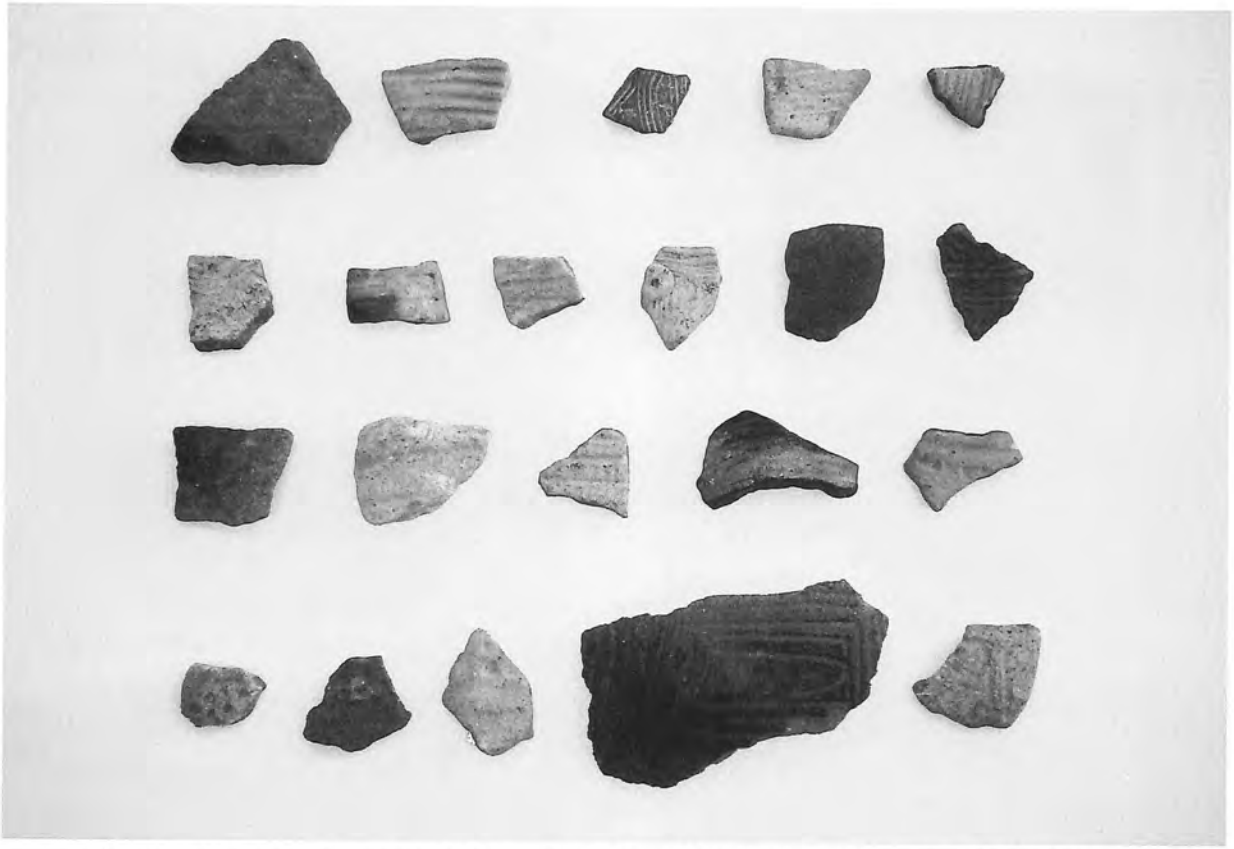
遺構外　第64図154

第10号溝跡　第50図３

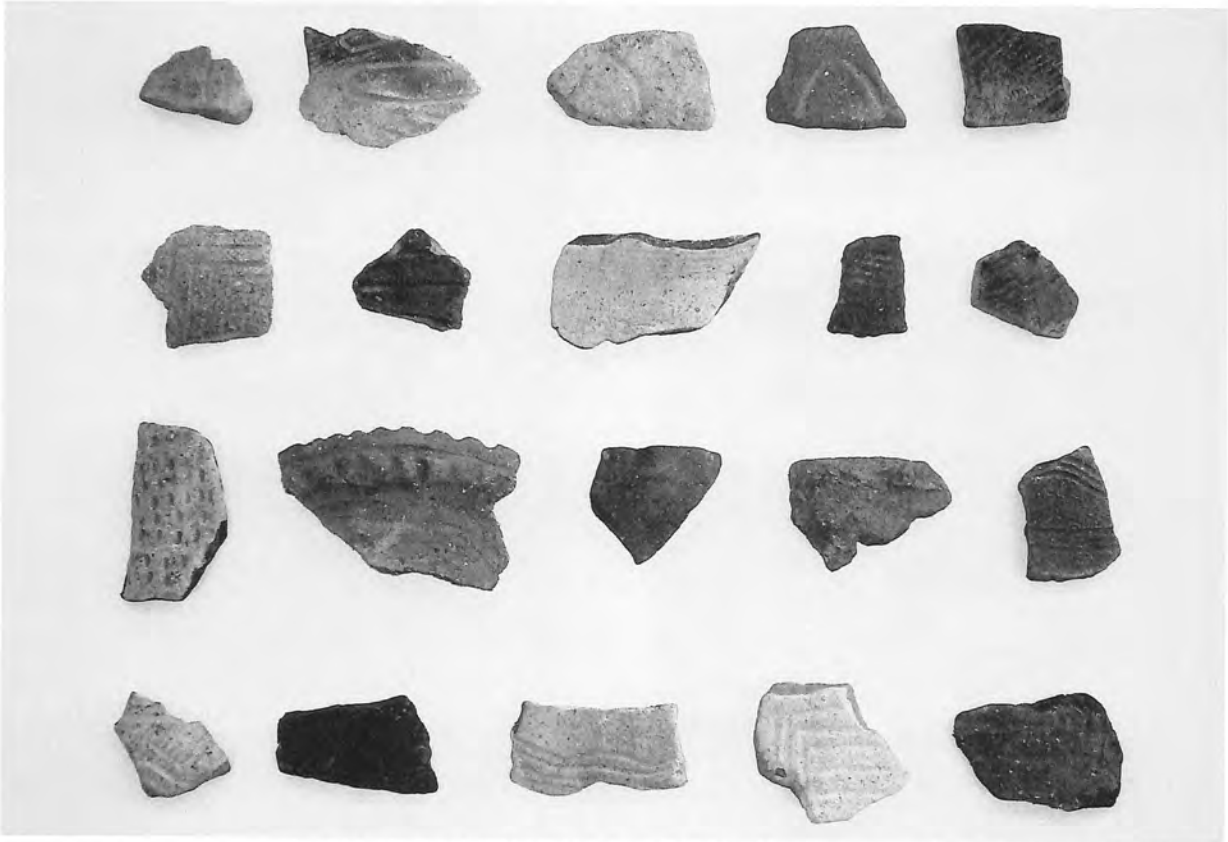
遺構外　第64図155

遺構外　第62図90

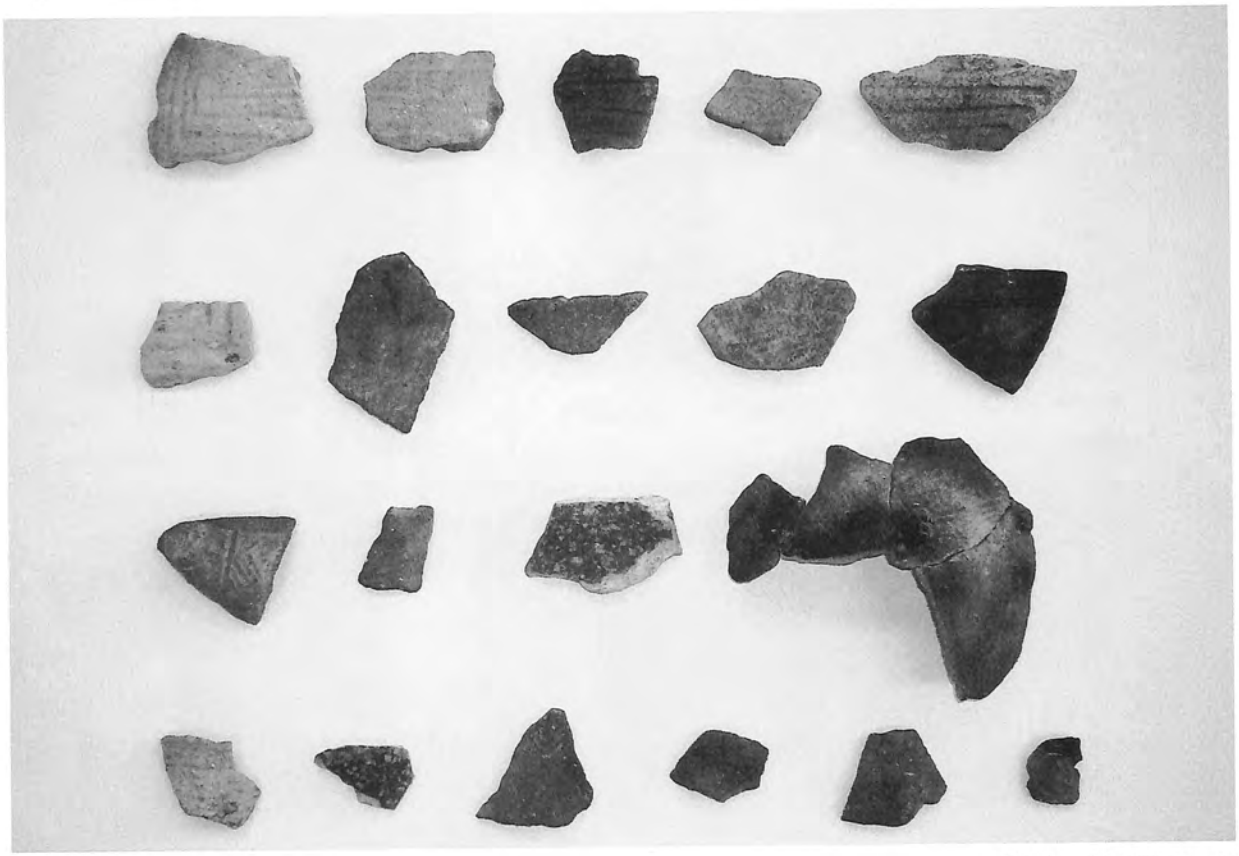
遺構外　第61図３



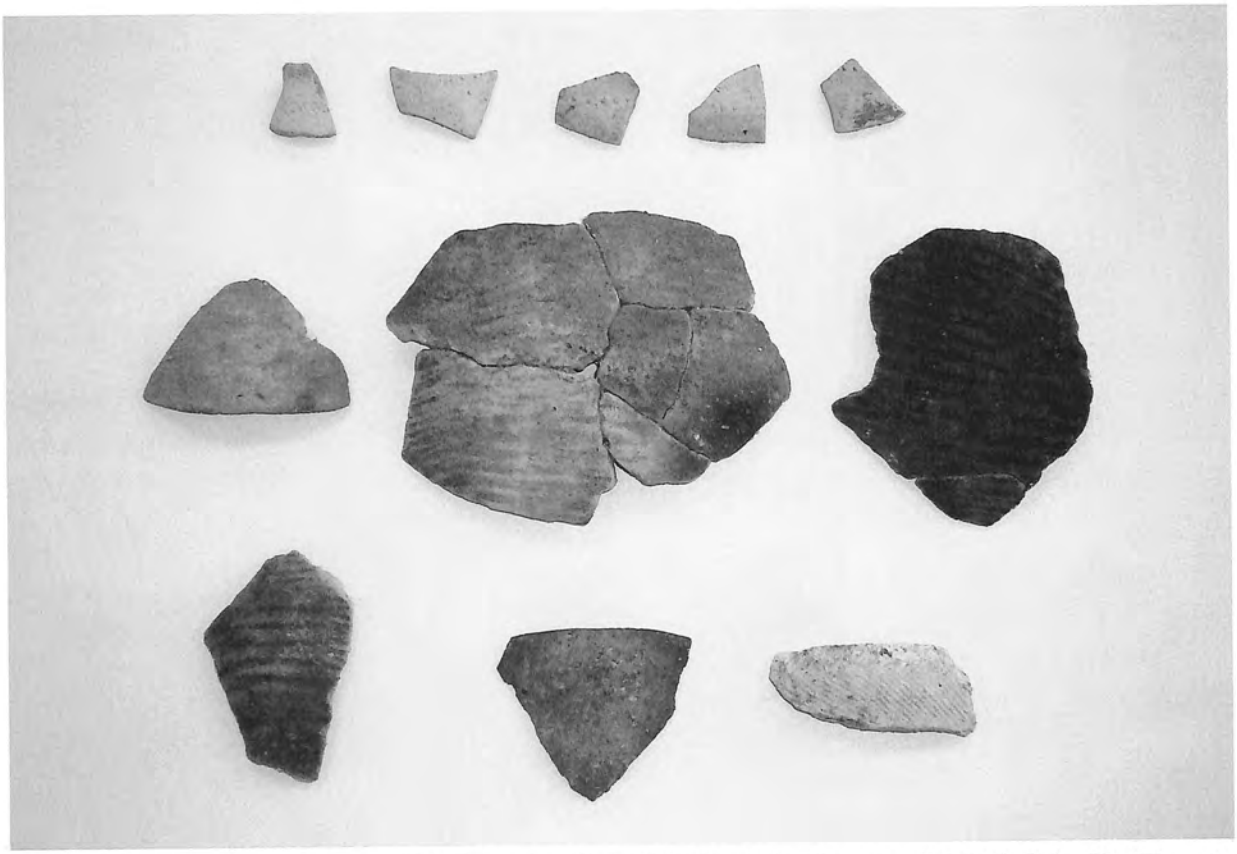
遺構外　第61図１・２、第４号住居跡　第９図９、第10号住居跡　第17図15、第14号住居跡　第22図６
第16号住居跡　第25図20～23、第18号住居跡　第28図17、第６号掘立柱建物跡　第36図１
第３号溝跡　第47図76～85



第３号溝跡　第47図86～90、第５号溝跡　第48図６・７、第９号溝跡　第50図27・28
第27号土坑　第55図３、第１号方形周溝墓　第58図１、遺構外　第61図４～12



遺構外　第61図13～32



第４号住居跡　第９図４～８、第11号住居跡　第18図２～５、第21号住居跡　第30図１・３

第５号住居跡　第10図３、60－88ＧＰ１　第60図14
遺構外　第66図221

第16号住居跡　第25図25
遺構外　第66図218

第14号住居跡　第22図５、第18号住居跡　第28図15
遺構外　第66図219・220

第９号溝跡　第49図26

第17号住居跡　第26図14
第18号住居跡　第28図16

第１号井戸跡　第57図１

第９号溝跡　第49図25

遺構外　第66図222

第９号溝跡出土馬歯

第５号土坑出土人歯

報告書抄録

ふりがな	ふじのみやいせき
書名	藤之宮遺跡
副書名	熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書Ⅳ
巻次	—
シリーズ名	埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1集
編集者名	松田　哲
編集機関	埼玉県熊谷市教育委員会
所在地	〒360－0107　熊谷市千代329番地　熊谷市立江南文化財センター　TEL048-536-5062
発行年月日	西暦2008（平成20）年3月21日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 (°′″)	東緯 (°′″)	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
ふじのみやいせき 藤之宮遺跡	くまがやしかみのあざふじのみや 熊谷市上之字藤之宮 ばんちほか 2010番地他	11202	093	36° 8′ 54″	139° 24′ 19″	20020508 ～ 20020808	1,907.29	区画整理 街路築造 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
藤之宮遺跡	集落跡 祭祀 墓	縄文時代晩期	—	縄文土器	・古墳時代の溝跡から水辺の祭祀に使用されたと思われる中期の土器群が完形に近い状態でまとまって検出された。
		弥生時代前期末	—	弥生土器	
		弥生時代中期	方形周溝墓　1基		
		弥生末～古墳初	住居跡　2軒	土師器	
		古墳時代前期	住居跡　7軒		
		古墳中期～後期	住居跡　1軒		
		古墳後期～末	住居跡　6軒 掘立柱建物跡　3棟 溝跡　11条 土坑　11基	土師器・須恵器 土製品・鉄製品 石製品	
		古墳前期～末	溝跡　1条	土師器・須恵器	
		奈良・平安時代	住居跡　5軒 掘立柱建物跡　3棟 溝跡　6条 土坑　5基 井戸跡　3基	土師器・須恵器 土製品・石製品	
		中世	火葬跡　2基		
		時期不明	溝跡　1条 土坑　13基 井戸跡　1基 ピット群		

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書　第１集

藤　之　宮　遺　跡

―熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書Ⅳ―

平成20年３月21日
発行／埼玉県熊谷市教育委員会
印刷／ぎょうせい